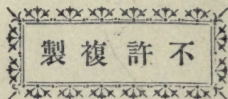
大正三年三月八日印刷
大正三年三月十二日發行

有朋堂文庫
心學道話集（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎
印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

養ひ、家内を治めり、汝が如く文字を效へば文字を讀む、汝我に代りて一日これを勉め見よ、賣買のことは知らずと云はゞ我に替ることなし。我職分を知れば事は足れり、汝箇程の理を知らずば、夫を學者と云ふべきや。彼儒者も中京にて、近代誰と世に知れし儒者なれども、彼れが理の明なるに及ざれば、答ふべきことなし、文學なけれども、足ることを知る者はかくの如し。況や性理に明なる者、文學に達するならば、聖學の興ること速なるべし。孟子所謂七八月の間旱すれば苗槁れぬ、天油然として雲を作し、沛然として雨を下せば、則苗浡然として興之矣。かくの如く興り起りて聖學天下遍からん。此故に博學豪傑の士、性理明なる者あらんことを幾ふ。汝も一理を明し得るなれば、其時にこそ神聖生其中國常立尊と號すと宣ふこと知覺し、天の與ふる樂を得て、實の道に入らるべし。

都鄙問答　終

於夏禮ニ所ニ損益ニ可レ知也と。前を推て後を知り、今より推て始を知る。人と生るれば、仁義禮智の性は、古今相續て變らず。是天地に有つては元亨利貞と云ふ。名は替れども、萬物の理は一なり。一物を知り得れば、一物の中に萬物の理はこもれり。然れ共此微妙の理は、容易知るべき所にあらず。一度我に疑晴るゝこと有りて後に味ふべき所なり。然るに今の世の人、文字に泥み色々に作爲するゆゑに、昏々然と闇く、古人の心を知らざるゆゑに、和漢ともに文學他に勝れば、此を德と思ひ、我を伐る者多し。文學に伐る者を喩へて言はゞ、衆人の財寶をたくらべて、彼は劣れり、我は勝れりと伐るに同じ。學者に於ては恥べきこと第一なり。如何となれば財寶もかせぎ設けて吝くすれば溜る者なり。文字も其如く、年を重ねて油斷なく、學べば、他より勝れる者なり。其中に記憶能くして多く記すは、衆人の中に仕合能く富るが如し。又學者も文字を讀むのみにては、聖人の意味、神書の奥深き所知らるべきにあらず。然るに文字を滯りなく讀めば、此外も有るまじと思ふべきが、推量とは雲泥違ふ所なり。或儒者田舎へ通ふ商人と、親類にて互に因せられしに、儒者の曰く、汝も少々は學問せられよかし、如何としても文盲なりと云はれければ、商人の言ふ、我少しも文盲なること候はず、斯の如く絹布に札を附け、何國にて賣るべき心當もなけれども、賣買して父母妻子を

なり。二葉に分るは平にして陰の形なり。二葉の中より心の立ち出づるは、陰より出るの陽なり。其草木梢に至るまで、陰陽々々と生々す。易の上繫辭傳に、天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十と說き給ふ。是にて陰陽々々と生成して止まざることを知るべし。天は一、地は二、萬物は三、天地有つて後の萬物なり。人は萬物の靈なるゆゑに、萬物を人に惣合せ、三に生るゆゑに、人は寅に生ずとも言ふべし。又人母の胎内に宿る時は一滴の水なり。是雞の子の如くにして牙を含めり。其中に淸陽なる者、虛にして心となるは、天の開くるなり、重く濁れる者形となるは、地の闢くるなり。頭の形高くなるは葦牙の如しとも云ふべし。かくの如く見ば、天地開闢の理は我一身にも具れり。此を味ひ見ば、天地の始終は古今共に同じ。それを今此上下の天地ひらけ始ることと有りと宣ひしことと一概に見なし、又天は子に闢くるの、地は丑に闢くの、人は寅に生るるのと、字面にかゝはり曲に泥むことあつては、書を見るとも不審ばかりいでて、心を解くの樂とは成るまじ。滯りて困しむは、我知の開けざる所なりと知るべし。子思曰、今夫天斯昭々多及ニ其無ニ窮也、日月星辰繫焉萬物覆焉と。此味を見て知るべし。天は廣大なれども、耿々と少しばかり明かなる器の中の天を見て、其高大の天を知るべし。聖人も天地の外を巡り見給ふにはあらず。子曰、殷因ニ

を交へて釋き給ふ。易は變易にして、今古變らざるものは理なり。理を以つていへば天人一致にして、今日に至り人間畜類まで、銘々繼ぎ來る者は理なり。其繼ぐ者を知り得れば、忽ち疑は晴るゝ者なり。天地未ㇾ闢の說、又天は子に闢け、地は丑に闢け、人は寅に生るなどの說も怪しきに似たれども、皆々當る所あり。夫を辭に泥むこと有つては、書は見えざる者なり。易の卦を以て月に配して云ふときは、十月純陰なり。十一月冬至の日、一陽來復するといへども、天地の間に何方を見ればとて、是に一陽來れりとも見えず。初陽は潛みかくるゝゆゑに見えずと言はゞ、正月には三陽生じて、花咲き鳥鳴くといへども、其體は見えず。又乾は龍となし、坤は牝馬となし、陰陽を龍と馬とに喩ふ。是も文字に泥み陰陽は直に龍馬なりと言ふべきや。周公旦の譬は疑はず、親王の譬に、狀葦牙の如しと說き給ふことを疑ふは、如何なることぞ。皆象を假りて義を顯す。其體は微妙の理にして、見るべきにあらず。見えざれば左にあらずと言うて、古人の書を破り捨てんや。天地未ㇾ闢の說、又天は子に闢くるの說、是皆天地は自然の次第なることを知らしめん爲なりと知らるべし。我性を知つて萬事の說を見ば、掌を見る如く、昭然として疑なかるべし。今草木の生ひ出づるを見れば、始は種土中に有つて渾じて分れず。それより錐の先の如くに成るは、自然に陽の形にして、皆葦牙の如く

曰く、我等如きが、此旁に及ぶべきことにあらず。然れども天地開闢の說は、奇怪の說なり。答ふ、太子親王は聖德おはしまし、世に賢く渡らせたまひ、書き傳へ我朝の記錄となし給ふは、如何なることぞと心を附くべし。此御旁天地未開渾然たる時有つて、其時にも人有りと思召給ふべきや。今日短才の者にても、箇程のことは知るぞかし。其に心をつけざるは愚昧の者にあらずや。神聖生其中とある其神は、今日に至ても在すや在さゞるや。在さずば今は神國とは云はれまじ。在さば何れに在すぞ。其時には見はれ在し、今は隱れ在すかと默して心を盡さば、夜の曉る時節あるべし。汝は自心のくらきことを知らずして、心の明なる親王の筆記し給ふ書を廢せんと思ふは、暗夜に燈火を以て天を窺ふが如し。さて我も前つかたは天地未闢の說を非として、他を迷はせたることありしに、今に至て見れば、愚なる處より古人を譏り侍りしも悔し。然れども猿賢き者は、十人が九人までは、能肯ふ議論にて、汝が如く言ふ者を、反て知者のやうに思ふものなり。汝も世間の少し學問ある者に言ひ聞さば、是は發明なる見識なりと思ひ、汝を知者のやうに思ふべし。知者と思はるゝ汝の愚は、思ふ者より勝れる愚なり。今言ふ所に心をつけられなば、解る時節もあるべし。挈易の畫八卦は伏羲より始る。象の辭は周に至て文王始て繫け給ふ。爻の辭は周公旦に始り、傳は孔子天地人

でを親の子を思ふ如くす。聖人民を子のごとくに思召す。政の大小の替りはあれども志は同じ。それを知らずして世に異る人と思へるは、大なる僻ごとなり。世の中の有福なる者、我親類を銘々に引き請けて世話に思はゞ、飢に及ぶほどの者はあるまじきに、反て道ある人を誹りあざけるは哀しきにあらずや。

○或人天地開闢の説を譏るの段

或人問うて曰く、日本紀神代巻に、天地未レ剖、陰陽不レ分渾沌如二雞子一溟涬而含レ牙及下其清陽者爲レ天重濁者爲レ地、神聖生二其中一、于レ時天地中、生二一物一狀如二葦牙一便化二爲神一號二國常立尊一と見えたり。此怪しき説なり。若世に人有りて、天地未闢けざる前に生れ、壽を得ること數百億萬歳にして親しく視、是を後の人に傳へしや。傳なく元來跡形も知れざることなれば、實にこれ奇怪なる説にあらずや。汝は如何心得居られ候や。

答ふ、汝の言へる如く、此説を世に疑ふ人多し。然れども此所は性理に昧き者の、窺ひ知るべき所にあらず。然るに是を奇怪の説と言へるは、聖徳太子舍人親王よりも、汝が器量はまされりと思はれ候や。

貧しき身となるときは恥を知らず、盗をもなすに至る。又身の程を知つて約を守る時は、法に合ふゆゑに安かるべし。孔子又曰、麻冕禮也今也純儉、吾從レ衆、拜レ下禮也、今拜二乎上一泰也、雖レ違レ衆、吾從レ下と、君子の世に處する事の義に害なきことは、世俗に從ても可なり。義に害あることは從ふべからずと宣ふ。奢の害より大なるはなし。又天地の冬に至り枯れ槁れて屈するは、春に至り伸ぶる所の兆なり。聖人の約を本とし奢を退け給ふは、凶年などの時は溜め置ける財寶を國々へ布施さんと思召す、民の爲の儉約なることを知るべし。かくのごとき類を法として、下々も一家の頭たる者は、親類中を我家の如く思ひ、難儀あれば救ふことを我役目と思ふ者ならば、平常儉約を思ふより外に心は有るまじ。儉約と言ふを世に誤て吝きことと思ふは非なり。聖人の約と宣ふは侈を退け法に從ふことなり。客の言へる今の親方の行は皆々法に合へり、聖人の行に合はゞ中庸とも云ふべし。然るを汝は善惡を擇ばず、二人の眞中を執んと言ふ。善惡を擇ばずして中を執るは、一を擧げて百を廢つ。これ時の中を害す、孟子道を賊ふと誹り給ふ子莫が中と云ふはこれなり。客のいへる今の親方の行を細に心を附けて見るべし。一として私の勝手づくをなさず、親類より手代ま

答ふ、汝のいへる如く、人倫を絶つこと大なる罪なり、我言ふ所も悉く人倫のみ。汝のいへる鳥獸と群を同すべからずと宣ふ聖人の意は、道の廢れたる世なれども、此人と交て亂れたるを正し、古の道に反さんと宣ふことなり。然るを汝は無道の人を正すこと能はずして、交る而已をよしと思へるは非なり。禮あるを以て人とす、禮なきときは人倫にあらず。食うて愛せざるは豕の交なり、愛して敬せざるは獸の畜なりと孟子宣ふ。是禮にあらざれば交りても交らざるの證とす。木綿布子生布の帷子は、上下の品分れて法に背かず、盡く禮に合へり。譬ば此に君を打れし臣數多あらん。心を合せて敵を伐つは士の道なり。然るに皆皆不同心ならば、大勢には背かれずと言ひて、主君の敵を見遁にし、武士の道を捨てんや。多分に背くと言ふとも、敵を打つは士の道なり。今日の交も斯のごとし。譏る人ありとも、なんぞ上下の禮を亂さんや。喩ば加賀絹は羽二重に似たり、紬は木綿に似たり、よつて聖人の教を聞得たる者は上を恐れ、紬を著て貴賤を分るの禮を貴ぶ。教を聞ざれば加賀絹を著て上を犯し、貴賤尊卑の禮を亂し、思はずして罪人となる。是教を知らざるより致す所なり。教を知る時は、交も不絶して奢をなさず、我を下るゆゑに、人に惡れずして心易く交るなり。又教をしらざる者に財多ければ、身の程を知らず、我をたかぶる故に、世の人これを憎み、表向は

世に露見せざるは如何なることぞや。親類家内の人々はそれを知らざる而已ならず、不義を以て義に勝んと思ふは辟なり。汝は賢德ある親方の仁愛を知らずして、辟言ふ者に徒黨し親方を誹る。然れ共愚癡よりなす所なれば、親方は心寛くこれをも免し置るゝなり。其心を會得し、これまでの誤を改め、忠義を盡さるべきことなり。數多家來の其中に、左程德ある親方に與し相くる者なきは、惜い哉哀しい哉。

客退いて後、或人曰く、最前より客との問答を聞くに、汝の言へる所一とほりは相聞え、法式に背くことも有るまじ。然れども、時を知らざる所あり。今日に違うては世間の交なるべからず。世の交をかきては人の道にあらず。大聖孔子も鳥獸には與に群を同うするべからず、吾斯人の徒と與にするにあらずして、誰と與にせんと宣ひ、人たる者の交を絶つことを悵み給ふ。客の言へる先の親方の他借を返さずして死す、夫を果報人にて終れりと言ふは極めて非なり。又今の親方の仕方、假令法には背かずとも、人に替りたる行にて、世の交を絶つ。これは又是に似て非なり。中庸を以て見れば、過不及ありて雙方ともに中らざることなり。二人の行を合せて其中を取りて行はゞ可ならん。然れば木綿布子に生布の帷子高宮羽織は不及なり、忽に今日の交すまず。其すまぬことを尊ぶは如何なることぞや。

私意を入れんや。當世に異なるにはあらず、當世の人が、法式を越え聖人の教に異なり。汝の今の親方は、聖人の教を能く守れる人なり。

曰く、中庸に所謂聖人は素二夷狄一行二夷狄一とあり。又君子は無レ所レ爭ともあり。然るに、親類一家中と盡く爭ひ逆らふ。これらは如何。

答く、汝經書を見ても一も理を辨へ知ることなし。程子曰く、吾自二十七八一讀二論語一當時已曉二文義一と。書をよむことは我に會得せんが爲なり。聖人夷狄にては夷狄を行ふと宣ふは、夷狄の法を背かずして、而も道に合ふやうにすべしと宣ふことなり。また君子無レ所レ爭と宣ふは、不義を以て人にあらそはずと宣ふことにて、義を以て他の不義を正すことはあるべし。此故に湯王も義を以て桀を南巣に放ち、武王伐レ紂。是我に義有れば爭ふ所の證なり。汝今の親方は天下の御法にそむかず、義を以て行ふ、ゆゑに背き奢れるの不義に爭ふ。然れども親類より手代の末々に至るまで、一人として肯ふ氣色も見えず。見えざれ共我宗領家のことなれば、本を正し奢を退け約を守て、禮義の本を知らしめんと思ひ、末々までをすてず、世話にせらるゝは神妙の至りなり。其正き人惣領家にあるときは、一家中の寶なり。此味を知らざるは、實に寶の山に入り、手を空うして歸るとは箇樣のことなるべし。夫程の徳ある者、

破れば五戒は盡破るゝなり。證を以て言ふべし。毘婆娑論に、一の鄔波索迦あり、性仁賢にして五戒を受持てり。專ら精しくしておかさず。後に一時に於て水に逼り、一の器を見れば酒有り、水の如し。取りてこれを飲む。その時飲酒戒を破れり。時に隣に鷄有り、來りて家に入る。盜み殺てこれを食ふ。殺生戒と、偸盜戒を破り、隣の女鷄を尋ねに來る、强逼て是に交る。邪淫戒を破れり。隣より官所へ訴ふ、これを拒み爭て妄語戒を破る。如是一戒をおかすに依つて、五戒悉く破れて佛の罪人となる。佛心を悟つて後は、例令奉加を勸むる共、勸る上直に教と成るべし。神佛ともにかくの如し。古人は道德明なるゆゑに、人是を感心して宮寺を建立せしことと相見ゆ。然れば今日にても道德あきらかにして、人を教へ導き、旦那も此人の教によりて心も安樂に成り、又生死疑なくならば、其人奉加帳は出さずとも、如何やうの社堂にても建つべし。古今ともに人の心は天の命ずる所なり、何ぞ替りあらんや。又宮寺の奉加と云ふとも、毛筋ほども人欲勝手あらば、此不義の類なり。汝の親方の正き心にて、其不義に與せんや、奉加につかざるにはあらず、只不義に與せざるなり。死後何に生れんと思ふ心、なんぞ有らんや。今日の義を行ひ、明日のことは天命にまかす志と見えたり。孟子曰夭壽不貳修身以俟之と。來るも天に任せ、歸るも亦天に任す。此間に

見えたり。宮寺の建立ごと嫌ることは見えず。先古の様子を考へ見れば、宮寺を建てたきと言うて、奉加帳を旦那の家々に持ち來り、いやがる旦那に奉加をすゝめて金銀を出させ、其金銀を持ちて建立せられたる神主開山方は有るまじ。皆々徳有る故に神道佛道の棟梁と成れり。神の御心を云はゞ、常に供し奉る者なく、金石を食する共、常に心に濁り穢し人の捧る者は受けずと、八幡宮の御神託にあらずや。其に氏子の志なき金銀を、慈悲正直の神受て喜給ふべきや。又吾もろ〱の蒼人草いつはり謀りて、假令善と思ふ共、必ず天の尊の怒を受けて、根の國におもむかん、正き心を持ちて正に惡しく共、必ず天の神の惠あらんと、皇太神宮の寶勅なり。神御納受無きことに、氏子を苦しめ、金銀を出させなば、神の御心に背くにあらずや。神主と成る者は御神託に因て神の御心を知るべし。何事も御心を知るの徳による。譬へば禹王の有苗を征せしも、師を班し徳を敷くには如ざりき。物の成就致しがたきは身の不德なりと、我を顧ば、恥しきことも多かるべし。心を明にする爲に神に仕へ、反て心昧くば神罰を受くること速ならん。扨て佛の道は五戒を有つに依て、佛の弟子にあらずや。其に寺の修覆と云へば、内福の寺方にても、世間に習うて家々へ奉加帳を出すこと有つて、強く勸れば、旦家迷惑し、出しかぬる金銀を出させ、人を苦め傷るは殺生と云ふ者なり。一戒を

の子を思ふ心と何ぞ替あらん。嗟世の中の人十人に二三人程、加樣なる人あらば、世の難儀する人少かるべし。我金銀と思はず、我は此事を治むる役人と思ふ志、世に稀なることなり。我一族の人を左樣に深切に思ふ身には、誰も成りたき者哉。孔子も周ㇾ急不ㇾ繼ㇾ富と宣ふ。周ㇾ急とは困窮の者の足ざる所を補助ることなり。不ㇾ繼ㇾ富とは富で餘ある者には、つぎ足すには及ばずと宣ふことなり。汝が親方の欲心を離れて、金銀を出し、人を救はるゝは、聖人の御志に能く合へり。或田舍に、其所にては內福なる人あり。此人親類中へ金銀を貸すに、借りに來る人あれば貸されけるが、戾す覺えあらば遣はれよ、此方金貸は家業にせず、因つて利足は取らずと言うて貸されけり。是程の人さへ稀なるに、汝の親方は先方の算用不足する譯を聞き屆け、道理の立ちたる不足なれば、何かへすと言ふことをかまはずして貸るゝなれば、合力金と云ふ者にて、取反すと云ふ心を離れたる仕方にて、天下に飢人を救ひ給ふに似たる者なり。

曰く、宮寺の奉加や建立ごとは嫌にて、死後には何に生れんと思はるゝや、曾て後世の善事はせられず、兎角當世に異なり。

答ふ、段々の問に因つて見れば、汝の親方の信心に合ふ程の、德有る神主や、出家が無きゆゑと

其ゆゑ前方には親父も折々異見せられしよし。然れども、汝等が思ふに、二男は悪所へは往れず、旦那位の身上にて、是ほどのことを急しく申されなば、反つて心僻みて悪からんと、大勢口々に言はるゝゆゑ、親父も其後はいはれぬよし。君子は本をつとむとあり。すべて家業に疎きほどの徒者何方に有るべきや。第一に不孝となる。不孝の罪は重くして、刑罰にも入れられずと、孝經にも說き給へり。家業に疎きを悲まれ、歌を詠むを喜るゝにはあらず。歌學に事よせて此褒美の算盤は、如何なることぞと心を附けさせん爲なるべし。それを汝等も同く利口さうに頭をふつて是を笑ふ。親の子を思ふ慈悲至らざる所なし。汝等が婦寺の忠を以て及ぶべきにあらず。

曰く、親類方や手代中より、金銀を借りに來る者あれば、貸かさぬは除置き、何れも方の家督にては、幾人暮持兼ることはなき筈なりと言うてかさず。又つもりが合へば彼は得歸へすまじと知りながらも貸るゝ。利のあることを曾て知らざるに似たり。是らの是非いかん。

答ふ、尤此事は深き心有るべし。如何となれば、世間にて金銀の出入するを見るに、假令親類手代にても、先彼は此ほどの金反すか反さぬかと、金銀を貸ざる前に吟味するは毎なり。然るに汝の親方は、先方の身上往きかぬる筋道有れば貸し、ゆくべき理あれば貸さずとは、親

分けて見ば、汝の親方の料理は、今少し奢にても有るべし。それを一門衆は、箸を取り初むる斗とは、分を知らざる奢り者なり。先飢饉年には飯米の調へ代を借り、汝の親方の恵により飢に及ばず、それを忘れ身の分を知らず、今手前豊に暮せばとて、左樣の惡口を吐るゝこと論ずるに足らず。其人々にも、道を知らせんと思はるゝ親方は、中や不中を捨てざる、實に中才の人と孟子宣ふが如し。又其一門衆の惡口を聞きて居ながら、此を法とせよと心一杯に勤め見せらるゝは眞實と云ふべし、一家の衆用ひらるべきとは思はずして、心を盡さる斗なり。魯國の季氏泰山を旅せんとする時に、冉有季氏が臣として、救ひ正すことあたはざることを知りながら、孔子心を盡し給ひて、女救ふことあたはざるかと宣ふに能く似たり。

曰く、日外二男内證にて歌學せることを聞き、喜んで何ぞ褒美を遣らんとて、大算盤三面褒美として遣らるゝ。歌學の褒美に算盤とは、實に木に竹を繼ぐごとく、文盲なることをせらるる。是らは如何。

答ふ、其褒美の心を知らずして笑ふ、汝は扨々文盲なる者哉。其二男の身の行を聞けば、家業の事は一として勉めず、尤色所のあそびはせられねども、諷鼓歌學に懸つて居らるゝよし、

に大法事など行はせ給へば、諸國殺生禁斷、罪人も御赦免なさるゝぞかし。かゝる實の御法事を法とし、身の分を僭ず、約にして、金の入用をへらさず、寄り集る者盡く快く喜ぶやうにせば、親祖を弔ふ實の法事となるべし。

曰く、兎角今の親方は、貧乏人が好きかと思へば、又財寶を聚め、其聚めたる金銀にて、衣服にても拵へ、美食にても好むかと思へば、毎々は食と汁に香物菜、朔日十五日廿八日は鰹膾に香物、正月節は鰹膾に鰯の燒物、大根汁に香物、祭は瓜膾に燒物は鱚のせんば、茄子汁に香物、不圖の客あれば、茶漬食に香物、有增かくの如し。夫ゆゑに寄り集る親類衆も、我家の格式とは大いに違ふ故に、箸を取りそむる斗にて、節や神事も淋く、陰口を聞けば、餓鬼じやの吝嗇のと人のやうにはいはず。加樣のことを聞くも氣毒なり。是等のことは如何。

答ふ、其一家一門の譏は、皆々法を知らざるゆゑなり。道有つて聚る金銀は天命なり。天の賜る財を捨てず、天の命にそむかず、約を以て禮の本を守れり。又道を行ふ者は、他のそしりは有るならひなり。孟子曰く、無傷士憎茲多口、詩云、憂心悄悄、慍于群小、孔子也と。聖人の行は小人の行に違へる故、衆の口の爲に孔子も譏に逢ひ給へり。又美食を好ざるは身の分限なり。二汁五菜七菜杯と云ふ、重き料理は下々のことにあらず。御上より品を

ㇾ與ㇾ祭如ㇾ不ㇾ祭と。因て供物等も自ら進め、人をして代らしむれば祭らざるが如しと宣ふ。祭と言ふはいま此國の法事のことなり。孔子大聖の徳御座て、親祖の祭には沐浴し、心を齊へ身を清め給ふ。親祖を祭るは、我誠あれば靈來つて供物を受け給ふ。誠なければ靈來らず、祭ると言ふとも何の益あらん。因て今日法事を行ふとも、只孝行を主とすべし。然るに汝が先の親方は、多く出家を召集め、客あしらひに隙をとられ、且臺所に人少ければ、廻りあしく、佛前の勉は他人に任せおき、それにて先祖在如きの馳走成るべきや。分を越えず、奢にならずば、出家多きを悪しきと云ふにはあらず。總じて今の世の法事を爲すを見るに、名聞のみにて、勝手は働者を儉約し、人少くして客は多きゆゑに手廻し出來ず、主は腹立ていかること多し。其怒れる顔つきして親祖に向ひ、何の法事に成るべきや。實の法事と云ふは、我心を散亂せず、安樂なる顔つきを親祖にも見せまゐらせ、出家衆へも衣の損じ料も澤山にあるやうに、布施に心を附け、出入働きする者にも、傭の外に心附をなし、何方も快く喜ぶやうにするこそ實の法事とは云ふべけれ。入用の金は心當を極め置き、名聞の爲に出家を聚むるゆゑに、自ら布施は減じ、其外爲すべき事に不足あることなり。法事をするとて人を怒らせ、我も腹立て、下々は手足摺粉木になるほど、つかひ苦めることこそ哀しけれ。天下

曰く、左にはあらず、出家さへ五六十人も招かれ候へば、勝手には人足らぬ故に氣をせき、自ら怒られ候。然れども結構なる法事は致され候。
答ふ、法事に佛前の供物は自ら備へられ候や。
曰く、外の世話多く、それまでは手が屆き申さず候。
答ふ、座敷の膳や引菓子杯は自らせられ候や。
曰く、それは丁寧なる者ゆゑ、重客の分は是非共自らせられ候。
答ふ、汝は最前に、主機嫌惡敷所へ召れ往くは、否と云ふにあらずや。我身を推て萬事を知るべし。法事の上客は親祖なり。然るに親祖の所へ、顏出しもせず、配膳も他人に任せおき、相伴人を馳走する禮法はあるまじ。左樣に不待の所へ、料理の好味を喜び、先祖は來らるべきや。若來れることありとも、爭か快からん。快からざることをなして孝行の法事と云はるべきや。
曰く、先祖は最早佛なれば、其構はなきにあらずや。
答ふ、汝は最前に名も實物と言ふ。佛前に法名あれば是直に親祖なり。神佛も名を祭り、親祖も名を祭る。名は直に體なり。體即心なり。こゝを以つて孔子も、祭神如在、吾不

答ふ、爪を切り身を切るとても名はなし。形は土なり。名は則汝なり。神と言ふ名は直に神なり。名の外に神佛はなし。因て先祖親祖も、法名を附けて召べば直に親祖なり。扨又汝祭や節に召れて往かんに、先の夫婦機嫌の好きが善からんや。機嫌は悪しくとも、料理のよきが善からんや。

曰く　料理は麁相なりとも、亭主機嫌の好きが勝るべし。

答ふ、先の親方は大業なる法事など致されしとあり。實に然りや。

曰く、信心者ゆゑ、佛のことは大業に致され候。

答ふ、法事の時何も機嫌能く喜んで勉められ候や。

曰く、大勢の客を疎末にせぬ心ゆゑに、下々の廻り悪ければ、勝手の者は叱りまはされ候、傭人などにも、法事の心附をもせられ候や。

答ふ、大勢の出家なれば、布施までのことにて、外の心附は致し申されず候。今の親方は異ものにて、布施は前の格式より仕過し、世間に替て、出入働きの者にも、傭の外に心附を致し無益の費御座候。

答ふ、然れば先の親方は叱りまはすと、我腹立つるとを法事にせられ候や。

云ふ、次で名を附け次郎とか太郎とか云ふべし。成長して汝今の名を附けり。又年寄ば法體して法名を附くべし。其時々の名を召ば答ふるなり。其名は實の者か假の者か。
曰く、名は附けて生るゝものにはあらず、先假のものなり。
答ふ、汝を盗人と云はゞ如何。
曰く、盗人と云はれては身分立ず。この故に怒るなり。
答ふ、善人と云はゞ如何。
曰く、我に善事はなけれども、譽めらるゝはあしからず。
答ふ、盗人と云ひ善人と云ふ、これ假の者にて、外より附けたる名なり。其に何とて怒り喜ぶことぞや。
曰く、假の者とは思ひしが、名も我に添ひたる者なれば、これも實物に同じ。盗人と云はれては思はずして怒るなり。
答ふ、今汝ぢが爪を切り捨つるに、爪の中に爪と云ふ名ありや。又汝が身を切り裁いて見ば、汝が名あらんや。
曰く、爪を切り、身を切るとても、名はあるまじ。

ごくみ育ふを以て要とす。孟子所謂、君子所レ性、雖二大行一不レ加、雖二窮居一不レ損、分定故なりと。是を以て見れば、人は貴賤に限らず、盡く天の靈なり。貧窮の人といへども一人飢ゆる時は、直に天の靈を絶に同じ。此故に聖人は民を養ふを以て本とし給ふ。此を以て飢饉年には、御上より飢者を救せ給ふ御事なれば、子の親方も御法を能も用ひ盡されたり。其志誰も斯は有がたきものなり。

曰く、親類一家祝儀の音物は、取遣ともに三分一に減し、七日の法事は三日に減し、一日の齋は三日に増し、齋非時も五十人の僧を二十人に減し、一石の施行は三石に増す。此等は如何。

答ふ、我分を能知て天を恐るゝ志、有がたき事なり。音物を減し、法事の日數を減し、僧を聚むることを減ずるは、分限を知らるゝが故なり。法事に齋し、敬むは禮なり。施行米を増し、人を救ふは仁の施なり。凡て増減を知るは智なり。實に智仁の心を能く用ひたるありさま、左も有るべきこと哉。孔子も禮與二其奢一也寧儉、喪與二其易一也寧戚と宣ふ。扨五十人の僧を二十人に減ずること、定て疑ひあるべし。

曰く、法事は少にても増すを善事と云ふべし、減すを善と云ふは如何なることぞや。

答ふ、似つかぬ事ながら、汝心得やすきやうに、事を設けて語るべし。汝も生れし時は赤子と

見ゆ。且借したるものを取反すは古今の定法なり。孟子曰、非㆓其道㆒也一介不㆓以與㆒人一介不㆓以取㆒諸人㆒と。心正き親方、貸し取ることに心あらんや。人を不義に陷し入れずして、且救はん爲なるべし。

曰く、左樣なるかと思へば、出入の働人などの、何の好もなき者には多くの米穀を施し、其は又遣捨てにせらるゝ。然れども誰が一人として禮にも來らざれば、格別に喜ぶ體も見えず。畢竟遺損なりといふ者あれば、否物を施すは禮を受る爲にはあらず、其筈のことなりといはるる。又吝いことは、虱の皮を千枚にへぐやうにせらるゝ。これらは如何。

答ふ、扨此に至つて一入感心いたす所なり。何を以てなれば、金銀は天下の御寶なり。銘々は世を互にし、救助る役人なりと知るゝと見えたり。此故に困窮に至りて多くの人を救ひ、又救はれし者どもより忝しと染々禮をいふ者もなけれども、其厭なきは聖人といへども、此上も有まじきかと思へり。孟子所謂若㆑民則無㆓恒產㆒因無㆓恒心㆒、と。民の如なきは常なり。其愚なる處を知つて、其者より我慈悲を知らざれども、其厭なく、他の憂を救ひ自これを任とす。能く貯へ能く施す。今の親方は、學問を好まるゝとも聞ざりしが、假令一字も學ばずといへども、此ぞ實の學者ならん。先人は天地物を生ずるの心を得て心とするなれば、人物をは

使ひなすは君の道なり。この故に汝が親方は、義理有つて出すべき給銀杯はこれを出し、聚むべき物は能く聚め、散しては聚め、聚めては散す。此二つ義に合はゞ、假令家國を治むるとも何の難きことあらん。奉公人も、儉約者は給銀を溜て主人の恩を知る。奢る者は給銀や鼻紙代にて遣ひたらず、足らざる所は盗みし遣ひながら、我旦那は幾年勤ても勤甲斐なしと言ふ。汝が親方は此を知る。こゝを以て給銀をねぎらず、見苦しきを反て喜ぶ、是誠の道を以て人を遣ふなれば、忠あるものを求め得ること多からん。子曰、以レ約失レ之者鮮矣と。儉約者を好むは尤なり。國家を治むるも約を本とするにあらずや。假令財寶ありとも、善人を得ずば何を以て家を治めんや。

曰く、先年の困窮年に、親類中、其外宿もち手代どもへ、米穀を調へ金銀を貸し、明年より取りかへさんと言ふ。借方の中より手前勝手に相なり候まゝ、今日よりは利足を出し借り度よし言ふものあれども、聞いれずして取り反し、内に積置き番をさせる。斯様なる費を知らざることは如何。

答ふ、是一入面白し。親類手代中も、先旦那は人の物を反さずして奢れしを見習ひて、奢ることを知つて、まさかの時の貯をすることを知らず。其を敎んために急々に取り立てらるゝと

水を始め給ふ。我職分を勉め給ふことかくの如し。親方は我職分に疎からず、聖人の道を能く聞き得る人なり。

曰く、算盤細に、聚むることを好み、散すことは嫌にて、奉公人も綺羅なる者は氣に入らず、儉約者の見苦しき者を好きて、其者の給金にても下直なるかと云へば、其も替らず。かやうなる前後揃ぬこと如何。

答ふ、扨汝の親方は世の法と成るべき人哉。凡て下々の者は云ふに及ばず、假令二萬騎三萬騎の大將にても、算術疎くては、馳引備へだて成りがたからん。元來商賣人として、算盤知らずして何を以て勘定致すべき。奉公人を抱ふるにも、此手代は拾枚、或は五枚、下男は百目、彼は又五十目と、人別に替り有り。其者の働を見て、功有者には給銀を增すべし。其目利あらば、我手代に成るべきもの幾人も出で來らん。中庸に忠信重祿所以勸士也。これ君誠有て臣を養ふ道なり、背くべきにあらず。何を以てなれば、唐土項羽人をつかふに、功ある者には國を封ずべきを吝み、忍んで祿をあたへず、卒に漢の高祖の爲に亡さる。是臣より君に怨ある故、心替りて高祖に往き、却て我敵となる。此其功と祿と算用知ざる所より發れり。假令項羽に無禮有りとも、高祖に往くは臣の道にあらず。不忠の者も仁を以て忠臣のごとく

羽二重より上はなし。其より木綿まで何程の品あらん。貴賤の次第を以つて云はゞ、上より地下に至るまで、其品何程と量るべきや。衣類は細に分けても、十段ばかりならでは無きものなり。位の段を以て品を立てば、下々は薦をきても善るべし。左もならざれば木綿を常の衣類となし、手前豊なる者は、祝日などには、衣類に絹紬までは、農工商共に用ふるなり。其法式を有りがたしと思うて背かず、急度執守りて、我身の賤しきを知り、其わかちを立らるるは頼母敷ことなり。汝も親方が木綿きらるゝならば、常に洗布子のつぎのあたりたるを著らるべし。汝は是を異形の衣服と言ふ。孟子は加様なる法に合へる、衣服を大聖堯王の服となし、法に背き分を僭るを大悪無道の桀が服となし給ふ。異哉汝が言へること。

曰く、折々は普請の手傳や手代の代りを勉めらるゝ。加様なること如何。

答ふ、問によつて見れば、親方の心入實に尤至極せり。汝は常を知りて變を知らず。格式定れる武の家を以て見るべし。治世といへども軍旅のことを捨てざるは士の常なり。唐土には田獵をして武の事を習ひ、我家の業を習ふは人の常なり。何程手代あればとて頼みとはならず、若手代なくならば、其時は家業を捨てんや。家業のことを知らずして、何を以て商賣取續き家を立つべき。孟子曰、禹八二年於外一三過二其門一而不レ入。禹是時に當て、天下の洪

の物は一芥をも受け給はず、盗跖は人の物を推取し、盗人の名は朽ちざるなり。此も同じことにて相濟むと言んや。借たる物は戻し、貸したる物を請取るは人の道なり。且孝弟忠信の徳あつて、家業に疎からず、加様の類を善事と言ふ。道は天地に昭然たり。然るを汝が先の親方は奢をなし、他借を乞ふ者なしとて反さず、反さずして死するは推取なり。其推取せしは聖人に近きや、盗跖に近きや、其不義を行ひし人を、一生事濟み、果報人ぞと思ふ汝は盗跖に與する者なり。今の親方は身を約にして、親の借銀を濟し、惡名を雪ぐ、これ人の道なり。范氏所謂、子能改二父之過一、變レ惡以爲レ美、則可レ謂レ孝矣と云ふこれなり。

曰く、扨今の親方の致方は前に言ふ如く、今時の日傭取にも劣たる仕方なり。親の代には衣類も華美を好まれしに、今の親方は木綿布子に生布の帷子、小倉帯に高宮羽織、加様に各別なる事を好む。是等はいかん。

答ふ、先汝が心に大なる奢あり。如何となれば、同下々にて我と日傭取とは格別なりと思ふ。此卽彼をいやしめ我をたかぶるの奢なり。農工商は一列に下々なり。然るに日傭取と我等如きと、何程違有んや。其を賤しきと見るは心せばし。今の親方は知有つて我をたかぶらず、上を恐れ身を下り、世に罕なる者なり。貴きと賤しきとの分れを知るは禮なり。凡て衣服に

りたる家督ありと云ふ、是奢の第一なり。上の命を受くるは民の常なり、假令御用達する身なればとて、手前より定ること有るべからず。況や其以下市井の臣と生れ、君の命を知らずして、此方より定りたる家督ありと思へるは、上を無する罪人なり。又借銀を乞ふ者もなしといふは辟事なり。如何となれば、汝今親方に仕ふるに、最早何年ほどは勤めたれば、いつごろは宿持せくれられんと、定て期にせらるべし。然るを時來りても暇を乞ざれば、宿を持せず、何までつかはるゝとも親方の遣ひ得と言つて、すまして置れんや。我身を推して知らるべし。汝が時節を待つ如く、貸たる者も、日限來れば利足を添て返さるゝを待つは常なり。其を乞ふ者なければとて、反さぬと云ふ法ありや。此は僥倖と云ふ倖なり。此倖倖と言ふさいはひは、人死去せしを、汝は幸なりと思へりや。然るに子が先の親方は借銀を返さずして其物を盜みても、人を殺しても、其罪知れずして遁れたるものの幸なり。此幸は望むべき所にあらず。然るを果報人にて終ると云ふは如何なることぞ。推取してはすまざることの證あり。善惡の二を舉げて告ぐべし。先唐土の堯舜は天下を治め給ひ、仁と孝との法となり、大聖孔子は至德を以て、其道を後世へ傳へ給ひ、今に至つて唐土は云ふに及ばず、我朝までを照し給ふ、又盜跖は大盜にて、其惡名今に絕えず、天下の人これを惡む。聖人は不義

も知らぬ醫者なりと、侮らるゝことを嫌ひて、色々の聞きなれぬことを覺えて言ひたがる者なり。良醫たる者箇様のことあるべきや。

○或人主人行狀の是非を問ふの段

或人來つて物語して言ふ、汝の知れる如く、我親方は、今日にては内福なる者にて、財寶何に不足のこともなし。然れども金銀を溜るばかりにて、何を樂むこともなく、只金銀の番をする而已にて、貧乏人に同じ。親の代には相應の樂もせられ、少は奢も有りし故に借金も有りといへども、定の家督有るゆゑ、是非乞者も無れば、財寶有るに同じ、申さば澤山に遣ひ得と云者なり。一生それにて相濟み、果報人にて終れり。加樣のことは雙方の是非如何。

答ふ、總じて重きも輕きも人に事うまつる者は臣なり。臣たる者は善惡是非少は辨へあるべきことなり。先第一に天下の御政道に、奢はかたき御禁なり。奢る者は久しからずと俗語にも言ひ傳へ、また奢に因て流罪追放せらるゝ者、其數を知らず。高家にて國天下を亡す者を言はば、中古には平の淸盛を始め、相模入道其外奢に因て國家を亡す者その數少からず。唐土にも秦の始皇は奢に因て天下を失ふ。汝の先の親方も、奢あれば天下の御法にもそむき、且定

らずや。

答ふ、博學は我も好む所なり、捨つるにあらず。然れ共醫學熟して後のことなり。本末を正すときは、醫學は本と知るべし。有子曰く、本立而道生と。本末の違へるは君子の道にあらず。扨汝は世俗の聞なれぬことを言ふを、博學と思はれ候や。それは麁相なる了簡なり。良醫は聞きなれぬことを言ふものにあらず。醫書に望聞問切と云ふことあり、先病人に望み、容體を見るを望と言ふ、樣子を聞きて病を知るを聞と言ふ、不審を問うて察するを問と言ふ、脈を診みて病を定むるを切と言ふ。然れば病人に望み、其容體を觀て後に病の事を言せて聞き、又委細の事は看病の者に問ひ、且脈を診みて、我意に合へるか合はざるかと得心して、藥を用ふべきことなり。それに人の聞きなれぬことを言ひ、先方へ聞えざれば、また先よりの返答も違ふものなり。互にきこえずば望聞問切と違ひ、病根を察して藥を用ひ療治することは成るまじきことなり。子曰く、辭達而已と。辭達して已むとは我言ふこと先へ聞ゆれば已み、きこえざれば聞えて通ずるまで言ふべしと宣ふことなり。言ても聞えざることを言ふ者は狂人なり。狂人が爭で療治すべき。京都に住める醫者、醫書と論語を見ざるほどの者有るべきや。聞えにくきことを言うて喜ぶは、邊土に居て假名雙子を見療治する者は、世間より何

と言うて延引致し、其病人若死にも至らば、天命とは言ひながら、其醫の心に成りて見ば、我より不仁の私欲を以て、かくなしおこなひ、天命と片づけては置きがたかるべし。孟子曰く、殺レ人以レ刃與レ政、有二以異一乎、曰、無二以異一也と。殺す品は替るとも、罪に替は有るべからず、恐るべきことなり。心一杯をつくし、人の命を惜む仁心ありて、藥をほどこし、且病治せざるは是非なしとも言ふべし。子曰、人無レ恒不レ可二以作一巫醫一善哉と。醫は人の生死を寄せ頼むものなり。人の命を惜むを以て我心とせざれば、過の不仁多かるべし、我命を惜む心を以て、病人を愛せば、過すくなからん。斯のごとくせば、實に仁愛の醫者と成るべし。其仁愛を失ざれば、これ醫の恒と云ふべきか。これを味ひ見ば、治しがたき病人あらば、何ほども醫書に眼をさらし工夫すべし。博學の爲にはあらねども、病人を實に愛憐する所より、終に博學の名醫と成るべし。博學と言ふは、詩作文章を事とするには非ず。此醫の志すべき所の大略を言ふ。

曰く、然ば博學の名醫と言へるは醫學ばかりのことにて候や。他の文學なく挨拶等常體のことばかり言はゞ、輕々しく文盲に見ゆべし。文盲に見えては他の信仰も薄く、信仰なき所にては療治なども成り難かるべし。身の飾をなす爲には、詩作文章をも兼て博學なるが宜きにあ

○醫の志を問ふの段

或人問うて曰く、吾悴の内一人は醫者に致し度候。渡世の爲には、如何なるものにて有るべきや。

答ふ、吾醫之道は學ばざれば、委からずといへども、暫く志す所を以て告げん。先第一醫學に心を盡すべきことなり。醫書の意味得心なくして、人の命をあづかる事は恐るべし。いかんとなれば、我一命の惜しきことを顧み、他人に推及す。かゝる時は病人を預りて、一時も心ゆるやかなるべからず。譬ば我身に頭痛し腹痛む時は、少の間にても堪忍なるまじ、其堪忍ならぬことを知らば、人の病を見ては我病の如く思ひ、心を盡し療治せば、一夜にてもゆるやかに寐ることはなるまじ。人の命を惜み藥を施し、施すを以て心とし、病氣快然を以て樂とし、藥禮の事を思はず、療治すべき事なり。藥禮を思はずといへども、病家よりは、一命を頼むことなれば、身分相應の謝禮は有ることなり。或人言へることあり、渡世の爲ならば、醫者はすべき者にあらずといへり。藥をほどこすと言ふ所より見れば、左も有るべきこと哉。渡世のためにせば、藥禮の滞る所へは、往きがたき心も出づべきことなり。追附見舞ん

○或人神詣を問ふの段

或人問うて曰く、吾頃日親の年忌につき、國本へ參り候所、産神へはまゐり申さず候。子細は此度墓參り第一に存じ、最初に墓まゐり致し身汚れ候ゆゑ、産神へは參詣いたさず候。又神へ先に參りては、親を疎末になすやうに存じ候。かやうのことは如何。

答ふ、親の心に適ふやうにせらるべし。

曰く、親はなきゆゑに問ふこともならず、親の心いかゞしてしるべきや。

答ふ、都て親の心は、子の身の上能きことを願ふものなり。親の心は子を思ふに到らざる所なし。然れば身の汚なき以前に、産神へ參らるべし。親存生の時に、汝在所へ往れなば、先産神へ參るべしといはるゝに非ずや。然らば先社參して神を敬はゞ、是親の心に合ふといふものなり。父母の心に合ふほど宜しきことあらんや。范氏曰、子能以二父母之心一爲レ心則孝矣。中庸事レ死、如レ事レ生といへり。今は父母なしといへども、此意味を得心して事うまつらば孝行と成るべきことなり。

直に御名を唱へ給ふは說法にあらずや。此說法の功德に依て、彌陀を念ずる行者も念ぜらるゝ方の佛も、雙方ともに一體と成り、苦樂の二つを離れ終るなり。離れ終て無心無念の不可思義と成る、是を名づけて自然悟道とも言ひ、能所不二機法一體とも言ふに非ずや。大原問答に曰、自二有相修因一直入二無相樂果一、抑二往生見一令三體達二無生理一。是等の所は如何得心せられ候や。阿彌陀經曰、從レ是西方過二十萬億佛土一有二世界一、名曰二極樂一、其土有レ佛、號二阿彌陀一、今現在說法。現在は目前のことなり。唯心の淨土、己心の彌陀なれば、娑婆卽寂光なり。然れば現在の說法と言は、草木國土悉皆成佛にて、森羅萬象悉く一佛なれば、柳は綠花は紅と分れて、己々が法を說なり。一心不亂の修行を以て此に至り、九品の淨土を目前に拜むべし。これ卽諸法實相の所なり。光明遍照十方世界、念佛衆生、攝取不捨。他宗は修行の功を積み、觀念座禪等を以て、此理を悟るなり。然るに難行をせずして悟開かるゝ故に、念佛宗旨は諸宗に勝れりと、汝も口眞似するにあらずや。釋尊の法性を悟り、一佛成道し給ふと、念佛にて法性に至り、自然悟道したると、二つの替ありや。法性に二つ無くば、南無阿彌陀佛にて、淨土宗門は事足るべし。然れども傳授なくては足らずと云はゞ、大師の起請は僞と言うて破り捨てんや如何。

レ令ニ衆生專心ニ有レ在、是故讃ニ歎彼國ニ爲ニ別異ニ耳、若能依レ願修行。莫レ不レ獲レ益矣と。是に因て見れば、一切衆生に心の濁亂るゝ者多く、正念の者は少き故に、衆生の心を一筋に向はしめん爲に、西方を極樂と指て敎ふと宣ふこと明白なり。然れば極樂を西方と敎へ給ふは、愚癡の者に說き給ふ法にて、上知の敎は十方佛土なること明なり。師範と成る者は別して味ふべき所なり。愚癡なれば先我往くべき道を知らず。我往生を知らずして、他を導くべき所にあらず。扨如來の說法と言ふは、直に南無阿彌陀佛と知るべし。如何となれば、口に唱へる南無阿彌陀佛が耳に入り、一遍の念佛にては一念の惡を消し、二遍の念佛にては二念の惡を消す。惡念死して善心生るなれば、これ卽往生なり。往生に三義を立つる中に、一を擧げて云はゞ、往は猶此のごとし、此に生るなり、自心よりうまるを以て、故に不レ往往を名づけて往生となすなり。念佛の行者も、初には火宅を厭ひ離れん事を思うて、極樂往生を願ひ、彌陀を念ずるなり。夫より年月を經て、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と唱ふれば、念佛にくせづきて、終には餘念他念なく、後には南無阿彌陀佛斗になれば、往かずして南無阿彌陀佛に生るゝなり。南無阿彌陀佛になれば、我と云ふものあるべきや。我なければ虛空の如し。虛空に南無阿彌陀佛の聲有て唱れば、此卽阿彌陀佛なり。阿彌陀佛

是又三重病人に似たり。聖人の教は咎ある者はこれを正す、咎なき者を何ぞ正さん。扨汝に問ん、所々に庚申と云ふを見れば、見ざる聞ざる言ざるの猿なり、これを三疋合すれば、三重病人なるを、これは佛菩薩として人に拜ます。然れば三重病人も、佛菩薩に近きものを、傳授なくては救ひがたしと云ふは、如何なることぞや。且圓光大師は念佛の外に奥深きことを存ぜば、二尊の愍にはづれ、本願にもれ候べしと、一枚起請はありとかや。一枚起請にては、奥深きことはなしといひ、今汝が言へる所にては、傳にて大事を傳ふと言ふ、これ大師の教にたがふべし。儒には左樣の箱傳授はいらず。

曰く、然らば汝は、段々傳へ來る大事をみな僞と云ひ、非法するは如何なることぞ。

答ふ、何ぞ理なく他を非法すべき。念佛宗に云ふは、西方極樂へ往生し、彼國に至つて、如來の說法を聞きて悟を開き成佛するとの教なり。汝如き、人の導師と成る者は、此所を能々工夫して開くべき所なり。佛氏にて言ふときは、迷ふが故に三界城、悟るが故に十方空、本來無東西、何處有二南北一矣。如此なれば、彼國と言ふは、唯心の淨土と言ふことに決定せり。淨土と言ふも我心のことなり。普廣菩薩白レ佛言、世尊十方佛土、皆爲二嚴淨一、何故諸經中偏歎二西方阿彌陀佛國一、勸二往生一、佛告二普廣菩薩一、一切衆生濁亂者多、正念者少、欲

答ふ、然らば此に君を弑し、親を弑したる者あらん。その罪逃るゝこと能はず。これをも助くべきや。是を助けなば屆かぬ所をとゞかすと云ふものなり。助くること能はずといはゞ、三重病人も助くること能はざる證なり。且三重病人は見聞言ことなければ罪なし、罪なき者に助けはいらず、其外に助くることありや。

曰く、否猶大事あり。三重病人と生ることは、過去の因縁なり、此を助くる傳あり。三世を攝て救ふことは、儒道にはなきにあらずや。

答ふ、左樣の教は、傳へ來ることなし。天地の間に生るゝ者は、天を父とし地を母とし自ら生ず。朱子曰、自㆑天降㆓生民㆒則既莫㆑不㆑與㆑之以㆓仁義禮智之性㆒矣、然其氣質之稟或不㆑能㆑齊と。今日人に生れたる者は五常五倫の教あり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、兄弟の序、朋友の信、これを能く行ひ、仁義禮智の性を全うし、天命に至らしむる教なり。草木は天にたがはざるに因つて、教は入らず、人は喜怒哀樂の情に因つて、天命にそむく故に、教をなして人の道に入れしむ。固より啞なれば言ず、聾なれば聞かず、盲なれば見ず、見聞言ざれば咎なし、咎なき者は赤子に同じ、赤子は教へざれども無知の聖人なり。抑聖人は見るに心なく、聞くに心なく、言ふに心なき故に、不㆑失㆓赤子之心㆒者は聖人なりと、孟子宣へり。

曰く、先儒佛道ともに、勸善懲惡の教はしれたることなれば、相替ることもなかるべし。如何としても、儒には教のとゞかざることあり。

答ふ、教へてとゞかぬは孔子宣ふ下愚の不徙ものと言ふことにて候や。

曰く、その下愚は、目も見え、耳も聞え、口にも言ふ者なれば、教のとゞくことあり。下愚のものにても、佛前や神前に向ひ、これは神、これは佛ぞといへば、名は聞くなり。然れば是程の教とゞく所あり。如何しても教のとゞかぬ者に、とゞかする傳授あり。その傳授といふは、啞と聾と盲と、此三色を身に具へたる者は、先聾ゆゑに法を聞くことならず、盲なれば見ることならず、啞なれば言ふことならず、如是三重病人にても救ひ、往生さすることを傳授するなり。此を以て見れば、儒には闕けたる所あり。今世のこと斗にて、後世を救ふこと能はず。

答ふ、其救はるゝ罪は、何に因て出來申し候や。

曰く、その罪と言ふは、物を見ては見るに附き著念を發し、聞くにつきては喜び怒り、言ふに附きては他を誹り人に怒らせ、其外種々の罪を作る、擧げて數へがたし。如是つみ咎を救ひたすくることなり。

學、不レ遷レ怒、不レ貳レ過、不幸短命死矣、今則亡、未レ聞二好レ學者一と。顏回の心は鏡の物を照すが如し。右の怒を左に遷さず、前に過つことを後に復せずと。如レ是心に得て身に行ふを德に至ると言ふ。故に文學に長じたる子夏子遊を、好レ學とは宣はず、詩書六藝七十子習て通ぜざるにあらず、通ずれども文學は用なり、德とはいはず。汝の云へる學者は、年久く文字を數へても、書の心を得ざるゆゑに、不孝にして世の交あしく、不義の類多し。然れども文字さへ讀めば德ありと思ひて、世間に取違へる所なり。誤るべからず。

○淨土宗の僧念佛を勸むるの段

或淨土宗の僧、每々參られしが、或時來りて曰く、汝は儒者の事なれば、佛法を勸むるにはあらねども、無常變易のならひなれば、また徒然の折柄は、百遍二百遍づつ成りとも、念佛を勉められなば、後世の便とも成るべし。且儒にて終に聞及ばざるの大事も、佛法にはこれあれば申すことなり。

答ふ、思召よられ、斯く申さるゝこと過分の至りに候。扨其儒になき大事とは如何なることに候や。

曰く、然らば書物を讀む外に學問と云ふことありや。
答ふ、いかにも書物を讀む事にて候。然れども書物を讀みて書の心を知らざれば、學問とはいはず、聖人の書は自ら心を含め給ふ、其心を知るを學問と言ふ。然るに文字ばかりを知るは、一藝なるゆゑに文字藝者と言ふ。
曰く、書を讀むは同うして、汝今分けて二つとするは、證あることに候や。
答ふ、孔子謂二子貢一曰女器也。子貢の學は記憶能して記すこと多けれ共、いまだ德に至らず、志あれ共仁に至らざる中は器なりと宣ふ。器とは一品の役をなし、萬事に通ぜざることなり。子貢は志あるゆゑに、終には性と天道とを聞いて、君子の德に至り給へり。汝の云へる學者は、親には不孝をなし、他人には僞を言ふ、是皆不仁のことなり。文學ばかりにて一藝なるゆゑに文字藝者と言ふなり。德とは心に得て身に行ふを云ふ。我心を得れば父母には孝行をなし、他人には僞をいはず、詐をいはざれば、出入等に不埒はなさず、返す覺えなきものは借らず、飢ゑて死すとも不義の物を受けず、己が欲ざる所を人に施さず、我才能を以て人にほこらず、他人の善事を身にうつし、人の惡事を見ては、我にもこの惡事あらんかと恐れ、己を顧み、仁義の志有りて止ざるを聖人の學問と言ふ。子曰、有二顏回者一好

○學者の行狀心得難きを問ふの段

或人問うて曰く、或所に幼年より學問し、四書五經は云ふに及ばず、何にても書物暗ずる程の德有る人あり。然れども心得がたきこと多し。一事を擧げて言はゞ、金銀借用等に、不埒なること多し。夫ともに手前にも儉約を守らるゝ上にて、是非なく不足あらば、他の了簡も有るべけれど、手前は取りじめなく、他人に不埒をなし、且親への事も何とやら惡しき所有りて、親の心に合はざれば、先は不孝と言ふべきか。さて身の行作を見れば、物知顏に我をたかぶり、辯舌は鮮なれども、聞きなれぬ挨拶にて、兎角耳に入りにくし。なにとやら寄りそひがたき風俗有りて、十人が九人までは嫌ふなり。是を以て見れば、親の氣に入らぬも尤なりと云ふ者多し。博學の德有りて加樣なる身持あるは、如何なることぞ。

答ふ、汝は德と言ふことを曾て知らずと見えたり。加樣なる疑はしきことを問ひ定めらるゝは、左もあるべきことなり。其學者は德に至るの學問にはあらず、文字藝者と言ふ者なり。

答ふ、教の道は一定の中に膠して變を知らず、一を取りて百を捨つる如きにはあらず。喩ていはゞ、一本の丸木桴に乘るが如し。よく乘り馴し者は、何を踐んでも踐む所直に中と成りて乘ることやすし、乘り馴れざる者は、丸木ゆゑにぐれ〳〵として踐む所を知らずして乘ることかたし。學問の道もかくの如し。心を知らざれば聞けども聞こえず、又心を知る者は何を聞きても一理なれば、皆我心に合へり。其放心を求むると說くも、聖人の心は無心なりと說くも、二つにはあらず、一致なり。天地は物を生ずるを以て心とす。其生ずる所の物、各天地物を生ずる心を得て心となす。然れども人欲に掩はれて此心を失す。故に心を盡くして、天地の心に還る所にていふ時は、放心を求むると說き、又求めうれば天地の心となる。天地の心になる所にて說くときは無心と言ふ。天地は無心なれども、四季行はれて萬物生る。聖人も天地の心を得て、私心なく無心の如くなれども、仁義禮智行はる。一旦豁然として貫通する時は疑は晴るものなり。聖學を論ずるといふは、此心を知つて後のことと思はるべし。

給ふ所なり。神璽の御德に至り給へば、寶鏡寶劍の御德は、其中に籠り給へり。此寶鏡を視ますこと、吾を視ごとくすべしと宣へば、寶鏡を直に天照大神宮とも拜むべし。床を同殿を共にすと宣ふは、寶鏡の御德を離れ給はずば、代々の君天下を平に治め給ふべしとの御寶勅なりと拜すべし。此理を知らずして事を行はゞ、君としては國を亡し、臣としては家を亂し、政道正しからずして無益の物を殺し、人欲肆にして無道を行ひ、五倫五常の道に背き、出家は五戒を破り佛の道に背くべし。世法を治るには、聖人の道にあらずして何を以て治めんや。故に儒道佛道老子莊子に至るまで、盡く此國に相とする樣に用ふることを思ふべし。日本宗廟天照皇太神宮を宗源と貴び奉り、皇大神宮御寶勅に任せ、萬くだくしきを拂ひ捨てて、一心の定れる法を尋ねて、天の神の命に合ふ唯一を相くるに儒佛の法を執り用ふべし。こゝを以て、一法を捨てず一法に泥まず、天地に逆はざるを要とす。

或人曰く、客の問ふ所、未盡さざる所あり。汝が答を聞くに、學問の道他なし。其放心を求むる而已とも言ひ、又聖人の心は無心なりとも說く。無心ならば心を求むることは有るまじ。實に心を求むると思はゞ、無心と說くは非なり。何が是何が非と、一に定めずして加樣に紛はしく說くはいかなることぞ。

の體を指して、見易かるべきは、川の流に如くはなしと示し給ふ。滄浪の水濁らば足を濯ふの歌を聞給ひ、小子これを聞け、自心に不善あれば、他より侮を受くると示し給ふ。聖人は見聞くことを心とし給ふ事かくの如し。道に信仰あるこそ、聖人の學問とはいふべけれ。我前方に一物一大極のことを疑ひしに、或書を見侍るに、天地一面の神國といはゞ博くして狹し、微塵の中にも神の國ありといはゞ狹うして博しと云ふことを見て、一物一大極の疑を解く。他の書を見て解くといへども仝く儒の害をなすにあらず。儒をまなびし道を以て、御神託を拜するに、少も疑はしきこともなし。且佛老莊の教も、いはゞ心をみがく磨種なれば、捨つべきにもあらず、一度琢きて後は、佛老莊より百家衆技の類を寄聚め見ても、心は鏡の如し、物來る時は卽應じ、物去る時は卽靈々として一物を止めず。此心を得て後に聖人の教に向はゞ、明鏡に對して我形を見る如し、天地萬物の上を見るも、唯一理にして、我掌を見るに同じ、皆我一體なり。日本紀云、天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰、吾兒視此寶鏡當猶視吾、可與同床共殿以爲齋鏡と。此天照大神は神聖御德寶鏡寶劍御德見御神也。中庸に所謂自誠明謂之性者にして天道なり。天忍穗耳尊は、中庸に所謂自明誠謂之教者にして、由教神聖御德に入り

の名に泥み止まらぬことを言ふなり。然れども天地の外へ去るといふことにはあらず。又性理にくらき儒學者などは、此事を聞き驚いて、これは禪家のこと、格別なりと言うて除き置くなり。是を除き置けば、告子が弟子に成りて不レ得レ言勿レ求レ心といふ者にして、儒者にてはなし。何の告子に替る事あらんや。中庸に、子曰、舜其大知與、舜好レ問而好レ察二邇言一隱レ惡而揚レ善執二其兩端一用二其中民一其斯以爲レ舜乎。舜は天下の善惡を受容れ、惡を去りて善を用ひ給ふ。今世の人は我心に濟ぬことあれば、善惡を擇まず除け置くなり。孔子舜を大知と宣ふは、何にても問ひ尋ぬることを好み、近き言葉の中にても能察し明め、惡きことは隱しおき、其中にて、能き言葉を執り用ひて、其善の中にて、又兩の端を擇び、其中にて能き言をとりて、民の上に用ひ給ふは舜なり。是を以て大知聖人なりと宣へり。實の學問と云ふは毫釐も私心なき所に至ることなり。孔子の如く徳御座共、巧レ言令レ色足恭左丘明恥レ之丘亦恥レ之と宣ひ、又述而不レ作信好レ古竊比二於我老彭一と宣ふことを知るべし。其徳は古今聖人に勝れ給へども、此等の賢人にも一事の徳あれば慕ひ給ふ。無我の所を法とすべし。況や心を得度く思ふ者、私心有つては得らるべき所にあらず。心は彼にては得られず、此にては得らるゝとは定めがたし。孔子在二川上一曰、逝者如斯夫、不レ捨二晝夜一と、道

人の鏡磨ぐ者あらん。上手ならば鏡を磨ぎに遣はすべし、磨種に何を用ふと問ふべきや。儒佛の法を用ふるも斯のごとし。我心を琢く磨種なり、琢きて後に磨種に泥むこそをかしけれ。假令儒家にて學ぶといふとも、學び得ざれば益なし。佛家を學ぶとも、我心を正く得るならば善かるべし。心に二つの替あらんや。佛家に習ば、心が外に替る者と思ふ者は、笑ふにも又絶えたり。佛家も最初は儒學より入る僧多し。儒書が妨になりて、佛意を得ること成り難きことを聞かず。儒者もその如くに、佛法を以て心の磨種にして、心を得て何ぞ儒家の妨となるべきや。既に佛氏儒者の方にて發明しても、用ふる所は佛法に用ふるなり。又經論に因つて見れば佛は覺なり、覺は一切衆生の迷ひ解るなりとあり。迷解くれば、本に歸るゆゑに、三界唯一心と言ふ。迷の解けたる體を名附けて佛性と言ふ。佛性と言ふは天地人の體なり。至極の所は性を知る外に佛法あらんや。佛より二十八世、達摩大師見性成佛と說けり。又儒には道の大原は天に出づ、依つて天の命これを性と言ふ、性に率ふは人の道なりと說き給ふ。性と云ふも天地人の體なり。神儒佛ともに悟る心は一なり。何れの法にて得るとも、皆我心を得るなり。又禪家の僧などは、天地は大豆粒のやうなる小き者なるを、己とし止まらんやと言ふ。これは法性不思善不思惡の地位に至れば、天地の名を離れたる者なるゆゑに、此假

し。古より有來る法を一として捨てず、一に泥まざるは、名醫の諸藥を捨てずして病を治するに同じ。天下國家を治るに儒道は善といふとも、心闇して泥むことあらば必ず害あらん。是庸醫の人參を以て人を殺すが如し。金屑眼に入るときは忽翳となる。又佛法信仰するは、心をさとるためなり。佛法を以て得る心と儒道を以て得たる心と、心に二品のかわりあらんや。何の道にて心を得るとも、其心を以て仁政を行ひ、天下國家を治めたまふに、何を以て害あらん。自惡を爲し、刑罰にて死するものは、君の私を以て殺し給ふにあらず、何ぞ刑罰に心あらんや。書曰自作災不レ可レ活。聖人の政は天の如し、無爲にして治る。刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不レ驚といへり。

曰く、汝がいへる如くならば、心を得る爲には、佛法を雜へ用ふるも然るべきと聞ゆ。然れども、佛法は我業にあらざれば、同くは儒にて知り得度候。佛法を除き得ることは成りがたきことにて候や。

答ふ、孟子曰無二惻隱之心一非レ人也、無二羞惡之心一非レ人也と。汝最前より心を得ざるを苦んで赤面し、不善を恥づるは、即羞惡の心なり。其羞惡の心を押して知らば、仁義の良心に至るべし。何ぞ佛法によることあらん。我心を得れば儒佛の名を離れたるものなり。譬ば此に一

曰く、知ると知らざると、用ひやうに二品あるは、いかなることぞや。
答ふ、佛法の表一通りを聞きて悟ること能はざれば武帝に刑罰の者を訴へるが如し。助くることを知つて正すことを知らず、如何ぞ政行れんや。
曰く、左あれば忽に害あり。又悟道して行ふとも、佛法を用ひば殺生はなるまじ。殺生はならずと言うて、殺すべき咎ある者を助けなば、害あること明白なり。
答ふ、佛法も人を助くる法なり、藥もまた病を助くる物なり。然れども法を弘め藥を施し、人を助くるは其人によるべし。世に醫者多き中に、附子熊膽を遣ひ覺えて療治する醫者もあり、又人參を第一に用ひて療治する醫者もあり、熱病に眞桑瓜や水を用ひて、病を癒せし醫者もあり。かくの如き生冷の物は毒なりと言うて、多くは醫者の用ひざるものなり。假令大人參の如き、能き藥ばかり用ふとも、病癒えざればなんの益あらん。是を以て見よ、人參を勝れたりといはんや、附子と熊膽を劣れりといはんや。名醫は何にても、病の癒ゆべきものを用ひて疾を癒し、諸藥を盡く遣ひ覺えて、療治するこそ善かるべけれ。古より藥種として出し置るゝ物、何ぞ棄ることあらんや。一も舍てず一に泥まず、能用ふるは名醫なるべし。一方に泥み滯りて、時の變を知らざるを名醫とはいふべからず。天下國家を治る道もかくの如

をつなぐより勝ることあらじ。武帝の如く死罪の者を見て泣く君あれば、其慈仁は金を得し如く、民喜べども、政道正しからずして、江南の亂は金を懷き飢ゑて死するに同じ。是害ある所なり。聖人天下を治め給ふは、敬を主として、孝弟忠信を行ひ給ひ、是を教となし給へば、只一飯を與へ、命を助くる如くなれども、天下の民盡く孝弟を行ふゆゑに、及ぶ所廣大にして利益ある所なり。事を以て論ぜば、佛氏たる人罪咎あるものなればとて、死罪に行ふべきや。罪咎ある者にても、弟子にせんと言つて、上よりもらひ助け度思ふは出家なり。慈愛の心ばかりにて、聖人の法なくして政道を行はゞ、反て事の亂とならん。武帝の如き君あらば、異端と譏るも宜なる哉。

曰く、手前には儒道にて身を修むる志なれば、我爲に問ふにはあらず。然れども上より下に至るまで、佛法を信仰のことなり。雜ふる時に害あることならば、上には用ひ給はざる筈なり。如何なることぞや。

答ふ、汝の如く聞得ざる者あれば害をなす。聞得し人には何ぞ害有ん。

曰く、汝は交へ用ふるときは害ありといはるゝゆゑに問ふことなり。

答ふ、我いふ所は左にはあらず。佛法の用ひやうを知らざれば、害あることを言ふ。

覺るより外はなかるべし。悟れば生死の迷を離る。生死の迷を離れざれば、宗旨の法燈と成ること能はず。扨儒には性理の至極の所に至りては、上天の載は無レ聲無レ臭と說き給ふ。即易に所謂窮レ理盡レ性以至ニ於命一と宣ふ所にて、聖人の心なり。かくの如きは渺然として主とする所なきに似たり。然れども聖人理を窮め給へば、義有つて存せり。喩ば雪中に梅の香を知るが如し。形見えずして而も明なり。然れば聖人の儒は天道に至り給ひ、天地あらん限はいまし給ふ。聖人沒し給ふに、心ばかり殘れること、如何と思はるべきが、世に在す時も心は天道なり。詩曰文王在ニ於上一昭ニ于天一といへり。此心を知らば德行は至らずとも、儒者ともいふべきが、其心を知らざる者を、聖人の弟子とはいふべからず。扨儒佛共に理の所は近うして分れがたし、又行の上は見えたる通りに雲泥の違あり。出家は五戒を有ち、俗は五倫の道を行ふ、是又まぎるゝことはなし。其出家の眞似を、俗がするに因つて流に費有り。唐土にも梁の武帝の如くに、終日一食ニ素蔬一宗廟以レ麪爲ニ犧牲一斷ニ死刑一必爲レ之涕泣、天下知ニ其慈仁一。然るに武帝之末、江南大に亂る。佛の心を悟ずして法に泥む時は害あり。害あることを譬へていはゞ、飢者に金を與ふる如し。天下第一の寶と喜べども、此を懷いて死するに同じ。聖人の敎は飢者に一飯を與ふる如し。一飯は金の喜には劣る如くなれども、命

見はれ行はれず、世の人德を明にせんと眼を開くべき所なり。天の道を知つて世に教へ施し給ふを、聖知とはいへり。

又問ふ、儒者より佛法を異端と言うて嫌ふは、いかなる違あることに候や。

答ふ、異端とは端を異にすといふ事なり。儒には仁義禮智信の五常、君臣父子夫婦兄弟朋友の五倫とを天の道とし、天人一致とす。佛家には五常五倫の道を立てず。此儒と歸を同じうせず、因つて異端と云ふ。假令儒者にて儒經を說くとも、我心を知らざるは聖人の心に通ぜず、我私心を以て教を立つれば、私心は直に異端なり。然れども聖人の弟子に似たれば、押いだし異端とはいはず、言はずとも異端の方に近き者なり。時節至て心を知れば、我儒と一致となる。扨儒佛の二道を枝葉にかゝり論ぜば、事多くして分れ難し。互に根本の所は性理を會得するを要とす。先佛氏にていはゞ、天台宗は止觀と言ひ、眞言宗は阿字本不生と云ふ。禪宗は本來面目と言ひ、念佛宗には入我我入機法一體などと言ふ。日蓮宗には妙法と言ふ。加樣に名目には替あれども、修行熟して至る所は一なり。一事を擧げていはゞ、壽量無邊經に曰く、佛告㆓文殊㆒言、無心無念本佛以㆓不思議㆒爲㆑體、無㆓本去來㆒無㆓三身性㆒無㆓十界性㆒と言ふ。然れども有に對する無にはあらず、是を以て法性とはいふべし。然らば其法性を

を免るほどのことを知る世となりぬらん。此皆大已貴命、少彦名命、唐土にては、伏羲神農黄帝御仁徳の功なり。天は萬物を生じ、生ずるもの自育る。日本紀に云ふ、保食神乃廻首嚮國則自口出飯、又嚮海則鰭廣鰭狹亦自口出、又嚮山則毛麁毛柔亦自口出と見えたり。保食神の口とは、如何なる口ぞと工夫すべし。天神地祇はかくのごとく、自由なる御神なり。その自由の口より生ずるゆゑに、生ずる物も又自由なり。譬ば蟬は口に聲なくして、脇の下に聲ある者なりともいへり。口もあるべけれども、何方とも見分がたし。春夏空に飛ぶ小蟲などを見れば、何を食ふとも見えずして、飢ることなく、虚空に生じて虚空に死すや、出所を知らざるもの多し。此類を推して保食神の口を味ふべし。是を以て見れば、今日の萬民世渡りの事は定ある者なり、衆人はこれ有る事を知らず。然るを萬物の上について、萬物の迹を見て教を立て給ふ。其教直に天に有る故に、古今變らず。天は物を生じ與へて、其心を聖人をして民に知らしめ給ふ。聖人は天の如くこしらへ出すこと能はず。天の力に届かざる所を教へ世を救ひ給ふ。聖人なくば天德見れず、天德なくば爭聖人の功を立て給はん。譬ば日本武尊の武勇なくば、天の叢雲の御劍も、草薙の御劍と云ふ名は見はれじ。寶の德も皆持つ人による。聖人なくとも天の道朽はせず。然れども世に

則定其療病之方、又爲攘鳥獸昆蟲之災異則定其禁厭之法、是以百姓至今咸蒙恩賴と見えたり。何國にも道は同うして、唐土にて伏羲よく犧牲を馴伏すと、史記に見えたり。第一に人と畜類とは類異る故に、鳥獸共に人を懼て近ずくことなきを、聖神は私心なきを、彼が懼るゝことを見てこれを心とし給ふ。それ故に牛は此をこのむ、羊は彼を好む、豕は此を好む、馬は彼を好む、此は強し彼は弱し、此は厲し彼は靜なりと、向ふ所の物を自の心として、彼が氣質の性の儘を能く知り給ひて、人に馴伏するやうにし給ふにより、多くの獸を馴れしたがへて、後世鬼神に諸肉をすゝめ、又老人を養ふことを教へ給ふ。然ればは天地に生を受くる物は、自弱きものの強き者に從ふは是天之道なり。聖神其德いますに因て無益の物を殺さず、理を盡くして、祭祀賓客老人の養等には已ことを得ずして、時の入用に從ひ、殺して是を用ひ給ふ。無用の時は蟲一疋も殺し給はず。又萬草の中に於て五穀は勝れたることを知り給ひ、麥は夏出來るものなり、いつ蒔うゑたるが實登がよき、稻はいつごろ種おろすが善き、それより大豆小豆小角豆はいつが善きと、時候を考へ給ひ、五穀を植藝ることを教へ給ふ。其外に草木の多き中に、食うて能く人を養ふ者を知らせ給ふ。且土を見分、それはそこ、此はこゝと、田畠の植る所を知り教へ給ふによりて、人たる者、飢餓る事

此母の胎内より知りて、生れ給ふにはあらず、向ひ視る物を則心と爲し給ふ。是聖知の勝れたる所なり。向ふ物を移し曲げざるは、明鏡止水の如し。人たる者元來心は替らざれども、七情に蔽ひ昧されて、聖人の知を外に替りたることあるやうに思ふより。昧くなつて種々に疑ひ發るなり。元來形ある者は形を直に心とも知るべし。譬ば夜寐入たるとき、寐搔し、おぼえず形を相く、是形直に心なる所なり。又子々水中に有つては人を螫ず、蚊と變じて忽に人を螫す。これ形に由るの心なり。鳥類畜類の上にも心をつけて見よ。蛙は自然に蛇を恐る。親蛙が子蛙に、蛇は汝をとり食ふ、畏しきものぞと敎へ、蛙子も學び習うて、段々に傳へ來りし者ならんや。蛙の形に生るれば蛇を恐るゝは、形が直に心なる所なり。其外近く見んと思はゞ、蚤は夏に至れば、すべて人の身に從つて出づるものなり、是も蚤の親が人を食うて渡世をせよと敎へんや。人の手のゆく時は心得て早く飛ぶべし、とばずば命をとらるゝと敎へんや。飛にぐるは此習はずして皆形によつて爲す所なり。孟子曰形色天性也、惟聖人然後可ニ以踐一形。形を踐むとは、五倫の道を明に行ふを言ふ。形を踐で行ふこと不レ能小人なり。畜類鳥類は私心なし、反て形を踐む、皆自然の理なり。聖人は是を知り給ふ。日本紀に云、夫大巳貴命與ニ少彥名命一戮レ力一レ心經ニ營天下一、復爲ニ顯見蒼生及畜產一

ことなり、少しにても仁愛を行ひ義に合へば安樂なり。我心の安樂になるより外に敎の道あらんや。我心に得ざることを、僞を以て得たる顏つきしたりとも、それは僞なりと受けつけぬ心有るゆゑに苦むなり。是前に汝が言へる古歌のごとく、

いつはりも人にはいひてやみなまし心の問はゞいかゞこたへん

と言ふ所なり。孔子曰、君子不憂不懼、又曰、内省不疚夫何憂何懼と。我言所他にはあらず、平日不憂不懼内に省て疚しからず、心靜々として安樂ならば、これに勝ることあらんや。

曰く、聖人は生れながらにして知り給ふ、汝等如きの窺ひ知るべき所にあらず。然るに心易く聖知の私知のと判斷せるは、如何なることぞや。

答ふ、汝も黑白は心易く分るべし。聖知と私知とを分るもかくの如し。禹の水を治め給ふ時に、彼は高し此は下しと、知り給ふばかりのことにて、替りたること有るにあらず。私知とは品々の了簡を加ふるゆゑに、自然の知にあらず、此聖知に異り。聖知を近く知らんと思はゞ、程子曰、今人覊靮以御馬、而不以制牛、人皆知覊靮之作在乎人、而不知覊靮之生由於馬、聖人之化も亦猶是是。聖人馬を見て後に覊を作りて、馬にはませて使ひ給ふ。

數も少ければ彌罕なるべし。

答ふ、我思ふは、左にはあらず。佛者には少なるべし、儒者には數も多かるべし。儒者といふは、學者のことなれども、儒は濡にて身を濡すと云ふことなれば、此身にて滿足したる者を儒者といふべし。孟子曰人々己貴者あり。己に貴は心なり。心を得て滿足し、身を濡す者は儒者なり。何ほどに出家多しといふとも、俗人の十分の一にも及ばず、人數少きゆゑに、悟道の人罕なるべし。俗は數萬のことなれば、身を濡す人も多からん。

曰く、然らば修行の功を積み、心を得て道の疑なき程に至り、何程の勝れたること候や。

答ふ、孟子の曰、我四十而心不動と。國天下のことに預りて、恐れ疑ふことなく、身を修るを勝れたりと言ふ。然るに世の中に、道を敎ふる爲に弟子を取り、敎ふることを知らずして、弟子に養るゝは逆なり。之を譬ていはゞ、男たる者我女房を養ふ事を得せずして、反て女房に養るゝ如し。心を知らず敎ふる時はかくの如く逆に至る。大學道明明德爲本新民爲末。學者たる者心を知るを先とすべし。心を知れば身を敬む、身を敬む故に禮に合ふ、故に心安し。心安きは是仁なり、仁は天の一元氣なり。天の一元氣は萬物を生じ育ふ。此心を得るを學問の始とし終とす。呼吸存する間は、心を以て性を養ふを我任とする

もありさうなるが、笑止や聾さうなといはれけり。加樣なることなれば問うても濟ず、問はざれば猶決定せず、如何して疑なく、末期に至りて泣かざるやうになるべきや。
答ふ、彼僧最初に、拂子を立てて見せられしを、汝是を見て不レ知、盲といふべきを、又品を替へ說いて聾といへるは、愛に溺し敎なり。孔子は吾爾に隱すことなしと、只一言に盡し給ふ。又季路問レ死、曰未レ知レ生焉知レ死と宣ふ。今此身を知れば、死と道は目前に明なり、何ぞ他に因て求んや。生死のことは論語に明なり。是をも殘さず敎るを實の儒者と言ふ。汝も秘密せずして、敎る方にて學び、早く生死の疑を晴さるべし。足下の近きことを知らず、聖賢の敎に違ひ心を苦め、夫にても世渡勝手よきと思うて己が心を欺き、我こそ孔子の弟子にて、眞の儒者なりと言つて居るゝは、如何なることぞ。
曰く、古歌にこゝろのとはゞいかゞこたへんと有るごとく、心に問へばやすきにはあらず。人がとへば、儒者などは俸祿渡世のことを思ふ者にてもなし、元來天より來りて天に歸ると潔白にいへども、實は潔白ならず。心は糞土に蓋をして置くやうにて安からず苦むなり。然りといへども如何ともすべきやうなし。是は儒者斗にてもなく、佛者も前にいへる如くなれば、世間並なりと思ふ。尤佛者は廣きことなれば、千人に一人得心の僧もあるべけれど、儒者は

地へ散り〳〵て一列なりと思はれ候や。
曰く、何ぞ人倫を捨つべき。又天地に散り散ると決定するにも非ず。然れ共地獄極樂へ往くべきとも思はず、三世のことは定めて無き者にてあらんと思へり。これは我ばかりにもあらず、世間にも決せぬ人もあるやらん。或所に儒者を專一に致し、佛法を譏り、且神社佛閣へ友に誘れ參りても、曾て拜などもせずして居られしが、時節來て病氣づき、最早九死一生と相見えし時に、日頃緣類ゆゑ來り因む僧ありければ、臥ながら手を合せ、淚を流し後世の事返すがへす賴入ると申されけり。自身にも最期に望んでは、何とやら氣味惡く、日頃の血氣に任せて言ふ時とは替るものにや、又我も實はさつぱりとはせねども、佛者に聞くも口惜く、其上佛者にも、正く悟道の僧も見あたらず。或時田舍の禪僧に出合ひ、幸哉と思ひ、佛家には生死の一大事を說き明せりと承る、如何なることぞ、今宵は心閑に御物語候へといへば、彼僧拂子をたてて見せられけれども、何とも心得がたき故に、暫く他の物語をし、後に又最前の生死のこと、今一度唯心易く耳に入よき樣に示し給へと言ひければ、今宵は茶が濃て、寐苦しからんといはれける故、聞えざるかと思ひて、最前の生死のこと、今一度示し給へと反していひければ、彼僧最早四の柝が鳴ると、大聲にていひ、又いはるゝやうは、汝は學問

仁義の良心を發す。常に仁義の良心起らば、人事は此に越ることあらんや。

曰く、性善を知るは、至極のことにて有るべけれど、我等ごときは何程聞きても得らるべきにあらず。孟子の如き器量あらば善ならん。後世の者所詮及び難し。又世界數萬億の中に纔に二十人三十人、假令九十百に至り、得心する人ありとも、いはゞ少しのことなり。只心易く云うて、世渡を能するこそ善るべけれ。佛者ならば極樂へ往生すと云うて悦ばせ、儒者ならば天地に升降と云ふこそ勝んと思へり。假令覺ればとて、同じ天地なれば苦んで益なきことにあらずや。

答ふ、汝も益あると思へばこそ、苦んで學ぶにあらずや。學ばざれば鄉人となる。鄉人となる恥を嫌ふ故に學ぶなり。學問第一の所は、聖賢に至ることなり。性善を知るは聖賢に至るの門なり。門戸なくば如何ぞ聖人の道に入るべき。孟子曰、堯舜之道孝弟而已。苦んでなりとも是を能くするを益とす。孝弟を舍つれば禽獸となる。心禽獸に陷て不孝不弟をなし、親子兄弟心を阻る程、世に悲しきことあらんや。此故に孝經に、子曰自天子已下至于庶人孝無終始而患不及者未之有也と、因て五刑之屬三千、罪莫大於不孝と宣ふ。加樣に罪人となり、人倫を破れども恐るゝ事なく、孝弟は行ひ損と思ひ、死すれば君子小人ともに、天

子は此理を知らず、己が私知を以て、定て此筋にてあらんと思うては問ひ、又決定なき所より、品を變て問ふゆゑに、論議の度々に變るなり。吾に決斷して云ふことばは變ざる者なり。然るに告子は不レ得ニ於言一勿レ求ニ於心一と言ふ。於レ言有レ所レ不レ言其言を捨置べし、其理を心に反し、求るに惡ししと云ふ。心に求る事を嫌ひなば、何の世にかは覺る所あらんや。今日一事の輕きことさへ、心を盡くして知るにあらずや。且告子が湍水のたとへにて明に知らるべし。告子が思ふやうは、心は種々の思を生ずれども、何をと言うて取るべきやうなければ、性は水の流れて淵にぐる〳〵回るごとき者と思へり。夫天は忽寒暑雲霧風雨を生じ、平旦清明の氣より、仁義禮智の良心を生ずることを知らず、色々品々に穿鑿し、思慮するゆゑに、只紙一重ほどの違も天地懸隔とはるかなるへだたりとなる。譬ば犬の己が尾を食はんとすれば、身の回るに隨ひて尾も巡るゆゑ、喰ひつくこと能はず。告子も色々思慮するゆゑに、性善に及ぶこと能はず、惜い哉哀しい哉。孟子は知を用ひず、義を行ひ給ふに因て、平旦清明の氣を養ふことを得給ふ。然れども獨得る所にして形容しがたきを以て言ひがたしと宣ふ。程子曰、觀ニ此一言一則孟子之實有ニ是氣一可レ知矣。又程子の此一言を觀れば、程子も此氣を養へること明なり。知音の人は是を知るべし。性善を會得すれば、氣も亦清明にして、

にして入り立つ時は、假令辻に立てなりとも、此味を世に傳へ殘さんと思ふ勇氣も出るなり。我文學の拙き恥を知らずして、如斯謂散すは實に鄙夫といふべけれど、我志を述んためなり。

曰く、性理は第一の事とはおもへり。然れども兎角聞き得ることかたし。雲泥の違ある告子が非を得心せば、孟子を是としらるべきや。

答ふ、孟子の性善を得れば、白晝に黑白を分る如し。他の非は聞かずして明に分るゝなり、何ぞ非を知ることあらん。性善を知れば、定木を以て曲直を正すが如し。孟子の性善と宣ふは、心を盡して性を知り、性を知る時は天を知る。天を知るを學問の初とす。天を知れば事理自明白なり。此を以て私なく公にして、日月の普く照し給ふが如し。告子がいへる所は、生れながらの性を見失ひ、私知を用ふれば白晝に日輪の光をからずして、戸を閉ぢて燈火を用ふるが如し。照す所かくの如く違あるなり。因つて雲泥の違と言ふ。天地は照々と明なり、何ぞ力を用ふることあらん。力を用ひず行るゝゆゑに、安樂にして然も明なり。是故に天地の靈となる。此を知らず、昏々とくらうして、私知を以て苦むは告子が說なり。孟子は性理に明かなるゆゑに、積義浩然の氣を養ひ、至大至剛にして天地に充るの德に至り給ふ。告

生ずべきや、是萬物は心なる所なり。寒來れば身屈し、暑來れば身伸ぶ。寒暑は直に心なり。熟して工夫あるべし。

曰く、段々の說にて、天人一致と性善のことは、耳には聞けども、心には得ずして、少しも面白き味の出でざるは如何なることぞや。

答ふ、能き問ひ哉。徒然草に、傳へ聞き學んで知るは眞の知にあらずと云ふ。今汝かくの如くきこえたる樣に思ることも、未だ實知にあらず、是を以て味なし。性を知りたしと修行する者は得ざる所を苦み、是はいかにこれは如何にと、日夜朝暮に困むうちに、忽然として開けたる、其時の嬉さを喩へていはゞ、死たる親のよみがへり、再び來り給ふとも其樂にも劣るまじ。昔より重荷を持し山賤の息杖懸て休みたるを、安樂の至極なりと畫き傳へし、其人は豁然と開けたる、此樂を知らざる者にて有りつらん。我に至極の樂を畫けと望む人あらば、豁然と開けつゝ、手の舞ひ足の踏む所を忘れし者を畫くべし。此所を傳曰、豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到と。扨この所は、我心を盡すほど〳〵に嬉さちがふなり。年久しく如何々々と思ふ所より、忽然として疑晴ることあり。然るに一ヶ月や二ヶ月に疑を起し、是に於ても彷彿と開く事ありと雖も、喜ぶ事少し。少き故に勇氣出ず。又信心堅固

ゐに萬物の體となる。其物を暫く名づけて、理とも性とも善とも云ふ。然るに私意を用ふる者は、天地は活物なりと、一方を知て、死活を攝て一理なることを知らず。因て害をなすこと甚し。是故に孔子攻乎異端斯害也已と宣ふことなり。天地を人の上にていはゞ、心は虛にして天なり、形はふさがつて地なり。呼吸は陰陽なり、これを繼ぐ者は善なり。用を爲す所を主る體は性なり。これを以て見よ、人は全體一個の小天地なり。我も一箇の天地と知らば、何に不足の有るべきや。告子はこれを知らず、生滅にあづかる思慮を以て我が性と思ふ。思ふ所は性にあらず。いかんとなれば思慮なき天理に異るゆゑなり。此味を知らざる者は、天道に合はざる故に異端と言ふ。渾然たる一理の性に至れる孟子には異る所なり。

曰く、天人は一とは聞けども、我も天地と一致なること落著しがたし。汝は此理を知れりや。嘗て不得心のことは、いはれまじきが如何なることぞや。

答ふ、書經大誓に曰、天視自我民視、天聽自我民聽とあり。天の心は人なり、人の心は天なり。此故に古今に通りて一なり。汝今物語の相手は誰ぞや。

曰く、對していふは汝なり。

答ふ、我は萬物の一なり。萬物は天より生るゝ子なり。汝萬物に對せずして、何によつて心を

はざる如くにして知らるべし。世の人書物を讀みながら、此性善を知らず、知らずして、書を讀む者を喩へていはゞ、病人の如し、無事の人は食の美き味を知る、こゝを以て喜ぶ、熱病人も食は喰へども、美き味を知らず、この故に喜びず。性善を知らざる者も斯の如し。書は讀めども、書の意味を知らず、却て孟子の性善を非と見るなり。孟子の性善も天なり、孔子の易の性善も天なり。天地と人と別々といはゞ、汝口と鼻とを塞ぎ活きて見よ。天地の陰陽を受けずして、活きられなば、孟子は非なり。死すべしといはゞ孟子は是にして、天地の性善と一致なること決せり。是端的の證なり。其繼ぐ物を知らざるによつて迷ふなり。其迷よりして告子が説を實に尤と請合ふなり。告子がいへる如く、性に何ぞ善不善あらんやといはゞ、人擧て是に寄るべきが、退て工夫すべき所なり。善不善なりと思ふ一念は、毫釐の差なれども、遂る所にては千里の謬となる。聖人の道は天地而已。天地は見えたる通に、清ると濁ると有りて、天は清めり地は濁れり。清める天も、濁れる地も、何方を見ればとて、物を生じ育ふべきとも見えず。無心なれども、萬物生々して古今違はず。其生々を繼ぐ物を善と言ふ。分ていはゞ、天は形なうして心の如し、地は形有て物の如し。其生々する所は活物の如し、無心なる所は死物の如し。天地は死活の二を兼たる物なり。死活の二を兼すぶるゆ

不善一所は空々寂々としたる所なり。孟子は其空々寂々たる所に名を蒙らしめて、性善といへり。告子はありのまゝに、無ㇾ善無二不善一言ふ、辭に替はあれども、實は虚名なり。夫に孟子は是とし告子は非とするは、如何なることぞ。

答ふ、是汝が不得の所なり。先告子が無二善不善一と言ふは、是思慮なり。如何となれば我性と云ふ者を尋ね見れども、善とも不善とも分れず、然れば善も不善も無きものなりと思慮を以て見たる所なり。孟子の性善は直に天地なり。如何となれば人の寐入たる時にても、無心にして動くは呼吸の息なり。其呼吸は我息にはあらず、天地の陰陽が我體に出入し、形の動くは天地浩然の氣なり。我と天地と渾然たる一物なりと貫通する所より、人の性は善なりと說き給ふ。自然にして易に合へり。扨此所は前後ともに聞分がたきところなり。默して工夫せらるべし。易は天地の上にて說き給へば、凡て無心の所なり。其無心の陰陽が一たび動き、一たび靜なり。是を繼ぐものが善なりと宣ふことなり。此微妙の所と告子が言ふ思慮と一列にいはるべきや、大に異る所なり。孟子の性善は生死を離れて天道なり、いかんぞ告子が念々生滅する者と、一列なるべきや。此は易きに似て知りがたき所なり。思慮を以つて知らるゝ所にあらず、信心堅固にして、憤を發し、孔子齊に在して樂を學び、三月肉の味を知り給

は一石五斗有る時は、纔に一反の中にて、米一石五斗違あらば、その田に惡心ありといはんや。又三石ある田を、善心ありといはんや。

曰く、田に心なければ惡心とはいはれまじ。然れども上田下田とはいふべし。

答ふ、然らば、土に替はなく、同じ土なれども、上田下田の替あるなり。是地に肥えたると磽せたるとありといへども、土の理に替ることなし。然れば土は同じ土にてありながら、上田と下田とあり。然りといへども、土に具る所の理は同じ。同きゆゑに漸々に糞を入れ土を入るれば、下田は中田となる、中田は上田となる。是を人に喩へていはゞ、下田は小人なり中田は賢人なり、上田は聖人なり。聖人と賢人と小人と替りあれども、元性善は同じきゆゑに、學べば漸々を以つて、小人は賢人となり、賢人は聖人となる。是性は一なる證なり。扨聖人も賢人も小人も、今日活きて動くは呼吸の二つなり。此二つを繼ものを見得すれば、形なきものにして、萬物の體となるものなり、是を名づけて善なりと宣ふ。此性の善なることは私慮を以て窺ひ知るべきにあらず。孟子の性善は前にいふ如く、惡に對する善に非ず、誤るべからず。

曰く、孟子の性善と、告子が性に無レ善無二不善一と云ふは同じかるべし。如何となれば、無レ善

れを繼者は善なり。身の動くも靜かなるも、天地の陰陽なり。易と何ぞ替ることあらん。孔子は天地を以て道の體を説きあかし給ふ。孟子は人を以て道の體を説き明し給ふ。天人一なれば、道も亦一なり。周子曰く、五行一陰陽也、陰陽一太極也、太極本無極也。此無極を一とやいはん、二とやいはん。己に實知せずば何を以て道を說ん。醉の中に夢をとき、世を惑すこと哀しきにあらずや。早く孔孟の一を可レ知。孔子孟子は割符の如し。孔子を是とせば孟子も是なり。孟子の性善を貴び、糟を食ひ與するにはあらず、我心に合ふゆゑなり。加樣に說く時は、甚だ知易きに似れども、此上を味ひ得ること難し。味ひ得ば、生死は一致なり。是故に朝聞レ道、夕死可矣と孔子も宣へり。扨孔孟の曰ふ所の善を、世に見誤ること多し。性が善ならば、世の中は皆善人にて、惡人はなき筈なり。然るに惡人も多ければ、定めて虛名ならんと疑ふ者多し。是以て味ひ得る者少なり。如何となれば、今日の上此は善彼は惡と、善惡對々の善と見るゆゑに、聖人の宗を失して、大なる謬出る所なり。

曰く、其大なる誤出る所を、聞くことを得らるべきや。

答ふ、然らば天地の道を以ていふべし。今こゝに、田地二反あらん。百姓の力を用ふること同く、糞等も同く、其植る所の苗も同く、うゑる時も同じ。然るに一反には米三石あり一反に

曰く、陰陽の外に他物有りや。

答ふ、五行といへども、陰陽なれば他物はなし。

曰く、然らば此陰陽は二つか一つか。

答ふ、二つとも分けがたし。又一つかと思へば動靜の二つなり。

曰く、動靜の二つなり。其動は何方より來り、靜になるは何方に歸るぞや。

答ふ、無極太極といへども、畢竟なきものに名を附けたるにや。踪と落著なりがたし。

曰く、無物にあらず。太極といふは、天地人の體なり。先汝が鼻の息と口の息とは二つか一つか。

答ふ、是も分けがたし。

曰く、其口と鼻との息は、直に天地の陰陽なり。天地に吐いて天地に吸ふ。其吸ふと吐くとを暫くも止め置かれ候や。

答ふ、止むること能はず。

曰く、呼吸は天地の陰陽にして、汝が息にはあらず。因つて汝も天地の陰陽と一致にならざれば、忽に死するなり。陰陽の外に汝が命なきこと明白なり。吸息は陰なり、吐息は陽なり、こ

得居られ候や。

曰く、加樣の類は深く詮議せざることなれば、早速は返答なりがたし。

答ふ、此三言は、皆我心のことなるが、其を急々に返答ならずといはゞ、書を見ること多しといふとも、何の益あらん。論語の書は皆聖人の心なるに、其心を知らずして、何を法として身を修め人を敎へられ候や。

曰く、孔子の道は、五倫五常の外はなし。何ぞ疑あらん。

答ふ、汝は一而已の一を知らねば、道を知らず。孔子曰、人能弘レ道、非三道弘二人と、心能盡レ性、人能弘レ道、人の外に無レ道、道の外に無レ人。人の心は覺ることあり、此を以て道を弘む。覺る心は體なり、人の大倫は用なり。體立つて用行る。其用は君臣父子夫婦兄弟朋友の交なり。仁義禮智の良心は、其五倫を行する心なり。汝は此心の一なることを知らず。

曰く、汝のいへる所も一理あるなれば、何れを學ぶも外ならず、我も向後は心のことをも工夫すべきか。然れども孟子の性善は愈々濟がたし。聖人は知仁勇の三德全して善なるべし。最早賢人さへ全からず、況や衆人は又劣れり。それを一列に善といふは如何なることぞや。

答ふ、孔子易一陰一陽之謂レ道、繼レ之者善也、成レ之者性也と宣ふ。天地は一陰一陽なり。

て、聖人の心なれば、言句を離れ獨得る所なり。曾子は是を聞き事理察なれば、其指に契ひ疑なきゆゑに、唯と對へ給ふ。外の門人中も一列に聞かるれ共、聞えざるに依つて、孔子出給ひて後に、何と云ふことぞと問れたり。一貫にては聞えざるにより、曾子曰忠恕而已と說きかへ給へども、其心を覺らず。既に子貢にも一貫と告げ給へども、子貢いまだ達せざる故、對なきなり。曾子は道統を得給ふゆゑに、忠恕を以て、至誠一貫の理を說き給ふ。得たる者は自由にして、一貫を忠恕と說けども合へり。合ふと合はざるとは得ると得ざるとにあり。汝忠恕と說けども性善を知らざれば、曾子の忠恕と違へること決せり。只忠恕のことと押つけ置くとも、彼是濟ぬこと多かるべし。師たる者は此理を說るべし。汝は性理に昧きゆゑ聞えざると見えたり。

曰く、其所は師たる人も、さつぱりとは濟ねども、此は聖人のことにて、今の學者の知るべき所にあらず。忠恕のことなりと言うて、此うへのことは、決して沙汰なきことなり。

答ふ、汝は今の學者の可知所に非ずと言ふ。聖人の教は古今に通じて變ることなし。今と古とを分くるは、佛氏の末世と言ふ教なり。混雜すべからず。さて孔子無適無莫と宣ひ、又顏淵の在前忽焉在後と宣ひ、孟子道一而已と宣ふ、加樣の類おほし。汝はいかゞ心

いはれまじ。我が言ふ如くに疑しきは疑ありといふこそ正直なるべけれ。尤世渡の勝手をいはゞ惡からん。然れども心に咎はあるまじと思へり。汝頸を押へて問ふならば、性善には是ぞと證はなかるべし。證はなけれども、先孟子に寄り因みて、性善と說き觸られ候や。

答ふ、否しからず。さりながら汝はいかやうとも思はるべし。所詮我が言ふ所は聞こえまじ。

曰く、汝が思ふ所に當るゆゑの返答かや。

答へ、左には非ず。子曰、朽木不レ可レ彫也、糞土之牆不レ可レ杇と。汝が如く我體を見失ひて、其を知らざる者は朽木に彫物する如く、相手無れば死人に同じ、誰に向て語んや。性善と言ふは我性を知つて、孟子の善と宣ふは是か非か、我性に合ふか合はざるかと、手前に法を求て後の詮議なり。先性善のことは差し置く。孔子一貫と宣ふはいかゞ得心せられ候や。

曰く、それは、曾子曰忠恕而已。何ぞ疑ん。

答ふ、曾子の忠恕は至て善なり。後世の性理に昧き者も、忠恕を一貫のことなりと云ふは可也。一貫を忠恕の事と云ふは不可なること必せり。如何となれば、今時にては和漢ともに忠恕と斗言うては、聖人の道統と思はず、思はざるゆゑに道統を無する罪あり。然るを汝性善を知らずして、一貫を以て忠恕と云ふは、曾子の粕を食ふなり。一貫と言ふは性善至妙の理に

都鄙問答　巻之三

○性理問答の段

或學者問うて曰く、大聖孔子は、三綱五常の道を說き、性理の沙汰には及び給はず。孟子に至て人の性は善なりと言ふ。又我浩然の氣を養ふと宣ふ。告子は生之謂性、又曰、性無善無不善、或性猶杞柳、性猶湍水如と言ふ。又韓退之は性有三品と言ふ。荀子は人の性惡、其善者僞也と言ふ。楊子は善惡混ぜりと言ひ、且老莊佛氏の說、彼此その數擧げてかぞへ難し。何を是とし何を非とせん。是に因つて我朝の儒者も、或は孟子を是とし、告子韓子を是とし、又は孟子を非とし、又孔子以下を皆非の如く言ふ者あり、その論議一として定めがたし。然るを汝宋儒を是とし、孟子を尊信し、人の性は善と言ふ。我思ふに兎角決定しがたし。元來人に替なければ、汝も決定は有るまじけれども、孟子に與する儒者も多く、且世の俗語にも、孟子を善しと思ふ者多きゆゑ、汝が心にも、實に孟子の性善を得心致し、肯ふ心にはあらねども、先性は善なりと言うて居らるゝと見えたり。それは學者の正直とは

は相模守殿を思ひたてまつるゆゑなり、天下の理非正しきは、相模守殿喜び給ふべき所なりとぞ言ひける。かくの如き者は士の中に入るべし。才知は青砥に劣る人も有るべし。不義の物を受けざるほどの事、青砥に劣らば士とは言はれまじ。こゝを以つて見れば、世の人の鏡と成るべき者は士なり。子曰、蓋有之我未之見とのたまふ。世界は廣き事なれば、鼻を塞いで不義の物を受くる士も有るべし。若有らば、士に似せて刀を指す盗人にて有らん。事を頼む者より賂をとるは、壁を穿つ盗人に同じ。青砥が公事を分明に分くることは、相模守殿を思ひたてまつると言ふなれば、我身を修め、役目を正く勉め邪なきは、君への忠臣なり。今治世に何ぞ不忠の士あらんや。商人も二重の利密々の金を取るは、先祖への不孝不忠なりとしり、心は士にも劣るまじと思ふべし。商人の道と言ふとも、何ぞ士農工の道に替ること有らんや。孟子も道は一なりとのたまふ。士農工商共に天の一物なり。天に二つの道有らんや。

水一面に油の如くに見ゆ。此を以て此水用にたゝず。賣買の利もかくの如し。百目の不義の金が、九百目の金を皆不義の金にするなり。百目の不義の金を設け増し、九百目の金を不義の金となすは、油一滴によりて、一升の水を捨つる如くに、子孫の亡び往くことを知らざる者多し。二重の利や倒者の禮銀や、拂のしかけなどの無理盡く合せ聚めて見たりとても、それにて世帶が持るゝ者にはあらず。此理は萬事にわたるべし。然れども欲心勝ちて、百目の所が離れ難きゆゑに、不義の金を設け、愛すべき子孫の絶え亡ぶることを知らざるは、哀しきことにあらずや。前に言ふ如くに、兎角今日の上は、何事も清潔の鏡には、士を法とすべし。孟子曰、無恒産而有恒心者惟士爲能と。昔鎌倉最明寺殿、天下の政を皆相模守殿へ讓り給ひ、諸國を巡り給ふは、天下の邪正を正んためなり。これ天下の訴、上へ通ぜざることを歎き給ふゆゑなり。上仁なれば、下義ならざることなし。此に青砥左衞門尉誠賢、鎌倉に於て訴を分くる時、相模守殿家人と公文と爭論有しが、相模守殿家人の無理なれども、評定の面々、時の權威に恐れて理非を分ざる所に、青砥是を分明に分くる。此時公文大に悅び、其夜半に鳥目三百貫文、青砥が屋鋪へ後の山より落し入れぬ。青砥是を見て喜びずして、殘らず返し遣して言ふ樣は、相模守殿よりこそ、褒美をば受くべき所なり、公事を分明に分る

年饑饉の救米を出したる者は、悉く御褒美を下し給へり。飢人を救うて人を殺さゞるは、人の道なり。

曰く、然らば商人の心得は如何致して善からんや。

答ふ、最前に言へる如くに、一事に因て萬事を知るを第一とす。一を擧て言はゞ、武士たる者、君の爲に命を惜まば士とは言はれまじ。商人も是を知らは我道は明なり。我身を養るゝ賣先を、疎末にせずして眞實にすれば、十が八つは、賣先の心にかなふ者なり。賣先の心に合ふやうに、商賣に精を入れ勤めなば、渡世に何ぞ案ずる事の有るべき。且第一に儉約を守り、是まで一貫目の入用を七百目にて賄ひ、是迄一貫目有りし利を九百目あるやうにすべし。賣高拾貫目の内にて、利銀百目減少し、九百目取んと思へば、賣物が高直なりと尤めらるる氣遣なし。なき故に心易し。且前に言ふ尺違の二重の利を取らず、染物屋の染違に無理せず、倒れたる人とうなづき合ひて禮銀を受け、負方中間の取口を盗まず、算用極の外に無理をせず、奢を止め、道具好をせず、遊興を止め、普請好をせず、斯の如き類盡く愼み止る時は、一貫目設る所へ八百目の利を得ても、家は心易く持るゝ者也。扨利を百目少く取れば、賣買の上に不義は有増なき者なり。譬へば一升の水に油一滴入る時は、其一升の

うに見えて盗人あり。實の商人は先も立ち、我も立つことを思ふなり。紛れものは人をだまして其座をすます。是を一列に言ふべきにあらず。

曰く、商人の道は是にて有增事足り候や。

答ふ、此はこれ賣買の道を云ふ。此上は中々事多くして盡し難し。

曰く、此外にも何ぞむつかしき敎ありや。

答ふ、むつかしき敎にはあらず。然れ共五常五倫の道は、天下國家を治るも一列なり。此故に小家といへども敎あり。譬へて言はん。田舍にて大佛殿を見度しと言ふ老衰の人有り。其子孝行なる者にて、在所に大工有りけるゆゑ、大佛堂の雛形を建て呉れられよ、親に見せたき由言ひければ、大工の言ふ、我は大佛堂の雛形は、得建て申さず候と云ふ。否小く、只四五尺許に建てくれられよと言へば、大工の言ふ、凡て本堂作は法を知らざれば雛形も得建申さず候、堂には大小あれども、仕用に替る事無きゆゑなりと言ふ。天下を治るは大佛殿を建るが如し、小家を治るは雛形の小堂を建るが如し。家一軒には君臣有り、父子有り、夫婦有り、兄弟有り、朋友の交有り。人倫の道なくば、小家と言へども如何して治るべき。小家を治るに仁、國天下を治るも仁、仁に二品の替あらんや。商人の仁愛も、間に合ばこそ、先

下に立ち力を勞して上を養ふと、孟子ものたまふ。上の清潔を法とするは古よりの道なり。其正をまもらずして、詫人と比て不義の禮銀を取り、これも財と思ふはあさましきことなり。下々に生るればとて、人に替の有るべきや。身上不如意の者は、是非なく金銀を減少して詫るなり。負方は身分相應の損あり。其中にて、取もつ顔附して禮銀を取るは、盗人に同じ。加様なることをなす者は、甘き毒を喰ひて自死するに同じ。又人の手代にもかゝる邪をなす者多し。是は主人のおもひ寄なき惡を迎へ、主人に甘き毒を喰せて家を絶す者に同じ。孟子の所謂逢君之惡其罪大と。然るを主人は金銀の損さへ少ければ、忠ある者と思ひて、我身を亡さることを知らずして是を喜ぶ。其根を尋るに、商人は學問はいらぬものなりと言ひて、聞くことをせず、反て聞く人を笑ふ。實に一疋の鼻のある猿が、九疋の鼻缺猿に笑ひ殺ると言ふに同じ。我賢しと思ふより、不善の道に陥れば、其家終には禍來る事を知らず。哀しい哉。易に曰、積善家必有餘慶、積不善家必有餘殃、臣弑其君子弑其父と。是教の眼なり。聖人の仁心能々味ふべき所なり。聖人斯のごとく不善を惡み給ふ味を知らば、一重の利を取り、二升の似をし、密々の禮を請くること抔は、危うして浮る雲の如くに思ふべし。是を能々つゝしむは只學問の力なり。世間のありさまを見れば、商人のや

曰く、其詫人より禮銀を受とり事を取もつは、商人ばかりにて候や。商人のほかにも此類あるべきことなり。

答ふ、商人多くは道を聞ざる故、加樣の類有り。又道を知つて事を取捌く者は、左樣の不義はせざることなり。假令御領家領の庄屋年寄にても、上の正き御政道を受けて、事を取持つ身として、小百姓より禮銀などを請取ること有るべきに非ず。元來士と言はるゝ身が、下下より密々に禮銀などを請くることあらば、定めて贔屓の沙汰に至るべし。下々と竝んで、何ごとにても取持つ人を士と言ふべきか。其は盜人と言ふ者にて士にはあらず。上にたつ人、下より賂などを受けて、政道たつべきや。假令當分は知れずとも、天知る地知る我知るなれば、終にはあらはれて天の罰を受くべし。天罰を知らざる者、天下靜謐の世に有るべからず。然れ共賣人は士にあらざれば、加樣なる不義有るなり。毫釐ほども道に志あらば、なすべきことにあらず。

曰く、其詫人が禮銀を出し、埒明を賴むが惡きか。又禮銀を取り、事を賴るゝ者が惡しきか。

答ふ、其時は賴む人は下なり。賴るゝ者は上なり。賴む者、賴るゝ者も罪あり。然れども七分の罪は上にあり、三分の罪は下にあり。昔より知ある者は上に立ち下を治む、無知なる者は

にては年貢を取り、果にても運上を取るなれば、二階作の運上に同じ、例なきことにあらずとの給ふ。それより果に運上取ることを止め、田地の年貢ばかりに成りけるとかや。御仁愛の及ぶ所、實に民を子の如くに思召す政、世に有がたきこと哉と申しき。商人も加樣なることを法となすべきことなり。二重の利を取り、甘き毒を喰ひ、自死するやうなる事多かるべし。一二を擧げて言はゞ、こゝに絹一疋帶一筋にても、寸尺一二寸も短き物あらんに、織屋の方にては、短きを言たて直段を引くべし。然れども一寸二寸のことなれば疵にもならず、絹は一疋帶は一筋にて、一疋一筋の札を附けて賣るべきか。尺引に利を取り、又尺の足る者と同く利を取るなれば、是二重の利にて、天下御法度の二升を遣ふに似たる者なり。又染物などは、染違あれば、少しのことを大きに云ひたて直引し、職人を傷め、誂へたる人よりは染代を請取り、職人方へは渡さざる事も有り、これ又二重の利に越えたる惡事なり。總て箇樣の類多かるべし。又身上不調につき、買懸り借金の方へ、三分五分の割銀を以て、詫言致し濟す事もありとかや。其負方の中に、賣高多きもの、又猿賢き者は、詫人より禮銀を密密に請取り、同く損銀ある體に見せかけて、我は損せざる者ありときく。箇樣の紛はしき盜をなす者を非と言ふ。

受くるを欲心と言ひ、道を知るに及ざる者と言ふは如何なることぞや。我教ふる所は、商人に商人の道あることを教ふるなり。全く士農工のことを教ふるにあらず。

曰く、然らば商人の賣買にて利を得ることは有るべきことなり。其外に曲て非なること候や。

答ふ、今日世間のありさまに、曲て非なること多し。こゝを以て教あるなり。實の商人は敬み爲ざること有り。譬へを以て告げん。我幼年の時分に聞きしこと有り。昔或國に、中頃より水入になり、農作ならぬ田地あり。其昔水も入らざりし時、年貢をかけられし例により、今も少々宛年貢をかけられしに、其田地に果を植ゑ、稻作より増によこ物なり揚りければ、其果に、先君の時より又運上をかけらるゝとかや。君これを難儀に思召し、是新法を止め、民の害るゝことを救はんと志し給へども、親殿の時より始られしことなれば、子の身として改め變ることを歎き給ひ、自ら止べきことを思召し、或時臣を召して曰く、見れば城下に、二階作りの家を立つる者あり、二階作の家は盡く運上を取るべしと仰有りければ、臣是を難儀に思ひて、相談示し合せ、君に申しあげらるゝは、先達て二階作の運上を取るべしと仰せ附られ候こと、昔より其例なきことに御座候、御免し下され候樣にと申し上げらるれば、君聞召し、昔より例なきことかや、われはその例を以て言附くる事なり、彼の水入の田地は、下

下の治る助となる、四民かけては助け無かるべし。四民を治め給ふは君の職なり、君を助くるは四民の職分なり。士は元來位ある臣なり。農人は草莽の臣なり。商工は市井の臣なり。臣として君を助くるは臣の道なり。商人の賣買するは天下の助なり。細工人に作料を賜るは工の祿なり、農人に作間を下さるゝことは、是も士の祿に同じ。天下萬民產業なくして何を以て立つべきや。商人の買利も天下御免の祿なり。夫を汝獨賣買の利ばかりを慾心にて道なしと言ひ、商人を惡んで斷絶せんとす。何を以て商人ばかりを賤しめ嫌ふことぞや。汝今にても賣買の利は渡さずと言うて、利を引きて渡さば、天下の法破りとなるべし。上より御用仰附けらるゝにも利を下さるゝなり。然ば商人の利は御免し有る祿の如し。然れども、田地の作得と、細工人の作料と、商人の利とは、士の如くに定めて幾百石幾拾石とは言ふべからず。日本、唐土にても、賣買に利を得る事は定なり。定の利を得て職分を勉むれば、自ら天下の用をなす。商人の利を受けずしては家業勉らず、吾祿は賣買の利なるゆゑに、買人あれば受くるなり。よぶに從つて往くは、役目に應じて往くが如し、慾心にあらず。士の道も君より祿を受けずしては勉らず。君より祿を受くるを慾心と言うて、道にあらずと言はゞ、孔子孟子を始として、天下に道を知る人あるべからず。然るを士農工にはづれて、商人の祿を

正直なり。利を取らざるは商人の道にあらず。こゝを以を正しき士は、此賣物は損銀たち候へ共、負けて賣んと言ふ時は買はず。我買てやるは汝に利を得させん爲なり、汝が合力は受けずと言へり。利を取らざるは商人の道にあらず。

曰く、然らば天下一等に元銀は是ほど、利は是程と極めあらば然るべし。それに僞りを言ひ、負けて賣るはいかなることぞ。

答ふ、賣物は時の相場により、百目に買ひたる物、九十目ならでは賣ざれることあり。是にては元銀に損あり。因て百目の物、百二三十目にも賣ることもあり。相場の高る時は强氣になり、下る時は弱氣になる。是は天のなす所、商人の私にあらず。天下の御定の物の外は、時々にくるひあり、狂あるは常なり。今朝まで金一兩に一石賣りし米も九斗に成り、小判は下り米は高り、又小判は高り米は下りするものなり。天下第一の賣買物是なり。其外何に限らず、日々相場に狂あり。其公を缺きて私の成るべきことに非ず。それに一人天下の商人に背き、元銀は是、利は是とは分がたきことなり。僞にはあらず。是を僞り言はゞ賣買なるまじ。賣買ならずば買ふ人は事を缺き、賣人は賣れまじ。左様になりゆかば商人は渡世なくなり、農工と成らん。商人皆農工とならば、財寶を通す者なくして、萬民の難儀とならん。士農工商は天

視レ己如レ見ニ其肺肝一と。此理を知れば辭を飾らず、ありべかゝりに云ふ故に、正直ものなりと、何事も任せ賴るゝゆゑに、世話なしに人一倍も賣るものなり。商人は正直に思はれ、打解けたるは、互に善き者と知るべし。此味は學問の力なくては知れざる所なり。然るを商人は學問はいらぬものと言うて、嫌ひ用ひざることは、如何なることぞや。

曰く、然れども世俗に、商人と屛風とは直にては不立といへるは、如何なることぞや。

答ふ、世俗の言に加樣なる聞き誤多し。先屛風は少しにてもゆがみあれば疊れず、此故に地面平かならざればたゝず。商人もその如く、自然の正直なくしては、人と竝び立つて通用なり難し。これを屛風のすぐにたとへたるものなり。屛風と商人とは直なれば立つ、曲めばたゝぬと言ふことを取り違へて言へり。古の伯夷の直も、屛風の直に勝ることあるべからず。

曰く、商人の屛風にならぶほどの直と言ふことは、如何なることぞや。

答ふ、凡て鬻レ貨曰レ商。然れば貨を賣る中に祿あることを知るべし。この故に商人は左の物を右へ取り渡しても、直に利を取るなり。曲みて取るにあらず。口入ばかりする商人を問屋と言ふ。問屋の口錢を取るは、書附を出し置けば人皆これを見る。鏡に物を寫すが如し。隱す處にあらず、直に利を取る證なり。商人は直に利を取るに由て立つ。直に利を取るは商人の

其口書せよと言て、口書をとりて歸さる。其後評議ありて、一人の用達は身上不如意なる者を手本とし、高利をとり、其上役人を言ひ掠むる咎ありとて、用事を取あげられしとかや。又一人は正直なる申ぶんなり、其上彼が貧乏は亡父が奢の爲所、彼が咎にはあらず、亡父が咎を身に受くる孝心、殿への忠義彼此後々に至りても、爲になるべき者なりとて、古借を聞届け合力致し、用向をこれまでの通に言附よと有り。これ正直によつて幸を得たり。これは是殿樣の高恩を忘れず、高直なる者を差上まじきと思ふ實と、父の奢を隱す孝と、我正直なる所より、役人を言ひ掠むる心なきと、此三つの德より我身の幸となる。又一人の用達は全く御用疎末に仕らず、又初めての者は損を致し差上げるなどと言ふことは、世間一等の口上なるが、其を聞く者の身に替りて見よ、目にあまるほど過分の違あらば、實尤と聞くべきや、扨も座遁の僞をいふと思ふべし。彌其辨舌を能く言ひまはす程、聞く人これを惡む。世の人賢きやうなれども、實の道を學ざるゆゑ、我過の益すことを知らず。こゝを能く味ひ見ば、眞實なくては叶はざる事を知るべし。多葉粉入一つ、幾世留一本買ふとても、善惡はみゆる物なるに、色々と言ひまはすは宜からざる者なり。有りべかゝりに言ふことは善者なり。我より人の實不實をみる如く、他よりも又我實不實を見ることを知らず。傳曰人

賣買の上に用ひられたり。子貢も賣買の利無くば富むこと有るべからず。商人の買利は士の祿に同じ。買利なくば士の祿無くして事ふるが如し。或所に屋鋪へ出入する用達二人あり。又外より出入を望む者在りしが、買物方の役人申されけるは、二人の用達より入る物は、殊外に高直に相見ゆると言ひて、彼の出入を望む者の絹と見合有りける時、過分の直違あれば、役人殊外に機嫌あしく、二人の用達を一人宛呼びて、汝が方より差上候呉服、殊外高直につき、外をも見合せ候所、格別の相違不屆の由申されければ、一人の出入の者の言ふ。拙者ども御用疎末に仕ること少も是なく候。初て御出入願申すものは、損銀を致してなりとも、最初には差上け申候へども、後の續かざる者に候と言ふ。其口書をとりて歸さる。又一人を招て不屆のよし申し渡されければ、仰せ御尤に候。拙者儀、去年までは愚父存生にて御用達し申す所に、愚父相果て候て後、御用拙者に仰つけさせられ候ところ、拙者こと不調法にして、勝手困窮仕候故、買物調ひかね、先方より高直に賣り申し候や、心もと無く存じたてまつり候。且御調へなされ候呉服が證據にて候、高直なる物をさしあげ申す事、殿様の御高恩を忘るゝと申すものにて御座候。今暫下しおかれ候御扶持にて渡世仕り、一兩年の中、家屋鋪諸道具等賣拂ひ借銀相濟し、其上にて御用相勤め申し度候と言ふ。然らば

をさするに同じ。彼に學問を進むるは、前後つまらぬことなり。其濟ぬことを合點して、教る汝は曲者にあらずや。

答ふ、商人の道を知らざる者は、貪ることを勉めて家を亡す。商人の道を知れば、欲心を離れ、仁心を以て勉め、道に合うて榮ゆるを、學問の德とす。

曰く、然らば賣物に利を取らず、元金に賣り渡すことを教ふるや。習ふ者外には利を取らぬことを學び、內證にては利を取れば、實の教にあらずして、反て詐を教ふると言ふ者なり。如何となれば、元來ならぬことを强るによりて、加樣に前後合ざることあり。商人利欲なくしてすむことは、終に聞かざることなり。

答ふ、詐にあらず。詐にあらざる子細を告ぐべし。是に君に仕る者あらん。俸祿を受けずして仕る者有るべきや。

曰く、それは無き筈のことなり。孔子孟子といへども、祿を受けざるは禮にあらずと宣ふ、如何ぞ有るべき。是を受くる道に因て受くるなり。受くる道にて受るを欲心とはいはず。

答ふ、賣利を得るは商人の道なり。元銀に賣るを道といふことを聞かず。賣利を欲と言うて、道にあらずといはゞ、先孔子の子貢をなにとて御弟子にはなされ候や。子貢は孔子の道を以て

ふ所なり。總ていへば道は一なり。然れども士農工商ともに各行ふ道あり。商人は言に及ばず、四民の外乞食までに道あり。

曰く、然らば乞食にも又道ありや。

答ふ、嘗て聞く、或人江州へ行き侍りしに、一の非人村あり。其所に橋の渡り初有りしを、立止りて見侍りしに、非人頭とおぼしき者、圓坐に座して有りけり。村の者ども、橋の渡り切の祝儀を持ち來る。其中より痩せて色悪しき男一人、茄子三つ持來て頭の前に進む。頭たる者是を見て、汝は頃日相煩ひ居ると聞きしに、何とて此茄子を持ち來るやと問ひければ、左樣に候、永々の病氣なんぎ仕り候所に、此度橋の渡り初につき、頭殿へ祝儀を致すべき由、小頭より申し渡し候ゆゑ、前夜他所の畠へ往き、盗み申候と言ふ。頭の言ふ、乞食は盗をせまじき爲なり、盗をなせば乞食はせず、汝は村の住居は成るまじきと言うて、小頭を召で彼が快氣次第村を拂ふべし、病氣の中は番を致すべしと、言ひわたしけるとかや。飢て死すとも盗まぬは乞食の道なり。子曰君子固窮、小人窮斯濫矣。困窮しても正きを守らば君子なり、困窮して放濫は小人なり。小人となつて、乞食に劣るは哀しきにあらずや。

曰く、扨商人は貪欲多く、每々に貪ることを所作となす。夫に無欲の敎をなすは、猫に鰹の番

答ふ、孟子も君子捨レ生而取レ義者なりとのたまふ。君子は命をすて義を取る。木綿は輕きことなり。假令一國を得萬金を得るとも、道にたがはゞ何ぞ不義を行はん。外物の損を爲し、心を養て利を得る、此外に勝ること何か有らん。

曰く、汝は財寳を捨てて唯義をたつとむと言ふ。然らば不義を嫌うて、利ありとも決してせざるか。

答ふ、其不義を行へば心の苦となる。苦を離るゝ爲にする學問なれば、なんぞ不義を以て心を苦しむることをせん。

曰く、商人などは、毎々に詐を以つて利を得ることを所作とす。しからば學問などは決して成るまじきことなるに、汝が方へは多く商買人相見え候由、汝は此にては此に合せ、彼にては彼に合せて敎ふるなれば、孔子ののたまふ鄕原にて、德の賊とは汝が事なり。學者にあらずして流を同うし、汚世にかなうて世に媚へつらひ、人を誑せ、己が心を欺く小人なり。門人はこれを知らず、汝も學者の中と思はるゝは、恥しきにあらずや。

答ふ、君子於二其所一レ不レ知蓋闕如也と孔子ものたまふ。凡て知らざる事は闕き置くべきことなり。此理を知らずして、言ひちらすは野卑ことにあらずや。扨汝の言へる所は、世の人も疑

先に進むは同日と言ふとも是を上とすべし。是皆天の爲す所にして私にあらず。こゝを以て時に宜しきと言ふ。

曰く、我言ふ所の木綿のこと、是は斯細なることなれども、汝が心に濟まず。それゆゑに返答せざるか。

答ふ、是は言ふまでに及ばざることなり。こゝを以て返答せず。

曰く、其返答に及ばすとは、如何なることぞ。

答ふ、孔子も己所レ不レ欲勿レ施レ人と宣ふ。我否と思ふ事は人も嫌ふものなり。我より其木綿を分くるならば、汝に能方を渡さん。汝より分くるならば、我能方を渡すべし。又汝の方へ織かけを取り、奥の惡しきところを我に渡さば、汝の世話にせらるゝゆゑにその筈なりと思ふ。加樣にさばき置く時は、悉く宜しからん。汝に能物を渡さば汝は喜び、我は義を以て仁を養ふ、是宜しきにあらずや。

曰く、夫にては汝の爲に損なるが、損の往くを喜び、是を義と言ふは如何。

答ふ、否損にあらず、大に利あり。

曰く、忽に損の見えたるを利と言ふは、如何なることぞ。

となる。此理を知るを學問の本と決定すべし。理明なれば萬事時の宜しきに合ふべし。」又問ふ、性理を知れば時の宜しきに合ふと言ふ。其時に宜しきと言ふは行ひ難きことなり。然るを汝は易きが如く言へり。夫は我爲に宜しきか、人の爲に宜しきか。

答ふ、宜しきと言ふは、其座雙方ともに宜しきを言ふ。

曰く、雙方ともによろしきこと有るべからず。譬へて言ふべし。先こゝに木綿一疋買ひ、汝と是を半疋づつ分て取んに、汝も織かけのよき所をのぞむ、我も織かけのよき所をのぞむ。この理は木綿のことに限らず、萬事にわたるべし。又奉公人を抱へ、或は役目等の事に附きても、同日に來る者、同じ役目を言ひつくる時に、凡て一方を上に立て、一方を下に立つる、其上に立つ人は宜しからん、下に立つ人は快からず不足あるべし。是を以つて見れば、兎角雙方ともに宜しき事はならざることなり。

答ふ、其所に時に宜しきこと有りて、一々にこと分るゝなり。

曰く、其一々事の分ると言ふは、如何なることとぞ。

答ふ、其奉公人、雙方同じ器量ならば、門口を先へ入りたるを上に立つべし。凡て門口をならびて出入はせず。器量に甲乙有らば器量の勝れたるを上とすべし。又役目の上にて言ふ時は、

は其體なること決せり。昔者聖人之作易將以順性命之理、是以立天之道曰陰與陽、立地之道曰剛與柔、立人之道曰仁與義、兼三才而兩之。陰陽剛柔仁義と分れども、天地人の三つを窮め盡す時は一箇の理なり。此性命の理を盡し給ふは聖人なり。このゆゑに無爲にして治る、天道に同じ。子曰無爲而治者其舜也與。しかれば天理に順ふ外に道あらんや。書經の意も、理に逆ふ時は天命變じて亡ぶべしとの敎なり。依て惟命不于常といへり。此を法として、今時も理に順へば天命に合ふ。理と言ふは、天地より人間禽類艸木まで行はるゝ道、それ〴〵に分れ備りたる體を、假に名附けて理と言ふ。又文字は天地開闢よりいはゞ、數億萬歲の後に作り初めしものなり。これを以つて天のなしなす無量の物に合ずとも、萬分の一にも不足、此理を知るべし。文字に泥むは糟粕を味ふに同じ。色々理窟をつくるとも、爭で文字にて盡すべきや。元來天地の體は、文字を離れて死活無き故に古今變らず。命は用なるゆゑに動きて變るなり。理は體なるゆゑに動かずして常なり。其變ざる物を理と名づけたると知るべし。文字は事を天下に通す器の如し。理は其主なり。子曰謹權量と。稱錘や斗斛も天下の通用を以て寶とす。學問の道も亦かくの如し。理をきはめ天道聖人の心通用するを以て寶とす。聖人窮理盡性以至於命給ふに依つて、古今に通用して寶

性なり。斯のごとく別なり。然るを死活を以て一致とするは如何なることぞ。
答ふ、汝のいへるところは枝葉にかゝはり、文字の沙汰にて本を失せり。君子は本を勉むと言ふ。萬事に渉りてかくのごとし。先初學の者は本末を知るを先務とすべし。末に至つては繁多にして分れ難し。天地有てものを生じ、物生じて後に名あり、名有りて後文字を加へて名を書す。文字は伏羲の後倉頡が作ると言ふにあらずや。いまだ名も附けず文字も無き前より天道あり、天道といへども人有りて附けたる名なり。我が言ふ所を名を離れて聞かるべし。既に聖人は仁を本となし、老子は大道を以て仁の本となし、道と仁と名は二つなり。文字に依ていづれが本と論議分るべきや。おともなく臭もなくして萬物の體と成る物を、暫名づけて、乾とも天とも道とも理とも命とも性とも仁とも言ふ。惣ていへば一物なり。乾は元亨利貞といふが如し。乾は利なり、元亨利貞は命なり、體用の謂なり。文字を離れて察よ、理と命と名は二つあれども一なることを知るべし。譬へば川と淵との如し。流るゝ所にては川といひ、溜る所にては淵と言ふ。理は淵の如く、命は川の如し、動靜有りて一なり。公伯寮愬二子路季孫一、子曰、之道將レ行也與命也、道之將レ廢也命也。孟子曰莫レ非レ命と。孔子孟子ともに道の行はるゝも廢るも、治亂共に皆命なりとの給へば、命は天の行はるゝ總名なり、理

て有るべし。これまでの所作を占ひ變るものならば、人の進むる羞を免れ、子たる道に入つて、家榮え長久なるべし。

○或學者商人の學問を譏るの段

或學者問うて曰く、我も學問を好む、汝は表に學問を言ひ立て、教を弘む。道は聖人の道なれば替ること有るまじ。然れども宋儒は孔孟の心に違ひ、老莊禪學に似て甚理を高く說く。此故に略心得がたきことあり。汝宋儒の註は用ふとも、定めて孔孟の本意を弘むると思ふらん。汝が教とする所物語り有れ。不得心の所に不審をいふべし。我不審を開かるれば、是卽學問なり。先他に導るゝ所は、何れの所を至極とせらるゝことぞ。

答ふ、學問の至極といふは、心を盡し性を知り、性を知れば天を知る。天を知れば、天卽孔孟の心なり。孔孟の心を知れば、宋儒の心も一なり。一なるゆゑに註も自合ふ。心を知るときは、天理は其中に備る。其命に違ざる樣に行ふ外、他事なかるべし。

曰く、汝は理を直に命と言ふ、是大に誤れり。理は玉の理なり、又惣て物の理なれば、通るまでのことにて死物なり。命は書經にも惟命不レ于レ常と云へり。天の降せる命なれば、活物の

答ふ、小者下男まで、口を閉ぢて置くゆゑ、家内には少しも知らずと思へるは甚愚なり。汝が悪事は、我よりいはざる先に天下に明なり。中庸に莫見乎隱と説給へり。未形といへども、幾は已に動く。動けばこれ明なり。人は知らずと思ふとも、汝が心に悪事と知る、しる故に口をとづ。悪事と知らばなんぞ速に止めざる。子曰見義不爲無勇也と。其上小者悪所金のつかひやうを見覺え、又僞を聞き習ひ、成人の上汝の教へし通りを守り、金銀を盗みつかうて、引負する手代ばかりに成るべし。これ我導きに依つて、人を害ふものなれば、加樣の手代出來るとも、汝いひぶんは無きはずなり。然るに引負せし手代あらば、請人にあづけ、難儀をさすべし。かくの如く、主從ともに放埒にて悪事をなさば、汝の家を亡すことも目下なるべし。子言衛靈公之無道也、康子曰、夫如是奚而不喪、孔子曰、仲叔圉治賓客祝鮀治宗廟王孫賈治軍旅、如是奚其喪とのたまふ。靈公無道なれ共、三人の臣を用ふるゆゑに、國を有てり。汝が家に禪門あるは、衛に三人の臣あるが如し。然るに禪門死せんことを願ふ。禪門死せば、專ら汝が令に從ひ、終には家を亡すべし。然れども心は是變易なり。汝今までの過を得心して、改むるときは忽ち變じて善となり、孝となるべし。語曰、不恒其德或承之羞、子曰、不占而已矣と説き給へり。汝が占ひ此ところに

は學知の及ぶ所にては此なく候。
答ふ、芝居顔見世、一度に棧鋪二三軒も借ると云へり。其客と言ふは、振舞の雜用のみならず、其上悉金銀を出す客ならん。其金銀の出る客を、二三軒の棧鋪に一杯おかば、親の渡さるゝ小遣にて足らざること聞こえたり。いかさま世に稀なる藥袋なしとは汝がことなり。家内の手代は、一分二分五厘三厘を爭ひて商賣をなし、汗を流し設くる金銀を、一度に遣ひ費す事、家内の人の血肉を吸からすに同じ。殷の紂王の比干が胸をさくに異ならず。如何となれば、紂王は我を助け諫る者の胸をさく。汝は家を思ふ手代の心を痛り。これ忠義の者を害ふこと、紂王になんぞ替あらん。恐るべきことなり。人たる道を以て言はゞ、其一日遣ひ費す金銀を家内の者に惠まば、汝が志を神の如くに思ふべし。家内の者に神の如くに思はれなば、主人の法と成るべきに、汝ごとき者は必ず内にては吝きものなり。兩親は是を見て、あの細さにては、多分の金は遣ふまじと思ひ居て、津波に値たる如く、家屋敷一度に取るゝ時のいたましさよ。扨又右のことを、供の小者や男どもは、家内にて物語は致さず候や。
曰く、其所にはぬかりなく、小者や男どもには心づけを致し、堅く口を閉ぢおき候ゆゑ、家内には露塵存じ申さず候。

答ふ、汝の言へる所を聞くに、既に家を亡す前表あり。その子細は、先親より渡さるゝ小遣金は、天の與る汝が祿なり。その祿を十分の一にもつかひ不足といふは、法を知らざる奢者なり。奢者は天これをゆるし給はず。又不足の所は手代を頼み、請取るよし、その金銀は手代の物か汝の物か、我物を自由に得せずして、手をつかね、手代に求むること有るべからず、我令を出し、彼より持來て渡すべき筈なり。それを此方より手をつかね求るは逆なり。此汝終には寳を失ひ、手代の家に養れん兆見れたり。其上の不足は母の方より、內證金を貰ふとや、母は此方より與へて養ふものなるを、反てせぶり受く。女は多く金銀の貯なきものなり。母も定て、親兄弟の方にて借り調へ與へられん。加樣なる苦勞をかけ、其辨を知らざるは哀しきことなり。その外不足は、他人より借り用ふるとや。自の財寳ありながら、他人の心を伺ふ、是汝が威衰へる前表なり。他よりは家屋敷に心を附けて貸すなれば、終には他の物とならん。是天汝が財寳をくつがへさんとする兆既に見る。詩曰、天之方レ蹶、無二然泄々一と云これなり。扨又月に一兩度の遊に、何とて左樣に金銀入り申し候や。

曰く、いかさま是の不審は尤に候。一事を擧げて言はゞ、芝居の顏見世毎に、棧鋪二三軒も借り候へば、相應の雜用かゝり申し候。委細は申すに及ばず、思召の外入用これあり候。此味

つくし申し候。つねに親どもは酒を好み、たべ過すこと御座候。其節はうか〳〵と長咄をし、寐ることを知らず、母なども難儀に存じ候。且二日醉を致し苦み候故、身を知らぬ酒の飲やうと存じ、以後は控られ候やうに諫め申候。加樣の類は、親を思ふ所なれば、孝行にては有るまじく候や。

答ふ、汝の言へる所子たる者の道に背けり。易に家人に嚴君ありと言へり。妻子より言はゞ、家の主は君の如し。然れば母も汝も家來に同じ。家來の身として我退屈するを以て、主人の慰を止る事、法に於いて有るべからず。且母の難儀と言ふ。我道にそむくのみならず、母までを女の道に背しむ。重々の不孝あげて數へがたし。己が身治らずして、人に及ぶべきことにあらず、況や親に於いてをや。扨又汝の遣るゝ金は何方より出で申し候や。

曰く、親ども方より、小遣金として渡し候へども、是は一ヶ月にも足り申さず候ゆゑ、不足の所は手代共を賴み、請取り申し候。然ども色々のことを申し、思ふ程渡し申さざるゆゑ、又母に申し、五兩三兩宛貰ひ、其上の不足は、此彼にて五兩十兩借用致し候。然れども二三年の中に親共隱居いたし候へば、早速に濟し申し候。他人も是を存ずるゆゑ、五十兩百兩借り候ことは、心易きことにて、何の世話もこれなく候。

となれば、忍びこらへ居るなり。その小者を他人打擲せんに、汝に打たるゝ如く堪忍いたし居るべきや。他人には是非に讎をなさん。然ども主人の事ゆゑ、手向せざるは。慎の致す所なり。是を以て見よ、慎でなほらざること有るべからず。まして父母へ此つゝしみなくば、畜類に替ることあるまじ。又兩親の世話に成りしは、たゞ一度なりと云へり。一度輕きにあらず、小者を打擲し血を出すとき、兩親の心を察せよ。人の子に疵をつくれば、その疵を恐るゝのみならず、若し死するときは、汝の命を取れんことを恐れて苦むなり。喩ば魏の文帝の時、凌雲臺を築れ、額をかゝせんため、韋誕と言ふ者を籠に入れ引上られし、其高さ地を去ること二十五丈なり。既に下るれば、黑かりし髪も忽に白髪となれりと。只此一事の恐れなれども、時の間に白髪となる。汝の兩親もおそれ傷むこと、身に釘をうたるゝが如し、五年のとしも一度に寄らん。老は卽死の本なり。刃を以て弑さずとも、殺すになんぞ替りあらん。その小者直に死することあらば、汝が身に及ぶべし。左あらば、一朝の忿に其身を忘れて、以て其親に及す。不孝是より大なるはなし。

曰く、前に申す如く、短氣は宜しからず存じ候まゝ、是は何卒なほし申し度候。親の氣を傷むることは、左程までには存ぜず候。知らざる所は是非なし。又親切に致すところは、心一杯

逆ふと言ふものなり。臣の諫を受入るゝを眞の君と言ふべし。然るに彼が長命を嫌ふは、忠臣を殺さんことを願ふなり。是桀紂に替はなし。不忠の者ばかり殘りなば、家の滅亡を待つものなり。傳に曰く、小人之使レ爲二國家一菑害竝至、雖レ有レ善者亦無二如之何一矣と云へり。又親父も家業のことを言はるゝは、禪門が言はせることと思へるは、汝大に過てり。禪門がことは理にあたるゆゑ、義に責められて言はるゝなり。孟子曰、家必自害而後人是害と。今汝も職を忘れ、身を害ることをなす。此こと得心なくば、家賣り果して後に思ひしらるべし。又汝は短氣にて、毎々兩親心遣せらるゝと聞く。いかなることぞや。

曰く、私生質短氣に御座候。これはなほし申し度候へども、生質ゆゑ是非なく候。然れども兩親世話に成りしことは、只一度田舍の小者を抱置きしに、不調法者ゆゑ、或時打擲いたし候ところ、疵附き泣きくるしむを、漸くしづめ、其疵癒えざる内に在所へ歸へらんと言ふ。夫ゆゑ兩親も手代共も、是には迷惑いたし候。その後は左樣のことは御座なく候。

答ふ、汝生質にて短氣なりと云へり。生質に短氣と云ふ事あるべからず、此氣隨の爲すところなり。貴人に對し氣隨出るものにあらず。愼み直さばなほらざる事いかでかあるべき。已に其小者を打擲せしに、小者怒恨ことあるまじきや。甚うらみ怒るといへども、主人のこ

孝をなし、父母の志を害ふことぞや。扨又汝は家業のことは、如何心得ゐられ候や。」
曰く、家業のことは、いまだ心懸もなく候。子細は、只今にては朋友の交多く、謡鼓茶の湯なども心懸なくては、交あしく候ゆゑ、右の稽古ごとに取紛れ、家業の儀はさして心がけもこれなく候。これは手代どもの役目なれば、致さずとも相勤り候。然るに右の禪門親どもへ申し候は、總じて家業のことは、子供の時より見習せ置かるべき由姦しく申し候。それゆゑに、親父も禪門が手前を思ひ、商賣のことも見習よとは申し候へども、母など内證にては、彼禪門が言ふことを甚腹立し、主人の子を澤山そふに、我子や孫を言ふやうに、いはれざる世話をして、人に嫌はれ、長命するものかなといへども、親父は又恐るゝことがあるかして、禪門が言ふことには、一言の返答もせず、聞いてばかり居申し候。

答ふ、家業のことは手代に任せ、遊藝に鬧しきと言ふ。汝今安樂に暮すは、家業の蔭にあらずや。職分を知らざるものは、禽獸にも劣れり。犬は門を守り、鷄は時を告ぐる、先武士方に馬を繫るゝほどの人、騎ことを知らざるはあるべからず。書翰は人に書かせてもすむ。我代りに家來を馬には騎せられまじ。商人とても我職分を知らずば、先祖より讓られし家を亡すに近かるべし。禪門のいへるも此なるべし。其忠ある者を母の腹立せらるゝは、金言の耳に

たし、免にて出申し候。又夜更歸り候ことは、邂逅のことゆゑ、緩と慰み歸り候。然れども、父母の志を害ふほどのことは御座なく候。元來親ども小氣ゆゑ、家來の者を起し置くことを氣の毒に存じ、門を叩せまじき爲に、八つ時分まで相待ち居申し候へども、數度のことにあらず、月に一兩度のことにて、その代りに翌日は勝手次第寐られ候へば、是も傷にはなり申さず候。

答ふ、汝遊興に出ること、邂逅のことゆゑ、父母を夜更くるまで待せ置きても苦しからずと言へり。先親に事うまつる者は、夕には遲く寐ね、朝には早く起きて、父母の安否を問ふは子の道なり。それに汝は身の遊興の爲に、寒暑の苦もかまはず、夜更くるまで兩親を待たせ置き、快く遊興せられ候や、總じて待事は退屈なるもの也。それは待つ斗のこと也、兩親は汝の歸られし顏を見るまでは、酒などが過はせぬか、喧嘩にてもしはせぬか、寒うは無きか、風ひきはせまいかと、色々品々に思ひ煩ふ。且に內徒の者の心までを推はかり、是ほど夜更せらるゝを、兩親はいふ事はならぬかと、思ふべきとの心遣、又下女や小者は草臥て、最早八つも過ぐるなどつぶやくを聞く時は、心を傷る事多かるべし。其苦み傷ることを不知、父母を夜更るまで待たせおき、翌日は勝手に寐らるゝことは、いかに愚なればとて、左樣の不

私を不孝者の様に言ひなし、孝行いたせと度々申し候へども、私さのみ不孝の覺もこれなく候。分て孝行とは、如何様に致し然るべく候や。

答ふ、孝行と言ふは、只志を養ふを本とす。昔曾子と言へる人、その父を養ふに必酒肉あり、食し終つて膳を除き去んとするとき、父に請うて曰く、この餘は誰にか與へ申さんと問ひ、若又あまり有りや否やと問へば、必ありと答ふ。親の意に、誰にか與へんと、思召さんことを恐れ給ふ。かくの如く、志を養ひ、親に事うまつるを孝行とは言ふ。

曰く、我父母を養ふに、衣服食物など如何やうにいたしても、其善惡を申すことなければ、父母の志を害することは有るまじく存じ候。

答ふ、汝は父母の體を養ふを孝行と思ふ故に、禪門が忠義有つていへる事を聞たがへり。我は志を養ふことを言ふ。我思ひ當る所を以て問ふべし。まづ汝は折々遊興に參られ、夜更歸らるゝと聞けり。まことに左様に候や。

曰く、我も前方は度々出で申し候ところ、親共甚不屈の由を申し、當分禁足致すべき旨申渡し候ゆゑ、私も迷惑仕り、禁足の請合致しかね候ところ、右の禪門挨拶いたし、若き者のことなれば、氣晴の爲に、月に一兩度づつの遊興はゆるさるべき由申し、兩親ともに得心い

と知らるべし。俗家は俗家にて、目出たきことに魚鳥を用ひて善なることを知らるべし。何をか疑ひ何をかあやしまん。俗と出家と混雜する者にあらず。我心易きことを以て喩へん。先四體は一つなれども、首は上に有つて足の代にはならず、足は叉手の代には遣はれず、口は體を養ふ入口なれども、目の代にならず、耳は鼻の代に香をきかず。凡て天地の形は照然たり。因りて物々此形替るに因りて法あり、其物に因つて法は替るなり。然らば何ぞ佛の法を以つて、俗家に混雜して用ひんや。心を清すには佛法も然るべし、身に行ひ家を齊へ、國天下を治むる法には、儒道を以つて善とせん。海川を渡るには船を以つて善とす、陸地を行くには馬駕籠を以つて善とす。佛法を以つて世法を治めんとするは、馬駕籠にて海川をわたるに同じ。五戒を有つ身として、政を行ひ罪人を殺すことは如何、又殺さずば政道立つべからず、刑罰なくば政は如何。汝のいへる所は、水火を一致にせんといふが如し。一致にせば水は湯と成り火は消ゆべし。水火は水火と分れざれば、爭で世を助けん。此理如何。

○或人親へ仕への事を問ふの段

或人問うて曰く、私祖父の時分に相勤め候手代、只今にては法體致し居り申候。この者毎々

喰うて身を養ふ。然れども此理を知らず。知らざれども、暗に賤を以て貴きを養ふ理に合へり。汝小乘に拘りて我は殺生はせず、非情の物を喰ふと云ふなれば、草木國土皆佛と說き給ふ佛語は詐とするや。是を詐とせば、佛經は皆破り捨つべし。捨てずして用ふと言はゞ、汝も大佛が小佛をくらひて殺生するに違はなし。我は幾の殺生し、身命をつなぎ居ながら、俗家は目出度嘉儀に生物を殺し、淺間しきことと言ふ。佛の本意をしらずして他を譏る事、大なる罪ならん。汝如き法にくらき僧多きゆゑに、徒然草に、僧に法有りて、法を以て身を賊ひ、又君子に仁義有つて、仁義を以て身を賊ふと譏れり。君子は仁義あるに由つて、君子といふに、如何なる事ぞと眼をつけて見ば、孟子の舜由二仁義一行非レ行二仁義一也とのたまふこと明ならん。無極の眞を體とし給ふ外に、仁義と云ふ名目あらんや。無我の舜なんぞ仁義を期にして行ひ給ふべき。聖人の道は一理渾然たる所より行はるゝ事を知り、佛氏も亦、本來は無法なりと會得せば、兼好に譏るゝこともなかるべし。汝禪家を學ぶといへども、本來の面目は不會なり。依つて俗家に目出たき嘉儀に殺生するは、あさましきことなりと云ふ。汝も自性を知らば、五戒はいふに及ばず、百戒二百戒にても有つべし。忽にすべきことにあらず、急々に會得あるべきことなり。此理を得ば、其時にこそ、出家は出家にて殺生戒をたもつ

づれが貴からん。至つて賤しき糠虫を助けて、至つて貴き人を殺すことはなるまじ。佛は無心にして不可思議を體となす。其釋迦も糠虫のある五穀を食し給ふ。然れば貴き者の爲に、賤しき者を殺すことは遁れ給はず。殺生戒の源もかくのごとし。天理を知れば、戒は易く有つべし。神佛聖人は何れが師にも弟子にもあらず、皆心の欲する儘なれども、自天道なり。天理を知らずしては何れの道にも合ふべからず。默して工夫せらるべし。天道は萬物を生じて、其生じたる者を以て其生じたる物を養ひ、其生じたる物が其生じたる物を喰ふ。萬物に天の賦し與ふる理は同じといへども、形に貴賤あり、貴きが賤しきを食ふは天の道なり。又佛氏には草木國土悉皆成佛といへば、萬物皆佛なり。然れども形に貴賤あり、貴き人間佛が、賤き五穀佛果佛より水火佛までを喰うて、世界は立つものなり。此理を知らば、聖人の物を用ひ給ふは、貴きと賤しきとは禮を以つて分つ、貴き者の爲に賤者を用ひることを知るべし。證を以ていはゞ、君は貴く臣は賤し。賤き臣、貴き君にかはり死することを聞く。貴き君の、賤き臣下の身に代り死したる者を未聞かず。此賤しきが貴きにかはるは、天地の道にして全く君の私にあらず。聖人物を用ひるに、禮を以てし給ふは卽此所なり。此故に臣として君を棄つる者を賊臣と言ふ。汝も今朝より、幾萬とも數知らず、五穀佛と果佛を殺し

我千首あまり五百首を生ましめんとの給ふ。此兩神は陰陽の御神にて御座す。天地の間は自然に生むと殺すとの二つ有る事を知るべし。今日物を用ひるもこれに效へり。萬物一理にして輕重あり、其次第たがはざるを以つて善とす。此理を以つて天地の行はるゝことを見るべし。强き者は勝ち、弱き者の負くるは自然の理なり。近く知らんと思はゞ、鳥獸にても見るべし。鷲鷹は諸鳥や畜類までを取り喰ふ。又鴉や鷺は魚類等を取り喰ふ。雀や其外小鳥は蜘蛛や菜虫などを喰ふ。犬狼は鹿猿等を取り喰ふ。此等の類は殺生とせんか、天道流行とせんか。戒律も天理を知らずしては有たれざることを告ぐべし。夏に至つて土用の時節などには、米を舂き置くこと一兩日にして、糠虫を生ず。此糠虫至つて微塵の如くにして見え難し。米の中へ手を入れし時、其手が痒き者なり。其かゆき時に黑塗の器に米を入れ、其米を取りて其跡を白日に能く見れば、動く形見ゆる者なり。定てこれを糠虫といふならん。假令五穀は非情なりと言ふとも、糠虫あれば殺生戒を破るなり。戒律の僧は夏に至つては五穀も食ふことはなるまじ。食はざれば忽に死すべし。こゝに至り、喰うて全く有つ事を知るべし。佛の敎に從うて戒を有たんと思はゞ、先我を離るゝことを修行すべし。此身このまゝにて、地水火風空なりと、一度見性する時は、我も世界の一物なり。其時に人と糠虫とはい

殺生戒を破り、目出度ことにものの命を取る。實に俗家はあさましきことを爲し、是を嘉儀とする、哀しい哉と言へり。

答ふ、汝佛法を學ぶといへども、小乘を知つて、佛の大乘を知らざるは惜しい哉。

曰く、知らざるにはあらず。如何と云ふに、佛法は先五戒を有つを第一とす。其中に殺生戒を重き戒とす。儒家にて言はゞ、五常の仁の如し。儒家に於て仁を害ふ者を善とすることありや。汝は儒を說くといへども、いまだ仁の意を知らざれば、聖賢の本意に闇し。

答ふ、仁は慈愛の德有りて私心なきを云ふ。汝如き私心を以て仁を知らるゝ所にあらず。汝は禪家を學ぶといへども、其家の本意を知らざると見えたり。既に南泉和尚は猫を殺し、蜆子和尚は海老を釣りてこれを喰ふ。所作に依りて見れば、是等の僧は殺生戒を破る惡僧と云うて盡く捨てんや。又汝日々の殺生擧げてかぞへがたし。先今朝より喰ふ所の米の數幾粒と云ふことを知れりや。

曰く、五穀は非情なり、殺生にはあらず。

答ふ、大乘の法に、有情非情とへだて見ることありや。隔ありと云はゞ、艸木國土に佛性なしと云ふべきか。神代卷に曰く、伊弉冊尊曰我千首をくびりころさんと曰ひ、伊弉諾尊曰

唐土には此例なし。此國には宗廟と尊ぶ故に、神樂初穂を捧奉る。今日天下の萬民より君へ貢物を捧るが如し。然れども御祭禮を其者自身に行ふことは能はず。國主といへども天子の御神事は行れざることなり。其位にあらざれば祭らず。まつらざれば唐土と違はなし。語曰、「三家者以雍徹、子曰。相維辟公、天子穆々、奚取於三家之堂」と。魯國の三家は、大夫の身として天子宗廟の祭に歌させ給ふ、雍の詩を歌うて己が先祖を祭り、又泰山に旅せんとす。加樣なる分を僭え理に背くことをなせば、せまじき事をするゆゑに、其鬼にあらずしてこれを祭るは諂なりと宣ふ。且孟子も社稷の神は民の爲に立つと宣ふことなれば、出來初穂を捧る如きは唐土にも有るべし。我朝にも初穂や神樂を捧ぐるを祭とは云はれまじ。譬ば祇園會御靈祭なども其神の祭なり。其土地に住み障なきことを喜びて、我身を祝ふと云ふものなり。又下々に何程さはりありとても、御神事は行はるゝなり。これにて我祭にあらざること明なり。俗説に拘ず、本を推して工夫有るべき所なり。

○禪僧俗家の殺生を譏るの段

或禪僧來りて云ふ、今日さる方へ參りしに、子息の婚禮有りとて魚類等をつかひ、生物を殺し

身持正しければ家督を受く、又身持放埒なれば、家督を受くることあたはず。願の成就するもせざるも此に同じ。天命の我身にあることを知るべし。神の御心は鏡の如し、何ぞ贔屓の私有んや。それに成れること有れば、神の納受と云ふ。是を他人は聞きて、誰は何を神に捧られしゆゑに彼願叶へりと云ふ。如レ此取沙汰すれば、終には神明を賂取の神と成し、穢し奉ること哀しきにあらずや。是天命を知らざるゆゑなり。

又問ふ、或人の曰く、子曰非二其鬼一而祭レ之諂也祭べからずと宣ふ。我朝には土地の神、又太神宮といへども、御恩の爲に五穀の出來初穂や、或は神樂などを捧奉ることなれば、兎角唐土とは違有ると云へり。然るに汝神は一列の如くに言へるは、如何なることぞ。

答ふ、中庸に所謂、鬼神爲レ徳其盛矣乎、體レ物而不レ可レ遺と云へり。鬼神とは天地陰陽の神を云ふ。體レ物不レ可レ遺とは、造化は鬼神の功用にして、鬼神は萬物を總主れるを云ふ。又我朝の神明も、伊弉諾尊伊弉冊尊より受け給ひ、日月星辰より萬物に至まで、總主給ひ殘所なきゆゑに、唯一にして神國とは云へり。こゝは工夫有るべき所なり。然れども唐土に替り我朝には、太神宮の御末を繼せ給ひ御位に立せ給ふ。依て天照皇太神宮を宗廟とあがめ奉り、一天の君の御先祖にてわたらせ給へば、下萬民に至まで參宮と云うて盡く參詣するなり。

非禮の物を推て捧げ、神明を穢し奉り、終には神罰を受くべし、恐るべきことなり。

心だにまことの道にかなひなばいのらずとても神やまもらん

との御神詠もあるぞかし。子路孔子の病を禱ることを請ふ。子曰丘之禱久と。禱ると宣ふは、誠の道に合へることとなり。誠にかなはゞ何ぞ祈ることあらんや。然るを我朝の神道に違ふとは如何なることとぞ。凡て聖人の書は、箇樣の迷を解くべき爲の書なり、書に依て迷はば書のなきこそ勝ん。古より神國の助に儒道を用ひ給ふことを知るべし。我朝の神も、非禮非義の賂を好ませ給ふべきや。清淨潔白の水上なる故に、神明と申し奉る。凡て神信仰する者は、心を清淨にする爲なり。然るに種々樣々の非禮非義の願を以て朝暮に社參し、色々の賂を以て神に祈る。これ不淨を以て神の清淨を無する者なれば、これぞ實の罪人にて、神罰を受くべし。子曰獲二罪於天一無レ所レ禱也と。聖人は天命の外に望むことは、皆罪なりと宣ふ。願と云ふは多くは手前の勝手づくなり。手前の勝手づくをすれば、他の爲に惡しし。他を苦むるは大なる罪なり。罪人となつて爭で神の御心に合ふべきや。萬民に隔なきこそ神なるべけれ、それに一方は惡くとも、一方の善きやうに願をかなへ給はゞ最負の沙汰なり。願叶ふと叶はざるとを、譬て云はゞ、親より子に家督を讓るごとし。子よりの願はいらず、

らぬ穢き願を遠ざけ、又先祖を祭るは孝を主とす。是遠ざくにあらず。捌敬して遠ざくと宣ふに、大に取違ひ有ることなり。神は非禮を受け給はず、然れば非禮の願を以て近づくを不敬とす、敬を遠ざくと宣ふにはあらず。汝のいへる如くなれば、我朝の神は願狀を籠めて成就に至る時には、願文の通に鳥居を立て、或は社の修覆などいたすを敬と思はれ候や。

曰く、然り。

答ふ、然らば今此に人あつていはん。汝が隣の娘を忰に妻せ度く候、媒いたし呉れられよ、禮金をやらんと云はゞ、身の辱を顧みず媒せられんや。

曰く、夫は人を賤たる待なり、金に目呉て爭で媒の成るべきや。

答ふ、汝も羞惡の心有りて身の辱は受けざるなり。況や貴人に對して何にても御願ひ申す時に、此事成就なし下されなば、是程の金銀を進めんと言はるべきや。

曰く、貴人を輕ずるに似たり、何とて左樣のことのいはるべきや。

答ふ、貴人に言はれざる不義を以て、清淨の神明に祈を爲し、願の通に成し下されなば、鳥居や社の修覆致し奉らんと云ふ時、鳥居や修覆に迷ひ給ふあさましき神有るべきや。然るを

都鄙問答　卷之二

○鬼神を遠ざくと云ふ事を問ふの段

或人問て曰く、我朝の神の道と、唐土の儒道とは、異なる所あり。孔子告㆓樊遲㆒曰、敬㆓鬼神㆒而遠レ之可レ謂レ知とあり。我朝の神の道は左にあらず。然るに神と云ふ名は同うして、加樣に替あることは如何。

答ふ、汝は我朝の神明は、いかゞ心得られ候や。

曰く、我國の神明は馴れ親みちかづくを以て本とす、遠くを以て不敬となす。因て或は物に願ひ望むことあれば、願狀を以て神明を祈る。其願成就する時は、始の願狀の如く鳥居をたて、社の修覆などをすることなり。加樣に人の願などを受け入れ給ふ。然るに聖人は敬して遠ざくと宣へば、雲泥の違あり。是を以て見れば、儒學などを好むものは、我朝の神の道に背く罪人となるべし。

答ふ、敬して遠くと宣ふは左にはあらず。外神を祭るは敬ひ愼む而已を主とす。此故に道な

孟子の所謂、欲貴者人同心也、人々有貴於己者弗思耳。此味を知るべし。

を要とす。子曰七十而從心所欲不踰矩と。如是心の欲する通を行ひ給ひ、天下の法と成り給ふ事は、賢人も及ばざる所なり。然れ共心を知る時は一なり。譬て云はゞ水のごとし。聖人は四海の水、大船を浮めて天下の財を通用し、萬民を養ふが如し。賢人は大河の水、一ヶ國の財を通はし、一國を養ふがごとし。我等ごとき小人は小川の水、五町か七町の田地を浸し育ふがごとし。世を助くる上には違あれども、漸にして四海に到るときは一なり。心を知るもかくのごとく、聖賢に至るまでは、上中下の替りあれども、學びて止まざる時は終には聖賢に到つて一なり。我等ごときは欲する心を抑へ、惡を懲し困しんで勉むれば、漸にして到らるゝことを知る所なり。客退く。

或人問て曰く、今客に告げらるゝ如くならば、書を講じて弟子を集むる世間の儒者は、悉く聖人の心を識りて敎へ候や。

答ふ、否しからず。書を講ずる而已にて眞の儒者とは云ふべからず、性を知りて身を濡すを儒者と云ふ。假令牛に汗し、棟にみつる程の書を讀むとも、性理にくらき者は、朱子の所謂記誦詞章の俗儒にして眞儒にあらず。汝も何方にて儒を聞るゝとも、其目利をせらるべし。目利せざれば、客の云へる如くに、學問に依て家業疎末に成り、不孝の本を習うて、身の害を

し、四方上下を照す、程子の所謂明鏡止水是なり。又用を以て言ふ者あり、孟子の所謂心の官は思ふ事を司る、飢ゑては食を思ひ、渇しては飲を思ふ、子曰視思明、聽思聰、貌思恭是なり。凡て云へば聖人は、天地萬物を以て心とし給ふ。口傳にて知らるゝ所にあらず、我に於て會得する所なり。詩蒸民に曰、有物有則と。父子の間にて云はゞ、父の慈愛有るは父の心、子の孝行有るは子の心、萬事にわたりてかくのごとし、是は聞え易きが如し。然れども一度決定し疑晴るゝことなきときは、正く聞得ることあたはず、此決定は信心堅固にして致す所なり。親より傳へて子に讓ること能はず、師も弟子に傳ふることあたはず、我知れば師の肯ふ所なり。こゝが孔子孟子も言句の絕えたる所なり。然ども天何言哉四時行焉百物生と宣へば、道は隱るゝ所にあらず。加樣に說き顯し給へども、此四時行焉百物生と宣ふは、如何なることぞと、心を附くる人少なり。莊子に所謂聖人の意を知らずして書をよむは、糟粕にして實の味はなく、皆糟なりと云へり。實の味は桶大工が輪を斲るごとく、徐則甘而不固、疾則苦而不入、不徐不疾、得之手應之心、口不能言と云ふも面白し。心を知らずして法を說くは、桶大工の事を傳聞きて、輪を斲るが如し。心に得ざれば、桶と成りて水を有つの用をなさず、教の道も斯のごとし。このゆゑに心を知る

發明する所あるべからず、醫書に以二手足痿痺一爲二不仁一。仁者は天地萬物を以て一體の心となす、己に非ずと云ふことなし。天地萬物を己とすれば至ざる所なし。若心を知らずば、天地と己と別々にして、氣已につらぬかず、手足の痿痺るゝ病人の如し。聖人は我心を以て天地萬物を貫く。凡て師たるもの是心を知らずば、何を法として敎へ、人の心を正さんや。然るを師家に立つ人、心を知らずと云ふ。夫は汝の在所などにて、書物を能く讀み、文字を知つて敎ふれば、是も儒者と思ふならん。若又聖賢の心を知らずして敎ふる儒者あらば、小人の儒にして人の書物箱と成るべし。君子の儒は心を正し德に至るの外他事あらんや。我文才に伐らず、利欲名聞を離れ、道に志有るを君子の儒とは云ふなり。然るに心を知るは古聖賢のことにして、今の世の者知らるゝことにあらずと云ふは、佛氏の末法萬年と云ふ敎なり。一方にては佛氏を非り、我勝手に合へば末世は衰ふと云ふ敎ばかり是として、取り用ふるは如何なることぞ。聖人は百世も變らずと宣ふにあらずや。此理を知らずして、書を講じ人を敎ふること成るべけんや。

又問ふ、然らば、汝も心を知りて敎へられ候や。其心を知ると云ふは如何なることぞや。

答ふ、心は言句を以つて傳へらるゝ所にあらず。心は體を以つて言ふ者あり、譬ば玉の鏡の如

今日我身のあるところ則ち天命としる。是孔子を法に取るゆゑなり。此の義を知らば我職分を疎にする心有らんや。且國主より召すことあらば、我器量の拙きことを申立て先辭退すべし。豈仕ふると仕へざるとに心を動さんや。孔子曰、沽之哉、我待賈者也。待賈と宣ふは、士たる者は禮を以て招かるゝこと無ければ、飢ゑて死すとも、此方より出でて仕ふる者にはあらずと宣ふことなり。此程明に說き給ふことを知らずして、論語を讀むと云はるべきや。總て仕官となる者は、君を正し國を治むる爲なり。少しにても祿を求むる心にて仕ふる者は、必ず得たる祿を失ふことを恐るゝものなり。祿に心有つて君を諫め正すことは思ひもよらぬことなり。假令何程の書を讀み、世に博學と呼ばるゝ共、君を不義に陷るゝ者を學者と云はるべきや。既に冉求季氏に仕へ、柔弱なる所より季氏を諫むる事能はず、却て附益することをなす。これに依て孔子冉求を深く責め給へり。若又祿に望有る者君に仕へなば我身を害ひ恥を受くべし。扨又汝は儒者たる人聖人の心を知らずといふは如何なることぞ、心は身の主なり。且儒は濡と云つてうるほすと云ふことなり。身をうるほすは、心よりうるほすことを知るべし。孟子の一書も、心上より說き來る。心を知る時は、志強く義理照にして、以て上達すべし。此心を知らずば、昏昧とくらく放にして、學問に從ふと云ふとも、

進み義を見て退くこと能はず、其無禮を學ぶ故、己が文學に伐り、他人を慢る、これ學問の害なり、其發を原れば、師たる者の名聞と利欲の心、自然に遷りたる者なり、弟子の難にはあらず、師の難なりといふ人有り、如何なる事ぞや。

答ふ、汝左樣のことは云はざるものぞや。子貢謂二子禽一曰、君子一言以爲レ知一言以爲二不知一、言不レ可レ不レ愼と。凡諸方に儒者の數、何程有ることは知らざれ共、論語を讀ざる儒者有るべからず。論語の序に孔子及レ長爲二委吏一料量平なりと。孔子大聖の德有りて、薪芻材木などを取聚むる役目を掌り給へども、不足に思召す事なきゆゑ、料量平かに勘定合り。此れ則天命に任せ給ふ所なり。又爲二司職吏一其時には役目なれば牛羊を畜給ふ。莊長とさかんに長じ、蕃生ばかりなり。此時の天命に安じ給ふ。これを法として、士農工商共に我家業にて足ることを知るべし。論語を讀む者、かほどの事を知らざらんや。凡て道を知ると云ふは、此身このまゝにて足ることを知りて、外に望むことなきを、學問の德とす。汝の言へる諸生は此訣さへ知らずして、帶刀を望み、教の道を聞得ずして、却て師の難となすは誤なり。儒者たる者も聖賢に至らざれば、祿のことを曾て思はざるには非ず、思ふといへども、祿に志有りては仕るものにあらずと知る。是を以つて望む心を抑へて、不義の祿はうけず。

の如し。

曰く、其中に心得がたきことあり。衣類に美麗をなさずと云へり、先父母は我子に、他よりよき物を著せたく思ふは親の心なり、それに麁相なる衣類を著ては、父母の心を害ふゆゑ不孝にあらずや。

答ふ、人に背き麁相にせよと云ふにはあらず、我が言ふ所は約を守ることを云ふ。道に明なる父母ならば、如何ぞ禮に背き、奢ることを喜ぶべきや。孔子も禮與其奢寧儉と宣ふ。然れば禮に少かくる所ありとも、奢の害は大なりと知らるべし。又道に疎く奢を好む父母に、盡く心に合ふ事ばかりは成難し、成難きことを譬て云はゞ、父母盗が好きなればとて盗をせられんや、内證にて此を止むるは、眞實の心よりなす所なり。心を知る時は孝の道をそこなはず、父母の惡事をも止め、父母を道に向しむ。又道ある父母ならば、心自ら合ふべし、是學問の力なり。

曰く、汝の言へる如くなれば、忰に學問させても大なる疵とも成るまじ。然れども或人の云へるは、かやうに學者の風俗惡しくなるは、弟子の難にはあらず、儒者たる人、聖賢の心を知らずして教ふる故に、己に克ち禮に復ることを知らず、且我身に祿の望有るゆゑ、禮を以て

曰く、學問をさせ候者ども、十人が七八人も商賣農業を疎略にし、且帯刀を望み、我をたかぶり他の人を見下し、親にも面前の不孝はいたさねども、事によりて親をも文盲に思ふやうなる顔色見ゆ。然れども他人の聞き悪くき様に、反り返答せぬことは學問の德かと思へども、親には默然とだまり居る者ぞと、云ふやうなる顔つき見え、又少しにても學問致したる者なれば、親達も遠慮せらるゝ體に相見え申候。夫ゆゑ手前の悴も若左様に成り候へば、迷惑に存じ得登せ申さず候。如何いたし然るべく候や。

答ふ、學問と云ふ者は左様なることを直す者にて候。實は御城下邊とは申しながら、田舎ゆゑにても候や。

曰く、左にはあらず、其中七八分ほどは、京都でも名ある衆中にて學べる者どもにて候。

答ふ、汝の物語を聞くに、其學し人は悉く人倫に違へり。敎の道は人倫を明にするのみ。師たる者、假令敵に敎ふればとて、聖人の道に背きて敎ふべきや。學問の道は、第一に身を敬み、義を以て君を貴び、仁愛を以て父母につかふまつり、信を以て友に交り、廣く人を愛し貧窮の人を愍み、功あれどもほこらず、衣類諸道具等に至るまで、約を守りて美麗をなさず、家業に疎からず、財寶は入を量りて出すことを知り、法を守りて家を治む、學問の道有増かく

して、十錢を天下の爲に惜まれし心を味ふべし。如此ならば天下公の儉約にもかなひ、天命に合うて福を得べし。福を得て萬民の心を安んずるなれば、天下の百姓といふものにて、常に天下大平を祈るに同じ。且御法を守り我身を敬むべし。商人といふとも、聖人の道を知らずんば、同金銀を儲けながら、不義の金銀を儲け、子孫の絕ゆる理に至るべし。實に子孫を愛せば、道を學て榮ゆることを致すべし。

○播州の人學問の事を問ふの段

或時播州の者上京致し、宿の主同道にて來り、物語して曰く、某こと忰一人持ちさふらふところに、學問を望み、何とぞ少の間京都へ罷出で、せめては小學や大學の講釋なりとも承り度きよし度々ねがひ候。汝に對して物語を致すこと、少し遠慮に候へども、物語を致すべし。姬路近邊にも內福にて、田地高も多く持ちたる者などは、學問をも致させ候所に、後に至つて難儀のすぢも出來申すよしを承る。一人の忰のぞみ申す事と云ひ、又少は目も明けてとらせ度く候へども、人柄あしく成るべきやと心元なく存じ、得登せ申さず候。

答ふ、學問に因て難儀ありとは如何なる事ぞや。

ことあたはず、祿を貪り身を退かざるは、此又大なる恥なり、能々味ふべき所なり。此志の大略を云ふ。事は士の家に入りて聞かるべし。

○商人の道を問ふの段

或商人問ひて曰く、賣買は常に我身の所作としながら、商人の道にかなふ所の意味何とも心得がたし。如何なる所を主として、賣買渡世を致し然るべく候や。

答ふ。商人の其始を云はゞ、古は、その餘あるものを以つて、その足らざるものに易へて、互に通用するを以つて本とするとかや。商人は勘定委しくして、今日の渡世を致す者なれば、一錢輕しと云ふべきにあらず、是を重て富をなすは商人の道なり。富の主は天下の人々なり、主の心も我が心と同き故に、我一錢を惜む心を推て、賣物に念を入れ、少しも麁相にせずして賣渡たさば、買ふ人の心も、初は金銀惜しと思へども、代物の能を以て、その惜む心自ら止むべし。惜む心を止め、善に化するの外あらんや。且天下の財寶を通用して、萬民の心をやすむるなれば、天地四時流行し、萬物育はるゝと同く相合はん。如此して富山の如くに至るとも、欲心とはいふべからず。欲心なくして一錢の費を惜み。靑砥左衛門が五拾錢を散

を委ねて、君の身に代り、露塵ほども我身を顧ざるは臣の道なり。常に手足が口に使るゝと、我身の君に事ふまつると、違ふことあらば、此は不忠なりと知るべし。此を法とせば、何國にて仕ふるとも、臣の道を離るゝことあるべからず。扨臣は政に従ふものなり。下を使ふは君の道を以て治むべし。古聖人の御代には、君としては萬民を子の如く思召し、民の心を以て御心となし給ふ。傳云、民所ㇾ好好ㇾ之、民所ㇾ惡惡ㇾ之、此之謂ニ民父母ㇾ。此故に聖人は世を沒し給へども、民思ひ慕うてわすれずと言へり。此味を知るべし。忠義の臣は、名を後世に殘し、天下の人これを愛す。禮曰、士四十志強立不ㇾ奪ニ於利害ニ不ㇾ怵ニ於禍福ニ可ニ以出仕ㇾと見えたり。士の道は先心を知りて志を定むべし。孟子曰、尚ㇾ志、何謂ㇾ尚ㇾ志仁義而已殺ニ一無ニ罪、非ㇾ仁也非ニ其有ニ取ㇾ之非ㇾ義、居惡有、仁是也、路惡有、義是也、又曰、舍ㇾ生而取ㇾ義者、此以患有ㇾ所ㇾ不ㇾ辟也。士たる者はこれを味ふべき所なり。又世に誤つて、武藝ばかりを以て、士の道と心得るものあり。實の志無きは士の中に入るべきにあらず。子曰、如有ニ周公之才之美ㇾ使ニ驕且吝ㇾ其餘不ㇾ足ㇾ觀也已と。心正く直ならば、他に不足ありとも猶士と言ふべし。孔子又曰邦有ㇾ道穀、邦無ㇾ道穀恥也と。然れば治世に幸を以て祿を得、無役にして食ふは恥べき事なり。況や君無道にて國治らず。然るに君を正す

年參宮致し、御師へ大神宮の御教を示し給へと言ひければ、此の神の御教は只正直を以て善とす、親への孝、君への忠直さまにして、家業を情に入れ、心に掛ることなく、其上に罪咎あらば、其罪咎は某が受けんと言はれけり。扨心易き御教哉と思ひ、今少し六かしき教もあらば示し給へと言ひければ、御師の言ふ、此のこと心易く勤りなば、重て告げんと言はれけり。心易く思ひ勤見れども、先正直が勤らず、孝と忠とは猶往かず其上家業を情に入れ、心に掛らぬ樣に勤むること、此身の一生にては、勤まるべきとは思はれず。思へば思ふほど高大なることかなと、感心致し侍るなり。只加樣に心易く告げられよと言ふ。

答ふ、實に左もあるべきことかな。樊遲問レ仁、子曰、愛レ人、問レ知、愛レ人、仁知は大なりと雖も、此の二語を以て盡し給ふ。文字によらずして、人の曉し易きこそよからん。愚元來不學なれば、幸なる哉心易く汝が身にも備りたることを以て語べし。先手足は口のために使はるるなり。如何となれば、口が物を食はねば、手足安穩なること能はず。このゆゑに手足が苦勞して、一代口の爲に使はるゝと云へども、少しも不肖らしきことなく、口に忠を盡して能く事ふまつるものなり。君に事ふまつる道も、手足の口に使はるゝことを法とすべし。臣下の飯と汁は、君より給る俸祿なり。其祿なくして何を以て命をつぐべきや。このゆゑに我身

我身を亡ひても逆ふことなし。汝は少々の金銀にて父母の命にさかひ、己が欲心を以て親の心を傷む。聖賢の孝行より、汝が仕形を見る時は、木石に異ならず、退て工夫せらるべし。

○武士の道を問ふの段

或人問うて曰く、我悴今度武家方へ奉公に出し申候。士の道如何申しきかせ然るべく候や。答ふ、我農圃に生れ武の事委からずといへども、書物にて見たる上を以つて告ぐべし。先づ君に事ふる者は凡て臣と言ふ。臣は牽なりと註し、心常に君に牽るゝなり。又世間に、君より俸祿を得んが爲に、牽るゝ如くに見ゆる者あり。子曰、鄙夫可ニ與事一君也與哉、其未レ得レ之也患レ得レ之、既得レ之患レ失レ之、苟患レ失レ之、無レ所レ不レ至矣と。毫釐程も祿を望むに心あらば、君を害ふ本となるべし。古より不忠をなす者は祿を貪る心よりなす所なり。臣の君に牽れし道を見んとならば、舜の堯王に事へ、伊尹の湯王太甲に事へ、周公旦は武王成王に事へ給ふを見るべし。今君に仕ふる者も欲心を離れ、古人を見て法を取るべし。其外殷の王子比干これらの旁は、皆義を盡して心常に君に牽れ給ひ、今に至つて臣を正す法となり給ふ。曰く、我學問なければ、六箇しき事を問ふにはあらず。只心得やすきやうに語らるべし。我一

答ふ、汝も人の是非を知ることは明なり。然るに親の寶を親の心にまかせざるは、如何なることぞ。唐土舜王は大孝の君なり、親の爲には天下を棄つること、敝たる蹝の如くに思召すと。加樣なることを知らるべし。財寶は言ふに及ばず、元我身は親の身なれば、遣ひたき樣に遣ひ、賣りたくば賣りて遣はるゝとも、汝が言分はなき筈なり。親の財寶を以つて父母を養ひ、其餘を我身の養の期にせる心あらば、父母の短命を待つに似たり。其機內に動くときは、必ず外に發して父母の氣を痛むること多かるべし。醫書に百病は氣より生ずと言へり。これを以て見れば、父母の心を痛ましむるほどの不孝はなかるべし。昔衞に宣公と言ふ君あり、其嫡子を伋と言ふ。後に又宣公齊國より宣姜を妻れり。宣姜二人の子を產めり、兄を壽と云ひ弟を朔と言ふ。宣姜と朔と二人して、伋がことを宣公に讒に言ひなしければ、宣公宣姜に溺れて伋を惡み、齊の國につかはし、賊をして路に待ちうけて殺さしめんとす。壽これは母と朔とが惡事なりと知りて、兄の伋に告げ命を助けんと思へり。伋が曰く、父の命なり、逃るべきにあらずと云うて聞き入れず。壽せんかたなく、伋が齊に使する驗の旌を竊執りて、兄の身に代り、死せん爲に先へ行く。賊あやまつてこれを殺す。後より伋至りて曰く、父の命なり我を殺せ、壽に何の罪やあらん。賊又伋を殺す。伋は父の命を守り、又宣姜の惡事を見さず、

所なり。我が言ふ所は悉く親に事ふまつる道なれども、汝聞き得ることあたはず。是心を知らざるゆゑなり。因て心を知る事を急務とす。
曰く、損ある事に從へば、先祖の家を破る道あり。是是非善惡分るゝゆゑなり。然るを是非しらずとは如何なることぞ。
答ふ、汝の言へる所、一つとして是非分れず。是非を論ずるは他人の事なり。父母に對して是非を論ずるものにあらず。況や汝の父母世間に對して惡しき事あるに非ず。親類を救ふ仁愛有ることを知らずして、却て親を不義の人と言ふは哀しきことなり。今汝の家財は親よりの譲か、但自身かせぎ出し、其財を以て父母を養はれ候や。
曰く、兼て汝も知らるゝ如く、親の譲の外、我財寶と言ふはなし。
答ふ、左程の家財を譲れし父母、少々費あればとて、家の立たざるほどのこと有るべきや。親の財寶なれば、假令つかひ捨てらるゝとも心まかせなるべし。財寶盡きなば、如何樣の賤き働をして成りとも養ふべし。若又此に人有りて、身を捨て苦勞し得たる寶なれば、父母を養ふことならずと言うて、飢ゑ凍やす者あらば、これは尤なりと汝が心に許すべきや。
曰く、否、我寶にて養ふ事はならずと言うて、父母を飢ゑ凍やす者、夫を人とは言はれまじ。

汝は書を讀みながら、書を讀まざる愚昧の者を法とする故に、父母につかふまつる道を知らず。昔公明宣、學於曾子、三年不讀書、曾子曰、宣居參之門三年不學何也、公明宣曰、安敢不學、宣見夫子居庭、親在叱咤之聲未嘗至於犬馬、宣說之學而未能と云へり。曾子の如きは親の前にては犬や馬さへ怒りて叱り給はず。然るに汝は、只養ふを孝と思へり。子曰、今之孝者、是謂能養、至於犬馬、皆能有養、不敬何以別乎と。如是なる時は父母に事ふまつる道は、愛と敬との二つなり。愛はいつくしみあいする心なり。敬はつゝしみうやまふ心なり。然るに汝は父母の命を用ひずして、心を痛ましむ。心を痛ましむるは愛心なきが故也、命を不用は敬心なきが故なり。愛敬の心なきは鳥獸に同じ。汝は世に呼るゝほどの孝を問ふ。聖賢の孝を聞かんと思はゞ、早く愛敬の心を知るべし。愛敬の心を知らば、聖賢の孝にも到るべし。

曰く、我が問ふ所は親に事へのことなり。其急なることを差置き、只一通に心を知れとは如何なることぞ。

答ふ、汝は損ある事には從ひ難しと言へり。從はざれば逆ふなり、親に逆ふより大なる不孝あらんや。然るに費有ることに從ふは、義に合はざると思へり。これ心の暗きより、是非分ざる

に仁義の心有りて人を救ふを、我不仁不義を以て、拒ぎ爭ふと云ふものなり。子としては親を善に導くべきを、反て惡道へ陷れしむること有るべきや。汝の如く書を見なす者も、學問せし者と言はゞ、世の人學問は不仁の本なりと思ふべし。然る時は學問を廢る罪人なり。元來世間に書を讀む而已を學問と思ひ、書の心を知らざるゆゑに、汝が如く見誤ること多し。總て經書は聖人の心なり。聖人の心も我心も心は古今一なり。其心を知りて書を見る時は、書の意味は掌を見るが如し。汝が義と言ふは盡不義なり。兩親の心は義に合へり。兄弟を捨てざる志、左も有るべき事なり。伯父は親同前の事なれば、假令兩親共に貸すこと成り難しと言はるとも、兩親へ願ひ、少のことは合力にても致すべきことなるに、反て親の志に背くは、親を無する罪人なり。其罪を知らずして孝行をなすと言ふ。その愚昧は論ずるに足らず。

曰く、汝が言へる所、心得難きことあり。世間を見るに、吝して家業に精を入れ、金銀を持ち、父母に不自由をさせぬやうに養はゞ、假令親類へ屆ざる仕方ありとも、不孝者とは言はず。身持よき者なりと言ふ。然るを汝は彼らも皆惡人にて不孝者と言ふべきや。

答ふ、かくのごとき者を、世間並の人と思ふべけれど、親へつかふる道は曾て知らざる者なり。

曰く、孝經に、父有ニ爭子一則身不レ陷ニ於不義一、故當ニ不義一則子不レ可ニ以不レ爭ニ於父一と、爭ふ時には如何ぞ溫和なるべき。父母に不義あるとき爭ふことは、聖人と雖も有ることなり。我が爭も是に倣へり。去冬伯父が方より銀子借用に來りしとき、親ども貸し度思ふことはこれ不義なり。伯父も前方とは違ひ勝手も貧く、何返すとたしかに心當なきことなり。其返す覺えもなき所へ、積なく貸せと言ふは、前後の辨なきことなり。加樣なる不義を言はるゝときは、親といへども爭はずば有るべからず。たとひ父母如何樣に言へばとて、家の害あることは成り難く候。我貸さざるは、後々に至つて親に不自由をさせまじき爲なり。手前に損あることを堪忍し、面前に從ふは、父母に甘毒を食せるが如し。其毒を與へざるは實の孝と言ふべし。其うへ衣類食物は、望の通にいたさせ、遊興物參等、心任せに致すことなれば、大槩の孝行は致し候。但雪中に笋を拔く程のことなければ、孝行の至とは言はざることに候や。

答ふ、汝も少は學問を致されしと見えて、孝經を引き用ひるといへども、盡本意に違へり。父有ニ爭子一則身不レ陷ニ於不義一とのたまふは、親無道にして、欲惡甚しく、或は君を殺し、國を奪ひ、下たる者は盜などをなす、大なる不義ある時は、善に遷しめん爲の爭なり。汝は親

答ふ、父母の心に逆はず、我顔色溫和にして、親の心を痛めざる樣に事らば、孝行とも言ふべきか。

曰く、父母の心に逆ざると、顔色溫和にすることは、輕きことにて勤りやすきことなり。たとひ能すればとて、內證のことなれば、世に呼ばるゝ程のことは有るまじく候。我言ふ所は、他人の目にも發知と立つほどのことを勉め見申度候。

答ふ、汝の言へる所は名聞にて、眞實を以て父母に事ると云ふものにあらず。其名聞あれば利欲も甚多からん。名利の勝つ者は、必仁義の心薄し。孝行は仁義の心よりなす者なり。有子の曰く、君子務レ本、本立而道生と。根本既に立つときは、其道自生る。本とのたまふは、親に事ふるのことなり。名を求むるは譽を喜ぶなり。我名に著する者、豈ぞ孝を知るべき。汝は父母の心に逆ふことなしと言ふ。然るに去暮伯父の方より、少々の銀子借用に來りし所、兩親は用達度由申されけるに、汝不得心にて少も借さゞりしゆゑ、親達難儀に思はれ、向後外の事は儉約も致すべく間、此度は用立遣すべきよし、再三申されしかども、汝聞分なく、終に借さゞるよし、其爭ふ時も顔色溫和に候や。人に爭ふときは、溫和ならざる者なり。夫にても逆はざると溫和との二つ、心易く勉まると言ふは如何なることぞや。

ふ。孟子は其仁を知ることを教へ給ふ。依りて心を盡し性を知ると說き給へり。文學は末なることと明なり。然るに詩作文章ばかりを儒者の業と思へるは僻なり。子曰、誦詩三百授之以政不達、使四方不能專對、雖多亦奚以爲と。專對るは心なり、詩三百を誦は文なり。和漢ともに小事を見て大事を見る者少なり。陋哉文學に伐る。文藝も道の助となれば、舍ることにはあらず。愚文學拙を以つて悔ゆといへども、民間に產れ家貧して、學ぶべき暇なく、四十餘の比より此道に志す、如何して文學迄に至るべき。只恥づべきは何方へ一箇の饋るとも、文字に於て誤ることぞ多かるべし。見る人これを用捨有らんことを願ふ。

○孝の道を問ふの段

或人問うて曰く、我若年の比は、前後の辨もなきことなれば、親へ不孝の事もあるべけれども、最早壯年の比よりは、孝行の心附も有るゆゑに、何の不孝も致さず、隨分心一杯につとめ候へども、是ほどの孝行は、世間にも有ることなれば、天下に誰と、名を呼るゝほどの孝行を勤め見申度候。如何樣に致し然るべく候や。

善なり、急々に進まざるは柔弱の致す處なり。又曾子孟子の如きは、行ひ課せて上達し給へり。依つて仁以爲㆓己任㆒。又、養㆓浩然氣㆒に至れり。今言ふ所は性を知るを先とす。性を知れば行ひ至り易きの道なり。孟子も人を導き給ふは性を知るを先として敎へ給ふ。依りて最初より性は善なりとのたまふ。此孟子發明し給ふ所にして、前聖の未だ發せざるところなり。知つて行に至ることは早し、行ひおほせて至ることは遲し。故に性を知るを先とし給ふ、今敎を立るも此に倣り。法なき道を弘むるにあらず。我因る所は孟子の盡㆑心知㆑性則知㆑天と說給ふ、我心に合ひ疑なきを以つて敎を立つるもととす。求㆑觀㆓聖人之道㆒者必自㆓孟子㆒始と序說にも見えたり。

曰く、彼儒の言ふ、汝は詩作文章に疎き由を聞く、若儒者たるもの諸侯方へ召出ださるゝこと有りて、詩文などを好ませたまはゞ、如何すべき、文學なくして儒者とは言はれまじと言ふ如何。

答ふ、然り。我等如きは文字を正ては、手紙一通も書き得ざる者、何方へ出づべきや、拙を知りて出でざれば、恥を受くること少かるべし。元來儒者は政に從ふ者なり。論語にも仁を問ひ政を問ふこと多し、詩作文章に及ぶこと少なり。孔子は德に至り仁を全ふする事を敎へ給

事油斷なく勉むる時は、身は苦勞すといへども、邪なきゆゑに心は安樂なり。身を肆にし、年貢不足する時は、心の苦と成る。我教ふる所は、心を知つて、身を苦勞し勉むれば、日々に安樂に至ることを知らしむ。心を知りて行ふときは、自ら威儀正くなり、安を知る事なれば何をか疑はんや。

曰く、知る者の善なることは、聞え侍りき。然れば、少しにても聞きたる者は、彌進むべきことなるに、前方は汝の方へ進み來れども、今は少し緩める者有りと言ふことは如何。

答ふ、左樣なる人も有り。其人最初に思ふ樣は、今まで遊興を好む心も、利欲に耽る心も、柔弱も忽に止み、心淸淨にして、樂むべしと思ひし所に、忠孝と家業を精に入れ身を敬まざれば、安樂になられず、舊染の人欲出でて行ひ難し。行はざれば心を欺き、道心と人心と戰ふゆゑに中を苦む。後は善からんと思へども、當分が窮屈ゆゑに進まざる者あり。子曰困而不レ學民斯爲レ下矣とのたまふこれなり。

曰く、然らば知るといへども、悅び來らざる者は、益なきことに候や。

答ふ、其者當分には、不義は行ふまじきと思へども、修行の功なきゆゑに、人心と道心と雜て分れず。然れども一度道を聞きて、不義を惡むことを知れば、此程の益なり。不義を嫌ふは

曰く、道は樂むべきことなるを、くるしむことを學ぶとは如何なることぞ。

答ふ、譬ば此に相駕籠舁く二人の者あらん。一人は力強く、一人は力弱し。強は苦しまず、弱は苦しむ。苦しめども駕籠を舁くゆゑ飢ることを免る。駕籠に出でざれば、乞食と成りて路道に立つなり。道を行ふこともかくのごとし。我ら如きは、力弱き駕籠舁に同じ、苦みながらも行ふ故に、不義に陷いらず。是を以て心安し。又心を知らざる者は、常に苦有りて、言葉の上に見る。然れ共その恥を知らざるゆゑに、學ぶ志立たざるなり。

曰く、汝の云へる行と言ふは、禮儀三千三百を習ひ、威儀を正くすることに候や。左樣のことなれば、我ら如き農人などの行ふ事は叶はざる所なり。彼學者の言ふごとく、不學者の及ぶべきことにあらずと言へるも理なり。

答ふ、否、左にはあらず。汝の言へるは、孔子子張を謂つて、師は辟也とのたまふ所なり。辟とのたまふは、威儀に習ひて實少きを言ふ。行の事を汝が聞き易き所にて語ん。行と言ふは、農人ならば、朝は未明より農にいでて、夕には星を見て家に入り、我身を勞して人を使ひ、春は耕し、夏は芸り、秋は藏むるに至るまで、田畠より五穀一粒なりともおほく作りいだすことを忘れず、御年貢に不足なき樣にと思ひ、其餘にて父母の衣食を足し、安樂に養ひ、諸

る所にあらず、修行のする所なり。

曰く、其子細なしと會得せるときは、如何なることぞ。

答ふ、此會得せしことは言ひがたし。然れども譬を以つて其趣を語らん。或は證文、印判抔の類入用の時、器を視れ共見えず、又外を尋ぬれども見えず、今日も尋ね明日も尋ね、又餘日も尋ぬれども見えず、見えぬに附き疑おこり、取れはせぬか、證文などは、反古にまぎれて遣ひはせぬか、落しはせぬかと、種々に疑おこるものなり。餘り見えねば、最早是非なしとおもひ、他の用事あつて取まぎれ居るとき、忽然と思出すことあり。おもひ出すはこれも文學の及ばざる所なり。其時にこそ、前に盗まれやせん、落しやせんと思ひし疑も、忽に晴る、なり。心を知るも其如く、闇夜の忽に明け、一天照然として明なるが如し。

曰く、然らば心を知るときは、直に賢人にて候や。

答ふ、否、身に行はざれば賢人にあらず。知る心は一なれども、力と功とは違あり。聖賢は力強くして功あり。中庸に所謂、安じて行ふは聖人なり、利して行ふは賢人なりと言ふこれなり。我等如きは力弱くして功なし、或は勉強して行ふ是なり。然れども心を知る故に、行はれざることを困しむ。困しむといへども行ひおほせ、功をなすに及びては一なり。

れども我が言ふこと、先方へ聞えざるゆゑに、斯く申さるゝと心得て、幾度も論議に及ぶといへども、肯ふ氣色見えず、我益がてんゆかず。或時彼人の言ふ、汝何の爲に學問致し候や。答て言ふ、五倫五常の道を以て、我より以下の人に、教へんことを志すと言ふ。彼人の言ふ、道は道心と言ふて心なり、子曰溫故而知新可以爲師矣。故とは師より聞く所、新とは我發明する所なり、發明して後は、學ぶ所我に在りて、人に應ずること窮なし、此を以つて師と成すべし、然るを汝心を知らざれば、自迷ひ居て、且他も迷せ度候や、心は一身の主なり、身の主を知らざれば、風來者にて宿なし同前なり、我宿なくして、他を救はんと言ふは、覺束なしと言へり。我見識を言はんとすれ共、卵を以て大石に當るが如し、言句吐くことあたはず。此に於て茫然として疑を生ず。實に得たる事は疑なき者なり。然るに疑の發るは、いまだ得ざると決定し、夫より他事心にいらず、明暮如何々々と心を盡し身も勞れ、日を過すこと一年半許なり。折節愚母病氣に附き、二十日餘看病せしに、其座を立出でけるが、其時忽然として疑晴れ、煙を風の散すよりも早し。堯舜の道は孝弟而已、魚は水を泳り、鳥は空を飛ぶ、詩に言く、鳶飛戻天魚躍于淵と云へり。道は上下に察なり、何をか疑はん。人は孝悌忠信、此外子細なきことを會得して、二十年來の疑を解く、これ文字のす

能すれば、一字不學といふ共、是を實の學者と言ふ。且文學ある者は文質彬々の君子とは言ふべけれど、常體の者の至るべき事にあらず。如何となれば、家業忙しく記臆薄き者多ければなり。子曰、行有餘力則以學文。聖人の學問は行を本として、文學は枝葉なる事を知るべきことなり。

曰く、汝の言へるごとくなれば、文學は末なること明なれども、彼儒者二言にて、身の修るべき事ありやと問へば、汝が如き四書の素讀もせざる者に、聖人の道何を言ひ聞かせんや、俗に聾に囁くと言ふ如し、耳に入る事なかるべしと言はれたり。又世間の人も斯く思へり。然れば汝の言へる所は誤なり。文學なくては知るべき事にはあらず。何程に言れても、疑なき事あたはず。又汝は何方にて學び、世間の學者に替たる教を弘むるぞや。

答ふ、替たる教にあらず。汝不審の所を語るべし。我何方を師家とも定めず、一年或は半季聞き巡るといへども、我初心と愚昧の病より、此ぞと心定らず、心に合へる所もなく、年月これを歎きしに、或所に隱遁の學者あり。此人に出會ひ物語の上、心の沙汰に及し所、一言の上にて、先には早速聞取りて、汝は心を知れりと思らめど、いまだ知らず、學びし所雲泥の違あり。心を知らずして聖人の書を見るならば、毫釐の差千里の謬と成るべしと言へり。然

毎日々々講釋し、家業の忙しき者を寄聚め、隙を費さしむるは如何なる事ぞや。且汝は故を見て知ると言ふ。彼禪僧十五年の間、心を盡しても、性を知り得ること難しと言ふ。然るを汝不學の身として、知ること安しと言ふ。彼此以て疑多し。此訣は如何。

答ふ、汝物語の僧は、未徹の僧なれば言ふに足らず、定て妙を見ることありと思ふならん。釋尊は曉の明星を見て大悟し給ひ、唐土の靈雲は桃花を見て悟られしにあらずや。悟りて後は星を月と見るべきや、又悟らざる前には桃を櫻と見るべきや。如何ぞ、活潑端的の所を知らざる。信心不及の所より、無益のことに十五年の間精神を費すは惜哉。又汝我を不學と言へるは、文字に疎と言ふことか。

曰く、然り。

答ふ、唐土の六祖は、一字を學ばすとかや承る。然れども達磨より六代の祖となり、禪を今日まで繼來るは、六祖の力に有りとかや。然れども是は禪宗のことなり。又我儒にて言はゞ、子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。聖人の道は心よりなす。文字を知らずしても、親の孝も成り、君の忠も成り、友の交も成り、文字無世なれ共伏羲神農は聖人なり、只心を盡して五倫の道を

下言」性故而已、故以」利爲」本。其性と言ふは、人より禽獸草木迄、天に受得て以て生ずる理なり。松は緑に櫻は花、羽ある物は空を飛び、鱗ある物は水を泳り、日月の天に懸るも皆一理なり。去年の四季の行るゝを見て今年を知り、昨日の事を見て今日を知る。是卽所謂故を見て天下の性を知ると言ふ所なり。性を知る時は、五常五倫の道は其中に備れり。中庸に所謂、天命之謂」性、率」性之謂」道。性を知らずして、性に率ふことは得らるべきにあらず。性を知るは學問の綱領なり。我怪しき事を語るにあらず。堯舜萬世の法となり給ふも、是率」性而已。故に心を知るを學問の初と言ふ。然るを心性の沙汰を除き、外に至極の學問有ることを知らず。萬事は皆心よりなす。心は身の主なり、主なき身とならば、山野に捨る死人に同じ。其主を知する教なるを、異端と言ふは如何なることぞや。

曰く、彼學者の言へる而已にあらず、其座に禪僧居られけるが、此僧の云へるは、拙僧も自性を見たしと思ひ、十五年程坐禪致すといへども、今に此ぞと見性せず、見性すれば、飛揚るほど嬉しきこと有りと聞く、然るに心易知らるゝと言へば、紛者に違はなしといへり。且汝の言へる如くなれば、知り易きことなり。我等如きは、心のつかぬことなれども、心を附けて見るならば、春は花さき秋は實り、冬は藏り、人は人の道を行ひ、夫にて知れたることを

云ふは、古の聖人賢人のことにて、後世の人及ぶべき所に非ずといへり。我此を聞くより思へば、人を惑す事は、山賊强盗を爲すよりは、其罪は甚からん、餘笑止に思はれかくのごとく言ふなり。汝故鄕へ歸居らるゝ共、只口を養ふ事は、心易き事なり。口一つ養はんとて、人を迷すは哀しきことなり。如何心得られ候や。

答ふ、厚き志過分の至なり。まづ今日教をなす志をかたらん。孟子曰、人之有道也、飽食煖衣、逸居而無レ教、則近ニ於禽獸一、聖人有レ憂レ之、使ニ契爲一司徒、教以ニ人倫一、父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信。此五の者を能するを學問の功とす。これにて古人の學と言ふ者を知るべし。論語學而の篇にも、大抵皆本を務ることを多せり。人倫の大原は天に出て、仁義禮智の良心よりなす。孟子又曰、學問之道無レ他、求ニ其放心一而已矣。此心を知つて後に、聖人の行を見て法を取るべし。君の道を盡し給ふは堯にあり、孝の道を盡し給ふは舜にあり、臣の道を盡し給ふは周公にあり、學問の道を盡し給ふは大聖孔子なり。此皆孟子の所謂性のまゝにして、上下天地と流を同うす。聖人は人倫の至なり。かくの如き君子大德の行跡を見、此を法として、五倫の道を教へ、天の命ぜる職分を知せ、力行ふ時は、身修りて家齊ひ、國治りて天下平なり。孟子曰く、遵ニ先王之法一而過者未ニ之有一、又曰、天

都鄙問答

卷之一

○都鄙問答の段

大哉乾元萬物資始、乃統レ天、雲行雨施、品物流レ形、乾道變化、各正ニ性命一也。天の與る樂は實面白きありさま哉。何を以てかこれに加へん。

或時故鄕の者來りて曰く、頃日出京致し、親類ども方に罷在候ところ、或學者參られ物語の上、汝の噂出申候。夫に附、尋度子細ありて來れり。是迄在所にての噂には、小學などを講ぜられ、少々宛は門人も聚めらるゝと聞き、陰ながらも喜しく思ひ侍りし所、彼學者申れけるは、彼は異端の流にて儒者にては無しと言り。依て其異端と言ふは、如何なる義ぞと問ひければ、異端と言ふは聖人の道に非ず、其者が別に私意を以て教を立て、世上の愚なる者を誣くらませて、性を知るの心を知るのと、向上の論義を爲し、人を惑す事なり、性を知ると

松翁道話終

ふ。又御歌に、

うけ繼し國の主の甲斐もなく惠まぬ民に惠まるゝ身は

此御慈悲が一國の百姓の腹の中へ、扨々有がたいと、佛樣が一體づつ往き生れてござる。其年餘國は不作であつたれど、御國は豐作であつたと、其國の御方の物語で有つた。此樣なありがたい殿樣でも、不足いひ附たものは矢張小言いふ。其樣な衆ばつかりがより合うて、イヤ何處が惡いの彼所が濟ぬと、善いことは悦ばずに、我が勝手の惡いことばつかり、言ひ幷べて小言いふ。是を安物買というて、善い物をみな潰の直に買ふのじや。我が本心の有がたいこと知らぬ故、精出して本心の靈明をほり出しては、我慢をねじ込み、本心を攫み出しては、我慢をねじこみ〲、安物斗取込んで、ハアスウ〲いうてゐる。中風病の樣なもので、生てゐるといふ斗で、天地の氣が通ぜぬ故、義理も法も知らぬ。身體が痺れて有る故覺えぬ。中京に中風病が火燵に寐て足の燒けたを知らずにゐて、翌日家内が大騷動で有つた。我體の燒けることも知らぬは、天地の氣が通ぜぬ故じや。どなたも本心を知り我身に立返ること御知りなさると、天地の有がたいことを知る。さうないと體の痺れて有るを知らずにゐる、恐しいものじや。御養生が大事でござります。

所の窓から、衣類も金も投込んで去んだといふことじや。天明三年卯の年が八十三歳であつたが、それから四五年もござつたことさうな。其時の歌に、

南無阿彌陀佛にかよふ出入の息のとまりは極樂がやど

能う寐た時も極樂が宿、思案分別の盡きた所も極樂に往生してゐる。往生とは往き生るゝといふこと、卽今の一念の向け樣が大事じや。念々往生我なす通に往き生るゝゆゑ、業往生ともいふ。「京へ往てこう」と、往かぬ内から京へ往生してゐる。「湯を沸かせと」いふ。「水を焚いて湯に沸せ」とはいはぬ。湯の沸かぬ内から湯になつてある。「飯を焚け」といふ。「米を焚いて飯にせよ」とはいはぬ。飯を焚いたら焦になるか、粥になるかするけれど、矢張飯焚けと一念で往生して居る。明日はどこへ往かにやならぬと、明日のことを今夜からちやんと往き生れてゐる。此一念で行きとゞく樣にして有る。奢の一念が直に乞食に往生してゐる。欲しいと思ふ、直に盜人に往生してゐる。

悪いと思ふと、咽笛に喰附いてゐる。さうは思はぬけれど、恐いものじや、腹の中の親殺、腹の中の主殺、腹の中の間夫、腹のなかの盜賊、皆一念で往生してゐる。さる寅の年或國の大守樣、「御百姓と呼ぶべし」と御家中へ仰附があつた。世をたつとんでござるのじや。是を世尊とい

小鳥を飼ふ人などは、其鳥への孝行、外へ行きしなにも、留守の間の食物萬端妻子にいひ附け、又は家來にも呉々頼み、「猫鼬に氣を附けてくれよ」と頼み行く。扨もどれば直樣鳥籠の內を見て、御變もないかといはぬばかり。能うゆきとゞいたものじや。其位氣を附けたら、餘程親御さま方が、御悅び被成さうなのもじや。

美濃の國竹ケ鼻村佛佐吉、燒餅を小うして賣つてござる。心安い人が、「何と佐吉樣、此米の安價にもつと大うして賣らぬか」といへば、「大うすると人の邪魔になる」というてござる。又綿を賣に行くに、人より一時宛遲う賣に行くに、人が待つてゐて買う樣にする。夫から綿賣止めて仕まうた。此衆達は、我身を忘れて人が助けたいばつかり。晝休に纔製へて、田の中の蛙をすくうて、池へ放して遣るといふ人じや。何でも人の難儀するを氣の毒に思ひ、所々へ石橋を架け、百姓の行通の難所の道を作り、今年迄八十八ケ所石橋かけた御人じや。法華經に、不自惜身命と云ふ。伯母御の病氣を見舞に行くに、少々金を持つて、夜深に出さしやつたれば、川原で追剝が著類を剝いだれば、丸裸になつて行過しが、肌に附けたる金は追剝が知らなんだれば、立歸りて、「是々まだ此金を忘れてゐた」と、追剝に與へ丸裸に成つて、伯母御の所へ行き、「扨々さつぱりと借錢なしして來た」と悅んでござつた。其後一兩日して、伯母御の

所の庄屋役なれど、片鬢で勤めてござつた。前栽の作松其外樹木見事に作つて有るを、母御樣が鎌で滅多にうち切つて佛前へ上らるゝ。近所の人が見て、「この庭の樹木を伐るは可惜ことじや」といへば、「母樣が、人の惜むものを、如來樣へ上て下さるが御馳走じや」といふてござる。是で母御樣の御了簡推慮してごらうじませ。此母御樣が阿彌陀如來で、人の惜む執著を切つて佛へあげらるゝのじや。内の奉公人に母御樣へ毎日々々挨拶すること、畑へ仕事に行きしなに挨拶すること、戻つても挨拶すること、此挨拶の賃錢日に二百文づつ、田畑で蛙蛇其外蟲螻殺さぬ賃二百文づつ。此外十四才より六十五迄、毎年正月元日に書初の寫、御望の方は御覽なされませ。治左衞門樣常々「人の非の見えるは我に非が有る故、同商賣故友達になり、我に不義のない人は、人の非は見えぬもの」と。凧のぼすに大勢寄合ひ、皆上づりになつて、風がちつと出て來たせんべいをやれ、傾く樣な、糸を引け、返りさうな、糸をやれ」と、總々が凧になりきつてゐる。是で親御の遠方へござつたときも、家内から凧のぼす氣になつて、「雨が降りさうな、傘遣れ、夫迎にやれ、歸りさうな、駕やれ、風呂はよいか」と同じ世話のやき樣で、親御の安心なされさうなものじや。凧のぼりでも、をしへにならぬといふ事はない。氣をつけてみれば一切のをしへじや。

手がからになることじや。越前の治左衛門様六十餘、母御様が九十四、御年の上で老耄してござる、其母御様に仕へてござるのじや。内の奉公人を究める時相對してござる。「母が同じ事何遍言はしやつても、始めて聞いた様にしてたもれ。又母が何ごと仰せられても顔つき悪うせぬ様にしてたも。」其賃三百文づつ毎月いひ渡して頼んでござる。ある時治左衛門様が風呂へ入らうと思うて片足入られた所を、母御が、「治左衛門風引いて居やるじやないか。止めにしや」と言はしやると、「ハイ〳〵」と其儘著物きて外のことをしてござる。或時母御が、「治左衛門こなたは子供等に、著物して著せずに、己にばつかり著物して著しやる。いかい太郎作であるはい。」治左衛門様が、「母様が色々の名を御附け下さります。ありがたう存じます」というてござる。六十四になつて母様々々いうてあまえてござる。餘所へ行きしなに、「御母様乳戴かして下さりませ」と、母御の側へ手をつかしやると、母御が乳を出して、「それ」と治左衛門様の頭を撫でらるゝと、「ありがたうござります。」他所から戻つてもまた其通じや。何と六十の餘になつて出來る仕事かな。世間の外聞が悪いの善いの處では出來ぬ。治左衛門様病氣の時、母御の膝を枕にして寐入てござつたれば、母御が鋏で慰に片鬢剪んで仕まはしやつた。治左衛門様目をあき頭撫て見て、「此間は心悪かつた。是で瀟洒と心ようござりますと」いうてござる。其

と歌ふ。片田舍の狀の居き惡い所ほど人が正直な。物事自由の出來る在所は人が銳い。

　豆腐よしもう此處らからすゞどかろ

といふ句の下に、

　髮は皆下手誠ある里

藁で髮ゆうてゐる在所は眞實が厚い。

　其知可ㇾ及。其愚不ㇾ可ㇾ及。

此在所で阿房は誰じや。大和の喜助樣の、平三郞樣の、あるひは西の岡の儀兵衞樣の、越前の治左衞門樣の、美濃の佐吉樣のといふ御方々じや、何歲になつても親のする通にしてござる。喜助樣が風呂屋へ親御を負うて行て洗うてあげてござるを、近所の人が「能う御奇特に其樣になさります」といへば、「ハイ我が子抱いて芝居見せに行くから見ては、仕よい事でござります」というてござる。成程夫から見ては、祭に我子に、赤い頭巾著せて肩車に乘せ、「よい〳〵さつ〳〵。」餘程仕惡い務じや。野崎まゐりや權現祭に、美しい衆達や、太鼓持など雇うて船に乘せ、知りもせぬ人に踊つたり舞うたりして見せるは、錢銀入れて大儀な仕事じや、御手柄じや、皆御手がからになる。御身上相應三百目なり五百目なり乃至一貫目二貫目でも、夫程御

物に堂の色は書いてない、どうも仕樣がないけれども、偵が旦那じや、「あれは堂色と言ふもの
じやわい。」小女郎は何にも知らぬ、「へエ」と言うてしまうた。旦那も言ふは言うたが腹の中が
合點せぬわい。何でも正眞に見たのでなければ役に立たぬ、生きた書物でなければ間に合はぬ。
目の廻うた時、經文の中の水といふ字を、口の中へ捩込んでも役に立たぬ、眞正の水でなけれ
ば助からぬ。書物の火といふ字を暗へ並べても明うはない、眞正の火でなければ助からぬ。此樣
にいふと學問も書物も役に立たぬ樣なれど、さうではない、書物は本心知つた上の證文じやと
いふこと合點したがよい。其通に違はないといふことじや。

道元和尚の歌に

　行ふも止も思ふも忘るゝも工のなすは絶間なりけり

是で智恵才覺の間に合はぬこと合點したがよい。在鄕に稻を扱くに、金扱が出來てから、米が
すくないといふことじや。六七十年已前までは、手に管を持つて稻を扱いたといふ事じや。其
時分には一反に三四石も米が有つた。夫から段々人が利功になり、才覺してその金扱といふも
の製へ、今では二石米が出來兼るといふことじや。在所歌に、

　利功達するひと〲よりも阿房が身を持ち世を過す

學問といふは、此本心の明德を明め知るの道理を書いた書物、一切經も其通、いはゞ本心の所書じや。其所書ばつかり讀んで、其所へは行きもせずに、子曰々々いうてゐるを學問と思うてゐる。さるに依て、讀んだり覺えたり、知つたりしたものが、腹の中で物知になつて居るゆゑ、夫が差支へて知れ惡い。慈鎭和尙の歌に、

聞分くる心の內のまことこそ敎に依らぬ悟なりけり

本心會得した上で、我明めた所に間違はないかと、聖人の書物、一切の經々に照してみる、慥な證文じや。其時は學問も智惠才覺も皆生きて働く。じやによつて本心知らぬ中は、學問の智惠才覺も邪魔になるといふは爰のことじや。本心を知るのは本來の白地にするの故、たんと下染のしてあるものは落惡い。在所の這出の小女郎が伊勢參して戾り、大佛樣の話してゐる。旦那殿が側から、「大佛の柱の穴を潛つたか。三十三間堂には三萬三千三百三十の佛樣が有る筈じや。それに大佛の堂の高さが何十何間ある」と、書物見ていうてござる。小女郎が、「旦那樣は京知らぬというてござるが、能う知つてござる。」旦那殿が「往つて見いでも知れた事じや。歌人は居ながら名所を知る、何んでも學問せにや役に立たぬ」と、鼻高うしていうてござる。小女郎が「申し旦那樣、大佛樣の堂の色は何色と言ふ物でござりますえ。」サア旦那が行詰つた。書

おれが手斗では大根一本も作る事ならぬ。此外大工職人商人皆同じ事じや。親芋が有る故、子芋孫芋彦芋迄段々殖るばつかり、痩疲て正味の味は皆子芋に讓り、わが身は乾物になつて世話燒いた故、子芋を世間で悅ぶやうになつた、それを子芋が己が智惠じや、おれが味じや、己が持つて生れた智惠じやと思うてゐる。持つて生れた智惠なら、どこから持つて生れたぞ。子芋が如何さまなうと、手を組んで思案し「まづ糞でもなし、蔓でもなし、又根でもなし、土でもなし、母親斗で出來よう筈もない。ハヽア雨露の惠か、扨は此目に見えぬ天の御世話じやな。」イヤイヤ其樣な小難しい學問はいらぬ。其智惠分別を離れて見たがよい。たとへば大海へ突はめられて、漸々板一枚に取り附いた時はどんなものじやぞ。唯何卒助らん〳〵と思ふばつかり、其時に雨露の惠も、天の御世話も、何をいふも金の事も、己が〳〵も、病けもぬけ果てて、どうぞ助らんと思ふ斗、其時大きな纜でそつと掬上げ、船の中へ乘せたらば、ヤレ嬉しやばつかりで、助らん〳〵と思うたものはない。夫を又浪の中へ突はめると、ヤレ哀しや、又助らん〳〵になつてゐる、其時にヤレ嬉しやと思うたものはない。浪の中ではヤレ哀しや、船の中ではヤレ嬉しや。浪と船とで哀しやうれしや。サア此浪の哀しや船の嬉しやは、どうして出來たものじやぞ。考て御覽じませ。本心を知るも此道理なもので、智惠才覺はいらぬ。又學問もいらぬ。

松翁道話五編　卷之下

駕舁も乘人もおなじ旅なれば一足づつに先は近づく
世わたりは狂言綺語とおなじこと上々も役下々も役

女中方の機織道具も、せはしう働く緯の筬のといふ役人もあり、緩々暮らす千切の、中つりの、亥の爪のといふ衆もあり、又一向動かぬ、兩方の機框の、腰掛のといふ衆は、初から仕まひまで一向働はない。けれども、此衆は動かぬが役前で、此衆がないと、緯の、筬の、まねぎの、かざりのと云ふ衆の働が出來ぬ。それを筬や緯斗が、おれが〳〵では織られぬ。女中方の著物縫ふに、絹針も絎針もなければならぬ。其外糸も、はさみも、かけ針も、それ〴〵の手傳人がないと出來ぬ。おれが〳〵指ばかりで著物の出來るものではない。神道では八百萬の神達といひ、佛道では三世の諸佛の、儀式の、說法のといふ。一さいの諸道具は三世道達の諸佛菩薩じや、麁末にすると罰が當るぞ。

百姓衆の田畑を作るも、鋤の鍬のと、其外色々樣々の、農方の道具がなければならぬ。おれが

煙草盆出すと、「私は能う給べませぬ、其代端の衆に飲んで貰ひます。」「私は金持つことが嫌でござり升故、外の人に持つて貰ひます。」「私は奢が嫌ゆゑ、外の衆に奢つて貰ひます。」どうでも、奢は錢銀の減る方でござります故止に致しませう、皆眞實の御勤めじや。

此體は人ばかりは逆樣にならなんだ。腹の中が内へ戻つて能う考へて見れば、女房子を戴いてゐる。女親を家來の樣にして、親達が麁末になり、どうも逆樣にはならぬけれど、天地の道具じやに依て、何もかも逆樣であつたけれど、能う御出と、ましたか、逆樣じや。女房呼んでから娘が母親を供に連れ房の一家が出來て、家附の親類が古臭うなり。息子が親の頭の上へ上り、て歩く。妾が出來ると商賣に無理する樣になる。「すつきり逆樣に、してやるぞ、節季の行かぬ樣に、してやるぞ、跡の立たぬ樣に、先祖も逆樣、家も逆樣、身上も逆樣にして震うてゐる。遂に遂身體せり上、せりおろし、入代り〱町内追附入代り、皆跡札買うて待つてござる。跡は無間の業々永代常芝居。㧞樂屋へ這入て見ては、埒もないものじや。右大將賴朝といふ樣な人が、肩ぬいで博奕打つて居やしやる。薄雪姫と言樣な美しい女中が、蛸の足かぶつて酒飲んでゐる。酒田の金時といふ樣な勇者が、按摩取つて貰うてゐる。蟲も踏殺さぬような親父樣が、高歩の利勘定して居やしやる。大織冠鎌足といふ樣な人が、現銀店で鼈汁を喰うてゐる。阿房の盆太が、富士や吾妻といふ樣な女郞と、さいつ押へつ酒飲んでゐる。樂屋では我が出來る故たはいもないものじや。人の身上も樂屋から見れば皆張ぼてじや。拍子木がなると直に世界の常舞臺、眞實の狂言じや。酒飲まぬ人に盃出すと、「イヤ私は不調法にござります。」煙草飲まぬ人に

內では、敷鴨居がはじまり、戸障子は息子殿や娘子、或は家來衆じや。其衆が片意地いうて開閉の工合が惡るいと、戸障子の方で削るか打添せにやならぬ。敷鴨居は天地則兩親、疵附ける事ならぬ。敷居鴨居も其心で隨分と歪まぬ樣にして遣らにやならぬ。敷鴨居に狂が來ると、大體大造なものじやない。家を建直さにやならぬ。

主人は敷鴨居、家來は戸障子、戸障子のぐわたつきは下で濟むけれど、敷鴨居のくるひは世間でぐわたくする。

御地頭の敷鴨居に狂が來ると、御下の戸障子が、大體ぐわたつき出すことじやない。娘を他所へ片づけるも、この戸障子になることを、能う呑こまして遣らにやならぬ。戸障子が敷鴨居の差圖する樣になると、家内がぐわたつく。其外聟取嫁取年忌法事、後で疵痛せぬ樣に、兩方に心得て居にやならぬ。此前葬禮に氣を張て身上潰した人がある。五十日經ぬ内に世間へ分散、後は一家中へ引取になつて仕まうた。是等は敷鴨居が上下になつたのじや。

芝居の顏見世に、逆さまやといふ狂言して見せた。あの衆は氣を附けて、甚い所をして見せたものじや。其道具立が天井を疊でして、座る所が屋根裏の檜皮ぶき、戸障子も襖も逆樣にして、著物も裏を著て、表を裏にして言葉も後前にいうて、仕て遣るぞ、堪忍を喰ふぞ、飯をなされ

は私がわりました、お杉殿じやござりませぬ。」男衆が出て、「重箱の緣は私が缺きました。」また腰元衆が出て、「此間旦那樣の御小袖の油は、私がかけました」と、皆銘々白狀して出る。家内中がお杉殿の善に化せられ、我が咎を我手に言うて出るやうになつた。此お杉殿が其内に八年勸めて、御家樣の病氣のときの介抱、晝夜暫も側を離れず、殘る所もなき勤方じや。御家樣の遺言で其飯焚のおすぎどのが、其家の御家樣にならしやつた。夫からそこの内が能う治り、此お杉殿の善に化せられ、一家中が睦じうなつて、今に其人がゐらるゝといふことじや。是等が眞實を勸める根強い奉公人といふものじや。皆我が心の通を天地へ手向山、朝から晩まで神のまに〳〵。女中方の縫物なさるに、針が歪むと縫目が歪む、針が大股に行くと、縫目も大股に行く。心に從ふ針なれば、針に從ふ糸が此通、なんと手利であらうがなと說法してゐる。心の通を、世界へ手向る。旦那殿が歪むと家内も歪む。しやべるに及ばず、自慢に及ばず、吾ものいふ事ながらよく欲す、ものいふに及ばぬ。京都壬生の大念佛、無言の狂言、互にものはいはぬけれど、大名も太郎冠者も、男は男、女は女、盜人は盜人、阿房は阿房、欲深は欲深と能う分かつてある、言ひ譯するには及ばぬ。著物疊むに、襟先持て疊めばツイ疊まれる。夫を裾や褄先引張つて疊もとする故、家内が皺くたになる。皆それ〳〵の役々でなければ勤らぬ。家内の

言うてゐる。
　瓢簞で鯰押へる噓のかは押へて聞けば兎角ぬらくら
正味の所に味がない。ぬらくら仕まひで猿の人眞似、噓の塊で皆眞實の勤らぬのじや。
京都のある絹屋に、家内大勢暮す内、半季居の飯焚のお杉どのというて、此眞實を勤めた人がある。家内中の不調法を自身一人して引うけてゐた人じや。「南京の鉢がわれてある、是は誰がわつたぞ。」お杉殿が出て、「ハイ此間私が不調法でわりました、御免されて下さりませ。」其後また重箱の緣が缺けてある。お杉殿が出て、「夫は私が缺きました。」又旦那殿の衣服に油が被つてある、「たれが此樣なことした。」お杉殿が出て、「私が麁相でござります、御了簡なされて下さりませ。」旦那殿が御家樣に「扨々此度の杉は甚い麁相ものじや。能ういひ附さつしやれ」と、旦那どの不機嫌な。ある時床の間の壁に疵が附いて有る。旦那どの大きに立腹して、誰かれと吟味すれど仕人がない。時にお杉殿罷出て、「私が不調法で疵を附けました、御免されて下さりませ。」旦那おほぎに腹立て、「其方は來てから間もないが、度々の不調法、麁相といふも程がある、此方には得使はぬ程に、勝手次第宿へ引け」といひ附らるゝうちに、七つ許の坊樣が出て、「床の壁は私が先度疵附けました、杉じやござりませぬ。」そうすると丁稚殿が出て、「先日の南京の鉢

らの樣なものを卷きて、粟の黍の稗のといふ類を盜みに來る。精出して折つては腰の繩に挿みをき、さても何の伏目行くのじや。山猿が腰に繩切や、藤かづ

（以下本文）

難となり、終には子孫斷絶跡形もなく、皆山伏殿の同行衆じや。山猿が腰に繩切や、藤かづらの樣なものを卷きて、粟の黍の稗のといふ類を盜みに來る。精出して折つては腰の繩に挿みして、歸らんとするけれど動かれぬ。なぜなれば折りは折つたけれど、折つたばかりで離れずにある、皆根が附いて有る故、動かれんのじや。所を人が見附けて棒で、叩き殺して仕まふ。是じやに依つて人の合點せぬものは、天の合點せぬのじや。皆根が附いて有る故、後で難儀する。猿智恵と言うて、たゞ物を欲しがる斗、物覺がない故、恥知らぬ、人間に毛が三筋足らぬ、慈悲と知惠と正直の三つがない。人と談話してゐるかと思へば、足で物を盜み、後に隱して逃げて行く。跡から能う見えて有るけれど、借錢して好い形したがるも、後から能う見えてあるを知らぬ。恥の搔き通しで、それで顏が赤い。鼻の先斗の利欲に迷うて、皆跡から難儀の廻るを知らぬ。

道ならぬ物を欲しがる山猿の心からとや淵に沈まん

縱令我存分に勝利を得たりとて、人の合點せぬ物集めて樂とす。

水の月望む心は猿猴のひだり延ぶれば右はみじかし

我すいた方へ手が延びる、博奕、米市、遊所、山事、片一方で難儀さしては、片一方で贅八百

る物じや。何ぼ小人の子でも、善い事を仕込さへすりや、聖人君子に何にも變つたことはない。善人にしてさへ置いたら、何れ程困窮に遇うても滅多に狼狽へず、本道の道筋へ切拔けて出るものじや。すりや、煙の絶える樣なことはせぬ。

一家親類の中に善人が一人あると、大きなたよりじや。大體世界のつよみじやない。直に天道へ御奉公じや。縱令百貫目二百貫目延して遣つたとて、道のない人といふものは、常に人並の樣なれど。まさか困窮するか、行き詰つたとき、どの樣なこと仕出さうも知れぬ。道がないと暗闇じやによつて、人の損じることも構やせぬ、とつけもない了簡を出すものじや。すりや道を教へて遣らぬは、親の大きな無慈悲、子孫斷絶の基を仕込んでゐると言ふものじや。

昔天竺に山伏が有つた。人星の術を學んで、急に我が奇特を世上に顯さんと思ひ、「我が子の命數七日限」と言ひ觸した。けれども諸人合點せぬ。其後七日過ぎて我子を締殺し、相果しと云うて葬る。夫から諸人大きに驚き、「誠に奇代の修驗者なり」と、世擧つて大きに賞美したと言ふ事じやが、我が子を殺しても、我が名を顯したいとは、餘程愚癡の固じや。けれども銘々どもの樣なものは、今日の鼻の先の名利名聞に耽り、世界のものに我が名前が附けたい。夫故急に金が欲しうなり利欲に迷ひ、人の合點せぬものまで集めて我が物にする故、子孫の憂ひ災

て、役に立たぬことを止めにするのじや。のら〳〵すると精出すとは、どちらが利詰が善いぞ。又淨瑠璃と謠とはどうじや、物讀すると學文とはどうぞ、本心知るは何の道理じや、孝行と不孝とは何方が善いぞと吟味して、物喰ふ代に、爲に善いこと仕ならふがよい。

或人が金鷄鳥を能く育つると言ふ話に、金鷄は子を孵すことを知らぬ、玉子を産捨じや。其玉子を鷄のしやうこくに溫めさす、生餌を一貫目程あてがうて置くと、戸屋を出ずして玉子を溫め、孵らすと言ふことじや。是に似寄つたことがある。去所に乳母を究めさつしやるに、給銀の外別に三十目宛心附して、「子を連れて滅多に遊に出ることならぬ。其代善い人の所へは隨分やる。人立の所や、賑やかな所へは行かぬ樣にして、また買食などは決してならぬ。この買食に癖附と、後には家藏賣つて買食するものじや。又甘い物食はすことならぬ。甘い物たんと喰た子は、今度苦口言うて人に憎まるゝ程に、氣を附けてたも」と、給銀の外に生餌を分與うてあたゝめさすのじや。扨七つ八つばかりになると、支配人か番頭の善い人を見立て、その人に引廻して貰ふ。是にも別に生餌分與うて、商賣のすじを仕込んで貰ふ。其位にして育つると、滅多なことは出來ぬものじや。

鼠でも仕込ば水汲んだり、通衢へて酒取りに行く。是等は萬更な事と思へど、仕込ばみん事勤め

の食足らで、末來のものまで食盡すゆゑ、末で食物が足らぬ、饑じいものでござります。「何卒御報謝戴かして下さりませ。」この樣な衆を作出す在所とて別にない、みな景物を取越した衆じや。此樣なことにならうかと、佛壇から泣いてござるに、勿體ない事じやぞえ。

追善に伽羅を焚くより竈の下けむりたやすな煙たやすな

此竈の下の煙絶さぬ樣にはどうするがよいぞ。兎角我子を善人にするのじや。我子が善人にならぬと家が潰れる。桐の木は曲節の多いものなれど、竹藪の中に植れば、周圍の竹にそゝなかされて、眞直に成人する。是を乘物の棒にする。友達を吟味せにやならぬ。鶯の附親に、金三兩の五兩のと出して預けるけれど、寺屋の御師匠樣が、ちつと叱らしやるとすねて行かぬ。「何としたのじや。」「御師匠樣に叱られた。」「行くな〳〵、錢出して預けて置くのに、小澤山さうにしやる、行くな〳〵。」ソコデ御師匠樣が詫言にござる。此位の相場に成つては、獄道が殖える筈じや。

中仕の子に米を持ならはすに、始は一升か二升かを俵にして、持遊にさして置くと、精出して肩上まはる。どうやらかうやら持歩くやうになると、それから四升六升八升一斗二斗と、段々子供の中から持ならはすと、とう〳〵三斗五斗と持つ樣に通力を得る。役に立こと仕ならはし

ものゆゑ中らにやならぬ。なんでも一切ものの安い時が味い天上、天地の御氣に叶うて有るゆゑ、中る氣遣氣がない。なんでも初物さへ食や、御祈禱にもなるやうに思うてゐる。世間に初物喰ふと七十五日生延びるといふことがある、一年四季の一候が七十二日じや。その氣の物を取越して食へば、いま死でも七十四日生延びたといふ心じや。ソリヤ生のびたのじやない、未來を内借したのじや。

ある物堅い侍の御話に、「手前どもは甚だ困窮にござる故、來年の物成の中を今年から借越して、年中景物喰うてゐます」というてござつた。是等は大抵御長命でござらにやならぬ。世間によい顏して借錢のある衆中は、五年も十年も取越して、初物喰うてゐるのじや。法事などにも、冬瓜の走り一つが三百五十、茄子ほど斗無い物引きむしつて、可愛さうに、皆赤子を喰ふのじや。小芋一升八百文、松茸の走り一貫五百、三百五十の冬瓜五つで足らぬ、十で三貫五百文、皆當られて節季に苦しむ、阿房なことじや。此節一番の冬瓜が八十じや。なんでも一ぺん頭打つて見にや目が覺ぬ。じやによつて、一文でも直の高いもの遣うて、人の膽潰したのが法事じやと思うてゐる。今日の佛は華美ずきで有つたなどと、佛になつて何の發出が要るもので。すつきり自慢と贅と景物比に、子孫の物までとり越して喰うて仕まふ。現在のも

と言ふ。大抵火の用心の悪いことじやない。其火焔の中に地獄、餓鬼、畜生を吹出す、恐いものじや。皆御腹の中の不掃除からじや。戰々兢々日々に新にせぬのじや。宗旨々々によつて彌陀を立つるも有り、釋迦を立つるも有るけれど、我を立つる宗旨は昔からない。天命之謂ㇾ性率ㇾ性之謂ㇾ道修ㇾ道之謂ㇾ教。此天命の性に率ふとは何ぞ。其樣なことは今どきは、末法萬年悪世の衆生じやによつて、全體及ばぬことと辭儀してゐる。此悪世の衆生とは誰がことじや。法華經に、彼見㆓久遠㆒猶㆓今日㆒。天地も昔の天地、日月も昔の日月、水火も昔の水火、春夏秋冬も昔の春夏秋冬に何にも變つた事はない。たゞ人々の分別ばかりが、末法悪世じやといふ事じや。その分別さへ取直してやれば我はない。我がなければ末法悪世はいらぬ。過去も未來も唯今ばかり、この唯今の一念で、天地と共に移り行く、その時々の心ばかりで、見ること聞く事やしなひ草、御腹の中の御養生、隨分毒なもの食はぬやう、竹の子の走り三本で五百五十、赤子の小指ほどなもの、時ならざるを食はず、茄子の走り十で一貫、すつきり當てられて、節季に御腹が痛む、八百屋と大喧嘩。その筈じや、まだ時節も來ぬものを、端から煽動られて、了簡違して出來たものを喰ふゆゑあたる。腹の中も了簡ちがひするのじや。温順しい息子でも多く端から煽動て、舞上らして仕まふやうなものじや。みな天地の季候を、人心で奪ひ取つた

弘法大師の歌に、

　此程は後世の勤もせざりけり阿吽の二字の有るに任せて

此阿吽のスウ〳〵から、高野山も吹出したものじや。奈良の大佛樣も、刀脇差も、錠前も、金棒も、手錠も、皆鞴のスウ〳〵から吹出したものじや。天地の阿吽、天地の有らん限のスウスウじや。阿字は外宮火の神、吽は內宮水の神樣、日々に三度づつ御神樂が上る。飯を焚くも汁を焚くも、外宮內宮和合なされて、腹の中へ御參宮拔參はならぬ法度じや。主人にも親にも相對なしは、神樣が御請なさらぬ。腹のなかが心わるい。茶を飲めど外宮斗で格別熱いと、內宮の水の神樣和合なされて、御腹の中を宮廻り。其外米を洗ふには、水の神さまが何遍も〳〵洗ひ清めて、火の神樣が焚上げて、八百萬の神達神樂を奏し、橫著ものの此腹の中へ、人身御供に上らせらるゝ。夫を何とも思はず、むざ〳〵食ひ過す故、鞴が損じて難儀する筈じや。二日醉で氣色の惡いは、皆罰の當つたのじや。去によつて口の出し入れが大事じや。病は口より入り、災は口より出る。善導大師は口から佛を一日に三體づつ吹出し給ふと言ふ事じや。空也上人は六體づつ佛を吹出し給ふといふ。皆我無しの南無阿彌陀佛じや。我のない言葉は柔軟にして和な、言葉に花ふらすといふ。凡夫の息は熱い、腹の立つ時火焔を吹出す、夫で火花を散らす

松翁道話五編　卷之中

節季に錢が足らぬといううて苦むは、平生の不心得じや。元來淸淨な心で一點の曇もない、所へ一錢借り二錢借り段々借が殖えて、節季にくるしむのじや。此苦をせまいと思へば、平生から心得て、現銀買にして暮せば、節季に何の苦もない。首縊るも身投げるも、獄門も磔も餘所から來るものじやない、皆我心から巧出したものじや。親は辛度いめして、世間の誹も構はず、どうぞ夥多にして息子に遣うとする。息子は厭がりて、餘所へ持つて行つて捨てうとする。入間川の狂言に、「さう思うても下りませねば、却つて迷惑にも存じませぬ。」何のことじややら譯けが知れぬ。けれども能う算用して見れば、矢張損德なしの年の暮じや。皆眞實の寶あることを知らぬ故、世界の物を欲しがりぞする。此スウ〳〵が合點が行かぬ。每年霜月八日鞴祭、稻荷大明神御託宣に、

千早ふるかみのやしろは我身にて出で入る息は外宮内宮
身は鞴出で入る息は風なれや打割りみれば風も火もなし

いたことが邪魔になると言うてはかなしみ、イヤ切るの續ぐのと言うて氣を揉んで、やう〳〵一番打仕まうて、勝つたと言うて嬉しく思ひ、敗けたと言うて悲しく思うたり、碁盤も碁石も片附けて、あげくに相手も去んで仕まうた跡で、たつた一人何にもない所で、さつきのときアノ石を斯うすれば善かつたに、アヽすれば善いのにと、首傾けたり頷いたり、たつた一人からだもがいてゐる。碁を打たぬ人は其苦もなければ、又樂もない。苦も又樂も、有り樣の所は役に立たぬものじや。

山が欲しい、海が欲しい、家が欲しい、釜が欲しい、衣類が欲しい、譽られたいと、明ても暮ても欲しい惜しいに惱み苦む。縱令望の海山、家藏金銀衣類諸道具手に入れたとて、水の月を掬ひ取って、我物と思うてゐると同じ事じや。此骸からして借物じや。指一本髮一筋も持つて行くことならぬ。たゞ此スウ〳〵息斗り、是も何時ぞは引つたくられて仕まふけれど、先今日では、此スウ〳〵より外に便はない。丁ど鞴吹く樣なもので、此スウ〳〵の出這入する間に、嬉しいの哀しいのと思うてゐる。虛空の鳴音斗が、「金儲けたヤレ嬉しや。此度は損したヤレ哀しや。」波のうつ樣なもので、どつと打つてはずつと引き〳〵、いつでも仕まひは、からつぽ虛空說法。伊賀の殿樣十二月の御辭世に、

　伊賀の米喰つたほどたれた此骸損德なしに年の暮かな

いつでも損德なしじやけれど、思つけた癖で、きつと損德の有るやうにおもうてゐる。元來苦樂順逆ともに無いものじや。皆銘々の心から、苦樂順逆ともに工みいだすものじや。華嚴に心は巧みなる繪師の如しと言うてある。例へば碁を一番打たんと一念氣ざせば、先碁盤碁石捌相手が出來る。始碁盤の上には、何にもない所へ、碁石を一つ置き二つ置き、夫から段々苦樂の種を蒔いて行く。捌中程になると、我が仕て置いた石が便になつたと言うては悅び、また仕て置

殼の内から大きな手足出して引ずりあるく。田螺の、ばいの、溝貝のと、色々様々の貝類が動くけれど、中の主は海老や蟹じや。それで宿かり貝といふ。どこへ行くにもその貝殻を引ずりあるく。大抵見とむないものじやない。これと同じ様なもので、奢のつくも、馴れると我生つきの様に覺えて止められぬ。夫ゆゑ色々さま〴〵のものを引ずりあるく。或は將棊盤ひきずつたり、妾ひきずつたり、千石ぶね引ずつたり、海山ひきずつたり、子曰く引きずり歩いたり、龍宮で頭の上に、鯛や、鱧や、鰒や、鮹や、蛤や、鰡、鰻、其外色々魚類貝類、みな頭の上に戴いてゐる。皆腹の中の通りの看板じや。龍宮とは腹の中のこと。海士の謡に、「三十丈の玉塔にかの玉を籠置て」かの玉は本心の靈明、天の御中主じや。皆めい〳〵所持して居りますけれど、ぐるりに悪い衆がゐるじや。悪龍並み居たり、其他悪魚鰐の口、恐いものがある。皆私心の異名じや、己が〳〵殿じや。此衆達が身の分限を得て覺悟せぬ故、一貫目の身體は十貫目の身體を見て咽かわかし、十貫目の人は五十貫目を咽渇かし、百貫目は千貫目を咽かわかし、皆是名の爲、利の爲の奢り、少しでも好い物は、己がものと名が附たい、名利を貪り色々の望ごとで、腹の中が押合じや。

我にある寶を知らぬ愚さに世界の物を欲しがりぞする

天上じや。赤子にも家業がある、乳呑んだりばゝたれたり泣いたりするが商賣じや。あれが乳も呑まずばゝもせにや大騷動じや。御大名樣方行列正して御通りなさるも、天道樣へ御勤じや。あなた方がじつと重になつて下さればこそ、銘々共の樣な輕いものまでが、皆散らぬ。卦算がなけりや何所へ吹ちらうやら知れぬ。スリヤあなた方の御勤、大抵御苦勞なものじやない。何國へ御出でなされても、日限の外一日も滯留がならぬ。何ぼ御一家がたでも、泊りがけに遊びに行くといふやうなことはならぬ。皆下々への重になつてござるのじや。大體ありがたいことじやない。銘々どもは氣さんじ、二日三日滯留せうが、大道に小便せうが、惡い事さへせねば御構ひはない。其外山へ行うが川へ這入らうが、芝居へ行かうが御免じや。餘結構すぎる故、まだ此上に、思ふやうにおごられぬと言うて小言いふのじや。何の樣にしたとて、町人は町人百姓は百姓、羽二重織物などは、皆上々樣御大名樣がたの御召なさるものじや。夫を木綿の袍著る物の袖口や襟先に、些と斗御大名樣方の眞似したとて、夫が何に成ることで。法會立に宿かり貝というて賣つてゐる。色々の貝殼が動き歩いてゐる。是がどうしたものなれば、海邊の磯ばたで、蟹の子や海老の子が貝がらの内へ出這入して遊び、終には其貝がらが我生附の樣におもひなれて、それなりに成人したものじや。ソコデその貝殼が出られぬ。夫故貝

それから腹のたつ浪、女浪、男浪の打わけ、なにもかも取込んで子持腹、どこぞで算用せにやならぬ。

何一つ止るものもない中にたゞ苦しみを留めて苦しむ隨分御腹の中の流れ灌頂、弔が大事じや。川の流で鍋洗へば鍋ずみが眞黒に流れる。暫見てゐる中に、色々の模樣が出來る樣なれど、流れて仕まへばもとの淸水、少しも滯はない。所にぽち〳〵附いてある鍋墨の固も、どこぞでは流れ灌頂。子川のほとりに立つて曰く、逝く者はかくのごときか晝夜を捨ず。少しも滯はない。池の水は滯があるゆゑ呑にくい、泥水は御腹に滯りて惡い、泥は沈んでえう浮かまぬ、奈落の底へ沈んで仕まふ。腹の中の間違じや。其間違を世界へ出して、また間違はす。大抵難儀なものじやない。

大學に國を治るとは、此腹のなかの療治じや。此體が治ると國も天下も治る。皆腹の中の吟味がたらぬ。仕よいことせずに、たゞ仕にくいことして苦しむ。隙にあかして奢を思つき、錢の減ることばかりに骨折つてゐる。銘々堪性のないと言ふことを風聽して居るのじや。我分限をえう覺悟せぬ故、奢が止められぬ。奢は錢銀つかふばかりじやない、唯遊んでゐるが奢の

へは出られぬ。其方は此諸道具が斷落して來た樣に思うてゐる。中々左樣した事じやない、皆身分相應に立金せにや爰へは出ぬ。私も此見世へ來て三年になるけれど、いまだ何國の淨土に安心することやら知らぬ。扨々心もとないことじや」と、阿彌陀如來道具屋店の無常說法、哀なことじや。古手屋の店を見れば、生はぎ死はぎ無常說法、「寺方にある幡幢ばんは身體の死んだの、古手屋店のは多く、ぴち〱達者で、袖口からちら〱手の出るやうな著物がつつてある。私は身體の死んだといふ御說法、御用心々々々」と勸化してござる。

聽く時はやれ尊やと悅べど實なければやがて失せけり

病人の藥悅するやうなもので、醫者殿の變目には、腹の中が珍しい故、滅多に悅べど、根が大病人じやによつて、一兩日すると又本の御腹、何喰うても味がない、皆天地の御馳走を食ひ過したのじや、兎角御腹のことじや。腹の中に嬉しいこと悲しい事、面白いこと、腹の立つこと、よその事まで取込んで、腹の狂言。此前道頓堀で見せた、天の岩戸腹、子持腹、龜腹、立つ浪、女浪、男浪の打わけ、皆御腹のうちの滯。誰それが何と言うた、どうも此ことが濟まぬ、夜が明たら往つてどう言うて、斯ういうてと、夜が寐られぬ。向の人は何にも知らず能う寐てゐる。こつちが先へ地獄へ落ちてゐる。御腹の中の暗闇、天の岩戸腹、御燈明ともさにならぬ。

裏門の古道具屋店に金箱の篩がたんと積んである。然も名前が確り書いてある。又軒の下には藏の戸まへ、手水鉢、是は初から賣る積でこしらへたのでもあるまい。又此身體の次第々々に消えて行くことも構はず、千年も萬年も生る積か、氣を張つて赤銅樋に、石のはしりも、身體若死頓死頓病、其外あらゆる諸式諸道具、皆親方を取失ひ、此店へ缺落して來たと見ゆる。此世に住むものは皆 如是かと、回向をすれば、棚の隅なる阿彌陀如來が涙をはら〳〵と流して、一切世界諸式諸道具が、皆名に迷ひ形に迷うて、日々家内の暮し方に算用もなく、一年に一度使ふか使はぬ、諸道具衣類に心を盡し、旦那殿が反り返りて歩行くやうになると、御家様も娘御も、朝から晩まで衣類の咄と、芝居話斗、裏の隱居が、おれが側へは緋縮緬や天鵞絨の頸玉した、狗や猫の來ぬ樣にして下され、と言はれたれば、それから家内がしばらく木綿の襟袖口になつた。夫迄は總々が、好い物さへ著たら御禮じやとおもうてゐる。お長東を向いて御禮申しや。尻叩かれては御禮する。佛壇へは御禮なしで、芝居遊山に御禮申すじや。損料がりで御禮申すじや。一才の腰下三拾目、丁稚の鮓代壹貫五百、お長北を向いて御禮申しや、とつけもない所へ御禮申してゐる。さうなると家内の諸道具、藏の内から相談して、中でもよい道具から暇とりかける。質屋へ行く間はまだ暇取りきらぬ故、毎日々々飯代が行く。夫が濟まねば爰

松の佛性。」松の木が曰く、「春から松のみどりが三寸程伸びた。御前何様じや。」「私は春から遊んだ故、三百目程食ひ込んだ。」「ソリヤ大きな野ら松じや、御用心なされませ」と、松の木にたしなまされた。

松に上る蔦蔓も、松といふ足場がなけりや上られぬ。夫を己が力で上つた樣に思うて居る。後には松を締絡んで、つい枯して仕まふ。是よき問ものと、蔦に向ひ、「汝松の木なくて上らるゝや否や。」蔦の曰く、「松の木なくば地を這ふばかりじやが、是を思へば、世間の人が私に辭儀して下るは、雨露の惠や地の御恩、主人の親のといふ足場があればこそ。それを我力のやうに思うて居る故、何言はしやつても尻に聞かし、大概なことは私が呑込んでをりますほどに、餘御世話の燒過じやといふやうな顏して、ぴん〳〵跳廻り、愛想づかし言うてゐるは、大恩の松の木を締枯して居るのじやぞえ。御得意方の御蔭で滯なう今日渡世すれば、是も我器量のやうに思うてゐる。些と結構な得意と見ると、表向は美しう見せて、心底は肋から爪が生えて有る。松の木が倒たら我身も共に地に附くことを知らぬ、難儀なものじや」と、蔦が自身のことを言ふかと思へば、何樣やらこつちが嬲られて居るやうな。夫でせうことなしに、「サアうかうかのぼるも、實は大てい氣苦勞なものでない」と、言うて別れた。

して首振つてゐる。又「如何なるか是汝が心」内から「喧しいわい」と叱つたら、虎が「あの人は氣違じやさうな、構はしやんな」といふ。夫でも又「いかなるか是汝が心。」虎もどうも返答が出來なんだやら、「天地に一ぱい」というた。「虎は一日に千里を行くといふ。汝其棚に何時の頃より上りゐるや。」虎の曰く、「汝知らずや、我晝夜に幾萬里あゆむことを知らず。」「汝が身と心と別か不別か。」虎の曰く、「天地の間に生をうけ、天地の間に養はれ、天地の間に行ひながら、何れの方に向つて口を開かん。人ありて我を叩かば、我張ぼてなればツヒつぶれて仕まふなり。其ときは天地と共に歎くなり。天地の靈と我心と一如にして隔なき故、身心も不二なることを會得すべし。汝は有情なるが故に、我と異なる樣に思へども、汝怒る時も身心共に怒り、悦ぶときも身心共に悦び、眠る時も身心共に眠り、覺めるときも身心ともに覺める、憎む時も身心ともに憎み、愛するときも身心ともに愛する。物に感じて涙溢す時も、心に感じて目に涙を溢す、驚きて汗するときも、心に驚きて身に汗する、心に傲あれば身賤しく、身奢れば心貧しく、是則身心二つなきの道、會するや〱、此身心不二の實體、能見れば萬境に咎はない、汝ただ妄想を好むことなかれ」と、張ぼての虎に說破せられて、仕樣事なしにこそ〱と逃げた。それから御堂樣の内へ這入つたれば、松の木がある。これ幸と松の木にむかひ、「いかなるか是

り、晩にしぼむ。世界の經卷、夜の八つ時分には、世界中が唯一軸の御經となる、けうといものじや。人間の息佛、たゞスウ〳〵斗、しばらくも止まらぬ。

京都今宮の祭、是を休ひ祭といふ。此世に暫く休ひ祭じや。毎年三月十日頃、上加茂より六七十許の老人が色々の面を著て、歌を謠うて踊り行く。其歌の文句に、

此方の椿が美事に咲いた、翌日ない花よ、借りたる小袖を茨に掛けな、明日ない花よ、借りたる小袖は、親から預の此身じや程に、無理なことして茨に掛けな

と言ふことじやさうな。明日ない花よ唯卽今のスウ〳〵斗、此一念が大事じや、善いことすれば心よく、惡いこと思へば心あしく、極樂の道法十萬億土も此一念より始り、去此不遠も此一念より始る。毒氣は我より出でて我身を亡す。曾子曰く、爾より出でたるものは爾に歸るなり。善惡の其報あること影の形に添ふ如く、心に善を好めば善人とよぶ、惡を好めば惡人とよぶ。十目之視る所、直に天地の賞罰じや。天地は善のみにして惡なし。天道人を殺さずとは、不善を善に歸すまでのことじや。さるによつて天地より大いなる心もなく、又心より大いなる天地もなし。我一念曲るときは天地曲り、一念直なるときは天地直なり。

御堂の前の人形屋に張拔の虎が首振つてゐる。「如何なるか是汝が心」と問ふに、虎は知らんか

走り歩くのじや。夫で腹の大きな衆の仕事で、腹の小さいものに格別迷はないものじや。その證據にや、美しい美人が私を見て迷うて下されと賴みもせず、又金銀財寶が私を欲がつて隨分蓄へて下されと言ひもせず、雪月花紅葉が私を眺めて樂めともいひ附けず、茶碗皿鉢がわつてサア腹立てて喚かしやれとも言はず、火が私を撮んで火傷さつしやれとも言はず、酒が私を飲んでぐたついた跡で喧嘩せいとも言はぬ。萬境に咎はない、其境界を取込んで世話やくゆゑ、雇人に煽動られて居るが迷じや。是で雇人の身にならぬことを合點したがよい。そんなら境界の雇人は役に立たぬものかと思ふが、隨分なければならぬものじや。例へば御大名の行列に、沓籠持も、鎗持もなければならず、普請するに、土持も、音頭取もなければならぬものじや。けれども其沓籠持や、音頭とりの差配をうけるゆゑ、大勢がうろつき出す樣なものじや。神佛の教はこゝじや。我が一念の源に立かへり、天地の本業を失はざる樣との教じや。先此天業の古今來變らざる事を考へて御覽じませ。浮雲日月を覆へども日月は暫時も止らず、水は低きに流れ方圓に從ひ、火は穢不淨を厭はず燥けるを燒く、風は無心にして少の隙間よりも出入して天地の氣を通じ、花紅葉は人なき山奥も時を違へず、鳥は曉を告げ、犬は夜を守る、人は孝弟忠信のみ、是則天の本業にして、暫時も止ることはならぬ。優曇花は朝開いて、日の中は花ざか

松翁道話五編　巻之上

子曰逝者如レ斯晝夜不レ捨。

諸行無常說法也。

世の中は何にたとへん朝ぼらけ漕行く舟の跡のしらなみ

かりきりと思ふ間もなく目が覺めて乘合舟の夜半の起臥

有物がなくなれば、無物が出來る。天氣の好いが雨ふりとなり、この事を爲んと思ふ内に、彼ことが障となり、彼事を爲んと思ふ中に、思ひも寄らぬことが出來て來る。諸行無常は說法なり。この移り變る有樣を、何時までも變らぬものと思うてゐる故、遽に算用が間違ひ、「此筈ではないが〳〵」と狼狽廻る。誰と約束して此筈ではないのじや。娘の子が子持になるかと思へば、もう婆々になつてゐる。坊樣兄樣言うた子が、祖父は山へ柴刈に行く樣な尻附になり、我身世にふるながめせしまに、變化するのが天地の本業じや。寐て居る間もまけはない。此轉變して定まらぬことを覺悟すれば、迷はない筈じや。迷と言ふ字は米に辵かけた字なれば、米が

水を潜る樣なものじや。生死は離れ切つてゐる物故、一天四海皆歸妙法、たつた一つの仕業、三千世界始つてから、ずつと先の天地有らん限、南無妙法蓮華經樣たゞ御一人じや。夫故順氣の善いのも南無妙法蓮華經、又惡いのも南無妙法蓮華經さまの御心一つ、暑いも寒いも南無妙法蓮華經、花を見るも扇を見るも南無妙法蓮華經、あんどを見るも茶わんをみるも南無妙法蓮華經、一天四海皆歸妙法の若退若出したまふ、眞實の御說法じや。我が了簡は微塵もない。夫を我が有ると思ふが迷じや。ちよつとでも我をこしらへて見たがよい、世界中が合點せぬ、一切萬物が合點せぬ。其證據が有る。御堂參する御人が、毎朝々々鳩に米撒てやる人がある。鳩が肩へ止つたり手へ止たりする。外の人が「何卒一疋捕まへて下され」といふ。ソコデ「心安いことじや」と言うて捕へんと思うて、米を撒き〳〵行けば、一疋も側あたりへ寄附かぬ。能うしたものじや、此方の腹の中に何ぞ出來ると、ちやんと向から見てゐる。我說法禽獸草木までも聽聞すると言ふものじや。人は知らぬけれど、鳩は能う知つてゐる、油斷はならぬ。鳩から見ては人は餘程とろい者じや、我心に我が出來てあるを知らずに居る。其筈じや、我斗になつて居る、我の塊じやさかい知らぬ。夫じやによつて一寸さきは暗の夜、恐しいことじや。何卒どなた樣も本心を知つて、此我を離るゝ道理を御工夫なさりませ。

欲深い者や横著者も、己がさまぐ〳〵形に表はして直説法してゐる。天地の四時行はれ百物成るの姿をば、南無妙法蓮華經といふ。銘々どもは凡夫故、色々樣々に理屈言うて、一つ〳〵樣子が大きに變つた樣に思うてゐるけれど、佛さまの耳へは、何を言ふのも、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、と聞いてござる。思邪なき故、一切時中法華の轉ずるのじや。丁度銘々どもが還城樂か太平樂の樂見た樣なもので、どうも仕樣はない。善いのやら、惡いのやら、何所らが善いのじややら、何所らが惡いのやら、夫なら面白うないでもなく、又格別面白いといふこともない。思案分別せうにもどうも仕樣がない。唯其儘でぶう〳〵どん〳〵と見る斗じや。定めて一つ〳〵理屈の有ることであらうけれど、唯こちの目には、ぶう〳〵どん〳〵と動くばつかりじや。其時は何じや。虚空か、天か、ぶう〳〵か、どん〳〵か、是則法華の轉ずるといふのじや。大事の所じや。何の彼のとものいふ程直打が下る。止々不可説我法妙難言。八千餘卷の終に、一字も說ず、何にも言うたのじやない。本の通じやと言うてござる。萬年竹も拭へばもとの白地じや、此白地が知らせたいのじや。談義參りして御覽じませ。一言言うては南無妙法蓮華經、何のかの言うては南無妙法蓮華經、皆妙から出て法に入り、法を勸めては妙に入る、是則妙法の轉ずるのじや。此樣にものいふも妙の出たり這入つたりするので、鵜が

象一切萬物皆法藏から出た代物じや。それ故皆是阿彌陀佛、飯を喰ふのも南無阿彌陀佛、腹の痛いも南無阿彌陀佛、金儲けたも南無阿彌陀佛、損したのも南無阿彌陀佛、痛いも痒いも、南無阿彌陀佛、天地一ぱいの南無阿彌陀佛を、一人前の南無阿彌陀佛にする故、祖師方が謗法雜行と御叱りなさるのじや。色々樣々の塀切を取つて、大きな南無阿彌阿佛にして遣りたさに、汗水になつて御世話なさる。

阿彌陀佛と言ふより外は津の國の難波の事もあしかりぬべし

蘆斗刈りて取る。蘆は其儘。蘆刈と言ふは、要らぬ惡人に爲とむなさ、地獄へ落すまい爲斗じや。

唱ふればほとけも我もなかりけり南無阿彌陀佛聲ばかりして

天地一杯の南無阿彌陀佛の御腹の中で、南無阿彌陀佛が、南無阿彌陀佛と言うてござるのじや。親に不孝な阿彌陀樣はないぞえ。一念でも惡いこと思附いたら、阿彌陀樣を地獄へ突落すのじや、どうよくなものじやぞえ。

又法華宗では一天四海皆歸妙法、天は妙也地は法也、心は妙なり骸は法なり。妙一ツの働きで、法は形にあらはるゝ、麥となり、米となり、山吹となり、さくらとなり、

春雨の別きてそれとは降らねども受くる草木は己がさま〴〵

口へ捩込み、もう仕まひ事〳〵と手を拍く。ソコデ向の子が「饅頭おこせ〳〵」と泣出す。腹の中に入れて仕まうた饅頭に執著して、迷ふは夢見て居る樣なものじや。夢見て居るは樂屋の小口で狂言して居るのじや。是は是じやが、此饅頭持つて泣かしに步行く者がある、惡い癖じや。或は三十間口五十間口、或は千貫目二千貫目も、唯獨口へ捩込んで、もう仕まひ事〳〵してゐるゆゑ、皆泣出すのじや。錢銀持つても些とづつ飯事して遣らんと、幽靈が取附ぞえ、恐いものじや。此飯事と言ふは、一家親類知音近附までに誠を盡すのじや。小人に錢金たんと持すと、世界の邪魔斗する、賣〆買〆世界の咽〆して泣すことが多い。じやによつて幽靈が蔭裏から取附いて、終には家屋しき屋財家財正直にもう仕まひこと〳〵して仕まふ。人は腹の中がこと〳〵にさへなつたら助かつた物じや。阿彌陀如來の兩手を廣げてござるのは、もう仕まひ事仕まひ事を知らしてござるのじや。此時虛空が始て大悟した。何と大悟した。「此阿彌陀佛の外に一念でもそへたらば、南無阿彌陀佛にならぬ」と大悟した。此阿彌陀佛は男か女か。親御樣の名は何と言ふぞ。兄弟は無いか。無い筈じや。此天の御名じや。若い時の御名が法藏比丘と言うて、何やかたらんと思慮分別があつた故、佛とは言はぬ、比丘というた。法藏とは此目に見えぬ虛空から、色々樣々の物が出る故、法の藏といふことじや。親子兄弟夫婦を始、森羅萬

幽靈じや。その幽靈が三人前の五人前のと働く故、あれを持出し、是をかたげ廻りて、朝から晩まで幾生も〳〵、生れ代り死に代りしてまぜかへす所を、地藏菩薩哀みて、錫杖をがら〳〵と鳴し給へば、迷の幽靈が、がら〳〵斗になる。錫杖とは、衆生の事じや、今のがら〳〵はどれが鳴つたやら知れぬ、皆一統のがら〳〵じや。此時一切平等のがら〳〵なることを、錫杖が始めて悟道したと言ふ事じや

　眞實の目が覺めたれば世の中の憂きも辛きもみな嘘の川

夜の八つ時分になると、江戸の者も長崎の者も、大名も、太郎冠者も、御姫様も、鉢坊主も、ごちや〳〵に成つて、虚空の樂屋へ這入て仕まうた、内で何して居るやら知つた者がない。不思議とも不可思議とも知らぬが佛じや。夜が明けると狂言の始り、其日も一日何やら見えぬとて、うろ〳〵〳〵尋廻り、腹を立るやら、泣くやら、笑ふやら、悦んだり、樂んだり、何を言ふも金の事じやと、日がな一日、もいや〳〵して、又夜の八つ時分には、虚空の樂屋へ我一にくす〳〵と這入て仕まふ。何でもない事じや。夫でも夢見るは何うしたものじや。未だ迷うて居る。夫は晝の狂言の殘りじや、夜通に芝居する顏見世の樣なものじや。其代に晝夫程虚空へ樂屋入せにやならぬ。子供が饅頭一つ持つて、「岩さん是で飯事せんか」と、向の子に見せて、直に

さつぱりと埒の明たる世の中に埒を明けぬは迷なりけり

何方でも御病氣が平癒すると元の御腹、何を喰うても中らぬ、何でもないこと。六祖偈、是眞常寂滅樂涅槃相復如」是と。此前四條の道場の芝居で、場を買うて見て居る人が小便しに立つた、其あとへ一本さした人が座つて居る。小便に行た人がもどつて、「こゝは己が錢出して置いた所じや退け」と言ふ、「些の間見せい」と言ふ、「否ならぬ」と言うてもやく〳〵いふ、近所から「喧しい」と言ふ、東西々々言ふ中に俄に大夕立じや。何が、むしろ屋根で雨は漏る、大雷でぐわら〳〵と言ふ、總々が立噪ぎ、上を下へと狼狽廻る、場買うた者も、場を買ぬ者も、ぐわらぐわらぴしやりになつて居る。其時男の吃驚も、女の吃驚も、貧乏人の吃驚も、金持の吃驚も、別々に吃驚はせぬ、吃驚斗じや。喧嘩した衆がみな中よしになつて、「もつと此方寄つてござらしやれ」と互に助合うて居る、甘いものじや。其後雨も上り雷も外へ行た。左樣すると狂言が始まる、もいやく〳〵も夫なりに治つた。能うしたものじや。「何でも世界中が戰々兢兢さへして居ると小言は無い」と、其時芝居が大悟したと言ふ事じや。

地藏樣が錫杖をがら〳〵と振しやると、六道の衆生が成佛する。六道と言ふは思慮、分別、思案、才覺、邪智、妄念、皆雇人じや、本心の日雇働して居る衆人じや。此衆は幽な靈じや、

死ぬることも、些算用に入れて見たがよい。

紀州の岡田に、桑原角右衛門殿と言ふがある。此床の掛物、一休和尚の正筆、大字で一行物。

一なんでもない事〳〵　一休宗順㊞一此何でもないことが、合點の行にくい所じや。正月に旦那殿が錢一貫出して、「今夜は夜寐講じや、此錢で寳引でもせよ」と渡さるゝ。丁稚衆や女子衆が總分けて取り、夜がな夜つぴと勝つたの負けたのと、血眼になつて爭じや。翌朝旦那どの、「夕の錢皆揃へて持つて來い。」子供衆が、「誰それは何程勝つた、何ほ負けました。」旦那殿が、「よしよし、一貫揃うたら宜い」と錢を受取りて、戸棚へ入れ、錠前ぴんと下して仕まうた。總々が汗水に成つて勝つたり負けたり、何でもないこと〳〵。錢銀は御上の物、持つては行かれぬ。三拾間口五拾間口も持つては行かれぬ。身體は土なり、心は天なり、皆借物を我が物の樣に思うて、一生あたふた〳〵、三百貫目も五百貫目も、天地の在物、世界の戸棚に入れて置くのじや、持つて行く事はならぬ。何でもないこと〳〵。さう思うて見れば、合ぬ仕事に浮々月日を送りて居るも、何でも無いことじや。何を言ふも金の事じや〳〵と、狼狽廻るも、又錢銀たんと出來して、どうも仕樣がないと言ふも、なんでもないこと〳〵。

宛と見て三十年で、凡三千兩じやが、貴殿の御代になつて、凡二百貫目餘の伸銀がなければならぬ。貴殿の親御樣より御請取なされた御家督とは、何程殖えてござります。」「否々親どもより請取つた時とは、大きに減して居る。」甥子が「左樣ならば、何の役に立たぬ御世話じや。畢竟渡す可きを押へて渡さぬ樣にして、其癖伸銀もなく、縱令又其銀が丸で伸びて有つてからが、畢竟人の得心せぬものじや、どうも仕樣の無い銀じや。一生人に惡く思はれ、憎まれ死に死んで仕まうて、延した銀も此骸も、跡に殘して置くのじやが、惡名と罪科と斗、背たら負うて、マアどつちへ往かうと思うてござりますぞ。」老人聞いて「如何樣なう、とんと其所に氣が附かなんだ」というて得心なされた。其後はふつふつ節季の御世話が止んだと言ふことじや。此樣に早う助かつたのがある。人間も五十過ぐると人が遠慮して、大體では言うて吳れぬ。夫故思はずしらず自慢も言ふ。我がすることは善い〳〵と思うて、うから〳〵地獄の手傳して居るものじや、大體心得ねばならぬ。此隱居も甥子が無我な人であつた故、助けられたのじや。又能う合點して見たがよい。何でもないことじや、些許の黑坊に迷ふのじや。

雲晴れてのちの光とおもふなよ元より空に有あけの月

衆生本來成佛なるが故じや。如何に物忘れするとて、肝心の死ぬことを忘れてゐる。折には

大君の御名は如何有るやと言ふことじや。聖徳太子様と達磨大師の御會輔、斯も有りさうなものじや。此御歌二首が止觀とやらで、甚深微妙の味有つて、此樣な安い事じやないけれど、我大君の國が入用故、ツヒ此樣に申して居ります　此大君の國さへ知れば、鬼奴が其身其儘姿を改めず即身成佛じや。

黑坊も暗の夜は通力自在なれど、月夜の晩は黑坊が迷子になる。銘々どもが善い人の側へ出ると、場うてがして狼狽する。

眞實の目が明かぬから狼狽て我と我が見る憂い目辛い目

或富家の旦那殿六十許じやが、節季々々に店へ出て不足錢を拂ひ、仕かけ錢を拂ひ、銀には欠を渡し、或は相對の濟んだものを直切り、何時の節季も〳〵、橫鉢巻で大喧嘩じや、大抵しんどい仕事じやない。其家の甥子二十才許の人が尋ねてござる、「何と其樣に節季々々に御腹立てられますが、何ぞ利詰のあることでござりますか。」老人聞いて「隨分利詰の有ることじや。此樣にすればこそ、一節季にマア一貫目から二十兩程宛も違ふ事じや、恐い物じやて。」甥子が「夫は怪しからぬ事でござりますが、凡何十年程其樣に御世話なされますぞ。」「されば二十四五から世帶受取つて、今年六十一、マア三十四五年のことじや。」甥子が「左樣ならば、一年百兩

知ニ我身一者卽身成佛　本來成佛して居るのじや

鬼奴が我の無い事を合點したれば、執著も怨もない。夫で切に、「淺ましや恥しの我姿やと、言ふ聲は、尙物凄じく夜嵐の音に立ち紛れて失せにけり。」此鬼は、何方へ失せにけるぞ、何處もいき所はない、我を殺せば本の人じや。

草も木もわが大君の國なればいづれか鬼の住家なるらん

我大君の國とは、本來の淸淨心の事、則天じや。無量壽佛、神道では天照太神樣、銘々どもの鼻と口とから、御往來なされてござる。此大君の國を、己がゝゝと言うて住家にする。聖德太子樣が、片岡山の非人に遣さるゝ歌に、

しなてるや片岡山の飯にうゑてふせる旅人あはれ親無し

非人の返歌に、

いかるがや富の小河のたえばこそ我大君の御名は忘れめ

此非人は達磨大師で有たつと言ふことじや。太子の御歌のしなてるやは、死で居るや、飯に飢て臥て居る、生死往來の人ならば、本來の親の名を知らぬ人かと、御尋ねなされたれば、非人の返歌に、いかるがや、如何あるや、本來法性の流れ絕ねばこそ、我心身則大君なるが、此方は

何と恐しいものな、此鬼の相は無いかな。只他所事に聞きなし言ひ流して仕まうては、何の益も無い事じや。我身に行ふ所と、意に思ふ所とを、この鬼の相に引合して、身に立歸りて一色でも、此鬼の相が有らば、早う御療治なさりませ。若し御療治が遅いと、終には八萬四千の地獄めぐりせにやならぬ、恐しい事じや。

安達が原の謠に、「世渡る業こそ物憂けれ。あさましや、人界に生をうけながら、かゝる浮世に明し暮し、身を苦むる悲しさよ。ワキ不思議や、主の閨の内を、物の隙より能くみれば、濃血忽融滌し、臭穢は滿て膨脹し、膚膩ことごとく爛壞せり。人の死骸は數知らず、軒と等しく積置きたり。いか樣是は音に聞く、安達ヶ原の黒塚に、籠れる鬼の住家なり。」黒塚とは、私心の塊。此身は眞黒げな土の小高きものじや。

遙々と安達が原へ行かずとも心の内に鬼こもるなり

此鬼を成佛さす文言がござります。

見二我身一者發二菩提心一　我身は土の小く高きもの也
聞二我名一者斷レ惡修レ善　我名は虚空のかり名前じや
聽二我説一者得二大智惠一　天地の功徳なる事を知の也

松翁道話四編 卷之下

人の爲身をしまぬが佛なり樂をしたがる本はこれ鬼

青筋の額に角があらはるゝうちに妬のとがめ有るゆゑ

世の人の惡事見いだす心から眼球こそおほきなりけり

忠孝の人をもあしく言ふ口は大きに耳の根まで裂つゝ

ばり／＼と人を嚙んだり人の氣を痛める故に恐しき牙

何もかも攫まんとする欲心が手足の爪の長きにぞ知る

指を見よ貪欲瞋恚愚癡の三つ慈悲と智惠との二なき也

善人をよせ附けぬゆゑ體中生え出る毛まで針の樣なり

身勝手がたくましい故逞しい體を出來し惡事をぞする

虎の皮の褌をしたる姿こそ惡事千里をはしるしるしに

鬼の所作鬼の意をもちながら他所事に見る人は是邪氣

足納を爲ると爲ぬとのむねのうち地獄もあれば極樂もあり此足納するも我心でする故、誰も叱りはせぬ。尻の來る氣遣氣はない。また地獄の釜の下は誰が焚きつけるぞ。

惡いこと焚附られてにゆるのを地獄の釜の湯とや言ふらん業を熱すと言ふ、日々の業を沸すとも言ふ、胸が燃ゆるとも言ふ。修羅の下燃やせ、業を沸して茶附喰ふぞ、夫で腹の中が何時でも悶つく、腹の中も大火事じや。

財寶を燒ぬ氣づかひするよりは胸こがさぬが藏でこそあれ

藏立てぬ先に、腹の中が大火事、錢ちつと出して、よい物しようとする故氣が揉める。皆鬼に責られて居るのじやけれど知らずに居る。

世間の相場拾匁で賣る物を、拾五匁で賣つて來い、三十匁でうるものを、拾匁で買うて來いと、言附ける親方があつたら、無理な人じやと言うて、奉公する者は一人もない。のらかわけ、好い物著よ、隨分ひけらかして自慢せい、三貫目の身上を五貫目で暮せ、仕まひに難儀せいと、腹の中の鬼奴が無理斗を言附けるを、ハイ〳〵言うて勤めて居る、呵責の責じや。夫を辛抱強う勤めて居る。扨此鬼を今出して御近附に致ましせう程に、何方も近う寄つて篤と御覽じませ。

の殖える斗、東から御日様が出さつしやると、ちら〳〵かあ〳〵、麥も出來る米も出來る、花の咲くも實の成るも、私唯一人への御馳走と思うて見れば、有難涙が溢るゝ。足が一本無うても手が一本無うてもならぬに、此樣に手足は滿足で、見る事聞く事有難い事斗り、雨露にも濡れず、三度の御飯に缺けた事もなく、蒲團の上に寐起して、夜が夜半も「火の廻り〳〵。」時は拍子木が告知らす、饂飩蕎麥切鹽梅よし、蒲團中で鹽梅よし、先祖の御蔭で鹽梅よし、御上の御慈悲で鹽梅よし、天地の御恩で鹽梅よし、無上靈寶神道加持、高天ヶ原に神とゞまります、八百萬の神達の御諫で、今日を暮す果報な身が何所に有るもので。

經曰若離我執著忽然歸無我。此心を教家卿の歌に、

心なき四方の野山の草木までわれをすつれば我身なりけり

紀州の南鄕に、權の守と言ふ人があつた。人達で肥料壺へ陥められて、「有難い〳〵」と言うて悦んでござつた。道通の人が、「此方は人違で陥められたのじやわいの。」「サア其人違尙有難い、其陥められる人は怪我なしに逃げて呉れたかの、有難い〳〵。」其時の歌に、

芥ほども悪心のなき心こそ盡きせぬやすきたのしみは無し

かう足納してからは、たまるものじやない。

は、皆我情の行屆かぬのじやと言うて、世を憐みて諸國を御廻りなされたと言ふことじや、誠に親が子を憐みてうろ／＼なされた様なものじや。是何の爲ぞ、皆天地への御孝行じや。天の心で生れた人が、世を勞り世を助くる心のないは、直に天地を盗んで居ると言ふものじや。昔軍の有つたも、皆義の爲孝の爲の戰爭じや。其義も孝も何方へ立つる義ぞ、皆天道へ立つる義じや。夫を我身の爲や我威勢の爲に立てた衆は、皆滅亡て仕まうたじやないか。是で我の甲斐のないことを、能う御明めなされませ。又何樣にしても我のないが元直じや。其無いもせぬ我を拵へて、春はどうせう秋はどうせう、子どもの行方がどうならう、何を言ふも金のことじや、金が無うてはどうもならぬ。ハアスウ／＼と悶躁苦む辛度の仕損、放し龜が竹の筒の上でからつぽ斗搔いて居るのじや。終日歩而不レ歩二一歩一。日々食而不レ食二一粒一。皆此方は不調法、じやによつて本心知らにやならぬ。本心知つて御覽じませ、根つから其樣なものはない、實相無漏の大海で、汗手拭洗ふ樣なものじや。何にも思案分別は要らぬ、世界中が我心じやによつて、生れて居るとも思はず、死んで居るとも思はず。盤桂和尚、

過去も未來も唯今斗心止めずば浮世もあらじ

只目前の唯今斗、此今の外に何があるぞ。此只今斗になつて、御覽じませ。によつき／＼物

も大事はない。二百貫目三百貫目出して、堂塔宮寺建立してさへ、小善根福徳の因縁と言うてあるじやないか。夫から見れば、此本心を知るは、生きた佛を建立するのじや、壽命は限なし、無量壽佛と言ふ、成らうことなら少々出してなりとも、知らせたいものじや。

或所の旦那殿が、本心を知らしやつて、「家内の者へ金壹兩宛遣らう程に、知つて呉いと」御頼じや。夫で家内の者が我一に知つて見たれば、我はない、我が無ければ物を貪る心もない、「扨扨有難いこと」と言うて、その金を一人も取る者がなかつたと言ふことじや、まあ夫程のことじや。欲しい惜しい憎い可愛いも我が有ればこそ出來たものじや、我が無けりやあた面倒な、何の爲に其樣なものを拵へて苦まんや。此處を能う合點して御覽じませ。本心を知ると壽命は限なし、天地萬物が心なる故、何所へ行て自慢するといふ世話も要らず、憎いの可愛いのと言ふは、右の手と左の手と引張合して居る樣なもので、能算用して見れば、我唯一人狂言して居る樣なものじや、大體氣辛度なものじやない。其樣な阿はうらしいことに暇費して居る間はない。又一切萬物が我心なら何にも不足はない。其代世界の難儀は我難儀、世界の悅は我悅、此身體が直に天の御心なる故、天地の間の塵一本藁一筋も、無益に者を費すは、則天地の功德を破り損ふと言ふ者じや、いはんや人に於てをやじや。むかし最明寺時賴公は、浮世の人の情の無い

れ取換て近附にする、悪い銀を一向しらぬ。夫で悪い銀を見ると直に撥除ける。本心を知るも其様なもので、本體の善いことを知る故、少でも悪いことは合點せず、撥除ける様になる。どなたも御知りなさつて御覧じませ、甚利功な者じや。本心を知るは別にむつかしいことは要らぬ、たゞ我心の無心無念なることを能う合點するのじや。夫で山ほど迷うてハアスウ〳〵言うても、本體の思慮分別のないことを知る故、少しも分別に迷ふと言ふことがない。欲どしい氣からは、何やら便ない様なものなれど、無心無念が本體じやによつて、外にどうも仕様はない。橋のうへで放し龜が竹の筒の上に乘つて、からつぽばつかり搔いて居る。けれど龜は矢張水の中で泳いでゐる心持じや、夫でも虛空のからつぽ搔いて居るに違はない、精出して同じことをして居るのじや。此様に言ふと、斷無じやの、外道じやのと言うて、恐る人もあれど、此方では見るも聞くも一つ〳〵證據のある事じやによつて、少しも氣遣なことはない。甚埒の明いたものでござります。其かはり餘結構過ぎるもの故、悪うすると中る事がある。在所の者に鯛喰すと、腹痛起す様なもので、食附けぬ珍しいもの喰すと、中ることがある。何程も中つたのがある、半分は本心で半分は私心、難儀なものじや。半分山の芋で半分鰻でぬら〳〵して居るがあるけれど、是も氣遣なことはない、薯蕷汁にならにや蒲燒にして喰ふによつて、どちらで

匁掛の蠟燭五匁掛の蠟燭、明が餘程違ふ、夫から、十匁掛二十目掛三十目掛五十目掛、これが明い〱、百目掛五百目掛一貫目掛より二貫目掛は明が大きい、十貫目掛から五十貫目掛百貫目掛、二百貫目掛、千貫目掛より二千貫目掛が明が大きい、是があかい〱と思ふけれど、消えた跡の暗は三匁掛の消えた後も、千貫目掛の消えた後も、暗に違はない。千貫目掛の消えた後じやとて、暗が大きうもなし、三匁掛の消えた跡じやとて、暗が小いこともない。夫を暗に塀切して、是程は己が暗じや〱と、死だ跡まで暗の爭、なんの役に立たぬことじや。暗から暗に迷ふのじや。

暗きより暗き道にぞ入りぬべしそのくら闇にまよふ暗闇

明へは出されぬことをたくみけりたゞ暗がりに心置く故

唯暗に心置く故、親と妾と取ちがへたり、御先祖より預の身體と我一人前の欲と取違へる、皆暗に心置く故、先ぐり後から仕直せにやならぬ。天地へ言別に暇が要る。大體費な事じやない。此暗に居る者は、明い所が能う見ゆるものじや、夫で小人は人の非斗を見て、何のかの何のかの小言いふ。又明い所からは暗は見惡い、さるに依て君子は人の非を咎めず、人の能こと斗見える、惡い事を知らぬ故じや。兩替屋の丁稚、十一二から毎日々々よい銀斗、あれこ

冥加錢々々々、松木も梅木も、西瓜、眞桑も、柹も蜜柑も、それ〴〵の味持つて、各志を陳べてござる。旦那どのが羽織一つ始末して家内のものへ志、肴の味いところ旦那が喰つて骨の所を家内へ志、人に憎まるゝも志、家を潰すも志、骸潰すも志、大阪に三百貫目、おやまに寄進して、仕まひに紙屑ひろひに歩いた人が有る、是も志。又或所の息子殿、拾五貫目の茶屋拂じや、親御樣のいひ附、節句後に拂方よびに遣り、息子殿一人して、藏から錢を千五百貫運ばすのじや。息子殿中程でほつと疲ぶれ、一向足腰は立たぬ、「誰ぞ手傳うて吳れんかい。」親御樣が「否々ならんぞ〳〵、其方一人して遣うた銀じやないかい、誰も手傳ふ事はならぬぞ。」拂仕廻ふとすぐに勘當じや。親御は慈悲の志、自身でに拵へた咎は、外の人が何程氣の毒に思うても、其難儀手傳うて遣ることはならぬ。報と言うは書出の來た樣なもので、自身が拂ふよりほかに拂人はない、拂が濟むとすぐに地獄へ志、能うしたものじや。皆我手に拵へて置いたことは忘れて、何ぞ間違が出來ると、私が樣な不仕合なものはない、私が樣な運の惡い者はないと、歎いたり悔んだり自業自得も志、錢銀を麁末にまき散した衆が、溝の中や、水道の中で釘ひらひしてござる、皆暗へ志、佛壇の御燈火は早う消ゆる、油を些と志、我慰には夜を深し、油を夥多志、彼岸の志、こんにやく三丁も志、油揚五つも志、蠟燭五丁も志、三

からも譽めて下さる、「横著我儘意地惡樣、横柄自墮落恥搔さん、無理いひ自慢の口松さん、一文惜の百知らずさん。」心の通を姿に顯はして、正身、正體の通の說法をして居る。

或所の隱居が娘を見に行きて、煙草盆に火を入れさして見て、善い惡いを知り、直に嫁に貰ふ相談究めて戾つた人がある。道で仲人が、「見ると直に貰ふ約束なされたは、何うしたもの」と尋ぬれば、「さればさ、火入に火を入れるに、灰を和げ、火の消えぬ樣埋んで生けて持つて來た。彼で世帶持の善いことが知れてある。何卒貰うて下され。心の通が形に顯はれて有るものじや」と言うてござる、一切此通りじや。上り口にはき物が二間程またげてある、自墮落者と言ふ事を履物が說法して居る。朝から晚まで一切經じや。煙草飮んだあとの吸殼を火鉢の脇や、火入で「くわち〳〵」と叩く人があるものじや、是道樂者と言ふ看板。一切萬物を勞る心の無いは、人遣の荒いと言ふ證據を顯して居る。慈悲心の有る者は、一切萬物を勞つて、灰吹を叩くさへ手で叩く樣にする。萬事萬端皆志の通を勸め行うて居る。現銀懸直無しの正札附じや。

〽歌をうたうて心が知れる聲と節とでなほ知れる

隱してもかくされぬ。各志をあらはして談義說法の場でいかきをまはす、皆人々の志、毎日毎日の志、親孝行も志、不忠不孝も志、商賣繁昌も志、商不情も志、正直も志、嘘も志、

のじや。二日醉で心惡いと言ふは、取込過して、目安附けられた樣な者じや。上たり下つたりするは、取返さるゝのじや。皆罰の當つたのじや。是ほど世界に、饑い者や難儀する者があるのに、如何になればとて、好い加減に食ひ居つたがよい。身體の損ねるも構はぬ、ごくだうが何所に有るものでと、天道樣から引つたくつて御仕廻なさるのじや。それも知らずに、まーぱい罰當らしやれ〳〵と言うて勸めて居る。勿體ないことじや。

人の身も皆灰汁桶と同じこと上から入れた程にたれるぞ

善事でも惡事でも、外から入れたほど斗出ぬ、灰汁桶と同じことじや。子ども衆なぞは、取分腹のなかの通を言うたり仕たりして居るものじや。これじやによつて、善事は仕込まにやならぬ。是で腹の中の清淨なる事を御考へなさりませ。根つから覺の無い事は言やせぬ、覺えた事はか言ふ事ならぬ。夜分門あるく衆でも、考へて御覽じませ。腹の中のある物だけ謠ひうたうて行くか、淨瑠璃語るか物まねするか、腹の大きい衆は音頭取てじだんだ踏んで行くのがある、何にも知らぬは念佛を申し腹の中に覺えた通り白狀して行く。如才の無いものじや。伊勢の相の山では、此方の姿の通を向から講釋して下さる、「縞さん紺さん中のりさん、絞の浴衣のふり袖さん。」絞の浴衣を紺さんとは言はぬ。隱して隱れぬ此方の直打の通り顯はして居る故、世間

か、おごりものかと言ふ、天の心に穴明たものじや、夫から拔ける事を知らぬ。例ば穴の有る釣瓶で水を汲む樣なもので、精出して水を汲み上げても、半分ほど斗ない。夫で己が此樣に汗水になつて働いても、水が溜らぬと思うて居る。溜らぬ筈じや、底に穴がある。「如何樣此穴に氣が附かなんだ」と、穴を詰めて「よし〳〵是では氣遣ない」と言ふと、此度は水溜に穴が明いてある。何程汲んでも〳〵水が一ぱいにならぬ。「コリヤどうじや。」どうも仕樣がない、とんと此通じや。內を始末せいと言や外で奢る、外を始末せいと言や、世間の義理を缺いても內で奢る。矢張一升入る壺は八合じや、二割宛干減が行く。いついけ一ぱいにならぬ算用じや。又衣食住に事足らぬ衆は、體を動さず、人斗遣うて、甘い物喰うて、客があると言うては酒を飲み、肴を食ひ、鮓を喰ひ、氣が盡たと言うては、菓子を食ひ、淋しと言うては羊羹をくひ、饅頭をくひ、鯉の吸物じやの鍋燒じやの鰌じるの鼈汁のと、へらへいとに取込んで、根つから腹の干上る間がない。夫が脾胃に食滯れて心惡いのを、イヤ癪氣じやの氣欝じやのと、鍼をしたり療治したり藥を飲んだりしても、根つから利目がない。取こみ過して鹽梅の惡いと言ふことを知らずに、私が樣な病身者は無いと、御祈禱やら立願やら、上たり下したり、水に附けたり火に炙つたり、體を長才坊にする。なる程壽命が無い筈じや。食すごすと言ふ穴が詰めてない

一決すると言ふ事がない。其代に國々の眞似は何の樣なことでもするじや。是は色相の上の體のことなれど、心は三界唯一心、此心を知つて本來の淸水で洗へば、何樣な垢もおちる。一切經、一切書物皆因緣因果善惡邪正の灰汁を垂したものじや。夫で洗ひさへすりや成佛するに違はない。佛も本は凡夫也、一旦は迷うちじや、其迷によつて迷を拔くのが成佛じや。孔子も、五十にして易を學べば大なる過はなかるまじと御悔みなされた。すりや皆垢によつて垢をお拔きなさつたに違はない。元來垢は身によつて生じたもの故、土氣でなければ落ちぬ。石川五右衛門も、垢さへ脫けたら孔子も釋迦も同じことじや。生れた時は無智の聖人と言うて、天を心として居る故、大體公なものじやない。御腹さへよいと、にこ〳〵笑うて一切萬物を心として足納しきつて居る。御辭儀せいと言ふと、何時でも御辭儀する。心に不足が有つては出來る仕事じやない。微塵も欲氣はない。盜人の子でも二つ三つ斗までは、持つて居る物をたい〳〵と言ふと直に放して吳れる、慈悲の丸無垢じや。それが大きうなると、たい〳〵處じやない、節季に書出遣つて、其上に催促しても、いや〳〵言うて放しやせぬ。段々垢の溜つたのじや。赤子の時は、手足も不自由なれば、口過に氣遣もなく、節季に屈託顏した赤子もない。夫が生長して、手足滿足に達者に成てから、せつきいやがり、口過し兼るは、何でも野らかぶしやう者

松翁道話四編　卷之中

昔の祖師方は、破衣に草鞋掛で、得意を御廣めなさつた。金紋の先道具網代の乘物に用はない。大僧正の紫衣のと言ふに一向念もないことじや。たゞ心の垢の洗濯斗、日々新より外にない、一切衆生の迷の垢を洗うて遣りたい斗で、大きな灰汁桶をこしらへて、灰汁を垂し、其灰汁で垢を洗ふのじや。汚れた物を初手からよい水で洗うては、垢が合點せぬ故、落難い。垢は灰汁で洗ふが可い。根が泥じやによつて、泥水の淸んだので、揉んだり振つたりちやつぷ〳〵する間に、心安う相談が出來て瀟洒垢が落ちる。能うしたものじや。唐更紗を此方の水で洗うてははげぬ。此方の染物を田舍へ遣つて、田舍の水ではどの樣に洗うても剝げると言ふことはない。何でも其土地の物を、其土地の水で洗ひさへすりや心好う落ちる。同氣相求むる道理で、田舍で百姓一揆の起ると言ふも、同じ土地に出來る麥や米喰うて居る故、物ごと相談が一決すると動くと言ふ事がない。其段は大阪の京の江戸のといふ三都じや、取分大阪などで一揆の起る氣遣氣がない。物事相談して居る中から崩て仕まふ。其筈じや、諸國の麥や米喰うて居る故、物ごと

五百目では、何うも受取が書れぬ。銘々共も受取の書かれぬ株じやないか知らぬ。人は人じやが、どうも合點の行かぬ人じや。人にしては些と受取の書けぬ所がある、受取の書けぬはどこらじやな。されば、「彼人も見かけは隨分能うござりますけれど、今一越物を打任して頼まれませぬ。心の底に恐しい所のある人でござります、じやによつて滅多に肌がゆるされぬ。」「ハテナ夫では中が磨糠斗じやな。」「ハイマア其様な物でござります。」可惜事じや。

如何にとも仕様の無いは佛のない堂へ参つた心地こそすれ

結構な堂塔を建てても、肝心の本像の無いは、埒も無い者じや。近所から物置にしてがらくた斗が入れてある。其外一家親類知音近附迄のがらくた物を、皆腹の中へ取込んで、日がな一日ハアスウ／＼言うて居るのじや。

が有れば拂はにやならぬ。安い物で堪忍すれば節季が心安い、高い物買へば節季に苦しむ。よい物程直が高い、よい物は持たぬがよいと、代物から辭儀してござるを、此方から辭儀なしに無理にする故、跡で難儀せにやならぬ。知れた通で何にも六づかしい事ではない。漆に負たのは生の蟹を擦りつぶして附ければ直る、膳椀の損じたのは塗師屋へ遣ると直る、饑いのは飯を喰ふと直る、腹の痛むに黑丸子呑めば治る、幽靈に取つかれたるには、こちの體を消して仕まへば取つく事ならぬ、我なしになると直る、心の歪たるは正直の敎を聞くと直る、朝から晩までなほし物皆成佛の直道じや。日々新而又日々新なり、六根淸淨内外淸淨が此身の洗濯。

只濯げ心の垢の落ちぬ間はのりだちのせぬものにぞ有りける

すつぱりと垢の落ちたは心よいものじや。夫を洗濯せずに糊かふ故、のり立がせぬ。二季の店おろしが家の洗濯、借錢の有る上に歩の出る銀借りて、世間を取繕うて居るのは、家潰す御祈禱して居る樣なものじや。白粉箱の上包、上皮ばつかり結構にして、色々樣々の模樣を拵へ、金銀で飾立て、中の白粉は些ばかり、中の代物が惡い程外側を張込む、皆眞實のない證據、嘘の看板僞なし、五百目の銀は反古で包んであるけれど、何でも五百目で通用する。十日戎の

いうて、一位から二位へ上るに、一位に愛著して二位へ上り惡い。況や凡夫唯よい物に執著し、欲い惜い斗を得忘れぬ、執心ぐるめに喰うて居るのじや。

何國にも心とまらばすみかへよ存命ぬればもとの故里

欲い、惜い、惡い、可愛と思うて居る内から、消えて仕まふ。朝から晩まで一つも止る物でもないものに、取附いて惱み苦しむ。うから〳〵と今日を過し、闇々と地獄の釜こげ、可惜事じや。今喫んだ煙草の煙何方へ行たぞ。

立上る富士の煙の空に消て行方も知らぬ我おもひかな

此煙草は呑が宜いの惡臭いのと、色々樣々の分別の、行方も知らぬ我思かな。煙草呑まぬ先に煙は何所に有つたぞ。

美しき刻煙草のいろも香も息ひきとれば灰とこそなれ

直に煙草の火葬、一息々々灰となる身を知らぬ。惠心僧都の歌に、

後世と聞けば遠に似れども知ずや今日も其日なるらん

後の世と、今斯う物言うて居る。此言葉の終つた所が後の世、惡い事すれば後の世が惡い、善事すれば後の世が心よい、形の影に應ずるごとし。報とは物買うて書出の來たやうなもの、覺

が「其御歴々へ上る時斗持ちて、外の所ではもつ事無用」と仰せられた。夫で首尾能う言分は濟んだけれども、こはい事じや、其樣にいひぬけ所を拵へて置いてなりとも、贅がこきたいとはさりとは因果なことじや。御役人も亦利功な、「其煙管貰うた御方の所へ出入する時ばかり持つて、外の所へはもつ事ならぬ。」御慈悲な事じや。御上からは何卒筵の衣服著せまいとて御世話なさるに、夫を助かろまい〳〵として居る。折角極樂へ投出しても、下地の三途八難の臭氣がぬけずにある故、またじても〳〵地獄へかけこまうとする。鼈屋の籠の内じや、足おとがすると我一に下にならう〳〵とかけこむ樣なものじや。「鼈と言ふ物は、執心の深いものじや。必上りますなえ」と言へば、さる御方が、「イエ〳〵私は其執心ぐるめに下さります故、一つも構やいたしませぬ」と言うてござる。左樣言ふ御方に出合うては何うもならぬ。何時までも鼈の味を得忘れぬ御方じや。鼈よりは、其執心が深い、皆大概執心ぐるめに喰うて居るのじや。「此方は盜はせず、間男はせず、人は殺さず火はつけず、何にも惡事した覺えはない。本心知らいでも大事ない、必此方の子供に勸めてなど下さりますな。」皆執心ぐるめに喰うて居るのじや。乞食の子供が鴻池の門で泣いた。其乞食嬶が「其樣に泣きをつたら爰な子にするぞ」と言へば、子奴が、「堪忍じや〳〵」と言うて逃げて去んだ。住なれた所がはなれにくい。菩薩にも法愛と

温和しい親父分の衆迄が、飛入に出る様に成つて、惣々が裸になり、我一に取うくとする、遂々大相撲になる。どこぞでは怪我の基じや。相撲は取らぬが勝でこそあれ、身代有丈商賣仕にせて、花に下さる親御樣をほつて置いて、他所へ相撲取あるくと言ふ様な、戲いもない事が有るものか。何程負を惜んでも、恥はよそでかいて居る、相撲取の勝つた話斗、鼻の先の女房子へは何時でも勝つた話、我負たのはかつた人が世間でいうて居る。コリヤ相撲取の事じやないぞえ。銘々共の直打のない話じや。此扇の損じたの代銀拾匁、誰も買人がない、代呂物に直打がないと世界中が合點せぬ。扇も厭がつて居る。夫を拾匁に賣る積じやけれど買人がない。身の分限を知らねばならぬ。傘も日笠も時を知らねばならぬ。雨が降れば日傘が泣く、日和なれば唐傘が歎く、足納する術を知らぬ故じや。身代が悪うなる程氣が高ぶりて、兎角珍しい物が持てみたい。方々で身上潰して來た道具集めて、掘出じやくと言うて悦ぶ内に、終には我身上掘込んで仕まうたら、上る事がならぬ、怖いものじや。水は方圓の器物に隨ふ、友達は吟味せにやならぬ。銀の道具御法度じや。是は京の事であつたが、矢張銀の煙管もちあるく人があつた。役人衆に見咎められ、難儀しながら、いひ譯してござる。「私は御堂上方へ御出入仕ります。此煙管はさる御歴々様より御拜領仕りましたが、御名は恐多うて申上憎うございます。」ソコデ御役人

じや。歩の出る銀借りて、金持の樣な顏して暮すと同樣なもので、身の痛になる事知らぬ。先今日が損料暮し、第一此身が假物、其損料物で奢つたり贅言うたり、我儘する故、仕まひは皆我かぶりとなる、六根一つ〳〵吟味逢ふと、借物と、雇人との、言分して、引のこりて咎斗が、おれがのじや〳〵言うて居る。借錢してでも好物著て、世間を流に歩行く、裸體に成つても我が立てたいとは、一家親類と相撲取るのじや。

何所ぞでは怪我の基と知るならば相撲は取らぬが勝でこそあれ七つ森織右衛門といふ角力取の所へ、「弟子にして下され」と賴む人が有つたれば、「其方には親が有るか」「ハイござります。」「親が有るなら相撲取はせぬが可い」と言うた事がある。夫に親持つて、商賣抛へて、角力取歩くと言ふ事が有るものか、身上比、衣裳比、奢比、自慢比、ひけらかし、負惜、或は聟取嫁取の目出たい續、是も斯しては置かれぬ、彼も彼では濟ぬと言ふと、何所からも彼所からも御目出たい〳〵と言うて、滅多無上に突飛す、どつこい此所らが一生懸命の所じやと答へて跳返す。其拍子に思はず知らず氣が高ぶり、商賣の勝手も構はず、普請の物好、一家親類互に負けまいと、進物贈答氣を張合ひ、御振舞の料理の獻立には、互に膽を潰合ひ、後には家の潰れる事も構はず、衣裳比、道具比、相撲が段々はづんで來る。左樣なると、一家中の

は此方の智恵才覺いらず、其程々に能う分つてある。如何なるか是佛、麻三斤、三斤は三斤、四斤は四斤、山は是山、水は是水、櫻は櫻、梅は梅、柳は緑に花は紅、人に問ふに及ばぬ事じや。則今日が我業の秤、分別の掛目如何程あるや、憎いと知り、可愛と知る、心に思ふ程の掛目、我無しの無駄目さへ狂はにや、長崎へ行ても江戸へ行ても通用する。とかく手細工の秤は間に合はぬ。丁度あると思うても欠替を言うて來る、「コリアさんじませぬ、此方の秤に狂が有る」と、何遍も〳〵尻が來る、天地の間に通用が出來ぬ。夫を知りつゝ善物著て、ひけらかしたり、ないもせぬ金をある樣な顏して、贅の八百言うたりして居るは、皆不足錢や欠拂うて居るのじや。尻が來にやならぬ筈じや。

さる所の女中が禮に御出なさるに、一日五匁で衣裳を損料がりして御出なされた。その後禮に御いでなさつた先から人が來て、「先日の御小袖の模樣甚だ美事なものでござります。娘が小袖に染めさしたう存じます。何卒四五日御貸なされて下さりませ」と言うて來た。サア難儀じや、何樣も仕樣がない、皆虚言吐いた報じや。されども何樣やら斯うやら、また損料で借出して遣つた。先も優長な、四五日しても戻さぬ。催促にや遣られず、一日が五匁宛じや、氣が堪るものじやない。大方十五日程してから戻した、損料斗が七十五匁、其上に心遣して損斗して居るの

にする。稻の倒たのは、倒ぬ稻とくゝり合して置くと、つい本の通に整然となる。是が何程株が分つて有つても、一家同士の助け合じや、田地から教へてござる。夫を御公儀へ持て出て御世話をかける。「隨分なる樣にして世話してとらせ。」「ハイ〳〵。」何でも天井へ出て恥かゝにや合點せぬ。大道で乞食の喧嘩、互に打つ擲いつする拍子に、面桶を打落し飯がこぼれた。其際に居た犬が尾を振て御辭儀なしにして遣つて居る。乞食は矢張摑合喧嘩して居る。互に飯から起つた喧嘩じやけれど、犬めが飯を喰て仕まうても構はず爭うて居る。何の喧嘩じや譯が知れぬ。皆名に迷ひ形に迷ふ故じや。人に譽られたい〳〵と思うて、精出して人に笑はれたり、誹られたりして居るのじや。皆犬に喰はれて仕まうた、辛度の仕損じや。惡人と聞いて腹立てるは、惡人と言ふ聲に耳のはえた事知らずに、此方が惡人に成つて見せる。どうでも腹の中に惡人持合して居る故、書出の來た樣なものじや、覺がある故拂はにやならぬ、覺がなけりや何樣に言うても拂やせぬ。「外を御吟味なされませ、何とも無いわい衡の無駄目じや。」我無が正直の體、五匁は五匁と知り三匁は三匁と知る、衡は何時でも我なしの無駄目、親なれば親の樣、主人なれば主人の樣、夫なれば夫、女房は女房、我子は我子、盗人は盗人、正直者は正直者、親の死んだ時の心持、他人の死んだ時の心持、恥かいた時の心持、茶碗割つた位の心持、重い輕い

じや。其證據にや、一向知らぬ同士は喧嘩はせぬ、皆懇意の中にばち〳〵言ふ。北齊の蘇瓊貫といふ人、清河の守護となりし時、百姓の兄弟田地を爭ひ、數年の間落著せずに有つた、又願ひ出したれば、訴狀を見て、「兄弟と言ふものは、天地を尋ねても又となき物なり、至つて得難きは兄弟なるぞ。田地は其身の果報さへ有れば、如何程多く求む可きも自由じや。然るに今汝等兄弟、田地を爭ひ仇敵の如く中惡くなること、僻事にあらずや、縱令一方望の如く田地を得るとも、天下に又と類なき、我兄弟の心に背き、是を得んこと本意なるべきや」とて、はら〳〵と淚を流し示されければ、數百人の證人ども、尤なりと感に堪へ、一度に淚を流しければ、兄弟も互に悔み悲しみて、田地を讓り合ひて一家に立かへり、互に親み合うて暮したと言ふ事じや。一家と言ふは何間あつても一つ心故一家といふ、皆別家別心する故じや無い。

　でゝ蟲のちつくり角を持つ故に早爭の端となりけり

　兄弟が田を分取の爭はたわけものとや人の言ふらん

家を分けるも、金銀を分けるも同じ事じや。

　兄弟のなかも互に敵となる欲ははげしき劒なりけり

一家親類の間も、他人の中も欲は烈しき劒なりけり。一家の中に貧乏人が有ると、寄附けぬ様

砂石、草木の非情といへども、一切の法を説くと言ふことじや。
經云諸法從本來常自寂滅相山河大地等本來寂滅心也萬法示形顯色是草木説法也見色知齅香悟是聽聞説法也口音之説者爲下根之説法也出音説文此是爲息小兒之啼也敢非爲大人之説法也凡眞説法者吾聽草木之説法草木聞吾之説法是如來知見覺者之前説法也

春來れば咲き散る花も説く法を聽かぬは人のある故ぞかし

春花の咲き散るも、人の生死去來も直に説法じや。それを得聽かぬは、我一人前の心なり、則人の出來たのじや。人の生ずるも死するも、四時行はるゝも、百物なるの中のものじや。六根淨とは、眼耳鼻舌身意の六根が、天の道具じやと言ふことが慥に知れたら、我分別拵へて交かへす事も入らぬ者じや。此又色々さま〴〵分別の生ずるも、百物なるの中の物じやと合點がいたら、我一人前の私に引附ける事も無いことじや。此道理を會得すれば、六根悉く淸淨にして、兄弟喧嘩も入らず、親子喧嘩も入らず、疎からぬ己等しも怨しくも入らず、一家親類の喧嘩も世間の喧嘩も要らず、豆がらのばち〱も、互に火花を散らす事もいらず、皆心安達から

松翁道話四編　巻之上

昔或國の御大名樣でござりましたが、其親殿樣道中にて歩に御歩行なさる時、空より松のちりの落るを、はなしし〳〵中にて御とりなされたれば、附々の衆中、天晴殿樣の御手練の程恐入り奉る由、申上げらるれば、殿樣が、「否とよ忰などは、かく天下の御師範ともなるべき筈じや、手前共の及ばぬ所なり。第一斯樣の物の落ちる下などへは參らぬなり」と仰せられた。是を以て見れば手練功を積むといふは、天地と同一體の我無になるが、ものの奥儀を極むると言ふものじや。

徒然の六十九段に、「書寫の性空上人は法華讀誦の功積りて、六根淨にかなへる人なりける。旅のかり屋にいらせけるに、豆がらを焚きて豆を煮ける音の、つぶ〳〵と鳴るを聞き給ひければ、疎からぬ己等しも、恨めしく我をば煮て、辛き目を見するものかなと言ひけり。焚かるゝ豆がらの、ばら〳〵となる音は、我心からすることかは、燒かるゝは如何許堪へがたけれども、力なき事なり、斯くな怨み給ひそと聞えける。」如是物言ふこと、豆がらのみに限らず、風雨、霜雪、

我と言ふ古盗人にだまされて南無阿彌陀佛の寶取られた
虚空の會座を踏外しけり。南無阿彌陀佛が厭なら、地獄の釜へぼつたりこしたのじや。
兎にかくに我に借屋を貸す人はえては心の母屋取らるゝ
鬼めが醤油かけて皆喰うて仕まひをる。もとも子も無い樣にならにや目が醒ぬ。何方も御用心なさりませ、えては心の母屋取らるゝ。

起つて來る。

　既う宜いと思ふはすぐに地獄道鬼の來ぬ間に洗濯をせよ

洗濯とは欲心を改めるのじや。戰々兢々愼が大事、六根清淨、内外清淨、日々に新に洗濯するのじや。年越の晩に一年中積々し惡鬼惡魔を打出すのじや。

　我と言ふ心の鬼が募りなばなにとて福はうちに居るべき

　福は内と口には言へど心には鬼をだかへて豆はやすなり

腹の中には色々樣々の物を入れて、鬼奴が上下著て尤らしい顔して、福は内〳〵、大黑樣が怖がつて袋擔げて逃げて出やしやるも知らずに、大きな聲して福は内〳〵、福の神投出して仕まうて、アヽ是で氣が瀟洒とした、ヤレ〳〵嬉しやと、鬼は矢張だかへてゐる。

　ために善いことといふ人はいやで毒をあてがふ人が好き

鬼は外〳〵へと打はらふ手のうちにこそ福はありけり

　有がたき道にはやくもいりこなる(炒土鉢)無事で我慢な鬼を打出せ

是が年越の晩に限る事じやない、毎日毎晩我慢な鬼を打出すのじや。左樣無いと正月の元日から鬼賣う言うて歩行きをるぞ。蓮如上人の歌に、

此狐が化し居るのは、まづ紅白粉で年を化し、梅花丁子で髪を化し、かもじの、そへの、みの、もつそう〳〵一の輪、二の輪、假わげ、前髪、あるひは鬢張、つとはり、突棒、差股、など皆雇人で頭を化し、度々著換る衣裳の七化、正味の所は些斗で、みな雇人に化されて居る。御先祖が一文二文から組あげなされた汗油を、惜氣もなくづか〳〵使ひ減して樂としてゐる　團子と思ひて馬の屎を食ひ、小便を酒にして飲み、後には屎壺の中へ這入つて行水する、穢いことの有條、目が覺めては出來ぬ仕事じや。

　一口に取つて嚙むのは目にみえず三味線かぢる鬼の恐し

　酒酌んで三味線引いて氣を奪ひ人を取り食ふ鬼の多さよ

　目には色耳は優しき三味の手に引かれて更に鬼と思はず

皆むかうは天命の職分口過じや。其所へ我と言ふ體拵へて食はれに行く。後に家屋敷土藏まで醬油かけて、してやらるゝ。人を取り喰ふ鬼の多さよ。子供が、隱んぼするに、既う宜いと言ふと、鬼が捉へに來る。息子には嫁をとり、孫も出來た、商賣も次第に仕にせた、是から隱居する斗、銀の歩も一日に何程宛入つて來る、既う是で宜い、ヤレ嬉しやと言ふが最後、既う鬼が捉へる。孫が煩ふか、息子が錢を遣ふか、嫁が死ぬるか損をするか、家内に色々樣々の災が

と、終には旦那殿を釜の中へ投込んで、醬油かけて喰うて仕まふ。家内のこらず引淡へ、西の海へさらりこつかかう。田村の謠の、鈴鹿山の鬼神も、羅生門の鬼も常は何ともない、たゞの人じや。九鬼の八鬼の三鬼の五鬼のといふ所の名も、皆盗人の住んだ所じや。鬼といふも遠いことじやない、鼻の先に何程もある。親御様が用を言附けると、顏脹す息子殿、母御様がなんとぞ言はしやると、不返事な娘御、半分鬼になつてゐる、鬼貰らう〳〵といふのじや。奇麗な錦手の茶碗でも、ひゞきがあると鼻聲、びしや〳〵じや、晴な所へは用ひられぬ。直をまけて遣つても買手がない、此茶碗なんぼ穢い茶碗じやけれど、こん〳〵返事がよい、是に致しませう。「長吉こいよ。」「ハイ〳〵。」返事がよい。「いと樣御出で。」「マア待つてお呉れ。」鼻聲じや。ほとほとは直打がない、皆鬼のなりかゝりじや。此前千三百五十兩で白狐を買うた人がある、其後八百兩で古狸買うた人がある。皆家つぶして跡かたもない様になつた。又白狐を嫁にとつて家内が化され、旦那殿が其狐のいふ通をしてござる。江戸妻、ハイ〳〵、芝居行、ハイ〳〵、びろうどの帶、ハイ〳〵、何でもハイ〳〵〳〵、異見するものがあると暇を出し、出入差留め、商賣休んで、毎日々々飯事じや、我儘事して遊んで暮すのじや。

氣も知らで顏に化され嫁取りて跡で後悔すれどかへらず

も思はず、してやつて居る。未だ其上に子孫の骨肉までも吸ひ寄せて喰うて仕まふ、恐しい者じや。

遙々と安達が原へ行かずとも心の内に鬼こもるなり

安達ヶ原の荒屋で、奥の一間を必ず見なと言うたけれど、覗いて見たれば、人の手足や人の死骸が山の如く積である、人に見せとむ無い筈じや。賣〆買〆高利を貪り、世界の咽〆して、人の手足を挖取り、藏を立てたり家買うたり、夫が出來ぬと高歩の銀借つて、銀持の樣な顔してゐる、指二本で家潰す工面じや、納戸の内がみせとむないはずじや。皆我が立てたい斗で、鬼を飼うて居るのじや。御先祖が何もかも、揃へて置かしやつた物を、一々微塵に打碎く、赤鬼は腹の中に籠つてはいぬか、御家樣が鬼になると、家内中が鬼になる。銀の角や鼈甲の角、御家樣の氣に入る女中があると、家内中に噛り附く。けびつに錠をおろす樣になると一人も勤める者はない、旦那殿が目が暗むと、下地から勤めて居る正直者が、一向阿房の樣に見ゆる、夫で新參の鬼手代が、何もかも引受て萬事萬端取捌く氣轉もの、旦那殿が思ふ通する故、家内の締括、此鬼手代が獨して勤める。

漢の王莽、平の清盛、借借屋貸して、母屋取られたのじや。腹の中の鬼手代一人の支配になる

目を明き、南無三寶、夕寐際に今日の用を鬼に言附ける事を忘れて寐たが、何ぞ惡さをせずばよいがと、思ひ〳〵起きて邊を見廻し、女房も居ず子供も見えぬ、夫から庭へ下り、甑のもとへ行て見れば、鬼が火を焚き〳〵何やら喰うて居る。「ヤイ鬼よ、かゝや坊は何所にゐるぞ。」「今喰うてゐる。」ヤアと驚く旦那をまた引つ撮んで、釜の中へほいと投込み、また引上げて醬油かけてしてやる、遂々皆食ひ盡して仕まうたと言ふことじや。何と恐しい怖いものな。是を能う考へて御覽じませ、欲に目がくれて家を潰し身を失ふは、皆鬼を遣ふ故じやぞえ。鬼とはなにぞ、我儘にして堪忍を能うせぬ人の事じや。盗人と言ふも鬼のこと、此盗人は我物と人の物を取違へて、人の物を我物の樣に思うて居る。又此體も能う吟味して御覽じませ、我物でも無い物を、夫を我物にして我儘して居る。秦始皇帝、相模入道、淀屋の辰五郎、皆腹の中の鬼を重寶して、終には醬油かけて食はれて仕まうた。佛樣の六千餘卷も腹の中の鬼の療治じや。儒道の禮儀三千、威儀三百も、神道の吐普加身依身多女はらひ給へ清め給へも、皆此鬼奴を降伏するのじや、此外總て一切經々一切の書物入用はない。大江山の酒呑童子、酒飯んで甘い物喰うて好い物好き、おれが〳〵というて、我を大きうして家内一ぱいになつて居る、人の手足を引ぬいて、かひなを附炙にしたり、太股を蒲鉾にして酒の肴にする、御先祖の汗油を何と

米屋が來ると相手に成つて直をする、船積する、帳合する、其の片手に風呂を仕掛け、火は手のもの故、直に燃ゆる。何でもたつた一人して、ばた〳〵と風の吹く如くに働く有樣、旦那殿見て膽を潰し、「扨々千兩は安いものじや、百人前の造用引けば、半年で千兩は取かへす、何樣にしても一年に二千兩宛德用がある、十年で二萬兩、二十年で四萬兩、五十年で十萬兩、百年で一萬二千貫目の銀じや。夫では銀の置所がない」と、屈託する位じや。「扨明日は御客がある、其用意はかやう〳〵」と言附ける。夫を聞くと商賣片手に座敷掃除、玄關、或は式臺、かこひ、みづ屋、掃廻り、飛石、盛砂、切水まで心をつけて清潔なことじや、扨御客が御入りなさると三人前でも五人前でも言附けた通の料理、鹽梅善うして出すに少しも滯がない、ソコデ旦那殿現ぬかして、「コリヤ鬼よ〳〵」と言うて、何もかも鬼に任せ切つてござる。其後旦那殿、振舞に行き酒に醉うて遲う戾り、明日の用を言附けること忘れて、夫なりにねて、しかも朝寐しられた。扨鬼が朝おきて何にも用がない、サア無間の業じや。まづ大釜に湯を沸し悪さ斗してゐる所へ、御家樣が起きて來て、「鬼何して居る」と尋ねれば、直に御家樣を引つ捕へ、熱湯の釜へ投込んで仕まうた。あとからぼんちが起きて來たを、また釜の中へ投込んで仕まうた、能う煮えた所を引上て、醬油かけて喰うてゐる。さて旦那殿じや、四つ時分にふつと

ア篶と見たがよい、扨々お恐ろしいものじや、嚙みやせぬかえ。」「イエ〳〵滅多に嚙むものじやござりませぬ。」「シテ是は何ぞになるものか。」「なる段ではござりませぬ、人間の百人前を働きます。」「夫は調法なものじや、直は何ぼほどするものじや。」「ハイ代金千兩。」「ヤアそれは滅相に高いものじや」と言うた斗 誰も直の附けてがない。その中に欲深い人がある。「私は造酒屋じやが、藏の人から臼屋から、庭廻家内かけておよそ百人斗じやが、いよ〳〵百人前の働が出來るなら買ひませうが、違はないかや。」「何の嘘なこと申しませう、其代言うて置かにやならぬ事がある。此鬼を御遣ひなさるに大分工合の有ることじや、何でも其百人前の用向を先ぐりに前廣に言附て置かにやならぬ。些の間でも遊すが最期、忽悪さをしをる、是を無間の業と言うて少しも遊すことならぬ、これさへ心得てござれば、屹度百人前働きます。」「そんなら買ひませう」と直に代金千兩渡し、さて家内の者殘らず隙出し、鬼一疋に用向を云附ける。「先づ明日の用事が、かやう〳〵」といひ附おく。扨翌朝夜の八つ時分から起きて、甑の下を焚き、藏へ這入つて大桶の上で諸味をかき、七つ時分になると水を汲み米をあらひ、夜の明方より五十程の碓臼が一時にぐわた〳〵〳〵と踏む、糠を篩ふかと思へば、甑を取つて藏へ運び、莚へ廣げ室へ入れて麴にする、其間に晝飯を仕廻ひ、厨する、扨酒を樽詰して荷物を作り印をする、燒印押す、

い、其樣な親切な世話人が三千世界に有るものか。父親の目は、涙で夜の目の合はぬ事は幾日ぞや。夫がちいと人らしうなつたと思へば、すね隱したり缺落したりして、親達をうろ〳〵さし、そりや御祈禱よ足留よと、彷徨してござる御達を、我方人拵へて、搖りこかして仕まふとは、餘どうよくじや。是は一向親の頭へ屎をたれかけると言ふものじや。其樣なことして置いて、「私の運氣は善いか惡いか、御覽なさつて下さりませ。」善いか惡いか些と自身算用して見たが善い。其體を神佛へ持つて行て、「諸願成就南無天滿大自在天神、商買繁昌子孫長久、私は主人に小便仕かけた者、親の頭へ屎たれかけた者でござります。」其樣な不淨な者が神前を汚す故。駒犬が嚙附いたり、右大臣左大臣が矢を射かけたりなさると、忽ち氣違となるか、卽死するか、仕合善うて、濕ひぜん、或はかんそ、橫根、骨うづき、鼻がころり、亦は妙見山へこもるか、或はたじま龍神四國八十八ヶ所、仕まひは右や左の御長者樣と、直說法して廻るのじや。是が皆堪忍を能うせずに、我儘の鬼を重寶して育て上つたものじや。

門を「鬼賣う〳〵」と言うて步く、「ハテ珍らしいものを賣る、何樣物じや見せさつしやれ」と、惣々が集りかゝつて、我一に見樣とする。「ソレ御覽じませ」荷の覆をとる。「ソリヤ」と言うて逃る者やら、のぞく者やら、大噪じや。中にも落附いた人が、「其樣に喧しう言はしやんな、マ

る故、算用が違うて來る。凡千貫目程の金持じやと思へば、亦千貫目程も借錢がある、引殘りて手斗握つて居る、あけて見れば、からつぽ、何時の間に脫けたぞいな。犬が屎こいた跡へ、後足でちよい〳〵と土をかける樣なことするは我も知らず、不淨を隱す程のことは天性と生附いて居る。けれど土もない所でからつぽを足ばつかりで、ちよい〳〵遣つてゐる、屎はきよろりと脇の方に露れて有ることを知らぬ。夫程が畜生じやけれども、是に類した事が何程もある、鼻の先斗取繕うて、とつけもない所に恥搔いて置いて、人に蹈す事がある。小人に財寶が多いと、錢銀で人の口は覆ふけれど、大きな恥をきよろりと搔いて居ることを知なずに居る。どうでもこはい所があるやら、世間へ口塞に、仰山な年忌法事して見せたり、知識方に近附いたり、宮寺の世話やいたり、陰德ごかしに世間を附合ひ、見え斗の潛上を大きな事の樣に思うて居るは、皆後足でちよい〳〵じや。

犬が犬の御器のもの喰うて腹が大きうなると、小便しかけて去にをる。能う氣を附けて御覽じませ、幼少から世話になつた、親方の錢銀を澤山さうに、詰らぬ事仕出し、親請人に難儀かけ、大恩の主人に損をかけ苦しめる、皆小便しかけて居るのじやぞえ。ぎやつと生れるから、今日迄親達の辛苦艱難どの樣なもので有らうぞ、母親の爪の間に我子の屎の取れて有つたことはな

松翁道話三編　卷之下

見ることの欲と愚癡とに嚙合うてけん〳〵するは犬の御仲間町内の尨犬、能う肥えて逞しいものじや。一町内の犬の御器を我ものにして、外の犬が、若し御器の側へ寄ると、直に嚙伏せる、一町中銀で仕切つて、外の者には指も指させぬ位じや。同じ町内で、病惚けて瘦こけた犬がある。是等は一向飢死しさうなものじや、けれど其尨犬が東を吟味して居る間に、西の方で口過し、西を歩行いて居る内に、東の方でひらひ喰し、何うやらかうやら、同樣に一生を暮して居る者じや。それ〴〵に外の犬もみんごと口過して居る。鬼も寐る間とやら言うて、寐てゐる間は鬼も休じや。其尨犬が、町内銀で仕切つて辭儀させて步行いたけれど、何樣したものやら、後には又辭儀して廻りをつた、どうでも我獨して、何もかも搔きたくる樣にして見たけれど、造用まけにくたぶれたと見える。じやによつて餘り我ひとり搔きたくる樣にするは損と見えますぞえ。皆濡手で粟攫むことを樂んで居るけれど折角攫んだ粟も手が乾上ると、指の股からばら〳〵と脫けて仕まふ。夫も知らずに手斗握つて居

近頃ある肴屋に内外の衆が寄合うて、芝居咄に痼がつき、「どれ〳〵の役者は上手じや能する、其時の衣裳はなに〳〵であつた。」「イヤ空色であつた。」「イヤ萌黄であつた」と、内の男衆と御家様とが、何の役に立ぬ事の競合、萌黄じやイヤ空色じやと、根強う互に爭ふ、傍から挨拶しても聞入れぬ。御家樣が腹立てて、煙管打附けるやら、男衆は打かぎゐほり附けるやら、互にいひあひたゝきあひ、のちには側にある出刃庖丁を投附ける。此方も打かぎを頭へ打込み、兩力血塗、とう〳〵町内大騷動となり、御檢使に御叱受け、疵養生の上、五十日の御預で、事相濟んで兩方ながら目が覺めて、「さて〳〵理由もない事じや、どうも町内の衆に顏が逢されぬ」と言うて、引込んでござつた。なんとマアとつけもない事が出來るものじや。錢銀入れて難儀して、其上に疵負うて、人に笑はれ、痛いめするとは、餘辛抱強い我の立樣じや、皆御腹が善いからじや。男ならばのら、女ならば淫奔者、我手に身體の直打下げて廻るのじや。全體に此體の直打を知らぬ故、親の事や主人の事は、何とも思はぬ筈じや。皆結構な極樂の舟に乘つて居ながら、錢の出る地獄の船に乘換るとは、さりとては殘念なことじや。神道では天の浮橋と言うて、三千世界自由自在に、往來の出來る道があるのに、行かれもせぬ崖道へ行て怪我するとは、外道聰明にして智慧なし、脇道を稼ぐ皆外道の衆類じや。

きな仕合、人ならこそ」といはるゝ。ソコデ外の衆中が、「お前は何にも言はず、折々人ならこそ大きな仕合と言うてござるが、何のことでござります。」「さればサァ此乗合の衆中は、諸國の寄合、これが犬なら嚙合うて大體喧しいことじやあるまい、人ならこそ大きな仕合でござります」と言うた。是が可笑い話じやけれど、面白いことじや。或は船中で腹痛か癪氣で難儀する人があると、知りもせぬ人でも、藥よ水よと世話をやき、深切に介抱し、よそでは我がない故みんごと勤めて居る。兎角内では我が出來る故勤り惡い。親子の間もけん〳〵兄弟夫婦の間も嚙合する、あんまり心安い故、無禮講か無禮比か、煙草盆も灰だらけでは人中へ出されぬに、あられもないことを、出途へ出して恥かく、氣の毒なものじや。一樹の蔭一河の流、袖の振合も他生の緣、暗で行當つたも、尚因緣が深いといふ。それに親となり、子となり、兄弟となり、夫婦となる、大體の因緣じやない、それを何とも思はず嚙合するとは、どうしたものじや。或は一家と成り、朋友となり、師匠となり、弟子となり、主人となり、家來となり、僅な事から言ひ上り、中惡うして暮すとは、大體損なことじやないか、同じ時節に生れ合した甲斐もないことじや。皆我を立つる故、無益なことに骨折にやならぬ。凡てものの爭と言ふ物は、ないことから起るものじや。

内も互に避合さへすりや小ごとは出來ぬ、にこ〳〵して今日を暮すことじや、喧嘩は節季の足にはならぬ、互に些づつ遠慮仕合うて家内が治る、他人とは違うて生れぬ先からの近附じや、取わけ念頃に仕合ねばならぬことを、惡うすると親子行當りたり、兄弟行當りたり、夫婦行當りたり、不遠慮なことじや、行當る度每に損の行くことじや、德のつかぬ仕事じや。

船と水と中好くてこそ世を渡れ心のあらき浪風ぞ憂

碇をば沈むる時は世の海の浪風とても厭はざりけり

是は船の碇なれど、心の碇を沈むるは、我無しにさへなると、何れ程浪風が荒うても、怪我する氣遣氣がない。山川の筏舟、吉野川でも加茂川でも、あるひは高瀬舟でも、向の岩に當らぬ先、ちやつと強梁支ふじや、岩角に當れば船が碎ける故、突張する、此突張が互の愼じや。「全體貴樣の仕樣が惡い故、物ごとが此樣になつた」と言ふ、向に岩角のあるのじやぞえ。其時ちやつと突張支ふ、「成程是は我が了簡違じや、堪忍して下れ」と突張支ふのじや。夫を、「己が仕樣が惡いとは何處が惡い、言うて見や」と突張無しに岩角へ、くわちんと打當て微塵にする、可惜事じや。何んでも頭ぴつしやりと打つて見にぬ合點せぬ、危いものじや。京登の夜船に諸國の人の乘合、口々に、いろ〳〵さま〴〵珍しい話する、其中に一人何にも言はず、折々に、「大

く見れば、空船じや。一人も人は居ぬ、自然と流れて來て行き當つたのじや、どうも仕樣がない、折角惣々が汗水に成つて腹立てて見たが、相手の無いはどうも仕樣がない、立た腹がじみじみと消えて、大笑に成つてしまうた。

　寂莫の柴の戸ほそに音すれど無人定とて人音もせず

スリヤ萬事萬端相手のもたす氣じや。元來腹の中には何にもない、たゞ氣あつて動く斗り、天ばかり妙體不思議の有樣を、考へて御覽うじませ、喧嘩は仕度うても、爲ることならぬ筈じや。

　諍は實に山びこのこだまかやわが口ゆゑに先も喧し

此方からワイと言ふと、向にもワイといふ、其の聲の響に附いて泣たり笑うたりしてゐる、全體一人狂言と言ふことを知らぬゆゑじや。

橋の上を大勢人がゆき通するに、一人も行當るものはない、互に我なし、向の人は此方の身體に成り此方は又向の人になつて、天の心で居る故、我も知らず避け合うて通る、根つから行當りはせぬ、甘いものじや。また川舟が何艘往來しても、互に遠慮仕合うて、往當らぬ樣にする。向に橋があるとちやつと帆を下し、帆柱が辭儀して橋の下をツイと通る、すこしも行當りやせぬ。彼がどちらぞに遠慮がないと、船も橋も打碎いて仕まはにやならぬ、結構な教じやぞえ。家

我もなく人もなければ大虚空たゞ一體の姿なりけり
天も地も佛も鬼も我も人も是この意ひとつなりけり
彼是に尋ねて見れど根から葉から此わろの名は知れぬなりけり
名取川の狂言に、名を取ると、うろつき出す、名や形に迷うて居る故難儀する、其名を取つた所が元直じやと言うても合點せぬ　權兵衛といふ名を取つても働いてゐる、誰が働いてゐるのじや、考へて御覽うじませ。
天下の廣居に住んで居ながら、知らぬとは可惜事じや。
家宅は青天井に地のむしろ月日をあかり風の手ぼうき
大小もしらぬ虚空を家として普請も要ず物數寄もなし
我なければ人と爭ふ世話も要らず、足納して今日を暮す、此上の樂が何所にあるぞ。川船の行通に、もう楫取楫と互に挨拶仕合うて船をかはして往來する、自由なものじや。時に川上から船が下る、何時もの通もう楫とり楫と、挨拶するに、向の船に返事せず、此方の船にくわちんと當る。船頭大きに怒り、「舟の法を知らぬかい。」乘人の内にも聞かぬ氣な者口々に、「ヤア狼藉船一人も動くな」と大きに呼はり罵しれど、根つから返答せぬ。變つた事じやと惣々が能く能

目も、まだ其上に山も川も三文五文も己がのじや、茶碗一つ扇壹本も己がのじや〳〵と、たゞ此世界の道具に己と言ふ名が附けたい、をかしい病じや。此己と言ふはどんなものじやぞ考へて見たがよい。

子曰天何言　四時行　百物成。天の運動によつて四季が行れ、萬物生々するけれど、つい ど天が己がのじや〳〵己が天じやと、おつしやつた事はない。人は其天の運動に由て萬物生々する内から涌いて出た虫じや。じやに依て天理が具つて有る、言はゞ天の出店じやけれど、出見世と斗では身上が持てぬ故、鼻と口から天が御通ひなされて御世話をなさる。夫故此樣に見たり聞いたり動き働く、能うした者じや、死人にも目鼻があれど何んにも見えぬ、動く事もならぬ、天が往來なされぬ故じや。左樣して見れば、此樣に見たり聞いたり動き働くは直に天の御計で、餘自由自在が出る故、つひ己がのじや〳〵と思附いた癖と言ふものじや。夫で肝心の母屋の天を、他所の物にして居る、夫故此五尺の身體丈の勝手を思うて、己がのじや〳〵、何にも彼も己が物にしたがる。出店から母屋を家明附ける樣な、滅相な事が有るものか、すつきり虚空に準繩して、己がのじや〳〵と爭うてゐる、好い加減に迷うて置いたがよい。

心とも知らぬ心を何時の間に我心とや思ひ染めけん

言へば、剃刀の柄が抜けたとて、己が頭をあてにして柄をすげますわいの、味噌を擦れよと言へば、櫺木の有るに、杓子で味噌を捏廻し慰をする、雪隱を掃除せよと言へば、佛前の箒で掃きます、扨々片意地者で困ります」と仰せらるゝ。子僧の親、片一方聞いて腹立て見たが、兩方合して見れば御尤千萬と腹立が消える。

、山は靑く水は流れて白けれど其儘もとの色にぞ有りける

大和の喜助樣の田地の境目をせゝる人がある。段々跡へ寄せて作つてござつたれば、向の人が退屈して詫言に來た。其儘本の色にぞ有りける。根つから世話いらず味いものじや。

我善きに人に惡氣の有るものか人の惡氣は我わる氣なり

又或寺の隣同士、境目の論より起り、御上へ訟へ、互に爭ふ。或人が狂歌を贈る、其歌にて双方の爭が止んだと言ふ事じや。

假の世のかりのやどりの假垣に繩張をして長みじかとは

皆虛空を塀切して、是程は己が虛空じや〳〵と言うて爭うて居る樣なものじや。其塀切して居る中から消てあるも知らずに、矢張己がのじや〳〵と言うて居る。此虛空ばかりじやない、或は田地、田畑、家屋敷、掛屋敷、三十貫目五十貫目を己がのじや〳〵、または二千貫目三千貫

小言いうて居るやうなものじや。一つの物を二つに割りて、片一方宛捕へて、何の彼のと狼狽へて居るのじや。打ば響く是一乘の法じや。夫を己が比所を叩けばぐわたりと鳴る、ハテ合點の行かぬものと、音と我と二つに分けて分別する故、夜が明けぬ。權兵衞と呼べばハイト返事する、是また一乘の法、また權兵衞と呼ぶに返事せぬ、是も一乘の法。なぜなれば、權兵衞と呼ぶに返事せぬは、聲の屆かぬか聾か、たゞし權兵衞の腹の中に何ぞ滯が有つたのか、是則一乘の法じや。其を「是程呼ぶに返事せぬはどうじや。」「返事して居るに世話しない」と言うて叱く、是一つの物を二つに割り、片一方づつ捕へて居る故なんなにもならぬ。夫故兩方聞いて下知をなせとは、此一乘の法を敎へるのじや。

栂尾の明惠上人の子僧が親里へ戻り、「扨々和尙は無理を言ふ人じや、髮剃の柄が拔けた故、柄をすげたれば、なぜすげると言うて叱られる、味噌を擦るに櫺木が見えぬ故杓子で擦れば、杓子で味噌を擦ると言うて叱らるゝ、雪隱を淸潔に掃除すれば、なぜ掃除すると言うて叱らるゝ、彼の樣に無理言しやつては、何うも仕樣がない。」ソコデ子僧の親が大きに腹を立てて、直に上人の許へ行きて、「扨小僧奴がどうも勤らぬと言うて歸りました、どうで年の行かぬ者でござります、大概無理言うて遣うて下りませ」といふ。上人が、「然れば聞いて下され。髮を剃れよと

神佛の味が出る。物欲い心が起れば横著者と味が出る。百姓が金借りに來た、手が美しい此人のらとあぢはひが出る。自慢と贅を言ふ者は不仕合の味が出る。不義理なるものは、子孫斷絶の味が出る。一切天地の大釜で焚く故、夫々の味が出る。是を名附けて一乘の法といふ。此一乘の法を二に分けて見る故に、兩方ながら役に立たぬ。

或富家に父御樣が大病じや、二人の子供衆を枕元へ呼び寄せて、「我死したらば家財殘らず汝等に與ふる程に、家屋敷金銀諸道具二つに分け、兄弟必爭そふ事勿れ」と遺言して死しぬ。扨兄弟の者遺言に從うて所有物を二つに分ける、衣裳も眞中から二つに割く、或は器物桶盥草木迄眞中より割いて二つになし、金銀錢までも二つに割つて配分したが、兩方ながら役に立たぬ樣にして仕まうた。一つ以て是を二つに打ち碎いて仕まうたのじや。飯を喰へば腹が大きうなる、腹が大きうなつた其跡で雪隱へ行く、是一乘の法則天地の移り行く有樣。

生れたも死ぬるも同じ我心今死ぬる扨は生れた報かな

生と死と合して一心法界の説法じや。此一乘の法を我一人前の了簡で、二つにわけて分別する故、目が覺めぬ。譬ば飯を喰ふを生じやと悦び、雪隱へ行くを死じやと悲む樣な物故、生の方ばかり捉へて悦び、死の方斗捉へて悲む。泣くも笑ふも一本竹の元と末と同うないと言うて、

は、どうもつかまへ所がない。夫なら阿房かと思へば、物事が滯らぬ故、さらり〱と埒が明く。

我と言ふちひさいこゝろ捨てて見よ大千世界障るもの無し

此身此儘虚空暮し、生靈死靈も取つく氣遣氣がない。

欲し惜しや憎くや可愛とおもはねば今は世界が丸で我もの

今虚盧裏昔もきよろり行先も何時も變らぬきよろり也けり

虚露裏とは何を言ふかは知らねども味噌を舐れば味を知る

骸が虚空同體なる故、飯を喰へば飯の味を知り、酒を飲めば酒と知り、酢を嘗めて酢と知り、酢を呑んで酒の味の無いのは、本體が酢なる故じや。虚空は是程正直なものじや。何んでも物ごと相談の極むることは、此虚空へ出て來ねば埒があかぬ。兩方に少しでも疑のある内は、物事が定らぬ。商内事でも談合事でも、一切の事が雙方互に「如何にも御尤其通」其通とはどこじや。互に思惑が取れて仕まふと一言の申分もない。此虚空へ出た所が則天の御姿じや。其時虚盧裏が味噌の味を知るのじや。味とは阿字にあうたのじや。又天地合して、天地合とも言ふ。天地を合して、一蒸籠で蒸されて居る故、何となと思うた通の味が出る。慈悲の心が起れば

松翁道話三編　巻之中

或とき御地頭様より清九郎の正直を御聞き及び遊されて、殿様の山を御褒美に下さる。清九郎辭儀して受けず。其故を御尋ねなさるれば、清九郎申すに、「殿様の山でさへ、相應に盗みますじや御ざりませぬか。夫を私が山になつたら、尚盗人が殖えて、咎人が餘計になります。殺生な事じや、止になされませ」と根つからうけ附けぬ。どうも御地頭様も仕様がない。其後御役人が、「なんと清九郎、此山の樹木を盗まぬ仕様は有るまいか」と、御尋ねなさつたれば、「ハイ隨分盗人遣ぬ樣になされませ。盗人遣うと盗人が寄つて參じます。」「其盗人を遣うとは、どうしたものじや」と尋ぬれば、「さればでござります。是が五里も七里も他所のものが、樹木位盗にや參じますまい。また少々でも錢金のあるものは尚致しませぬ。して見れば、いたつて困窮の者が、今日をしのぎかねての事じや。皆御下の困窮な人を、些とづつ救うて御遣りなさつたら、盗人は參りますまい」というて、きよろりとして居るじや。此やうに學文せいでも文字を知らいでも、埒の明いた人がある。とんと我無しじや。虚空法界を心の主として暮して居る人

善人は善人じやけれど、暗がりの善人で役に立たぬ、なぜ世間通用の善人にならぬぞいの。」夫から盗人とはなしじや、「イヤモウありやうは盗人したいことはなけれど、是は因果じや。今更止めて外に仕樣がない。」「イヤ隨分仕樣がある。其了簡なら、己次第になつて居や〳〵と言うて、世話やいて逐々六十六部に仕立てて遣つたと言ふ人じや。是が棒振に向へ振ぢて善人に仕込んで遣つたのじや。

負けて退く人を弱しと思ふなよ智惠の力の强い故なり

勞がない。其筈じや、向の手傳ひして居るのじやによつて、どれほど向が强うても、力を出すことがならぬ。大體心安いものじやない。和州鋒立村に清九郎と言ふ人があつた。御年貢に上げる米を二俵拵へて庭に置かれたれば、その夜盗人が這入て其米を擔げて出る。清九郎目を明き、「コレ〳〵其米は此方に進ぜうと思うてこしらへて置いた、持て去しやれ。己が進ぜるからは、此方の咎にはならぬ。然し夫では、持つていに憎い。とてもなら、明日の晩にござらぬか、それを銀にして置いて進ぜう程に。」ソコデ盗人も乘が來て、「そんなら明日の晩來る程に、屹度銀にして置いて下され」と、言うて去んだ。是がこれ棒捩に向の捩の方へ捩ぢて居るのじや、向の手傳して遣るのじや。扨清九郎はその翌日米を賣拂ひ、銀にして待つてゐる。其後四五日もしてから盗人が來て、「此間の米は銀にしてあるか。」「サア貴樣つい來ると言うたゆゑ急に賣つた、それで相場よりは少々安價けれど、堪忍して持つて去なしやれ」と銀を出せば、盗人は引たくり、其銀をひねくり廻し、清九郎の顔を見て、「イヤモウ此銀は止にせう」と、銀を返し表へ出るを、「コレ〳〵待たしやれ。なぜ其樣に言うぞいの。己が遣ると言うのに何の申分があるぞいの。どうぞ持つて去んでたもいの。」「イヤ〳〵止めにする。」「なぜに。」「ハテ餘まり貴樣の樣に正直過る人の物は取つても拍子がない、餘まり阿房らしいわい。」其時清九郎「いよ〳〵それに違

ものじや。大體恐しいものじやない。しまひは此方の體をしてやらるゝ。此樣な恐しい事さへ堪忍して勉めてゐる。皆他所の堪忍箱へ銀入れに行く。算用のあはぬ筈じや。一年中の店おろしの引合ふやう、毎日毎晩店卸して見るがよい。親の心と我心と、引合ふたか、引合はぬか、主人の心と我心と、引合うてあるか引合うてないか、若し少でも、喰違うた所があらば、親の前へ手をつかへ、主人の前へ手を仕へ、「今日晝過の事は、私が大きな不調法で御座ります、どうぞ御堪忍下されませ」と、眞實に詫言すると、帳面がさらりと消へて、互に嬉い、ぢきに利の有る事じや。此帳面が消えぬと、互にむし〳〵利が喰て夜が寐られぬ。仕まひは大きな損じや。此店卸しは親ばかりじやない、誰にても此通の店おろし。

堪忍はかならず人の爲ならず詰る所は己が身の爲め

我欲と正直とも店卸して見たがよい。人に憎まるゝ帳合して居るか、可愛がらるゝ帳合して居るか、どちらが德じやぞ。

踏れても咲く蒲公英の笑顏哉

手折らるゝ人に薫るや梅の花

たゞ〳〵人の按摩取つて遣るのじや。棒捩するに、向の人の捩る方へ捩て居ると、兩方に氣苦

るいめに逢ふた者でないと、乞食に物を遣るも慰の樣に思うて居る。自身勤めても見ずに、人ばかりいぢる者があるものじや。是がこれ畑水練じや。一萬石以上の御大名樣方の御膳部の御料理、一日が金一兩あてと言ふことじや。夫から段々十萬石二十萬石と、御知行に應じて、御膳部の格式がある事さうな。夫に或御歷々の太守樣が、一汁一菜になされて、年々其餘銀を以て、家中の據なき借金を濟して御遣りなさつたと言ふ事じや。是を其樣子も知らぬものが、一通に聞いては、ちひさい思召じやの、始末な殿樣のと言ふけれど、親の心子知らず、佛の心凡夫知らず、勿體ない事じや。水の中で働いて居る人の心も知らず、岡から見て何の彼のと小言言ふ、左樣じや無い、斯樣じや無いと。マア働て見たがよい。

待目には下手に見えたる渡守

御上の思召も知らず、下として小言斗、皆罰の當る事じや。兎角天地の思召に合ふ樣、兩親に此身を任してさへ居れば、氣遣なことはない、何にも六づかしいことはない。若し不調法の出來た時は、其尻は親が引受けて差配して呉れる、何事も一つ〳〵親達に問うてするのじや。親御達は天地に問うてなさる。我了簡でしたことは、皆此身のかぶりとなる。身を任すが堪忍じや。知りもせぬおやまや藝子に身を任すゆゑ、仕廻に難儀する。狼や蟒蛇と跡さして寐る樣な

で堪忍する、殘り三匁を右の堪忍箱へ納る。内の御家樣今年の衣物百五十匁と積り、それを百二十匁で堪忍する、殘りの三拾匁を堪忍箱へ納る。或は諸式諸道具に至る迄、上分に用ひるものは、是まで三拾匁の品を貳拾匁位で堪忍する、殘りの拾匁を堪忍箱へ入る。この通に旦那をはじめ、御家樣、子逹まで、上分ばかり堪忍して、其代り店の手代衆を始め、下女小者に至る迄、好物をやり、好物を食すようにする。扨正月と七月に堪忍箱の堪忍の溜銀を取出して、家内の者へそれ〴〵に割つてやる。是で旦那殿に裏表なし、平等一切の心じや。目前で、旦那樣、裏口で、旦那奴〳〵、と言はぬ樣にする。是が一粒萬倍御舍利樣の殖し樣じや。蒔さへすれば生えるやう、段々御仕合がよい。是等は仕惡いことじやない、甚心易いことで、利功な仕事じや。人に笑れたり、人にしかれてさへ堪忍して、モウ拾匁じやまゝい、モウ廿匁じやまゝい、とてもなら五十匁の方が德じやと言うて、錢銀をつかふ人がある。是等は他に堪忍箱製へて、内の銀を精出して他所へ入れに行くのじや。家の潰れることさへ堪忍して勉めて居る。堪忍の仕所が間違うてあるのじや。堪忍せずに家潰すが德か、堪忍して家相續するが德か。是はマア何方も御腹の中と相談して御ろうじるがよい。堪忍も口で八分堪忍々々言うて、身に行はぬ人がある。是を畑水練と言うて、座敷で水の稽古する樣なもので、まさかのとき役に立たぬ。眞實ひだ

呉れよと、親御の御頼、其外に親の望は無い。夫を用ひぬ故、天道様から御刑罰が下るのじや、恐ろしいものじや。どなたも我儘の出ぬ様に、堪忍が大事じや。又食物と言うても、甘き味がいつまでも口の中に置くものでもない、暫く咽を過すまでのたのしみじや。また家居も雨露を防ぎさへしたら、もう夫でよいことじや、其上を願ふは、皆我身のあだを願ふのじやと思ひ取りて、堪忍すれば自から道に合ふ。孔子も貧しうして樂しみ、富んで禮を好むものにはしかずと仰せられた。此禮を好むとは堪忍の事じや。或は妻子眷屬の心に任せぬも、堪忍して睦じく暮し、又心にかなはぬ朋友にも、堪忍して爭はず、隨分我を殺して交る時は、一生が安樂な。麁食を食ひ水を飲み、肱を曲て枕とする、聖人のたのしみ、少しも華麗な事はない。奢は苦の種、身をうしなひ家を破る根本、唐土の大舜姦しき親御につかへ給ひ、孝道成就なされたも堪忍ばつかり、主人に忠義を盡すと言ふも、堪忍なくば皆不忠となる。婦人の舅姑に仕へ、夫に順ふも堪忍なくては女の道に背く。萬事萬端我腹の中の本心に任せて、少でも氣味悪い事は、皆皆堪忍して思ひ止まる樣にするのじや。

南都の御社中の内に、堪忍箱と言ふ物を製へて、家内が堪忍を御勉めなさつた所がある。この家は上分の人ばつかりが堪忍するのじや。或は花見に行きたい、今日の入用拾匁と見て、七匁

親父がいうたら何うするえ。生きながら身體に家明附られたら、魂の引取所がないが、其ときは一言の申分無之候じや。畢竟是が親の慈悲で、其精落がなけりやこそ、昔から其儘ですんで通れ、是で他人と他人とで見たがよい、公事は全敗じや。

此間も齒のぬけた人が、上手な入齒師に、壹兩貳歩出して仕て貰うたと言ふ人がある。正眞の齒とはどの樣なものじやと言へば、ソリヤ大な違じやと言うてござる。夫で考へて御覧じませ。物の喰へぬ樣な齒でさへ壹兩貳歩じや。此結構な齒がたゞじや。夫に未だ有るじや。こゝに指が壹本無いと言うたら、三百目出さしやれ、生附の樣にして遣ると言ふ者があつたら、貧乏質に置いてなりと、三百目や四百目は出す。此何にも役に立たぬ眉毛が無うても五兩や十兩は出す。夫なら此體を一つ〳〵直打いれて見たがよい。三拾貫目や五十貫目の物じやないぞえ。それをたゞ貰うてゐながら、己が何にも貰やせぬとは餘り厚かましい。今爰に、知行百萬石の大名にして遣ろ程に、首を呉れいと言ふたら、ハイと言うて首を遣るものが有らうかな。どの樣な慾深いものじやとて、滅多に遣るものはあるまい。スリヤ百萬石にも換へぬ身體じやぞえ。夫程ありがたいものを貰うて居ながら、己や何にも貰やせぬとは餘勿體ないことじや。然れども夫を今更差引せうと言ふ親はない。其代に物毎堪忍して世間の交、一家一門中好して暮して

小さい荷など持つて、三文五文の錢を貰うて、母御を養うてござつたが、是が己を殺して堪忍するの、何うのといふ、了簡はなけれど、我儘がない故、自然と道にかなふたものじや。是が不肖不性な顔で勤まるものじやない、何時でもにこ〳〵〳〵と嬉しい心持でなければ出來ぬ仕事じや。此堪忍の出來ぬ者は孝行は猶出來ぬ。孝行が直に堪忍じや。何方も、堪忍が出來ざ、私は餘程不孝者じや、天下の咎人じやといふこと覺悟したがよい。どうで長持は出來ぬ程に、昔の殷の紂王、夏の桀王、王様に生れ、位は十善萬乘此上なし、智恵拔群に秀でて、衆に勝れて有りながら、燈心屋や、萬吉様から見れば皆小人じや。何故になれば、我儘で堪忍が出來なんだ。況んや其外の衆に於てをやじや。親の跡式商賣仕にせ金銀道具疊迄敷て貰ひながら、もつとおごられぬといふし小言いふ、これ等は一向論にかゝらぬ、小人と言うても、些とつり取らにやならぬ。夫に未だ能う言ふことじや、「此方親に何にも貰はず、未だ借錢を讓つて置れた。畢竟遣りはせぬけれど、外の親から見ては此方の親父は、大體仕合者じやない。じやによつて親の恩は埃程もない。夫を今日何樣ぞ斯樣ぞ暮して居るは、皆己が仕出したのじや。」おれがおれがと言うてゐる、其己が體は誰に貰うたのじやと言へば、己が頼もせぬに、親父がこしらへた故、此やうに難儀すると思うて居るが、其難儀すると思ふ身體ぐるめに、此方へ戻せと

てござる。是程緋縮緬で髪ゆうたり、天鵞絨を草履の鼻緒にするけれど、注連繩はやつぱり藁じや。今の割して見ると、注連繩も糸巻にするか、金糸で綯ふか、せめて水引位に爲さうなものじや。斗張も矢張白木綿じや、是も緋緞子位にはなりさうなものじや。處を矢張昔の通り、白木綿で堪忍してござる。堪忍を行ふは道に叶ふ根元じやと言ふことじや、人の願樣々なれど、まづ第一番に衣食住の願が主じや。是も我身分相應に整ふたら、もう夫で善い事じや。夫を色々樣々と、奢を穿り出して心任にせんとする故、何時か我心にこと足り、たんのうする日あらんや。少欲知足と言うて、物事たんのうするが、人の道じや。夫を有るが上にも積かさね、有るが上にも貪り欲しがる、小人の常、色よき著物を著て、其華麗なるを誰に見せて誇らんとするのじや。人は心の美しきこそ、樂げも有るに、腹の中には妬嫉の、尖ばつかり捩込んで、狼が裲襠著た樣なものじや。耻しいものじやぞえ。

破れたる著物を著ても足ることを知れば襤褸の錦なりけり

島の内燈心やの娘御、十二や十三で一合の米でたんのうし、夜は一時斗寐ぬ。さうなければ仕事が出來ぬ。佛壇の御燈と、相合で夜業するのじや。夫で大病の母御を介抱してござつた。何と正眞ものじやぞえ。鈴鹿の萬吉さま五つ六つばかりから、道中往來の旅人の風呂敷づつみや、

松翁道話三編　巻之上

昔唐土の張公藝といふ人は、九代が間、一門眷屬一の家に暮して居た。忝も時の御門高宗皇帝公藝が家に行幸まし〳〵て、勅諚あるは、「汝が家は年久しく親類同居して、中よく家治り相親むこと、甚以て奇特なることじや。親類の中も年久しき中には、互に口舌も有るものじやが、定而一族相親む納方あるべし、具に申上げよ」と御諚ありければ、張公藝、敬んで、忍の字を百ばかり書いて獻じ奉つたと言ふ事じや。忍とは則堪忍のことじや。此堪忍の道さへ守らば、身納り國治る和合の道、忍の徳たる諸善萬行も及ばずというて、一切堪忍一つで世界中が治まる、結構なものじや。

堪忍と聞けば易きに似たれども己に克つのかへ名なるべし。己に克つとは、我身勝手に克つのじや。則天道様への御禮じや。今日言ひたい事を、明日まで堪忍するのじや。酒飲んだり、肴喰たりすることも、些と宛堪忍するのじや、好い物著たいも今日一日の堪忍と思うて先へ延すのじや。日本の宗廟御伊勢様が、茅葺に三杵米で堪忍を教へ

つてござる、有難い事じや。千手の暗室に一燈を入るれば暗何んか去る、即ち神明様じや。五十年六十年迷うて居た暗も、即今の一念發起して見たれば、忽ち明に晴れ渡る。

暗で影法師奴を見失ひ火を燈してぞ見つけたりける

本心が明にさへなれば、影法師の私心が見ゆるゆゑ迷がない、本心がくらいと影法師が見えぬゆゑ、私心を我心の主にして居る故、暗で狼狽にやならぬ。此繪馬の博奕打の様に銘々どもも、親達に拜まれてゐるか、但し親を泣して居るか。親類一家は何と言うて拜んで居るぞ、お山や芝居から拜まれてはゐぬか。世間からはどのやうに拜んでゐるぞ、女中方呉服屋香具屋から拜まれてはゐぬか。又本心御知りなされた御方々の御内様が、何と言うて拜んでござるぞ、若案じてはござらぬか。「こちの人が本心知られましてから、一向商賣不精でのらつかれます」と言うてござらぬか。本心を梃に遣うて遊び歩行くを本心のらといふ。是は聖人の御罰を蒙る事でござります。皆此方の姿の通を向から拜んでござる。佛様というて拜んでゐるか、鬼様と言うて拜んでゐるか、我心は向に明に顯れてある故、向の明神此明な神様を身に反す、そうして誠あらば樂是より大なるはなし。

是が卽ち衆生本來成佛なるが故なり。心は天の丸無垢じやによつて、天を尊ぶは則天の道じや。たとへ私欲に暗んで居ても、矢張天の心でくらんで居るゆゑ、何の樣な愚癡者でも、我尊しと思うて居る。直に天の心で性は善なる證據じや。夫じやによつて本心を知らぬ者は、其所が無茶苦茶で、本心と私心と、心と形との道理が、不分明な故、私心の方で突張返り、皆跡で難儀する。夫故神佛聖人の敎の道を立てて、敎化し給ふは、その私心を引たくりて仕まふのじや。學問の道他なし、八宗九宗とも此我見をこじ放すより外に、成佛の道はないでござります。

京海道に向の明神といふがある。此神社に面白い繪馬が上つてある。博奕打が發起して、簺を金槌で打くだき、骨牌を庖丁で刻んでゐる、其傍に兩親が肩衣かけて拜んでござる、其跡から親類や同行と覺しき衆中も拜んでゐる、御內儀さまは、一向疊に打臥し手を合して泣いてござる、小い子も同じ樣に簺の缺を石で叩き碎いて居る、其博奕打の脊中から、御光が四方へさしてある、珍らしい繪馬じや。親が發起すると小い子までが、簺の缺を打碎いて居るは、惡い種の跡へ殘らぬ證據じや。御兩親が拜んでござるゆゑ、御光がさしてある、直に佛樣にな

悪いといふ御直の御説法じや。
旦那殿の慈悲深いは奉公する衆の大きな仕合、又人遣の悪い旦那殿も矢張奉公人の仕合、どうでも慘う使はれた程宿這入して勝手がよい、商賣を早う仕にせる。
嫁御を善人にするも姑御が譽かけるじや。「此方の嫁は洗濯物でも仕立物でも、其速さ手利でござります。火燵に火の埋け樣までがよい、朝まで鹽梅好溫い。私が履物と言ふと、大事にかけて呉れます」と、滅多無性に婆樣が嫁を譽めて廻るじや。さうすると、大概鼻聾な嫁御でも、餘り譽められて、せう事なしに善人になる。皆譽殺して佛にするのじや。葬送が皆この通じや。格別あや切のした人でもなけれど、死ぬると院號の居士號の禪定門の禪尼の或は信士の信女のと名を附けて、大勢が寄掛りて結構な御經讀みて譽そやすじや。此御經が直に心の譽言葉じや。夫を讀みて總々が譽かける。左樣すると大概な迷も、譽殺されて成佛する、能うしたものじや。今日生きて居る人でも同じ事じや。悪い事言うて譏るのも、善い事いうて譽めるのも、同じ口手間じや、同じ事なら機嫌好う暮すが德じや。

　腹立て無理言ふ人に口たれて足納さすが施餓鬼なりけり

たゞ餓鬼は負惜が強うて、自慢するが病じや、隨分譽めてさへ遣ると心好う成佛する。

は、家内の諸道具までが惡人になる。煙管が頭たゝいたり、箒が背中へかぶり附いたり、己が役前は勤めずに、皆傍法雜行していろ〳〵の惡作しをる。是が皆化けたものじや。我心の向樣で、此仕事した手が盜したり、筆先でくろめたり、恐いものじや。皆佛樣が鬼になつたのじや。佛と言ふも神と言ふも、水と氷の如し、善人も惡人も本は一水、心さへ改むれば、皆成佛じや。

雨霰雪や氷と隔つれどとくれば同じ谷河の水

魚と水とは未だ形がある、水と水とになつて、暮すのじや、朝から晩まで流れ灌頂、須臾もとゞまるものはない。逝者如レ斯哉晝夜不レ捨。其流を杖で搔廻せば濁る、濁るけれ共暫く見て居る間に、濁は消えて仕まふ樣なれど、泥の底へ沈んだのじや。惡は沈みて能う浮まぬ。其所々に滯りて說法する。さるによつて惡は說くに及ばぬ、御直說法じや。見事な錦手の茶碗、直も安いけれど叩いて見れば、音がビシヤ〳〵、此不返事では心もとない。又此方の茶碗は、チト不調法なれど、チヤン〳〵返事がよい、どちらを買うぞ、不返事は氣術ない、どうでも顏が脹れてある、矢張チヤン〳〵此方にいたしませう。八兵衛殿は不男なれど、返事が好いので貰ひ人が多い。權兵衛殿は男振は好いけれど、仕事嫌は賣口が遲い、折々頭痛腹痛の作病は、どうでも世帶持の

るはなほ功徳が深い。我事を我いふ故、間違はござりませぬ。其上で主人に懺悔、親御樣へ懺悔、「私は是まで、大きに心得違致し居りました。此後急度相改め愼みませう。幼少の時より、今日までの不忠不孝、どうぞ御慈悲に御了簡下りませ」と、眞實に懺悔すると、主人も親も安心する。腹の中のごもくを瀟洒と掃除をすると、内外清淨六根清淨、拂ひ給へ清め給へじや。

打ち明て見れば大きな駒が出た後は輕うてもとの瓢簞

もとの赤子になりて今日を暮すと、病けが拔けて心安い、其上憂災難もなく息災で、大體有難いものじやない。

米蒔いて米が生ゆれば善に善惡には惡が報ゆとぞしれ

麥蒔けば麥が出來、米蒔けば米が出來る、少も天地に間違はない。又麥でも米でも黍でも稗でも其外一切の穀物、實が入るほど、ゆら〳〵搖られて智惠附は、風で動く樣に見ゆれど、天地から身體を能うして下さるのじや。身體がようなる程、慇懃に御辭儀なさる。伸上るは追附不作になる御しらせじや。人も滅多に伸上るは、「追附不作になる、不作になる」というて觸あるくのじや。男でも女でも顏斗り美しいとて、仕事嫌は役に立たぬ。茶碗の底に穴の明いた樣なもので、夜尿たれは、どつこい遣つても間に合はぬ。跡からねだりに來る。惡い事を好む人

ど譏りても尻の來る氣遣はない。

「私は若い時から能く嘘をついたものでござります。親の物を折々盗みまして、買喰したこと度度で御ざります。喧嘩して折々たゝかれたこともござります。若い時から自慢過ぎて、赤恥かいた事もござります。節季々々には、見す〳〵無理と知りながら、不足錢ついた事もござります。人に銀出さして、禮は私がうけた事もござります。」

「お恥しい事でござりますが、御主人や親の御恩より、どうでも女房子は大切に存じます。これは義理を知らぬのか、但し恥を知らぬと言ふものか存じませぬ。それでも顔は人じやが、心は犬や猿の仲間へ、宿這入致して居りますかして、けん〳〵〳〵言うて能う人にかぶり附きます。蛇の修行も致しました故、執著深う人を恨みます。其上、のたくり廻つて、あへさがす故、人に愛想盡されます。此前鵺男と言うて見せた見世物は則私でござります。御歸が三文なれど今日は法樂じや、珍しい見世物とくと御覽なされて下さりませ。扨折々がざみや、蟹が見舞に見えます。どうでも横に歩行くゆゑ、同行衆じやとおもうて居るさうにござります。」何と、此様に我事を譏るは、懺悔と言うて大きな功徳じや、罪が滅亡びて助ります。朝夕佛壇で看經するも我身の懺悔じやけれど、今日靈々と生きてござる、諸佛諸人様方に、我身の咎を申上げ

餘り制止が嚴しいと、嘘を附いて恥を何とも思はぬ樣になる。是がしかる事を先にする故、皆盜人になる。「よそから鯛を一枚貰うた、けふの鯛は、氏神樣のお下りじやによつて、骨ぐち喰はにやならぬ」と言ふたら、何ぼ鯛でも誰も喰人はない。骨を食ふは惡を上げるのじや。骨を喰ふは犬の役、善い人のせぬ事じや。役者の番附にも、上り役者、下り役者はあれど、赤下手役者とは書きはせぬ。「阿房よ」と言ふと、ちやつと阿房顯して見せる。「まだもつと阿房見せうか」と、段々阿房盡して見せる。こちの心の通を向へ顯して見せる、能うしたものじや　阿房羅刹というて地獄の役人じや。餘り心安うするものじやない。

道レ之以レ德齊レ之以レ禮有レ恥且格、

譽る事を先にして、善事を引上げてやると、人柄がぐう〳〵とあがる。佛壇から御先祖の御悅、無造作なことが皆善人となる。善人と言ふは極樂の役人、每日々々極樂の體相を顯はして、今日を暮すは、有難い事の天上じや。どなたも今晚から仕かけて御らうじませぬか。甚道理の善いものでござります。又譏話は堅く御法度、この譏話と言ふものは、向からも思の外、氣を張りて返禮するものじや。後には通附になつて、每日々々商賣がはづむと、節季に差引が喧しい。爭の始りじや、止にするがよい。夫程言ひ度くば、我事を言うたがよい。我事は何ぼほ

いと、丁稚も隱居も、下駄も燒味噌も、一所になつて、家内が犬の期器の樣になる。夫では詰らぬ。何でも善いことばかりを家内中が善事帳へ附ける、少しでも善い事は記し、惡い事は一向に附ける事ならぬ。其帳面を月に一度づつ讀み上げる。佛壇へ御燈をあげ、其前で段々に譽めかける。「長太郎は跡の月より此月は、大分善い事が多いの。おりんも段々善い事が殖えるぞや。さて番頭どのきつう精が出ます。御隱居樣御悅びなされませ、此間藏の戸前の掃除して、鼠穴の吟味が有つた。大方番頭どのの差圖であろ、能う氣を附けて下さる、嬉い事じや」扨是からが褒美に古帶一筋、古襦袢或は下帶一、手拭一筋と、善い事に應じてそれ〴〵に褒美をやる。左樣すると、家内中が惡い事は言はずに善い事斗を附ける。「申し旦那さん、岩松どのが御使に往て早う戻られました、帳面に御附けなさりませ。おすぎどのが、香物の納屋を。奇麗に掃除してゐられます。久助殿が此樣にたんと、錢差を夜なべにして置かれました、お家樣が出て、私が言附けもせぬに、丑松が御逮夜の花を立てて參んじました」と、總々がよい事斗り言ふ樣になると、善い事だらけで、家内安全、旦那殿の留主の間に、盜する者がない樣になる、けうといものじや。

道レ之以レ政齊レ之、以レ刑民免而無レ恥

たものじや。性は善なる證據じや。又惡いと言はるゝと誰じやとて、心好いものはない。「八兵衞は一向埒明ずじや」と言うて見たがよい、其時は何の樣な顏になるぞ、をかしげなものになる。「内方のぼん樣は賢い」と言ふと、煙草盆引ずつて來て、「おじ樣ぱつぱ〳〵」といふ。「イヤモ彼奴は阿房じや」と言ふと、直に阿房になる。「コリヤ茶汲んで來い」というても、「いやじや〳〵」というて、逃げて行く、叱るより譽めるは言ひよい。それを滅多に叱る故、人柄が段段惡うなる。ソコデ善人すゝみ帳と言ふを拵へて、月に一度づつ譽かけると、人柄がずつ〳〵と能うなる。其樣に譽めると附上がすると云ふは、矢張惡をあげるのじや。すべて、商賣物代呂物に、大極上々吉、飛切無類などとするは、皆代呂物への譽言葉じや。一向役に立たずの寐息代呂物とは書きはせぬ。佛經にも、どの樣な赤凡夫でも善男子善女人と言うてある。彼も惡男子惡女人と言うたら一向寄附人はない。また善男子善女人に違はない。性は善なり。涅槃經に衆生本來成佛なるが故也。畢竟人欲にうろたへて、赤凡夫に成つて居るでこそあれ、本來の株たは能う離してある。夫を人欲同士が背比して、惡人を仕込む故、宿這入してから埒が明かぬ。丁雅は十一旦那は五十、四十年違うてあるを、同年でもの言うては合點せぬ。嫁御は二十一姑御は五十、是も三十年違うてある氣で相談せにや、いつでも口舌が絕えぬ。其噺分がな

旦那寺の石塔も歪はないか、こけかゝつてはないか、水が上つてあるか、花が枯れてはないか、花の枯れた石塔は、内が大方が干からびてあるものじや、御用心なさりませ。」扨これ程たんとある石燈籠や人間じやが、みなちつとづつ、狂がある、滿足なは少いものじや。みな住よし様の御託宣、有がたい事じやないか。

松風の聲のうちなゝ隱家は昔も今もすみよしのかみ

此松風の聲のうちなる隱家とは、何處のほどぞ、我なしに成つて、松かぜのこゑのうちへ這入りて仕まへば、いつでも住よし様じや。

善惡と思ふ心を振り捨てたゞ何となく住ばすみよし

たゞ善惡と思ふ心が我じや。此我さへ打殺して仕まへば、性は善なり、天道次第でよい事斗が殖る。家内が善人なれば住よしぐらし、富貴繁昌子孫長久の基、家内を善人に仕様はどうじや。子曰。擧レ直錯ニ諸枉一則民服。擧レ枉錯ニ諸直一則民不服。善事をあげて惡事を其儘にして置くのじや。肴を喰ふに、よい所の身の所ばかり喰うて、骨の所は犬や猫に喰はすのじや。それを骨の所斗しがむやうにする故、咽に立つてやかましい。惡い事は捨てて、善い所斗あげるじや。「八兵衛此間は、ひどい精が出るの。」「ハイ〳〵」と顏附がにこ〳〵〳〵する、能うし

松翁道話二編　巻之下

田舍物が住吉の反橋を中程まで渡り、向へは行けぬ、こはいというて跡へ戻つたといふ事じや。むかうへ行くも跡へもどるも、同じことじやけれど、大きに違うた樣に思うて居る。死んで佛になるとおもひ詰めてゐる人と、生ながら此身のなひことを知らぬ人と、同じ事なれど、餘程違うた樣におもうてゐる。じやに依て、むかうへはこはがりて能うゆかず、跡戻する、同じ事をしてゐるのじや。それゆゑ御神託に、「有るのないのとおつしやるやうな、御人體じやござりませぬ」と言ふ。又松原に並んである石燈籠が、一々說法してござる。中にもこけかゝつた石燈籠が、「此樣に歪が來ると火をとぼすことがならぬ、たれも世話のしてがないと、此儘こけて仕まはにやならぬ、難儀なものじや。先刻濱邊へ御座船で、おやまや藝子たいこ持雇うて遊ばしてもらふ客衆が、此邊をそは〱連立あるき、此石燈籠は危いものじや、滅多に側へ寄るなというて通るゆゑ、私よりこなたの身上が危いと言うたけれど、聞かぬ顏して行過ぎたが、あなたがたはどうじや。若しこけかゝつてはないか、人が危がりてゐるやせぬか。此序に

我に智恵なし、忠孝をもつて智恵とす。
我に奇特なし、無事をもつて奇特とす。
我に方便なし、柔和をもつて方便とす。

王陽明曰く、

目に體なし、萬物の色を以て體とす。
耳に體なし、萬物の聲を以て體とす。
鼻に體なし、萬物の嗅を以て體とす。
口に體なし、萬物の味を以て體とす。
心に體なし、萬物の感應の是非を以て體とす。

目といふも、鼻といふも、みな體なき事をかんがへて御らうじませ。

との間で、ほどなく地獄へ打ちこまれ、ハアスウ〳〵苦しむ有様、久しう餓鬼畜生道にゐたときの臭氣が拔けずにある故に、地獄の苦しみのがれがたし。諸念の源のかぶたが離れずにあるゆゑ、わづかにも念が殘りあれば、其念が世界へ散溢れて、ちつとでも便があると、芽を吹出す。「おれがよいか聞いて下れ。」たゞ人に譽められたいが難病業病、其腐骸を結構な縮緬羽二重につゝみまはし、御腹の中の土產は何々ぞ、慈悲もなければ、情もなく、たゞ欲い惜い憎や可愛やの、がらくたもの斗を結構な重箱に入れ、結構な袱紗に裹み、擔げまはる樣子を、とつくり本心の目鑑かけて御らうじませ。額に角をはやし、丸はだかに虎の皮のふんどし、股暗ばつかり張込んでゐる。此役にも立たぬ所へ贅をこきたがるゆゑ、三界城を建立す。城とは何ぞ。我といふ隔をする故、家内が住みにくい、それで世界にもすみ惡い、兎角我なしにさへなると、一家親類住吉ぐらし。

住吉の御門が十一所皆扉なし、御本社は土間にござる。此方と對座して御逢ひ下さる、平等一枚なるの儀を訓へてござる。

我に神體なし、慈悲をもつて神體とす。

我に神力なし、正直をもつて神力とす。

る有様を、とくと考へて御らうじませ。元來ないもせぬ我をこしらへたゆゑの思慮ばつかりじや。其思慮に貪瞋癡といふ名を附けたものじや。名ばかりで諸行無常のひゞきあり。一向迷はぬやうにしてやろというて、葬禮の時は鉦と錀と鈰とをたゝいて、とんじんちん、まだ其上に鐃鈸と太鼓とぐわんどんと打鳴して、泣たり笑うたり、音ばつかりでして見せる。

ぼんなうも菩提も釋迦の口がなるこゝろに二つのかはりあるかは

とは、聲にかはりはないといふ事じや。是此人も一生の間やかましう言はしやつたが、此やうな音ばつかりになられました。とんじんちん、思慮ばつかり、とんじんちん〳〵。此様にすると、死んだ人の祈禱にもなるやうに、思うてゐるけれど、みな跡に殘りて居るものへ見せしめじや。此通じやぞえ、追附番が當りて來るぞ、御用心々々。誰方も御合點かな。活た人を棺に入れて、死人が舁いて行くのじやぞえ、御得心かな。夫も知らずに日がな一日、貪瞋癡の三惡道を味々こふ味劫業、目が舞ふたら灸すよ、氣が附いたら目を明て見たがよい。長うもゐぬ此娑婆を、千年も萬年もと思ひ馴れた心から、嬉しい事悲しい事、氣の強いときもあり、氣の弱いときもあり、其外爭嫉妬色々さまぐ〵な事を味々劫業して、しばらくは人道へ出て、人におれそれ禮義を盡しゐる時もあり、又天上の果報を得て、ヤレ嬉やと思うたも、ちつ

世の諸佛が禮拜してござるに違はない、夫がみえぬとは三悪道の地獄廻りじや。此三悪道といふは、衣食住の三つより起る。天地のあひだに生を請くるもの、此三つの外に仕事はない。上、天子様より下庶人にいたるまで、此衣食住の三つを、わが分に應じ、ほどようつとめ守りさへすれば、天變地妖もなく、天下太平五穀成就、萬民快樂子孫長久じや。此外に人に用はない。

此大道を知らぬものは、たゞよいものを身にまとひ、うまいものを喰うてあそんでゐたい、それゆゑ金錢のほしいと、博奕と、けんくわと、色事とを仕事のやうに覺えてゐる。ぜにかねのほしいは、貪欲喧嘩瞋恚愚癡ゆゑ色と酒に迷ふ。貪はむさぼり、瞋はあらそひ、癡はうろたへもの。

先うまいものをくひたがるは、御腹中のよい上じやによつて、甘いものでなければ喰へぬ。喰うたうへにもくひたがるは、貪欲のむさぼり、これが直に餓鬼道のくるしみ、よいもの著て人にまけまいとする、瞋恚のあらそひ、これ修羅道のたゝかひ、よいもの著てうまいもの喰うてはらが大きうなると、仕事がいやになりて遊びたい、のらくしてろくな事は思ひつかぬ、此愚癡なたねが畜生道へ宿這入、何とこはいものじやないか。此貪瞋癡の三悪道にうろたへまは

順に禮拜して廻るゆゑ、これをまことの順禮といふ。

第一ばんに、

　不斷らくや岸うつ波は三熊野の那智の御山にひゞく瀧津瀬

小人は、

　不斷くるしや岸打波は身のうへに何ぞ口舌がなうて叶はぬ

脊中の負連は平生二親を負つれる心持、兩方赤いは二親のある人、眞中のあかいは片親ある人、みな白いは兩親のない人と、看板かけて此身はいつでも親子一體、御老人方を同道するゆゑ、老つれるともいふ。大事の此身は、本來我なしの無東西、いづれの所にか南北あらん。人我の隔ない事を悟るがゆゑに十方空、迷ふが故に三界城とは、此順禮が逆禮になるゆゑ、親子兄弟一家親類、銘々城をこしらへて、貪瞋癡の軍が始まる、貪欲とは飯椀の内から白眼合する兵糧責、瞋恚とは一家親類知音近附、たがひに火花をちらしあらそふ火責、愚癡は糞責、糞を熱してたがひにかけあふ内證のことまでも、たがひにあらはしいどみあふ、きたないくさい仕ごとじや。毎日々々三惡道の大合戰じや。どなた樣でも御腹中におぼえがあらば、ちつと御休みなされませ。又覺の御方樣がたは、よう目をさまして御らうじませ、朝からばんまで、三

豆が嫁入して往たけれど、格式ばつかりで正味の所がすくない、其くせ付屆ばつかりに、張込んで、終には豆が喰はれて仕まふ。我分限より不相應な目上な人に追從して、其返禮に身の上仕まふも、猫めが爪を隱して酒肴をこしらへ、やさしいこゑを出して、音頭とると、ねずみが調子に乘つて汗水になつて、をどり居るやうなもので、

〻だまされてまだ其上に精出してをどりて舞うてそして喰はるゝ銘々どもは、どうじやな。汗水になつて、をどりてゐる株じやないかな。らつちもない所へ義理ばつて、ボン〳〵してゐやせぬか、喰はれてゐやせぬか、どなたも御腹の中と相談して御らうじませ。銘々心得事じや。兎角花美な心をやめにして、めい〳〵の宗旨々々に順ひ、先祖を大事家業大事にしてさへゐれば、當分は埓の明かぬ樣に見ゆれど、家内安全子孫長久じや。何にも氣遣なことはない。是に迷ふがゆゑに三界城、これを悟るがゆゑに十方空、三千世界が廣廣となつて、朝からばんまで西國順禮、一向宗なら二十四はい、法華宗なら千ケ寺參り、四國八十八箇所も、日本國の囘國も、毎日々々朝からばんまで、順禮をしてゐるのじや。親父樣の御機嫌はよいか、母さまどこも御惡うはございませぬか、御得意樣方の御きげんはよいか、商賣に無理はないか、家内の者をむごうはしてゐぬか、一家親類と不和にはないかと、毎日々々

や。方違の御札、張所が違うてある、銘々きつと胸に張るのじや。金神のたゝりといふも、金の神のたゝりじや。鍋かける所へ釜をかけると、へついが損じる、兩方ながら無理してゐるのじや。身の分限をわすれたが、大きな方たゝりじや。

身の業のよきにうなづきあしきにはかぶりをふるがかしら役なり

よいことにかぶりかぶりして、悪い事に合點々々するのは、首のほねが違うてある。難波へ往にや直らぬ、みな方違じや。雀と鷹と念頃にすると、仕まひは喰はれて仕まはにやならぬ。

聖人のをしへをきかずつひに身をほろぼすひとのしわざなりけり

猫とねずみと酒盛をするやうなもので、あぶない仕事じや。醉が廻ると、どこぞでは、ねずみがしてやらるゝけれど、猫めもとつて喰ふはずの鼠を近寄せて馳走するは、心に何ぞ一物あるゆゑじや。其奥念も知らずに、鼠が猫に手寄求めて、追從輕薄するは、鼠も心の内に大きな望があるゆゑじや。終には身も家も、してやらるゝ、あぶないこはい仕事を無理にしてゐるのじや。

まめは豆同士、あづきは小豆同士、緣組すれば、何の申分はないことを、くるみと豆と無理な緣談をとり結ぶゆゑ、いつでも仕まひに口舌が出來る。くるみの大きな家柄を目あてに、なた

百目持つて行きては焦附き、五百目持つて行きては焦附き、壹貫目もつて行きては焦附き、段段衣類諸道具から、家屋しきまで焦附して仕まひ、そろ〳〵一家親類のものまで焦附し、後には、知りもせぬ他人の銀に、歩を出し廻りて焦附かす、いかい世話やきじや。みな此方から焦附に行くのじや。

鶏を竹の皮か、はうろくの裏に附けておくと、蠅がひつ附に來るやうなもので、手足ばつかりひつ附て、ヒイ〳〵いうてゐる蠅もあり、其中に、すこし知惠ありさうな蠅は、にげていぬもあり、又そばへよつたら、ひつ附とおもうて、より附ぬはへもあるけれど、何をいうても、大勢むらがり、にぎやかなものじやによつて、おれや、そばへはよらぬ、遠くから樣子を見るばつかりじやと、自身ばかり、能う合點して居ながらひつ附もあり、又いつそ五體うちつけて、息のせぬのもあるけれど、一蓮托生竹の皮ぐるめに、流れくわんぜう、埒の明いたものじや。能う考へて御らうじませ、米は大切命の親じや。其命のおやに、命をとらるゝとは、どうしたものじやな。又藥は命を助けるものじや。米も藥種も命はとりはせぬ。みな命を助けるものなれど、たゞ何十何匁何分といふ直に迷うたものじや。みな直に迷ひ、名に迷ひ、かたちに迷ふは、みな用ひやうのわるいゆゑじや。愛欲の門違で、命を仕まひ身代を仕まふ、皆方たゝりじ

ずきじや。世に大切な御先祖の衣類著そくを、此やうな物は外聞がわるいの何のというて、雜巾にしたり、しめしにしたりする家は、仕廻は終に家屋しき諸道具まで、雜巾や、しめしにして仕まふ。みな御先祖の汗あぶらを、わがものとおもふゆゑ、われ斗利功者になつて、山の大將おれひとり、明けても暮れても、何十貫目の何百貫目のと、銀目ばつかりおぼえて、何十貫目何百貫目、〳〵、寐言にまでいうてゐる。子供が芝居見て戻りに、とてからかち〳〵と、太鼓もなしに口でばつかり、とんから〳〵いうて居るやうなものじや。人は笑ふがすぢふが構やせぬ、己は金持じや、かたよれ〳〵と世間へひけらかしたい、難儀な病じや。此やうに、そりかへりて、あるく樣になると、堂島から綱附けて引つこかしかける、天狗のなりかゝりじや、屋根の上へあがりて、アノ雲がかうなると風になる、又どうなると雨になると、雲や風を相手にして、相談してござる内に、貳分五厘五分五厘六分といふ、聲の響に、火のみから、ころりと氣絶して落ちたり、目むいたり血を吐いたり、身代も頓死頓病、夜の八つ時分から起きて何をうろ〳〵考へ出すのじやぞ。わつけもない事、あつたら骨を折たものじや。今日の家業に其半分精出したら、もそつと利功な事が出來さうなものじやけれど、身苛とりが、みいらとりに行く樣なもので、あの人は焦附いたけれど、おれはめつたに焦附きはせぬというて、三

じや。其時の御苦勞の御姿ををがまんとおもはゞ、今日丁稚衆のたばこ盆掃除するのや、重荷もつてスゥ〳〵いふ衆達を見ておもひ合はし、其苦勞がつもり〳〵て、今日の何屋何兵衛樣じや。

近來茶湯など、もつぱらはやる。是も仕やうに依つて、其家の御祈禱にもなる事じや。其仕樣はどうなれば、御先祖の宿這入なされたときの、古道具をしき一枚茶碗一つ鹽入の水壺のといふ類をとり出し、御命日や御逮夜に家内殘らずうち寄つて、宿ばひりのときの、たつた一つの古茶碗に茶をたてて、をしきには、あられ干飯の口とり、大和風呂にかけ土瓶、擂鉢の水溢も風雅なものじや。床のかけ物は御先祖の御筆のものを表具とし、古じゆばん古帶の切々を集め、一文字風袋となし、親子兄弟夫婦一家親類うち寄りて、御先祖がたの御不自由なされたことを、おもひ出して噺合ひ、今日の冥加を報じつくすを、これを眞の茶の湯といふ。毎日每晚でも茶の湯が出來る。世に大切な處の御先祖の御道具で、家内が御恩を報じ盡すのじや。茶の湯も心得がわるいとおごりになり、すこしでも、錢の高い道具を賞翫するやうになり、知りもせぬ人の道具を買集め、方々で身上つぶして來た道具を重寶してゐる、此井戸茶碗は堀出じやのと、不吉なものばつかりを集むる故、終には身上ほりこんで仕まふ。わるいもの

糞や小便呑された。「道理でいろがわるい。」みな御光のとられたのじやによつて、旦那どのの御光がつよいと、子孫のすゑまで、光明がさす。此家の主はたれじや、あみださま、法華宗ならば妙法が家主、御先祖が家主、家内は佛壇ぐらし、佛壇の内でけんくわすると、御先祖が家明いひつけさつしやる。御亭主は當寺の住職、家屋しき諸道具は御先祖の什物、一つも麁末にする事ならぬ。すこしでも紛失させたら、住持はからかさ一本で寺ひらかにやならぬ。家屋しきばかりじやない、この體も御先祖の預もの、それを我ものにすると、たちまち無間地獄のくるしみを請くる、おそろしいことじや。余所へ往て馳走にあふもみな御先祖の御光、戻つたら直に佛壇へ御禮申すのじや、忘れまいぞえ。御先祖の宿這入から、今日まで何萬日になるぞ、毎日毎日何萬日の御回向じや。開張まゐりして御らうじませ、神樣や佛樣や祖師樣がたの御一生御持なされた、錫杖のつゑの頭巾のと、みな御身にふれられた袈裟衣の類じや。銘々ども御先祖御身にふれられた、衣類著そく古じゆばん、手拭きやはん、わらぢかけなど、御命日にとり出して、其ときの御苦勞を、今日のありがたさに、おもひくらべて、大體御禮申さにやならぬ。いづれの御先祖でも、腹の中から錢銀や道具諸式もつて、うまれた御かたもない、みないろ〳〵さま〴〵と難行苦行、人にやとはれたり、重荷持つたり、ひもじいめ寒いめなされた汗あぶら

其ふえたを光明とも御光ともいふ。あみだ如來の御光が四方八方へさしてあると、又世界からも、有がたいというて、御光がさし込む、雙方たがひに、あひさしの御光で持つてあるのじや。あれが片一方斗じやもたぬ。又旦那どのの御光が家内中へさすと、又家内からもさし込んで、旦那をたすける。御光が強いほど、家内ばかりじやない、一家一門近在近國、得意がたは勿論、諸々國々からもさしてある。江戸長崎中國北國四國九州皆あみだ樣の御光が、あたまのぎり〳〵から、足の爪先まで、足袋となり草履となり、雪蹈ふんどし下駄ゆもじ、手拭頭巾帶著物、鬢附あぶら元結紙、腹は諸國の藏やしき、どこの米食ふも知れぬ。女中がたは櫛かうがい、かんざし丈長其外のやとひ道具、たばこ菓子類酒肴海山里の珍物、かずも限らぬ御光佛、此身はすなはち法身方便の尊像、家内の諸道具八百萬の神達、十萬分身三世の諸佛、みな御光佛じや。よつてあみだ樣に御慈悲の心がないと、諸國から御光を引つたくつて仕廻しやる。さうすると人が相手にせぬやうになると、頰かぶりして、しほ〳〵とひとりあるくは、みな御光のとられたのじや。「權兵衞はどうしたのじや。」「アリヤ此間親方から暇が出た。」「道理でをかしい顏して居ると思うた、本に影がない。」これ光明のとられたのじや。「どこそこの息子どのはどうしたのじや。先頃から内を出てゐる、何としたのじやえ。」「彼じやわい。」「彼とは何じや。」「ハテ馬の

ぬは天、ものを請けて殖して戻すは地、其ふえたものは人、此三を合して一乘の法といふ。神道では、陰陽冥合、蒔生といふ事、是すなはち、天地自然の御すがたじや。此御姿を如來ともいふ。

如來は如々の中より來るというて、此虛空の內から、によつと出たものじや。見るも聞くも、覺えるも知るも、によく〳〵と殖えるばつかり。今まで何ともない、此所へ扇をによと出せば、扇と知るものがふえた。音がすれば、何のおと彼の音と、知るものがふえて出る。なんと有がたいことが、むかしからあるじやないか。此見聞覺知するものを知りてごらうじませ、目も鼻も身も心も有るものじやない、それでも死んだものじやない。

　過去よりも未來へ通るづぼろぼう雨ふらば降れ風吹かば吹け

あくびしたり、くつさめしたり、のびしたり、何と大きな男じやないか。一匁の銀預けると、六十萬億那由多恆河沙貫目で御返濟なさる、慥な借人じや程に、とてものことにあなた任になさりませ。三千世界と同年になつて、天地一ぱいの生佛、よい事がふえるばつかり、其かはりに惡いことも又ふえるぞ。あなた任にしてゐると、よい事ばつかりがふえる。どちらなりと、あなたがたの御望次第。

松翁道話二編　卷之中

上土にいつの頃より麥一穗

天地が生ものゆゑ、少もゆるみがない。少ばかり水があればぢきに魚が生ずる。少ばかり土があれば直に草が生ずる。去年正月に神明樣のしめ繩に雨がかゝり、土ほこりがかゝりて、藁の勢氣が殘りてあつたやら、芽を出したれば、しめ繩に稻が出來たというて、大きに人群集が有つた。みること聞く事直に手足がはえて動きはたらく。人目を忍べど、みる目、かぐ鼻、すこしも油斷はならぬ、おそろしい事じや。

よい事でも、わるい事でも、ふやすが天地の御商賣なれど、わるい事は世界の妨となり、人には大きに害となる。それゆゑ天地の功德が消える、よい事はふえるほど世界の扶となる、ソコデ御舍利樣がふえるといふは、天地ははたらきの大きいことをいふたものじや。わづか麥一粒天地へあづけてごらうじませ、凡貳合ほどで御返濟なさる。一匁がつかひものして、五貫目ほどのため、入れて下さるは、天地より外にはない、天地がための天上じや。物を施して恩に著せ

乏種でも、地獄種でも、極樂種でも、

蒔かなくに何を種とて萍の浪のうね〳〵生ひしげるらん

よいことでもわるいことでも、たねのとほりに花が咲き、實ができる。

氣をつきやいの、おれにばつかり腹立てさせて、何をうろ〱してゐるのじや」と、がみ〱がみにゑかへる。番頭どの口のうちで、「あたいま〱しい」と、ほやくを聞いて、「其やうなぐづぐづした事では埒があかぬ。もつとづつはらたてにや、こちの商賣はいかぬ」というてござる所へ、表へ御客がある、手代衆が「よう御出なさりました、マア御上りなさりませ。」「イヤサ此間買ひました代物、目をかけてみれば貳百目たらぬ。アリヤどうしたものじや。」ソコデ手代衆が「めつさうな事おつしやれませ、あなたの見てござる通、私方では、りんと目を改めて上げましたに違はない。」「イヤそれでも目が足ぬゆゑ戻します。」「イヤ一旦賣附けた物、請けとらぬ」と、たがひにあらそひ、腹の立あひ、所へ旦那どのが出て、「左樣ならば中とつて、折合にいたしましやう、夫で御了簡なされませ。」客もせう事なし、腹立て仕廻つて、相談が究る。全體此うちには請取千木と渡し千木と、二挺こしらへてあるゆゑ、いつでも仕廻は喧嘩になる。あちらむいてゐる人を、足小股とつて突倒す工面ばかりしてゐる。これが有爲の願じや。無理無體に金をもうけんとするゆゑ、無理無體に金がきえて行く、人をつき倒してもと、正直におもひ詰めたものじや。其かはりに腹立てる事は何ともおもはぬ、腹立てる商賣じや。大がい此くらゐの種を蒔かにや、缺落分散心中身なげ首くゝり、子孫斷絕の花が咲かぬ。乞食種でも、貧

がお助りなされて、御悦に此方の願をかなへて下さるやうにおもうてゐる、やつぱり、ためをまつ心が離れぬ、みないつはりの信心じや。佛様に花をあげるに、根を切つて上げるは、心の根を切りて上げるといふ事で、これが無爲自然にいたる事を勸めるのじや。無爲とはわれも知らずして人を助け、われも助かりてゐる事がある、是が何のためといふを知らぬゆゑ無爲といふ。又有爲とは、わが心に覺ゆるゆゑ、形の上においてくるしみがある。たとへば途中で乞食に錢一文やつても、有難いといはぬと、どうやらふり返りてみる心がある、これが返禮をまつの心じや。有爲の病じや。此有爲の病があるゆゑ、たまく人の世話などして、おれがこれほど世話するを、何ともおもはぬといふて腹立てる、あつたらことじや。其やうに恩に著せる心なら、始から、世話せぬがよいけれど、有爲を待つの仕業は、みな形にくるしみが附いてまはる。此道理がわからぬと、腹立てる事を年中商賣のやうにおもうてゐる。ソコデ家名も腹立や、朝から晩まで腹立てるが商賣じや。大きな看板かけて、現銀大安賣腹立所、家内殘らず腹の立合、にぎやかな商賣じや。朝むつくり起きると、旦那どのが、ちやんと帳場にすわり、「コリヤ長吉きのふ權兵衞殿の所へ往て何といふたぞえ。」「ハイかやうく。」「其やうな埒の明かぬことがあるか。今一かへり往てこい。獄道めが」と、朝の間から腹立てかける。「見世の衆も、ちつと

なこともあるまい。其夢のやうなことに骨をらすが外道の法じや。世にまた知識方の入靜とい
ふことがある。是は格別やうすのあるものじや。これにも樣々の御願力ある事なれど、大體は
天地の御心をうけ繼給ひて、大慈悲心をおこし、修し得たる佛心を、末世の衆生に送らんとて、
入靜し給ふ事もある。此やうなおかたがたもなければ、世を導き人を救ふ役人がないやうにな
ると、世界が夷國のやうになりて、義理も法も失はせて仕まふ。スリヤこれみな世界國土のた
めの大願じや。おのれ一人前の榮花を願ふ外道の修行とは、大にわけの違うた事じや。此外道
の法を、今日の上でみれば、借錢のなるだけ借錢して、世間をあつかひ、其ことわりにあたま
をさげ、腰をかゞめてあやまり廻り、どうやらかうやら、みなが、聞届けて下さつて、相すん
だ。「ヤレ〳〵うれしやありがたい。」これから皺延しに借錢氣のない所へいて、贅八百をいひち
らし、さも美々しいすがたをあらはして、活計歡樂とする。これが一旦くるしき火定に入つて、
來世の果報を願ふ外道の法と同じ事じや。此やうな廻り遠い果報を願はんより、人には人の道
がある、しかも心安い事じや。其道筋さへ、つとめてゐれば、何の氣遣なく、此身はひとり助
るやうにしてあるを、知らぬ故、我身のためばつかりはかりて、却てくるしむ。夫ゆゑいつま
でも夜があけぬ、暗いものじや。神佛へ參りても、此方から精出して拜んで上げたら、佛さま

小人の常、たゞ欲深いゆゑ人があいそつかす。天道に見はなさるゝと、ろくなことはおもひつかぬ。たゞ此方の勝手ばかり、身勝手は我まゝ、わがまゝは迷うたのじや。迷ふといふは此からだを、我ものにしたゆゑじや。何ぼわがものにしても、我ものにする事ならぬ、だん〳〵年が寄る皺が出來る、白髪にしられたり、齒を拔かれたり、腰をかゞめられたり、長才坊にしられても、ねだりに行く所もない、腹立てることもならぬ。其あげくに死んで仕まふと、燒くか埋むかどうもほかにしやうもない。夫をどうぞ仕やうもあるもののやうに、おもうてゐるゆゑ、何をいふも金のことじや、金がなければどうもならぬと、こやかましうにえかへる。たとへ金銀が澤山にあつたとて、どうするゑ、ゆめのごとく幻のごとく、泡のごとく、影のごとき、ないもせぬ此からだを期にしてゐるゆゑ、なすことする事茶碗に一ぱいの水で、大火事消すやうな積ばつかりしてゐるのじや。能う考へてみたがよい。熱に浮かされて、たは言いうてゐるやうなものじや。

外道の法に、此世で火定に入つて、來世の果報を願ふといふことがある。火定といふは、生きながら火の中へ入つて命を終り、來世にわがおもふ通の榮花がしたいといふ願じや。たとへわがおもふとほり榮耀榮花にしたとて、高が二十年か三十年のあひだの事じや。それもきつと慥

衆丁稚どのまでが、毎月親里へ見廻狀出すやうになると、親達がよろこび安堵するゆゑ、子も安心して奉公が大切に成る。著物を疊むに、襟もとを持つてたゝめば、心安うたゝまれる事を、をくびや裾を持つてたゝまうとするゆゑ、しわくたになる、親御樣方を麁末にするは、しわくたにするのじや。夫で家内がぐわたつき出す。親捨てう親捨てうと、親を捨て居るのじや。親御樣は座敷へすてられ、つれない事じやというてござる。座敷の小隅や藏の二階で泣いてござる。御亭主が親御を捨てる氣になると、家内中が隱居樣をのけものにして、相手にせぬ。丁稚が隱居へ遊に往たのまで、旦那殿が腹立てしかりつける、「何でうろ〳〵隱居に往くのじや。かさねてから往きをつたらきかぬぞ」と、けん〳〵〳〵と犬の寄合のやうになる。それで丁稚までが隱居樣をけん〳〵〳〵云ふ。隱居樣は捨てられながら、ちつとなと家内のためになりそうな事いうてはしかられ、みなの氣のつかぬことを氣をつけてはしかられ、すたるものをひらひ廻りてはしかられ、「めんよう年寄といふものは、ぐづ〳〵〳〵、役に立たぬ事ばかりするものじや」と、息子どのも嫁も一つに成つて、おだてるゆゑ、隱居樣は、うろ〳〵〳〵してござる。目もあてられぬ、いたはしいものじや。家内の見まつべして儉約するは福の神じやに、其福の神いやがりて貧乏神信心するのじや。不仕合な筈じや。身上が惡うなるほど喧嘩がはじまる、是が

ふ。すべて世界の事はみな期を以てする事なれど、是に二色の品がある。世界のために期にすると、おのれが爲をあてにするとの違がある。これをたとへてみれば、醫者どのが病人をみて、どうぞ此病苦をたすけてやりたいとおもうて、藥をやると、どうぞ此病人本腹さして、我手がらにせんと思うて藥をやるとは、同じあてめで大に違ふところがある。これからモウ一二三だんも下卑ては、頭から藥禮をあてにして藥をやるがある。みな同じ藥なれど病人へ利き道が大きに違ふ。また醫者どのの身にこたへる果報も大きに違ふことじや。みな本をすてゝするゐばつかりの算用で居る。

植木の枝や葉に水かけると、根の所へ水かけるとの違がある。麥の穗の所や葉の所へ糞かけると、枯て仕まふ。根本へ糞さへすれば、枝葉迄行屆き、よう實る。

よしあしの枝葉のせんぎ入らぬものとかく心のねを知るもがな

本心を知るといふも、別のことではない。わが本來の本の心を知るゆゑ、枝葉にとり附くまよひがすくなう成つて、心安う家内が治まる、はなはだ利功なものじや。これまでそれほどにも思はなんだ、御先祖や親御樣方が實に大切になる。これが則根に土かふのじや。家内繁昌子孫長久に違はない。一家中から子孫の末迄和合して、萬事に仕あはせがよい。内外の奉公人

子を養子にやつても、實の親の方から、何のかのといふは、みな紐附けて、引ずりもどすやうなものじや。丁どこがね蟲が首綱を引かるゝと、じゆつながりて、何になとしがみつく、其しがみ附いたものぐるめに、引もどさるゝ、能うしたものじや、何ぼも世間にある事じや。其しがみつくものとは何ぞ。或は娘にしがみつくか、錢金にしがみつくか、何なりとしがみついて離しやせぬ。

此前或豪家であつたが、其内へ子どもから、丁稚に來た二才あがり、親かたの娘子にしがみ附いて、離さぬ、難儀なものじや。世間にしては、外聞あしく、夫を内證であつかひ、娘をこじはなしたもある。また娘も銀も家屋敷までも、ひんだかへて、出たこがね蟲もある。これらは長範より咎が重い。また、娘をよそへ嫁にやるというても、同じ事じや。先嫁にやるなら、かならず生きてもどるなと、かたく云附けて、紐を切つてやるがよい。もし腰に紐がついてあると、向の家がありがたうない。それですこし我氣に入らぬことがあると、なんのかの〳〵と小ごとをいふ。その度々に親もとから、それはすまぬ、是は聞えぬと、紐を引くゆゑ、娘もうろたへ出し、あちらへ行てはうろ〳〵、こちらへいてはまじ〳〵、猿の狂言見るやうに、わけもないものにして仕舞ふ。是が皆ものごと、期にしてする事ゆゑ、不調法なものになつて仕ま

よし野川其水上を尋ぬればむぐらのしづく萩の下露

わづかな葎の雫萩の下露が、後には船さしても、わたられぬほどの大河となる。こはいものじや。みな銘々の好む所を建立する。蓼喰ふむしも、すき〴〵じや。此夫婦の衆は親ずき、そのほか女房ずき、妾ずき、道具ずき、仕事ずき、のらずき、欲ずき、損ずき、あまい物ずき、からいものずき、金ずき、自慢ずき、卑下ずき、癪ずき、年中癪じや癪じやというて、居る人が有るものじや。この外いろ〳〵さまざまの、ものずきがある、みなむしの業じや。その内親ずきが、いつち理詰がよい。次第々々に富貴の身となるが、どなたも御のぞみの方はないか。また、當世養子と跡とりとがある。養子といふは、養育しられた恩を、親へ報じかへすを、眞實の養子といふ。また跡とりといふは、たとへ眞實の子でも、親御の御存命の内から、どうしてこうしてと、思うてゐるがある、是が跡とり、異名を油ねぶりというて、尾が二つにわれてある。また向の身上ばつかり、目あてにして居る跡とりがある。熊坂長範が子どものとき、こがねむしといふ蟲の首を、糸でくゝり、錢ばこの上に乘せて、あそんでゐたれば、そのむしが錢ばこの穴へはひつた。いとを引あげたれば、そのむしが錢をだかへて居た。それからおもひついて、入物の内にあるものを、とる事工夫仕だした、これが盜人のはじまりじや。

とおもふ眞實心から、天道樣より御授け下さる榮花の身、猩々のうたひに、我親に孝あるにより、次第々々に富貴の身となりて候。有りがたいことじやぞえ。あなたがたはどうじやな、親に孝あるによるかな、世間に何ぼもあるぞい、百兩所か、一錢も半文も出さずに、親御さまの跡を、大きな顔をしてぬつくりと、丸どりじや。其御禮には強い顔して白眼だり、不返事で買うてゐる、勿體ない事じやぞい。此席には其やうな御方はあるまい。つひに一日親を安心させた覺えもなうて、我子には孝行させて、かゝらうとは、あんまりあつかましいわい。種もまかずにおいて、モウ大こんが出來る時分じやがというて、精出して堀てみるやうなものじや。出來る時分は出來る時分じやけれど、種が蒔かずにある。土ばかりでは出來はせぬ。まんざら種を蒔ぬでもない、すねたりして置いたゆゑ、息子が目むいたり白眼だりする、わるい種を蒔いて置いた、俄に蒔直しもならず、のちには息子どのが、金箱にかぶり附いたり、家をゆすぶつたりして、徽塵にぶちくだいて仕まふ。あれほどの種はまきはせぬとおもふけれど、段々日合のかゝつてある事は知らずに、腹立る、とう〳〵家やしき諸道具まで、天道樣に引つたくられてしまひ、夫から何になろやら知れぬ、こはいものじや。其始は親御樣にすねたり、不返事したとゞこほり。

するぞ。」「ハイ御夫婦で代金百兩じや。」「ヤアそれは高いものじやのう。我等宿這入して間のないものじや、ちつとまけさつしやれ。」「イヤ〳〵現銀かけ直なし、一兩も負りませぬ」といふを、だん〳〵直切て八十兩まで附けた、「デモまけぬ。」「そんなら先代呂物を見せさつしやれ。」「ハイ左やうならば明日どこそこまで御出でなさつて下され。私が迎に出ませう」と約束して歸る。扨翌日金こしらへて夫婦つれ立ち約束の所まで往たれば、きのふの人が待つてゐる。「サア御出なさりませ」と、同道して直に彼の住家へ往てみれば、門がまへ玄關附、是はけしからぬ事とおもひながら、直に座敷へ通りてみれば、扨結構なざしきじや。御茶のたばこのと持ちはこぶ。菓子盆には、山のやうに、菓子を積みて、色々と御馳走じや。暫くすると、御老人御夫婦が出て御挨拶じや。「我々をかうて下さるはこなた衆か、いかい御世話でござる。隨分可愛がつて下されたのみます。我々夫婦年寄りて、あと相續する子どももなく、難儀におもひます處、能く買て下さつた。かたじけなうござる。さいはひ田地も少々あり、有銀も百貫目ばかりある。此家屋しきはいふに不及、是をゆづるべき眞實の養子がしたさに、賣りに出しましたを、よう買て下さつたのう。かう親子となるからは、今日から、みなこなた衆のものじやほどに、よいやうにして下され」といふて、悦んでござる。びつくりしたが何とうまい物な、親の恩しりたい

松翁道話二編　巻之上

むかし「親賣らう〳〵」というて、賣あるくものがある。誰がひとり買うといふものがない。ないはずじや。皆銘々親達を持ち、退屈して、こちの親父様もモウ極樂まゐりさしやる時分じやがと、いふくらゐで、誰がひとり買ひさうな人はない。時にまた、世には物好な人もあるものじや。宿這入して間もない更世帶、さし向の御夫婦が相談してござる。「何とマア笑止な事じや、賣るゝ親御達は不仕合か、息子どのが不孝なか、但子供衆もない人か、何でもいとしいことじや。我等は幼少で親達に離れ、一向親の味しらず、産の御恩を報ずる事もないものじやが、何と人の親でも我親にして、朝夕つかへ、心一ぱい御介抱申したら、すこしは産の親達へ御恩送にもならうかい。どうでも年寄のあるうちは、めつたに家がつぶれぬといへば、家の祈禱にもなる事じや。其御老人方を買うて御介抱してみやうか」と、相談定つた所へ「親賣らう〳〵」というて來た。「さいはひじや、是親買ひませう。ドレみせさしやれぬか。」「ハイ代呂物は内にござります。父親が六十八母親が六十三、隨分達者で代呂物は能うござります。」「直段はなにほど

松翁道話二編序

松翁道話二編成。書肆何某、其始に書せんことを請ふ。抑松翁の人となり、忠厚にして、其人をさとす事、懇切なることは、予嘗て其初篇に跋して是をいへり。今亦何をかいはんや。惟ふに、其言愈〻出而愈〻奇、愈〻出而愈〻妙なる事を。さるに此奇辯妙論は、翁天性の才敏より出づる處といへども、其實は奇を求めずして自奇に、妙を期せずして、おのづから妙なるのみ。他人の奇を貪り、妙を衒ふの類にはあらず。蓋其忠厚懇切の至情より、口にまかせて、おのづから流出するものなり。讀者徒に其奇を愛し、其妙を賞せずして、只其忠厚の情を察し、其懇切のこゝろをもとめば、希は此翁の本色を得て、その教誨のふかきに、背かざらんと、しかいふ。

文化寅のとし初はるの日、　南紀の鎌田鵬、京師の曲肱庵に書す。

跋

予弱かりし時、松翁に親炙して、しば〳〵其教を受く。其人となり、慈善懇至にして、實にありがたき君子なりき。こたび八宮のぬし、その嘗てきゝ給へるところをかいあつめて梓に上し、以て世に廣うせんとす。蓋其言卑近にして、能く近く譬をとり、諄々反覆して人を曉し給ふ。其親切忠告、慈母の幼兒ををしふるがごとし。所謂一片の婆心和盤托出なるものなり。予これを讀んで、實にその人に面するがごとし。我をして、懷舊の感あらしむ。此書、もし世に行はれば、可謂松翁不死。嗚呼善哉。

于時文化甲戌之夏

鎌田鵬記

に苦しんでゐるが。何ぼもあるぞ。片輪にしてからは、取返がならぬ。嫌がるものを、無理に芝居へつれて行く事もない。段々賣買は高うなる、渡世は次第に仕憎うなる、どうして此やうに成つたのじや。皆我まゝ氣まゝに、おごり遊んだ筒尾、則罰の當つたのじや。娘子が藪入に戻つたら、きらず飯や雜粥でせんたくすると、どの様な姑御へでも御孝行が出來る。御主人が大切に成りて、何ぼ程其身に德の附く事じや知れぬ。

よい事をいふてもらうて賃取りてそしてせぬのは扨もどうよくむかしから、聖人神佛の御世話は、何のためぞ。どうぞ片輪ものにしとむないのじや。賃ばつかり取りて、せずに居るゆゑ、先生方も、あたまかいて、扨もどうよくというてござるぞ。西洞院の捨子、よその事じやない。身に立歸りて御らうじませ、大きに利益のある事じや。

取込んだ、其算用はどうなると、大概算盤持つにも及ばぬ事じや。堵菴先生の辭世に、

君へ忠親に孝行賴みます内と外とのかはりあるまで

かりの浮世にかりの狂言、どうで一度は消えて行く身じや。とても事に、本道の勤を御賴み申します。盗人の長命は、刑罪をまつより外に用はない。如何成是大地一遍火坑何因是免。火の中へほり込まれて、どうして助かるといふのじや。ぐづ〳〵してゐると、燒けて仕まふ。サア助かり樣はどうじやな。時々刻々に、年が寄る、取返はならぬ、其中での助り樣御工夫。此前相州鎌倉の洪水に、我子を流して、兄の子を抱いて居た、女の死骸が有つた。其樣な火急な所でも、うろたへぬ義婦の行跡、御上にも御感心遊ばされたといふ事じや。火に入りても不燒、水に入りても溺れぬ結構なものを、銘々所持して居ながら、わづかなものに替へて仕まふは、あつたら事じや。よいもの著せて、うまいもの喰したとて、格別利口になるものでもない。此種の失せぬやう、子達のある御方々、どうぞ前訓を日に一枚づつなりと、讀しまして下さりませ。天地が御よろこびなさると、則其日の御祈禱、其御子、息才延命じや。皆君子の苗じやあつたらものじや。どなたも損はぬ樣になさつて下さりませ、御賴み申上げます。ハアスウ〳〵目前爲によい事いふ人はいやで、毒をあてがふ人がすき。皆毒物にあてられて、

目くら、商賣不精で仕事嫌、のら〳〵ふな〳〵骨なしの中風やみ、西洞院の捨子から見ては、よつぽど代呂物が落ちてある。よその事かと思へば、やつぱりわたしが事じや。どなたも身に立歸りて、考へてごらうじませ。斯いふ大病を身に持ちながら、其事は棚へほり上げて置いて、立心出世子孫長久、アヽ是何の譫言ぞや。若片輪の子孫が殘りて見たがよい、大體難儀じやない、殺生の第一じや。

立身出世したくば、足もとから勤めて行くのじや。若い御方々、外には何んにも用はない。主人大事、親大事、立身出世ひとり出來る。我まゝ氣まゝの、おごりが止みさへすりや、子孫長久疑なし。又立身出世も女房子にして見せるのなら、よしにしたがよい。一家親類の難儀は見捨てて、少々鼻に手を當てて、たゞ女房子には、活計さすを大きな事と思ひ自慢する。是を鬼窟裏の活計というて、濱納屋の乞食が、正月元朝の禮者を見て、「あの衆達は、此寒い雪降に勤めねばならぬ、難儀なものじや。夫から見れば、こちとらは三ケ日の食物はもらひ溜めてあり、何の苦もない正月する」と、乞食嗅が悦べば、男乞食が大きな顏して、「ソレ其榮耀は誰が云はすのじや。」所詮金銀財寶女房子の爲に、腐して仕まふ此身を、とてもなら世の爲人の爲に腐して仕まふが、立身出世の天上じや、そりやなぜなれば、主人や親の御苦勞で、世界の物を

は、六根不具といふ、さんげの說法、皆天地の御直說法じや。若し其やうな片輪ものに成つて御らうじませ。夫も天命なれば、是非もなけれど、大體難儀なものじやない。今日此やうに、どこに一つ申分のない骸に生れたは、有難い事じや。二親の御影、此身の仕合、大體御禮申さにやならぬはずじや。夫を何とも思はずに居るゆゑ、皆手細工の瘖聾、目くらに成つて暮します。かなしい事じや。憎口役に立たぬ、口松よいこと知らぬ瘖どの、身の爲になる異見は聞えぬ聾、藥師樣へ願かけて、御慈悲有つても、我と我手に、聞かぬ聾はどうもならぬ。惡いことは見ならうて、よい事の見えぬ盲目、仕事嫌ひの遊びずき、何にも出來ぬ身は痿じや。此捨子にほつとこまりものじや。もらひ人がなうて、うろ〳〵して居たを先生がもらひに出て、御養育下され、御社中樣方の御介抱で、やう〳〵今日此くらゐまでになされて下さつたけれど、まだ片意地はやみませぬ。

善事を、いふ口と手とそろはざる人は、まことの片輪ものなり。身の爲になる事、いうてくれる人があると、成程左樣じや御尤、あなたならこそ、能うおつしやつて下さつたと、口にはいへど耳へは這入らぬ金てこ、役にたゝぬ事や、人の腹たてる事はいふけれど、よい事は一言もいふことはならぬおし殿、人の非ばかり咎めて、腹立てるけれど、我事はねつから見えぬあき

ものの次手に、前方京都西洞院四條上る町、かまきり山の丁内へ、丑の十月十日の夜、三才ばかりな子を捨てた。其捨てた子は、瘖聾、盲の痿じや。何と珍しい片輪ものを捨てた。御上へ申上げたれは、丁内へ御預け、「もらひ人のあるまで、養育して取せ。」「ハイ〳〵畏りました。」丁内難儀じや。此やうなものを、誰がもらひに來るものでと、思うてゐたが、ふしぎなものじや、貰人が出て來た。西岡樫木村の、百姓十兵衛年頃五十ばかりの人が貰に來た。丁内悦び、「どうした事で、あの樣なものを貰うて下さる」と、尋ねたれば、「其事でござります。私は五十年已前、此御丁内へ捨てられました、捨子で御ざります。則其時御丁内が親分に成つて、只今の所へ、御やりなさつて下さりましたゆゑ、今日此通の男でござります。其時御丁内が、御世話なさつて下されずば、定めて犬に喰れてがな、仕まひませう。夫ゆゑ私が産の親と申すは、乍憚御丁内のあなた方でござります。只今では二親も見送り、子供もござります。御影で今日暮しかねもいたしませねば、其子には、乳母取つて育てますれば、何にも苦勞な事はござりませぬ。責めて是程の、御恩おくり致したう存じます」と、いふことじや。夫で其趣を申上げたれば、御上にも、神妙なりと御悦び遊ばされ、直樣もらうて歸られました。何んとふしぎな因緣もあるものじや。又此やうな正直な人もすくないものじや。正直は正直といふ說法、瘖聾で盲目のなへ

心の命を背き、萬物を造化する。先始に人間を造化して見たれば、天窓が大きうて、骸の小い、目大きにして耳の小い、鼻は獅々舞鼻で、口はとがり、手が大きうて臂細く、足小うして膝大きく、脊骨有りて腹なく、言ふにいはれぬ不器用なものを出來した。私心もあきれて、「コリヤどうじや、本心の教のとほり、少しも違はぬ樣に造化したが、どうして此やうな、變物が出來たぞ。」本心曰く、「汝我教を請けるといへども、其教を請たる所に過不及あり、夫ゆゑに、斯の如き不具なるものを造化する、是汝が自業自得にして造化の私にあらず」というた。斯ういふ事が何ぼもある事じや。隨分よい事じやと思うても、我一存でする事は、大きに噛違出來る物じや。我こそ本心會得したと思ひ、めつたに世間を欺語あるき、世界を變物にする事がある。實に勿體ない事じや。片輪にしては取返がならぬ。大事のことじや。どなたも能う心得て居てくれなされ。此樣に生きてゐるは、天命で生きてゐるゆゑ、自由が出來る。此自由を我才覺でするゝと思ふゆゑ、我まゝをする。此我まゝと天命と、混亂にするゆゑ、色々樣々の化ものが出來る。家を治むるも身を修むるも此道理で、もつともらしい所もあれど、又我まゝ非道な所もある。其天命に背いた所が變物と成り、憂ひ災難困窮飢渇と、形の上にあらはる。皆私心の造化した所じや。眞實に我を離れぬ仕業は、役に立ぬといふ事を能う御究めなされませ。此片輪

そひじや。錢の入る事ばつかり。夫で何をいふも、金の事〳〵と寐言までいうてゐる。なんと樂のすくない、不自由な物じやないか。能う思ひ廻して見れば、我身ながら、不便千萬なものじやぞえ。天王寺の、沈香屋見世に、狗が看板に出てゐる。菓子を見せると、悅んでわん〳〵泣いたりをがんだり、尾をふつたり、色々の狂言する。錢見せてはよろこばぬ。たゞ、菓子がほしいばつかり。銘々共に儉約ばなしや、本心のはなしすると、氣がつまつて面白うない、抹香くさいといふて寄附かぬ。又芝居ばなしや、おごりばなしで、酒呑んだり、自慢したり、よい物著て、ボン〳〵をどり廻ると、よだれ流して御きげんじや。錢より菓子を悅ぶ方じや。よつどうでも、喰には附き安い。家相續は氣詰な、やつぱりつぶして仕まふ方が御すきじや。よつほど大病じや。立煩は、本腹が出來憎い物じや。どうして此やうな病人が出來たものぞ、御考へなされて御らうじませ。

本心と私心とのはなし。本心は萬物を能造化するゆゑ、世界の主じや。其弟子に私心といふがある。永々本心の弟子と成つて、大體自由も出來るくらゐに成つた。夫で「私も萬物を能く造化いたしますが、ちつと造化して見せませうかい。」本心が「否々汝愚癡にして、自身智惠ありと思うてゐる、大きな了簡違、かならずその意を發す事勿れ　といましむ。なれども、私心が本

じや。夫を不便に思召して、人には人の道ある事を教へて御ざるけれど、其道に寄る事が嫌ひじや。なぜなれば、我まゝが出來ぬゆゑじや。其我まゝは、何程結構なものじやと思へば、やうやう此五尺の骸だけを、氣隨我まゝにするのじや。夫で道によると、どうやら窮屈な樣に思うてゐる、夫が大きな間違じや。この道によらぬものほど、窮屈な不自由なものはない。其樂とする處は、どのやうな事ぞ。ちよつと寄合うても、世間ばなしか、芝居ばなしか、或は喰飮の咄か、損德の事か、自慢するか、人をそしる事か、色欲のはなしか、人をうらむか、一だん下りては酒吞むか、博奕か、けん嘩するか、我身勝手ばかりいうて、腹立てるか、大體是ほどの事斗しらぬ。不自由なものじや。是等は人の恥とする所なれど、仕附けた癖なればなんとも思はず、是が人の道の樣に思ひ詰めてゐる。すつきり、此樣な無益な事に、暇を費し手足を費し、うから〳〵くらすゆゑ、けふの仕事が明日になり、今月の仕事が來月になり、今年の事が來年に成り、此世の事が來世に成り、せんぐりにおくれて行くゆゑ、手廻も惡くなり、貧乏もする筈じや。けれども此外というては、何にも知らぬ。是非もない事じや。夫故物事退屈してさびしがり、隨分出來のよい時が、瞽女座頭呼んで、親類打寄り、酒など呑むか、或は上るりかたり賴んで、同じ友達招き合ひ、小首傾け、泣いたり、笑うたり、仕まひは大かたあら

くらし、上股打つて寐起するも、コリヤどこからして下さるのじや。ちつと考へても見たがよい。つひに情らしい事して人の爲になつた事もなければ、人を救うた覺もない、また世界の害となり人を損うた事は多い。さういふ代呂物が今日を安閑とくらしてゐるはどうしたものぞ。あんまり結構過るゆゑ、返つて不足ばつかりいうてゐる。其筈じや、何をみても、何を聞いても、ものの道理がわからぬ故、難儀なものじや、聖人の、神佛のといふと、人に尊敬せられ、結構なものとばかつり思うてゐる。あなた樣方は、大體御苦勞なものじやない。どうぞ天下太平五穀成就萬民飢ゑず寒えず、うろたへぬ樣にしてやりたいと、思召して夜の目もあはず、此事ばつかり、御苦勞じや。勿體ない事なれど、天子樣でも將軍樣でも、御大名樣でも御役人樣でも、此事ばつかり、皆天下國家の爲に、御苦勞遊ばさるのじや。又此思召のない御方樣方は、かはり立てて、外の人に勤めて御もらひなさる。スリヤ大體大切な事じやない。孟子曰く、大體に從ふを大人と云ふ、小體に從ふを小人と云ふ。此大體に從ふとは、天地の爲に御苦勞なさるゆゑ、大人といふ。則今日の神樣佛樣じや。さるによつて、諸人有難がつて、尊敬する。又小體に從ふとは、我ひとり前の喰飮の私事に心をくだいてゐる。中々世界の事所か、壁隣の事でも構やせぬ。大體氣強い者じやない。じやに依つて我まゝ氣まゝは、世界の騷動のはじまり

ると、夫から直してやると、家内和合して、家治る。それも急に直さうとすると、惣々にくるひが來る、大體是には工合のある事じやない。鍛冶屋で鐵を湯に沸すに、消炭の和らかな火でなければ、堅い鐵は湯にならぬ。又眞鍮赤銅のといふやわらかな物は、堅炭でなければ湯にならぬ。一切の事、世話燒が能うなければものにならぬ。聖人神佛其外の祖師方が、痩せこけて御世話なさる。砥石で刃物磨ぐやうなもので、砥石がおりると、いつの間にやら、刃物に刃が附いてあるけれども、なまくら物は、何ぼ磨いでも、見えばつかりで、役にたゝぬ。又鍋尻こそげる炭かき庖丁の中にも、吟味すると、折によいものがある物じや。むかしの太公望は東海の濱邊に、漁人で有つたを、文王の御德で、磨ぎ上げて見たれば、天下第一の名作物になつた。炭かきの中にも、どの樣なものが有るまいものでもない。大舜は片田舍の田畝の中より出給ふといふ事じや。此御方を引上げて御相談なさるは、何の爲なれば、世界中のいがみを直すのじや。錆を落してもらうのじや。又此御方の目から、世界を見れば、やゝ子が髮剃持つて遊んでる樣なもので、あぶない事の天上じや。どの樣な事が出來うも知れぬと、ひや〳〵思ひ通じや。其心ならこそ、あの御世話が出來た物じや。中々伊達や名聞で出來る仕事じやない。此やうな御方々が、世に出で御世話なさりやこそ、何にも知らぬ、今日の銘々共、腹ふ

松翁道話初編　巻之下

人の家での本心はどこぞ、大黑柱じや。是を大極柱というて、神道では、高天ヶ原に神とゞまりまして、善事ばつかり集る所じや。

すぐなれば重荷かけても折れぬなり世渡る人の息杖ぞかし

此息杖が、ちつとでもいがむと、直に折れる。大黑柱が息を杖にして、つつぱつてゐるのじや。人では旦那殿が大黑柱、御家樣が外大黑柱、息子殿は小大黑柱、夫から段々手代衆、丁稚衆、女子衆と、所々の建柱じや。旦那殿の大黑柱に、少しいがみがくると、そう〳〵の柱が殘らずくるひが來る。又大黑柱に蟲が入ると、屋根裏まで廻る。旦那殿が遊所ぐるひすると、手代殿が小宿こしらへて、女房ぜんさく、丁稚殿が砂綾の帶と、段々蟲が廻はる。こはいものじや。此大黑柱の損じたを、どうしたら直るぞと、大工衆に相談して御らうじませ。一向家を建直さにやならぬといふ。スリヤ大體造作なものじやない。隨分いがまぬやう、御用心なされませ。夫の大黑柱がいがむと、女房の外大黑から直すやうにせにやならぬ。女房の外大黑がいがみかゝ

同じ様な事が大分あるものじや。本心のはなしすると、いやがつて顔を隠して、にげていぬ御方があるものじや。是等は生得に蟲が嫌ふのじや。此やうなは無理にすゝめると、御病氣が起る、止めにするがよい。酒の嫌ひな人に、酒ばなしすると、胸悪がる様なもので、本心は臭もいやと、いふが有るものじや、是はどうも仕様がない。

吟味して、少し安うしてやると、買た人が、精出して觸れあるく。一文二文の商内も、三百目五百目の商内も、同じ様に、ていねいに、如才なしの我なしにしてやると、世界中が世話やいて、「あそこへ行て買はしやれ。」買ひに行かぬとしんきがり、腹立て、世話をする。皆物喰はぬ給銀なしの手代殿が、働いてくれるゆゑに、天地を動し、鬼神を感ぜしむること、神明佛陀の妙感にかなひ、得意先が身になり、家内が身になり、盗人の世話入らず、心安い事で、其だ理詰のよいものじや。どなたもなされてごらうじませ、何にもむづかしい事じやない。いろはにほへと、ならふやうな物じや。あんまり心安い事ゆゑ、皆こはがつて辭義してござる。成程心安い結構な事でござります、けれど私は、親共が嫌ひでござります、イヤ親方が好かれませぬの、イヤ一向宗でござりますのと、色々のいひわけしてにげてござる。其代り何ぞかはつた事といふと見たがる。此度白烏を見せ物にする、馬に翼のはえたを見せるといふと、コリヤ珍しいと、一番がけに飛んで行く。其時には親の事も一向宗もいうてはゐぬ。皆腹中に、かはつた事を好む虫があるゆゑ、變を好むといふものじや。又見せ物の門を通る時、顔に袖をあてて行く御方がある。なぜ其樣になされますといへば、イヤ私は錢が無いゆゑ、かんばんも見ぬやうにいたしますというて、顔を隱してござる人がある、此やうな正直な人もあるものじや。是と

影ぼうし、憎いもかあいも、ほしいも、をしいも、影ぼうし。
　世の中は白黒赤く移り行くかゞみひとつはもとの身にして
此もとの身とは何ぞ。たとへば我大切なものを失うた、其時は方々を、さがしたけれど見えぬ。ほつと草臥、其儘にして置いたが、或時ふつと思ひもよらぬ所から出た。其時ほんに、わしがこゝに入れて置いたといふことを思ひ出したが、此思ひ出したは、我が思ひ出したか、失物が思ひ出したか、又我が覺えてゐたか、失物が覺えてゐたか、又失物の出た時に、うれしやと思うたが、此ヤレ嬉しやは、我に有つたか、失物に有つたか、我に有るなら、失物の出ぬ時は、ヤレ嬉しやはない、又失物に有るといふなら、失ものは覺え通じやが、ヤレ嬉しやはないはずじや。サア此ヤレうれしやは何ものぞ。御工夫。
　萬法と倶たらざるは何ものぞきのふの酒にけふのぼたもち
きのふは酒を飲み、けふはぼたもち喰ふものを、友とはせぬが、どうして此味を知り分けたぞ。此味を知りわけたものと、御近附に御なりなさると、商内しても、何しても、給銀なしの手代を幾人遣ふとまゝじや。我無我無心で詠むれば、森羅萬象、一切萬物、有情非情に至るまで、うごき働き、我を助る給銀なしの手代殿、何と道理のよいものじやないか。隨分代呂物

る。何ぼ面倒でも、橋へ廻らにやならぬ。橋が直に道じや。則教じや。橋の御冥加、善い事聞くも橋、惡い所へ行くも、橋のかけてがある。橋のない所は船ばし、萬事萬端請取渡し、椀から口までの間、物喰ふ箸、火をはさむに火箸、婚禮も橋かけがなければ渡られぬ。踏かぶらぬやうに、吟味して渡る物じや。腹中に無分別を出すも、橋かけて出す。本心を知るも、橋かけてやる、正直なと橋かけ、横著なと橋かけ、賣物買物、安いと橋かけ、高いと橋かけ、物が安いと、知らぬ人まで橋かけてあるく。又物が高いとあそこは高い、止めにせいと橋かけて廻る、正直なものじや。又細い橋など渡る時には、榮耀は出ぬ。こはい所では我なしじや。けれども此細い橋や、細道の所では、めんよう互に氣を急くものじや。向ふから、荷物などかたげて來る、ちつと待つてやればよいのに、餘の所ではぶら〳〵する癖に、斯いふ時に入合はさうとするゆゑ、羽織の裾など引つかけて、善人忽ち變生惡人、わづかな事から、地獄こしらへてくるしむ。大體仕憎い事じやなけれど、仕附けた事ゆゑ、心安うこしらへてくるしむ。何の役にたゝぬ事じや。こつちから橋かけると、向うから渡りて來る、皆此方の陰ぼうしを相手にして、けんくわする樣なものじや。庭鳥に鏡見せると、羽を逆だてて憤る。猫がふき入つた鏡戸へ、己が影のうつるを、相手にして、毛を立て爪をたて、いかる有樣、一切の事が、皆此方の

物喰うて遊びくらした其かはり末はくはずにかけ廻るなり

何というてかけ廻るぞ。はつち〳〵、くだん〳〵、皆生きた說法、生きた講釋、若い時からうまい物喰うて遊びたがると、此樣なものになりますぞえと云ふ說法じや。殘念な物じやないか。たまたま人と生れて、助かるべき道のあるに、其道を行かず、外道へ行て難儀するとは、よつぽど物ずきな事じや。

謗法雜行といふは、皆此外道をかせぐ人の事じや。謗法雜行といふと、宗旨體ばつかりの樣に思ふてゐる。祖師方のは、其やうなちひさいのじやない。人の道に背いたは、皆謗法雜行じや。朝から晚まで、神道儒道佛道、明なものじや。みちは近きにあり、しかるを遠きに求む。天地は書物、萬物は文字、能う氣を附けて讀んで御らうじませ。一切敎にあらざるものはない。イヤわしは學文せぬの、手習せなんだのと辭儀する事はない。眼前の諸式諸道具、喰物から、著物から、皆御助の上の御敎化じや。道は上下に明なり、書物の中へ這入つて居るを書林といふ。此身はずつぷり、敎の中へ漬りて居ながら、見違るのは、こちの不調法じや。ねだりに行く所はない、上町から船場へ行くにも、道によらねばならぬ。道のない所は橋がある、橋のない所は、橋のある所まで、廻りて行かにやならぬ、橋へ廻るが面倒なとて、川を渡れば、水に溺る

目は見えず耳は聞えず鼻つまり人のいふ事は何も聞えず難儀なものじや。若い時二度はない、隨分若い時に精出して、仕込んでやつたがよい。年の寄るは取歸はならぬ。親御樣の年の寄るほど、息子殿が達者になりて、後には親御樣を取つてなげたり、ふんだりして、一向手にあはぬ。家屋しき諸道具もなげちらし、雁金文七の、濡髮長五郎のといふ樣な、男達になつて、其樣な息子を持つた親達は、夜の目もあはず、氣苦勞である。親の身になつてごらうじませ、どのやうなものであらうぞ。けふは馬に乘つて引かるゝか、首ばつかりの見せ物にはならぬか、どこぞに身なげ、首くゝりの沙汰があると、聞く度々にあんじくるしむ、どのやうなものであらうぞ。仕合で命があれば、濱納やの御隱居鐵拐仙人のやうなりして、何ぞくだんく。扨此乞食といふものは、たゞ遊んで喰ひたいばつかり、仕事と名が附くと、しとむながる。何んぞ一色賴んでごろじませ、大體恩に著せるものじやない。骨をしみするものは、皆こじきの下地じや。

親の手にあまり者ぞといふ人はあまり物喰ふ乞食とぞなる

黑穗になつて仕まうた。

奢つたり遊んだりした仕かへしに難儀な年の尻が來るなり

工殿と、縁者でも有つたやら、家つぶさしてはならぬと思ひ、御亭主に御咄じや。「扨世にはどう欲な人も有るものじや。我子を庭へぶち附けたり、石になげ附けたり、石でたゝき廻し、顔も骸も疵だらけにする人がある。」「そりやどこの人でござります。」「イヤ外でもない、貴様の事じや。弟子はあの通に仕込んでやらしやれば、こん度はきつと棟梁になるに違はない。可愛さうに、息子殿も仕込んでやらしやれいの。あの様に疵だらけにして、此度世間へ顔出もならぬ様にしてやるとは、あんまり胴欲といふものじや」と、いはれたれば、大工殿が始めて目が覺めた。是が愛欲の、とんぼう返したのじや。可愛々々息子は獄道になる、算用づくで遣ふ弟子は棟梁になる、愛のとんぼう欲のとんぼう、顛倒の衆生、犬や猫が子を産んで、かあいがりてねぶり廻し、あんまりかあいゝがあまつて、喰うて仕廻をる様なもので、かあいくの、とんぼう返じや。いと樣の、ぼん樣のと、總々がかあいがり、氣隨氣まゝの肝癪持にして、人のする程の事が氣に入らぬ。氣の方の、勞痎のと名を附けて、喰うて仕まふ。又算用づくでかあいがりて、仕まひは、藝子や役者に賣つて、喰うて仕廻ふもある。皆顛倒の衆生というて、逆様になつてあるいてゐる、大體くるしいものじやない。どなたも足をあげて、手であるいてごらうじませ。目くれ耳くれ鼻くれて、目鼻口から血が出て、

ものじや。芝居はそこを見せるのじやない。此やうな不詰な事すると、此通に難儀するぞと、人の腹中を、まるはだかにして見せてござるを、すつきりこちの見やうが悪いゆゑ、御家様は女形の髪形地、身ぶりをならひ、旦那殿は立役の身ぶりものまねで、親類の寄合にも、本がこしらへもので、稽古したものじやによつて、眞實な所は一つもない。其薄情な心を以つて、家内を治めうとするゆゑ、不實だらけ、追附丁内入かはりく〳〵、永うはやらぬはずじや。

或所に大工殿がある。其弟子を仕込ましやる。嚴しいものじや。晝は仕事先一日働き、暮に戻れば水を汲み風呂を焚き、夜食を仕まうと四つ過まで夜業さす。朝もとうから起きて、めし焚いたり、掃除仕まうて仕事に行く。内の息子殿は、けふは頭痛がするというては休み、腹がいたむというては休み、近所の醫者殿に見せる。醫者殿もマア其様なものじやというてござる。夫で大きな顔して、火燵に當つたり寐ころんだり、のらくら遊んでも退屈な、錢もうけのかはりに、近所へ遊びに行き、酒呑んだり、上るり語つたり、だんく〳〵とのらが僻附き、毎日々々作病じや。親御達は病身ものじやというて、案じてござる。コリヤうまいものじやと、彌得手にさして、錢遣ふ事ばかりを、仕事にしてゐる。黒穂のなりかゝりじや。醫者殿も氣の毒、どつこも悪うないものに、毎日々々見まうて藥を呑すが、何んの藝もない事じや。どうでも其大

くらすを、人の道と心得、世帶するすべは知らず、我氣に入らぬと、幾度嫁入仕直しても、恥とも思はぬ、寢息代呂物難儀なものじや。皆當歳子の時から、仕込んだものゆゑ、急に直さうといふ事はならぬ。

夫なら芝居は、狂言綺語の戲を以つて、善道へ導くため、世界の助となればこそ、御上より御免なされてある。善人は一旦、どの樣に難儀しても、終には明立ちて運を開き、惡人は一旦勢強いけれど、どうでも仕まひに首がない。あれが惡人は段々立身し、善人は次第々々に亡ぶ芝居なら、誰が見に行くものはない、貧究の内より忠義を盡し、恩愛切なる所より、義を守り、誠の道を磨くゆゑ、面白いのじや。何にも知らぬ、山家の遠奧の三介お鍋までも、孝行忠義の正しい道理を、能う合點さすためじや、皆勸善懲惡の御すゝめじや。其入用の所は見ずに、わつけもない男と女とはなししたり、逢ひたがるものに逢はれなんだり、本妻嫌うて女郎狂ひする、獄道息子が、女郎へ忠義立てて、我女房賣つて、其身の代で請出してやつたり、皆不詰な事ばつかりを悦んで見て居る。其賣られて行く女房が、我子を殘して行くを、かなしび愁歎するを、同じ樣に、しやくりあげて目をはらし、兄嫁の死んだ時さへ、泣かなんだものが、知りもせぬ他人の事に、すゝりあげて癪おこらし、らつちもない所ばつかりを稽古して戻つた

太平、五穀成就、萬民快樂の姿と變じた。何と有難い事じやないか。家の旦那殿が無慈悲になると、家内不繁昌、子孫斷絶の姿をあらはす、恐しいものじや。其道理も大概辨へながら、遠慮會釋もなく、よいものから、ずつかく遣ひへらし、へたくそや、かぶたの何にもならぬ所を、殘してやるゆゑ跡が行かぬ、身上ももてぬ筈じや。さあく跡の行かぬ樣に、してやるぞしてやるぞ。どうよくなものじや。惡い種は、六根不具のものばつかり出來る。難儀な事じやぞえ。夫にまだどうよくな事がある。折角うつくしう出來上た佛樣を、鬼めがしわくたにして、地獄の釜こげにしをる。是ほど胴欲な事はない。いかに我すきじやとて、可愛さうに、乳呑子の中から芝居へつれて行き、術無がりて泣くものを、ゆぶつたり、乳をねぢ込んだりして、無理無體に見ならはすのじや。其樣にして癖附したものじやによつて、四つ五つばかりになると、芝居事計知らぬ。兄弟ゐる中でも、大口いうたり、あほ口いうたり、にくて口いうたり、うそいうたり、けんくわしたり、橫著ばつかり上手で、手習嫌の、わやく太郎、丁内もてあまし代物じや。又女の子は、あたまと顏となぶりものにして、著る物きかへる事を、女子の仕事の樣に覺えて居る。ちよつと寄合うても、芝居のはなしより外は、何にも知らぬ。糸つむいだり、布織る事は、男の仕事の樣に覺えてゐる。皆芝居で學問したものゆゑ、我氣に好いた事して、樂み

松翁道話　巻之中

豆蒔いて豆は出來るけれど、人蒔いて人はどうやら心もとない。どうぞ人になればようござります。弘法大師も心もとながつて、

人多き人の中にも人ぞなき人になれ人人になせ人

一切の物の種は、コリヤ種にするのじやといふと、跡へ廻して大切にして、よいのを殘す樣にするじやないか、夫に人はあちらこちらで、よいものを先へつかうて仕まひ、悪い種を跡へ殘す樣にする。小言が出來る筈じや。下卑たたとへなれど、香の物を菜にするというても、尾端の所から喰ふ樣にすると、是非跡へよい所が殘る。又妻子眷屬じやとて怨敵じやない、是程の事は、天地へ御禮我身の冥加じや。それを遠慮なしに、喰物でも著物でも、よい物から先へしてやるゆゑ、へたくそや、づるけた所ばかり、跡へ殘りて喰ひてがない、冥加しらずと云ふものじや。むかし天智天皇樣は、寒夜に民の辛苦を御歎なされて、御衣を御ぬぎなされたといふ事じや。天子樣じやとて、寒いも暑いも同じ事じやけれども、其御仁德が世界に行渡りて、天下

吟味の仕様じや。此くらゐに種も吟味せにや、人蒔いて人は出來ぬ。夫で此子供が、喰物の惡い、仕著の惡い、人づかひのむごい、親方を大切にして勤めてゐる。皆黑穗にならぬ仕樣じや。

身も喰へぬものこしらへ、兄弟の子供にするゐ、汁は赤味噌の眞黒な汁に、ちんからりか、鹽物ならば、鹽のからいを燒物にして、「さあ〳〵祝うて下れ」と、自身も一所にすわり、うまさうに喰うて見せる。二人の子供は一向喰へぬものなれど、是非なく少づつ喰て仕まひ、「扨是から氏神樣へ御禮に參る序に、一家中同行衆の禮も、仕まうて來る。其留守中に菜をたんと入れ、きらず雜すゐ焚いて置け」と、女房にいひ附出で行く。其御內儀樣が近所へ行つて泣いてござる。「けふは子供が藪入いたしました。一年一度の藪入に、かあいさうに、きらずめしに、ごとみそ汁、どこでやら喰はれもせぬ、ごとみそをもらうて來て、夫を焚いて喰すのじや。先程子供がめし喰ふ間は、よう見てゐませなんだ、裏へ出てゐました。あの樣なむどく心な人も、めつたにないものじや。夫に戻つてから喰ふほどに、雜粥焚いて置けというて置かれました」と、近所のばゝかゝ達が泣くらべじや。さて親仁樣が子供をつれ戻り、「さあ〳〵腹がへつためしを喰ひませう」と、膳にすわれば、菜ばつかりの雜するじや。兄弟ながら其雜粥を喰て仕まひ、弟が、「兄さん今夜泊らんすか。」「いや〳〵今夜は去ぬ。」「そんならわしもいがる」と、一夜も泊らずにげて去ぬ。跡で涙をこぼしてござる。「其殘つたきらずめしも、雜するも、米を入れて焚直し、乞食にやつて仕まやれ。」在所の乞食さへ能う喰はぬものこしらへて、子供に喰すのじや。きつい

て、終に身なげ首くゝり、満眞とおとし穴へ踏かぶつて仕まうた。きのどくなものじや。よつて大家に御勤なさるゝ衆は、大體此身に立歸る事を御稽古なさらぬと、滿足には勤り憎い。又大阪東堀に、或富家の息子殿、十二三才の時分から、京都の先生の方へ、月々十五日づつ預け、下男のかはりに、めし焚いたり、水を汲んだり、庭廻さうぢしたり、一ヶ月を京と大阪と、十五日づつの勤じや。夫でなければ、大家の旦那に成つて家は持たれぬ。「事ニ長者ニ」知らねば、終に我まゝが出て、家をつぶして仕まふ、是等は親御の有難い思召じや。

河内の金岡新田に、源七樣といふ人がある。其下百姓に五兵衛樣というて、夫婦ともかせぎの百姓、子供が二人ある。其子供を奉公に出すに、親方を聞合してござる。隨分喰物の悪い仕著の悪い、むごう使うてくれる親方へ、奉公に出して悅んでござる。盆正月の藪入前には、子供の御主人へ行つて、「こなたの御勝手に藪入をさしなさつて下さりませ。」親方がいつ比にやらうといはしやると、又弟の奉公をしてゐる御主人へ行つて、「あなた樣の御勝手が大事なくば、いつ比に藪入をおさしなさつて、下さりませぬか」と尋ねて、もし其日差支があれば、兄の親方へ行き、日を延べて、兄弟一所に藪入する日を究めて待てゐる。扨兄弟一所に藪入すれば、無事な顔見て悅び、馳走にきらずめしを焚き、其めしは米二分に、きらず八分ぐらゐにして、自

て下さりませ。

近在百姓衆じやが、能心得た人があるものじや。子供が三人ある。宗領は百姓を仕込み、弟二人は近在へ丁稚奉公に遣る、中息子は大工の所へ奉公にやり、末子は米屋へ奉公にやる、丈夫なものじや。何ぼしくじつても氣遣げがない。骸に覺えた事は賣る事もならず、急に質に置く事もならぬ、夫でせう事なしに身業が出來る。やぶ入に兄弟寄合うても、農工商おるゆゑ相談が出來やすい。是等は種を吟味するのじや。黑穗にせぬ積じや。また奉公するにも、子供の時から大家にうか〳〵暮したものは、どうも仕樣のないものじや。よい事ばつかり見習うて、ちと智惠づく時分に手代になりて、子供々々と灰吹たゝき、御公家樣の落胤の樣な心持に成つて、氣ばつかり高ぶり、自身は其樣にも思はぬけれど、いつの間にやら高い所へ上りてゐる。天神橋の眞中まで行て見ると、大屋根の上にあがりてゐると同じ高さじや。けれど夫程には思はぬ。よつぽど足もとに氣を附けぬと、思の外高い所へあがりてゐるものじや。さうなると、おとし穴へ踏かぶる下地じや。その踏かぶり所といふは、先鍋焼貝焼すつぽん汁、美しいとうろう鬢の女中が、にた〳〵笑ふと咽がかわき、どうぞ仕樣はない事か、山寺の御小僧は、豆腐は喰ひたし錢はなし、百兩の突留に、あゆみをはこぶ垢の身の、金相場米市と、段々立身出世し

るものへの目覺じや。夫でもやつぱり我がすきな所に、へばり附うとするゆゑ、算用が間違うて、色々樣々の事が出來る。此算用違の種を吟味してごらうじませ種がなうて、めつたに間違は出るものじやない。

日々喰うて一粒も喰はず、是は誰が事じや。無いもせぬ生死を、ほぢくり出して、難儀してゐ

此春在邊へ參りました節の噺に、麥に黑穗といふ物が出來る。麥と同じ樣な顏してゐるけれど、麥の出來揃ふ時分には、まつ黑に成つてくさつて仕まふ、何の役に立ぬものじや。同じ麥がどうして、此樣に黑穗になるぞといへば、去年刈込時に、いまだ熟せぬ青麥がまじりて有るを、一緒に取込んだものじや。其麥を蒔く時まじりて有つたが、黑穗になるじや。じやによつて、種は大體吟味せにやならぬものじや。今日我思ふ事の自由にならぬは、きのふ蒔いた種が、青麥がまじりて有つたゆゑ、すつきり黑穗になつてくさつて仕まふ。今朝からあなた方も、どの樣な種を御蒔きなさつたぞ。もし青麥なら引きぬいて御仕まひなされ。黑穗に成つてからは、役に立たぬぞ。ちつと骨折つて吟味さへすりやよいものが出來る。よいものにせうと、惡いものにせうと、種次第じや。本心を御會得なさつた、御方々の内にも、もう是でよいと思うて、青麥を取込んで御ざる御方々はないか。黑穗に成つてからは役に立たぬ。序に是も御淸落なさつ

山城の瓜やなすびを其まゝに手向となれや加茂河の水

何と大きな精靈祭じやないか。今年出來た瓜も精靈、なすびも精靈、加茂河の水も精靈、桃や柹や有の實も精靈、死んだ亡者も精靈、生きて居るものも精靈、祭る人も精靈、此精靈達が打寄つて、無心無念の御對面、扨々有難やと思うたばかり、たゞ一體の精靈祭、則是を一心法界の說法ともいふ。法界則一心なるゆゑ、一心則法界、草木國土悉皆成佛祭というものじや。何と面白い道理を、こしらへたものじやないか。此道理の合點の行かぬ人は、毎年毎年西方十萬億土から、はる〴〵御出でなさる樣に思うて御馳走申すはよいけれど、此暑い時分に、節季かけて、御客樣が御出なされて、扨々いそがしいと思へど、せねば氣がすまず、すれば世話しく、十五日の暮合の御歸を、早う御見立申したら、身のいひわけも濟むやうに思うてゐる。すつきり川が牛へはまつてゐるのじや。虛空と此骸と塀切してゐるゆゑ、ねつから合點が行かぬ。聾に淨瑠璃かたつて聞かすやうなもので、とんとわからぬ。

屋根へ上りたれば下りねばならず、井戸の内へ這入りたれば上らねばならぬ。今日の道じや大きに違うたやうに思へど、皆無心境界の働が見えぬ。夫ゆゑ少々銀でもまうけると、此骸の中へ這入る樣に思ひ、又損すると、骸がかけて取れるやうに思ふ。日々あゆんで一歩もあゆまず、

やら消えて仕まうた。どうも是ばつかりはせう事がない。夫でも夢見るはどうしたものと、とうてござるが、夫はまだ本眞に呑まれなんだのじや。虚空に何ぞ差支が有つて、しばらく其用に遣はれて居るのじやけれども、やつぱり虚空の中へ、這入てゐるに違はない。其證據にや、其夢を實事と思ひ、汗水に成つてかなしんだり、悦んだりして居る。其用が濟んで仕まふと丸で虚空じや、覺はせぬ。是ばつかりは、どの樣に意地張ても叶はぬ。けれども目が明くと、サアしてやつた、我からだ取返したやうに思うて居る。其思うて居るぐるめに、此虚空の御力に預らにや、生きて居る事がならぬ。鼻と口とから往來をなさりやこそ、此やうに見たり聞いたりうごき働く、此自由自在は誰がするのじや。是は誰が手車、お長殿の手車、手車賣の親仁の辭世に、

くる〱とめぐり〱て今こゝに立て置く卒都婆コリャ誰がのじや

天の車が一周天すると、世界中がうごく、大きな手車じや。夫も知らずに、いかに自由が出來るとて、あつかましい、おれが骸じや、おれがものじや、おれが家じやと、うそはづかしうもなう、能う言はれた事じや。其やうな寐とぼけたものの目を、覺してやらんと、一休和尚七月精靈祭に、

或人難じて、「川が牛へ陥るとは、どうしたものでござります」と問うたれば、一休和尚、「こなたは知るまいが、前かた其川の水を牛が呑みましたわいの。夫で川が牛へ陥つたといふに、違ひはござらぬ」と仰せられた。面白い事じや。是が是因縁果報の遁れぬ事を能う合點せよと、御示しなされたものじや。

むかし虚空が人を呑んだゆゑ、其報で、又人が虚虚を呑むといふ様なもので、其虚空を呑んだ人が、又虚空を吹出すと、其吹出された虚空が、又人を吹出し、せんぐり同じ様な事して居る。卽今、此様に、ものいうたり、見たりして居るが、いつの間にやら虚空へ這入つて、消えて仕廻ふかと思へば、又虚空から出て、見たり聞いたりしてゐる。どちらが本眞じや知れるものじやない。夫で色卽是空の、空卽是色のというてある。此やうにものいうてゐるが色、いうて仕廻うた跡は虚空で空、空かと思へば又ものいふ、能うした細工じや。所詮人になり詰にもなられず、虚空に成詰にもなられぬ。さうして見れば、何とつまらぬものは此骸じや。虚空が本眞か、此骸が本眞か、どちらが本眞のものじや、ちつと吟味して御らうじませ。先死んだ先の虚空の詮議より、今夜寐た時の骸は何處にあるぞ、どこへやら失うて仕廻うた、其失うた骸も、尋ねる心も、すつぺらぽんと、丸で虚空に呑れたか、消えて仕まうたか、權兵衛八兵衛もどこへ

ぼさにやならぬ大事の事じや。學問といふは外の事ではない、爰の事じや。朝から晩まで天地の移り行く有樣、皆敎にあらざるものはない。きのふの過を知りて、今日あらため行ふを、則道に進む人といふ。吉凶善惡共に敎にあらざるものはないのでござります。

和州久米寺の因緣は、通力自在の仙人が、布さらす女の脛の白いを見て、通を失ひ、落ちたといふ事、此樣な恥さらしな事までを因緣として、久米寺といふを御建立なされた。是何の爲ぞ、末世末代のものへの御敎化じや。どの樣な知識方でも、戰々兢々の愼を忘るゝと通力を失ふ、況や今日の銘々共、日々新にの吟味がないと、通力は失ひ通じや。御内儀樣の顏の白いが氣に入ると、親御樣方が麁末になる。是等よつ程通を失うたのじや。夫から家がつぶれる、末世末代の恥さらし。イヤ〳〵こちらは、めつたに通を失うては居やせぬと、思うてござらうけれど、油斷はならぬ。久米の仙人じやとて、どこぞに脛の白い女があらば、通力を失ひたいものじやがと、うろ〳〵さがして來たでも有るまいけれど、ついフイ〳〵と出來心、あぶないものじや。兎角物には取られやすい心じや。じやによつて、どなたも本心を御知りなされて御らうじませ。本心がイヤなら、此樣に動き働くは何の所爲ぞ、御工夫なされて御らうじませ。

一休和尙因緣物語に、「むかし、川が牛へ陷つたゆゑ、今又牛が川へはまる」と仰せられたれば、

松翁道話初編

巻之上

浪華　八宮齋輯

天明元年丑の夏比、或國の太守様へ、御出入の町人が、鯉を獻上したれば、その鯉を大きな器物に入れて、御座の間の緣先へ御取寄なされて、御覽の上、「鯉をたゝいて見よ」と仰せられたれば、近習衆が鯉の脊を扇でちよつとたゝくと、忽ちはち〳〵とはねる拍子に、側あたりへ水が散々にこぼれた。殿樣莞爾と御笑ひなされ、「皆能う合點が往たか」と御尋ねなされても、各々はつというたばかりで、何の事やら合點が行かぬ。夫で殿樣仰せらるゝは、「先斯見た處では、此器物は一國の姿よ、中の鯉は一國の主にして、水は一國の民百姓じや。よつて一國の主が我まゝに身うごきすると、他國へ水がこぼるゝ、愼まねばならぬ。國の主ふつゝしみなる時は、他國へまでも、恥をこぼさねばならぬ」と仰せられた。是甚だ有難い御示じや。一軒の内でも旦那殿が不行跡なと、世間へ恥をふるまふ。恥ばかりじやない、金銀財寶までこ

松翁道話序

君子之道は費而隱也。隱とは天理の本體、費とは天理の妙用也。夫山川河海人間鳥獸蟲魚艸木、有情非情皆天理の妙用にして、人は孝弟忠信、鳥は空を飛び、魚は淵に躍りて、各々道を行ひ法を說かずと云ふことなし。程子所謂、道之外無物、物之外無道、是天地之間、無適而非道也。松翁子爰に見ることありて、神儒釋老の格言より、狂言綺語に至るまで、普く執り用ひて、諸人を教諭せること、其志至つて深切也と云ふべし。翁、姓は布施名は矩道、伊右衞門と稱し、また松翁と號す。京師松原の邊りに住り。嘗て我石門の教を尊信して、家大人及び富岡先生に親炙して、肆に性理の蘊奥を覺悟すといふ。

文化甲戌之夏五月

平安　手島堵庵男正揚識

ろ〳〵と、臺所や座敷を、持ち廻つてゐる。内儀が見つけて、「ナゼ臺所におかぬのじや」と叱つたれば、下女ぬからぬ顔で、「もし闇がりに置いても大事ござりませぬか」といはれた。ナント味のあるはなしじやない歟。どうぞ一たび、本心の明を見知つておいて、自由自在にくらがりを照す様に、いたしたいものでござります。朱文公觀書の詩に、半畝方塘一鏡開。天光雲影共徘徊。問渠那得清如許。爲有源頭活水來。チト御かんがへなさりませ。下座。

えましたるは、小野何がしといふ人、お石がことを傳へ聞いて、十四歳になる娘をつれて、はる〴〵岩淵村に尋ねきたり、お石に對面におよばれしとき、かのむすめのよまれたる歌とて、

立よりてしばし成りともならはばやおやにつかふる人の心を

ナントやさしい志ではござりませぬ歟。習うてよいものは忠臣孝子の心、習はいでも大事ないのが、髮のかざりや衣裳の端手じや。すべてお石が此十一ヶ年の行狀、よそから習うて來たのではない、性にしたがふの道を、盡したのでござります。此性お石にばかり有るのではない、お互に具はつてある、生れつきの心じや。さるによつて、今にもあれ、志を起して勤めるときは、誰しも出來ぬ人はござりませぬ。忠孝の出來ぬといふのは、出來ぬのではない、せぬのじや。子曰はく、仁遠からんや、吾仁を欲すればこゝに仁いたると、仁は善の摠、心の全德、物を愛するの理、孝行忠義は、直に仁じや。仁其まゝ人の性じや。性則うまれつきの心といふ事じや。されば孝行忠義を、勤めようと思ふと、何時でも勤まるのじや。此結構な本心を持ちながら　うろ〳〵として、一生を終るは、口をしい事ではござりませぬ歟。これについて、よう似たはなしがござります。山家から、はじめて京へ奉公に出た下女が、夜になれば、行燈をともすといふ事を知らず、内儀のさし圖で、暮がたに行燈に火はともしたが、只手にさげて、う

の人申しあはせ、一兩人伊八をむかひに、長崎へ參りました。これ全く、お石が孝貞、人をして感ぜしむるところより、忌みきらひし者を、はるぐ迎ひに參るやうに成りまする。さりとては孝行の德は、廣大なものでござります。扨長崎へいたり、難なく伊八にめぐり逢ひまして、「在所へ歸れ」と申しますれば、伊八中々聞きいれず、「所詮かね儲せねば、在所へは歸られぬ」といふ。かの迎に來りし人、委細にお石が孝行節儀を咄しまして、「借錢はともあれ、すみやかに在所へ歸つて、お石が志を助けよ」と申しますれば、伊八これを聞いて大に驚き、「まだお石は居りまする歟」といふ。「居りまする處ではない、その孝順のありさま、見て居られぬ故、貴樣をむかひに來たのじや」と、無理に引たて、在所へ歸りましたる處、在所中、大騷の最中、「何事ぞ」と問へば、「只今萩の御屋形より、お石が御褒美を頂戴して戻つた處じや」といふ。さしもの伊八これを聞いて、腸を洗ふがごとく、慚愧後悔して、これより本心にたち返つて、よい人になられたと申すことじや。是ひとへに、お石の孝德他に及んで、此奇特があるのでござります。德孤ならず必隣ありの聖語、今さら思ひあたつて、驚くばかりの事でござります。されば此事隣國遠境に聞えまして、小郡驛御通行の御歷々さまがた、御本陣へお石をめされて、御目見仰附られ、御銀おびたゞしく下し給はる事、度々とうけたまはりました。中にも奇特に覺

の事でござります。實に又金玉の詞をつらねて譽めたりとも、萬が一にもおよびませぬ。所詮言句におよぶところではござりませぬ。人足衆の口々に奇妙な人じやと申しまするは、實に的當の譽めやうでござります。さて柳井氏、小郡驛にいたり、植田何某を召して、委細にたづねられしところ、きゝしにまさる行状なれば、早速立ちかへつて、此段言上に及びますれば、太守様ことの外感じ思し召され、關藏夫婦へは生涯貳人扶持を下しおかれ、猶またお石は、萩の御城下へ召しよせられ、御目見仰附られ、御懇命を蒙られしは、實に冥加至極の事ども、身をたて道をおこなひ、名を後世に揚げて、以て父母をあらはすとは、これらの事でござりませう歟。さてこゝに奇特なる事は、岩淵村の人は申すにおよばず、近村こぞつて、はじめ疫病神のごとくおぢ恐れ、毛むしの如くにいやがつた伊八を、この兩三年已前より、そろ〳〵其ゆく方を尋るやうに成りましたと申す事じや。其故はお石一人が、身心を碎て、舅姑につかへまする行状を見るに附けては、せめて、伊八が家にあつて、少しは手助をする物ならば、さぞかしお石もよろこぶであらうとおもふ心より、人々いひ合さねども、小郡驛へ、人足に出る度毎に、かならず往來の人について、伊八が人相骨柄をはなして、かやうの人をば、見あたり給はぬ歟なとと、あてなしに、尋ねましたるところ、ふしぎに長崎に居るといふ事を聞出し、やがて村中

多くは、姑を負うて、お石が勞をたすくる人もござりましたと承りまする。猶また人の聞をおどろかしましたるは、かの法座を勤められし僧、お石が日々に奇特の參詣を感じ、講頭植田何某といふ人に、くはしくその來由をたづねまして、名所を書きしるし、法座をはつて後、歸京いたされ、此よし御本山の御聞に達しましたる處、御感稱のあまり、お石へ結構の御菓子一折、關藏夫婦へ、法名を下しおかれ、これを捧持して、翌年またく、かの地へ御使僧御下向に相成り、法座はじまりし處、如例、お石舅姑を負うて參詣に及びましたる故、やがて御命のおもむき申しきかせ、右下されもの頂戴仰つけられましたるは、實にありがたき仕合、これひとへに至孝貞節の德と、隣國まで傳へ聞いて、うらやまぬ人はないと承りました。さればこれらの始末、終に太守樣の御聞に達し、やがて御近臣柳井何がしといふ士に仰附られ、かの地へたち越え、とくと相糺きたるやうとの御命が下りました。さるによつて、柳井氏、卽刻小郡驛へ發行せられまする。道中すぢ、驛々にて繼立の人足に、かならずお石が事をたづね問はれますれば、皆こたへて、たゞ一口に奇妙な人じやと申します。いかさま遠國邊鄙の、こころなきあらくれたる人足衆も、此お石が行狀を、見聞しては、わるいとはさすがに思はず、然れども、何と譽めてよいやら、譽やうがないによつて、只奇妙な人じやと申しまするは、尤

せうものを、氣のつかぬ事でござりました。あすともいはず、善はいそげじや、今日お供いたしませう」といふ。關藏も大によろこび、さらば御法談を、久しぶりで聽聞しませうと、その用意におよびました。則御法談のある、隣村へは、およそ道一里あまり、しかるをお石は、かの舅關藏を脊におひ、姑にしばらく留守をたのみ、やがてお迎に參りまするど、帶やうのものにて、小兒を負たるごとく舅をおひ、一里あまりの所を女の身にて、かひぐ〵しく通ひまする。尤其道に川もあり橋もあり、とかくして寺へ行きつき、講中をたのみ、かの舅をおろし、堂の隅に、寒からぬやうに、こしらへおきて、是よりまた引返して家に歸り、姑を脊に負ひ、隣へ留守を賴み置いて、ふたゝび寺へたち歸り、講中へあつく禮をのべ、舅姑の二便の世話などし、其身は側にあつて、なでさすりしながら、御法義を聽聞する。さて法話終れば、講中へ姑をたのみ置きて、まづ舅をはじめの如くに負うて、道をいそぎて家に歸り、舅をおろしてねさせ置き、また寺へ姑をむかひに來て、脊におひて、講中に禮をのべ、一さんに家に歸る。すべて一座の法話を聽聞するに、舅姑を負うて、一里餘の道を往來都合六たびにおよぶ。しかも一日の事ではござりませぬ。法座日限の間、雨の日も風の日も、一日も怠ることなき孝順の行狀、見る人驚歎せざるものはござりませぬ。されば後々は參詣の人、お石が至孝の志を憐みまして、

あるによつて、親ざとへ歸つたかと、お疑もおこりまする。これ全く私のとゞかぬのでござります。どうしたら御安心に成りませうと、思へば寐ても寐入られませぬ」と、いひわけする、詞のうちに、少しも舅姑を恨みまする心もなく、たゞわが身の足らはぬを歎きまする、眞實がみえますれば、關藏夫婦も大に氣の毒に思ひ、とやかくといひなぐさめ、其夜はやうやう、やすみました。實に此一條、一點も父母をうらむ心なく、唯おのれが身をくやみまするは、實にあり難い志、ようわが身に立ちかへつたものでござります。孟子の所謂行得ざることあれば、皆かへつて是をおのれに求むと見えましたるも、これらの事でござりませう歟。さればこの翌日より雇はれ仕事をかたくことわり、只兩親の側をはなれず、近隣の人をたのんで、わづかなる賃仕事を請けとり、其日の煙をたてまする、其艱難困窮、筆にも詞にも、つくされる事ではござりませぬ。あるとき隣の人が來て、關藏へ申しまするには、「此ごろ隣村へ、京都御本山より、御使僧が御下向なされて、ありがたい御勸化がある。ドウゾならう事なら、參詣をさつしやらぬ歟」と、すゝめました。關藏もうちうなづいて、「いかさま伊八が居りました時分は、隱居同前の事ゆゑ、をりをりは御法座へも出ましたが、今不自由なからだに成つては、それさへ思ふ樣になりませぬ」と、いふをお石が聞いて、「左樣の思召ならば、とくにもお供いたしま

て、すこし道で隙どりましたのじや。たとひ此後いかほど歸りが遲いとても、必心よわい事をおぼしめすな。我身は死んでもこゝろは死なぬ。いつまでも御介抱申して、御先途を見とゞけます。くれ〴〵も心づよう思しめせ」と、とかくいひなぐさめて、藥などあたゝめ、例のごとく兩親のまんなかに居て、咄しながら、草鞋をつくる。程なく夜も更がたに成りましたれば、とくやすめと兩親のいはるゝ故、うすき袷やうのもの引きかづきて、其まゝ其所に寐いりました。ある人の發句に、

　我が身に秋かぜ寒し親貳人

ナント哀な句ではござりませぬか。チトかみ〆て御らうじませ。扨關藏夫婦は、宵のつかれに一寐いり、寐入ましたが、ふと目をさましてみれば、お石がしく〳〵と聲も立てず、しめ泣きに泣いてゐる故、大に驚き、「何故ぞ」と問へば、「寐て見ても、目があひませぬ」といふ。「それは何ゆゑぞ」と頻にとへば、「されば伊八どの、家を出られてより、すでに六年、里の親たちよりは、緣を切つて歸れかしと度々申されますれど、もとより歸るべき志はござりませぬ。夫のみならず、御大病ののちは、なほさら側を離れてはならぬと、心一ぱい御介抱申しますれど、折々の雇はれ仕事に、手がひけまして、十分に御介抱のとゞきませぬは、まだ私の盡さぬ所が

や栢は、なほみどりの色を失ひませぬ。これと同じことで、お石が此とし頃の行狀、實に此場所でござります。さてある日、お石くれ方より、人足に雇はれましたが、心いそがはしく、道をせいたれども、餘儀なき用事にて、少し隙どり、其夜四つ時分に歸りました。いつも門口より聲をかけますれば、内よりも返事する、しかるに今夜に限りて返事もなし、これはいかにと内に入つて見れば、兩親はさめ〴〵と泣いてござる。「扨は何ぞお氣にいらぬ事が有つた歟。私の歸がおそい故に、お案じでござりましたか」と、しきりに問へば、兩親の泣々いはるゝには、「我等夫婦いかなる宿業にや。伊八の不所存ゆゑ、困きうにせまり、其上二人とも業病に取りあひ、此年月そなた一人の介抱で、今日までは命をつないだが、今宵そなたの歸のおそいゆゑ、もしや我々夫婦をすてて、親里へ歸つた歟と、ふと疑の心が起るにつけ、よく〳〵思へば、此年ごろの艱難辛苦、中々眞實のむすめでも、是ほどに介抱は、とゞきはせまい。されども、永の年月の事なれば、退屈の心のおこるのも、無理ではない。去ながら、其方が歸てくれねば、明日より我等夫婦は乞食もならず、立どころに餓ゑて死ぬると思へば、たゞ何となく物がなしう成つて、思はずも泣きましたが、能う戻つて來てくれた」と、又うれしなきに、さめ〴〵と泣れました。お石は氣の毒さ、いふばかりなけれど、わざと打ちわらひ、「今夜は餘儀なき用事に

れました。お石はこれより僅なる作間をもらひ、晝夜兩親の介抱にかゝりまして、物半日と出あるくことは出來ませぬ。やうく半道一里の使をつとめ、又は臺道村へ出まして、少しづつの小揚にやとはれ、家にあるときは、兩親を左右へねさせて、其身はまん中にゐて、草履わらじをつくり、世わたりの助に致しますれど、女の手業といひ、殊によごれ物のすゝぎ洗濯、何かと介抱に手がひけまする故、はかぐしきはたらきも出來ませぬ。さるによつて、次第に困窮にせまり、朝夕のたべものさへ、漸く兩親へ、粥をすゝめまする位の事ゆゑ、其身はたべるふりして、給ぬ日も、をりくはござりましたと申す事じや。されども猶不自由なる體は見せず、かひぐしく介抱する事、すべて十一年の間、其こゝろざしいよくかたく、少しも弱りたる氣色は見えませぬ。まことにありがたい女中でござります。子のたまはく、歲寒うして、而うして後、松栢の凋むに後るゝ事を知ると、論語に見えまして、君子も小人も、事のない時は別に替た樣にも見えませねど、困窮にせまる歟、事の變に出合うたときは、小人の悲しさには、利欲にまなこがくらむゆゑ、手あしをはつてうろたへまする。君子の所作は、かやうのときに當つては、いよく靜にして、少しも騷ぐことはござりませぬ。たとへば冬に成つて、木がらしのふく時分には、草も木も色かはり、葉もおちて、其姿とも見えませぬ。然れども其中に、松

り、鐵石の志にて、髮に油をもちひず、衣類は膝を過ず、然もまた行儀正しく、人にあうて甚慇懃にござりますれば、これに恥ぢて後々はいひよる者もなく、却てその行狀の正しいを、譽める樣になりました。成ほど行儀は大事のものでござります。たとへば、奇麗に掃除して水うつて、チヤント掃きちぎつてある所へは、塵芥を捨てに來る人はない。皆此方の仕向けじや。せけんに埒もない事の出來るのは、みなムシヤクシヤと、行儀がたゝぬによつて、さまぐ\の塵芥を持ちつける。こはいものじや。御用心なされませ。ある人のうたに、

汲てしれこゝろのそこの井をふかみすむもにごるも我ならぬかは

さてその翌年の年貢も、滯なくをさめましたが、翌年にいたり、舅關藏かりそめの煩より、つひに腰ぬけとなまりした。かばかりのわづらひゆゑ、藥代は勿論、諸入用も多く成りますれば、しうとめに介抱をたのみ置いて、其身はいよく\辛苦して、農業をつとめました。何さま世の中に不仕合な人も多けれど、中にもお石は格別に不仕合にて、其翌年また姑も、同じく腰ぬけと成りました。是によつて高七石の作も、出來ぬやうに成りまするゆゑ、村役人へゆきて委細をはなし、御大切の御田地なれば、若未進等も出來ましては、申譯がござりませぬ、何卒お預り下されいと、段々とたのみましたゆゑ、村役人も尤にぞんじまして、やがて下作へ預けてく

をそむきまするは、不孝なれども、此儀は御ゆるされて下さりませ」と、中々承知するけしきもなく、これより終に親里と手切になりました。此としお石廿二歳、ナントめづらしい、ありがたい、女中ではござりませぬか。人の親のこゝろは闇にあらねども、子をおもふ道にまようて、世間にはこれに似た無法な事をいうて、娘に縁をきらす親達があるものでござります。子もまたうろたへて、親のことばにつき、義理も法もうち忘れて、縁をきつてもどる上に、猶へらず口をたゝいて、親の詞を背かぬが、子たる者の孝行じやなどと、利口にいうて居る人がある、氣毒なものじや。孝經には父に爭ふ子あるときは、則身不義に陷らず、かるがゆゑに、不義にあたつては、子もつて父に爭はずんばあるべからずと、見えまする。今お石が父母に爭ひ、勘氣をうけても、伊八と縁を切りませぬが、則父母を不義におとし入れぬと、申すのでござります。しかもお石が孝經をよみ習うた人でもなく、又學者でもござりませぬ。しかれども其本心の正しきを守るときは、發して節にあたる、天下の達道、これが中和をいたすと、申すものでござります。これよりお石は手ひとつにて、舅姑につかへ、專ら農業を勉めまする。しかるに天性、顔かたち見ぐるしからず、ことに年も若ければ、居村は申すに及ばず、隣村の惡少年ども、其獨身なるを見あなどり、とかくいひよるものも、多くござりますれど、お石もとよ

し、萬物やしなはるゝと、親子兄弟、はなれ〴〵になるとの、二つに成ります。ナントこはいものではござりませぬ歟。その本は睹ざる所をいましめ愼み、聞かざる所を恐懼れ、わるい分別はおこりはせぬ歟と、腹のうちを吟味する、獨を愼む工夫の、出來不出來によりまする。この道理を合點して、おこたりなう、勤めるが、學問の極功、聖人の能事も、この外にあるのではござりませぬ。どうぞ本心におしたがひなされ、精出してお勤めなされませ。ある人の歌に、

あすもまた朝とく起てつとめばや窓にうれしき有明の月

わが心學の得方にとつて見ますれば、味のある面しろい歌でござります。チト考へてごらうじませ。さてかのお石が親里には、折もあらば、むすめを取りかへさうと、考へて居りました處に、「幸このたび、伊八が逐電したと聞附けましたゆゑ、よい縁の切所と早速に娘をよびよせ、「すみやかに離縁してもどつて來い、もし此度も縁をきらず、親の詞に背かば、餘儀なう勘當せねばならぬ」と、おどしかけて責めますれば、お石は、興のさめたる顔にて、「御勘當はかなしけれども、夫伊八のゆく方、知れませねば、誰にことわつて縁を切つて、歸りませうぞ。何事も私の不運、今更里へかへりましては、舅姑御の介抱は、何人が致しまするぞ。これからが嫁の入用、身を粉にくだいてなりとも、夫伊八と二人まへの孝行は私がせねばなりませぬ。お詞

續々鳩翁道話　參之下

中和を致して、天地位し、萬物育はると、これ則戒愼恐懼、ひとりをつゝしむの功によつて、小人も聖人の域にいたり、其德天地と合して、萬物を生育す、所謂天人一致、萬物一體の理を、おしめしなされたのでござります。畢竟中とは、天命の性をいひ、和とは、性にしたがふの道をいふ。致すとは、修行して推極めるのじや。平たういへば、本心の通にして、少しも背かぬ事でござります。大きういふと國天下もをさまり、小さういへば、一家一身もをさまる。ありがたいことじや。天地位すとは、聖人國を治めたまふ時は、雨風時にしたがひ、天は天の德をあらはし、地は地の德があらはれます。また一家でいへば、親は親のやうになり、夫は夫のやうになるのじや。萬物やしなはるゝとは、五風十雨、ときにしたがへば、人は申すにおよばず、米も麥もよう出來、鳥獸も其所を得て、おのれが生を遂げまする。一家で申さば、家内の諸道具鍋かままで、質屋の藏へもはいらず、道具屋の店へも出ず、おの〳〵其所を得て、その役をつとめます。是がこれその本心にしたがふ歟、したがはぬ歟、この二つのさかひで、天地位

によつて、戒愼恐惧し、獨をつゝしむの修行をいたして、どうぞお互に、人の道をはなれぬ様の用心が肝要でござります。休息。

ども此人、身は結構になつても、心はかならず苦勞する事があるものじや。夫にしたがうて道をまもれば、形は苦勞すれども、心は安樂な。また道をそむいて、身は結構になつても、心の苦勞はたえぬ。ようした物じや。さてかの伊八は、次第に困窮の身と成りましたゆゑ、一足とびのかね儲せんと、無分別をおこしまして、銀主をこしらへ、多くのはうろくをやかせ船積にして、下の關へおくり利德を得んと、やがて自分上乘をして、のり出しましたが、天のゆるさぬ處でござりました歟、海上にて難風に出合ひ、船は岩にあたつて碎け、はうろくは微塵になり、その身も海中におち入りましたが、どうやらかうやら、命たすかり、今一人の船頭も、是もふしぎに危きをのがれて、兩人ともにたすけ船にうち乘り、陸にあがりました。伊八は今さら在所へ歸る事もならず、終に其まゝいづくともなく逐電いたしました。かの船頭在所へ歸つて、この事を物がたりましたれば、關藏夫婦お石のかなしみ、申すまでもござりませぬ。しかるに在所中は、伊八が逐電を聞いて、かへつてよろこび、疫病神をおくり出したやうに、皆々安堵いたしたと申すことでござります。この伊八が行狀は、天命の性にさからひ、なす處の所作、一つとして惡事ならぬ事はござりませぬ。これその情の乖戾するとて、ねぢれましたのじや。さるによつて、人みなこれを忌惡み、五尺の身のおき所のないやうに成りました。これじや

まして、こゝにとつぐというてあるは、嫁入する事でござります。朱文公も、此註に、婦人嫁を謂ひて、歸といふとござりまして、よめ入して夫の家へゆくのではござりませぬ、歸るのでござります。およそ女子は、一たび嫁しては、夫の家を家として、外に歸るべき家はない。されば此石女が親里へかへるまいといふは、歸るべき家がないによつてじや。しかも此人學問をして、この道理をわきまへ、歸るまいといふのではござりませぬ。發して節にあたる情の正しい處で、則天下の達道でござります。誰が聞いても尤と存じまして、一言も點をうつ事は成りませぬ。其根元は、天命の性にしたがひ、本心の指圖通にしてござる故に、無筆文盲でも、か樣の働が出來まする。こゝを以て見れば、あながち學問をせねばならぬといふ斗の事ではない、只本心にしたがへば、自から性情の德があらはれ、忠臣孝子にもなられまする。すべて父母のゆるしをうけて、夫の家にいたり、それから後に、さま〴〵の苦勞をするも、又結構な身になるも、皆天命じや。しかれば難儀こん窮にせまるといふても、天命の難儀困窮なれば、遁れんとすれども、遁るべき道はござりませぬ。よし無理にのがれて、親里へ歸つても、同じ天地の間なれば、色しなかへて、また難儀困窮する、これが是自然の道理でござります。百人に一人は、夫を見すてて、おや里へ歸り、また外へよめ入して結構な身になる人も、ないではない。され

さがして見て、亭主のわる口をふれ歩行はせぬ歟、かしこがつて出しやばりはせぬ歟、頬べたをふくらして居はせぬ歟と、吟味するが肝要でござります。扨かのお石の親里は、相應に暮して居りますれば、これまで度々聟の伊八へ、金子も用立つてやりましたれど、淵へ鹽を投込やうにて、何ほど入れ足してもやくにたゝず、其うへ娘が、艱難辛苦するを見て、親の心には、いかにも堪られず、お石を呼びにやり、二親が異見して、「幸に子もなし、緣を切つて歸れ」と申しますれど、よく心得たる女にて、「全く夫伊八の身持のわるいは、私のつかへやうの、能うないのでござります。いづれから申しても、厭につるゝ蓬とやらで、一方が直なれば、おのづからまつ直にならねば成りませぬ。伊八どのの心得違の、直りませぬは、ヤッパリ私のわるいのでござります。其上伊八どのはともあれ舅姑御は、この上もない、けつこうな二親じや、伊八どのがわるいと申して、ふり捨て歸られるものではござりませぬ。只此まゝに捨ておかれて下さりませ」と、其志いたつて正しうござりますれば、里の親たちも、せん方なくて、このまゝに捨置いたら、後には困窮にせまり、緣切つて歸ることもあらうと、これより後は、一向におとづれもせず、又無心もきかず、ひとへに困窮に迫るを、待つてゐられましたと申す事じや。詩にいはく、桃の夭々たる其葉蓁々たり、この子こゝにとつぐ、其家人によろしと見え

うした物じや、そなたはとかく、仰山なもののいひやうする。世間體もわるい、チトたしなましやれ。すべて女といふものは、何事もやさかたに、小さう取りなしていふものじや。おれが此間江戸から歸りがけに、原の驛でとまつて、朝立しなに、草鞋をはきながら、テモ富士山は大きなものじやと、いうたれば、宿屋の下女がいふには、イエ〳〵、あのやうに、大きう見えましても、半分は雪でござりますというた。兎かく女子は、かうやさしう云ひたいものじや。已來チトたちがやうに、かりそめにも、仰山に物いふと、女子らしうなうて、聞えがわるい。そしなましやれ」と、叱りましたれば、内儀が頰ふくらして、「其くらゐな事、わたしじやとて、知つてゐます」と、せり合てゐる處へ、懇意の人が見えて、「これは八兵衞さん、此間江戸からお歸りと承りましたが、先御機嫌ようて、おめでたうござります。定めて長の道中、おつかれも有うと、ぞんじましたに、お見うけ申せば、能う肥えてお歸りなされた」と、挨拶するのを、内儀が横合から出しやばつて、「イエ〳〵あの樣に、ヨウこえて見えますのは、半分は垢でござります」といはれた。ナント出來のわるい内儀ではござりませぬ歟。得てわるうすると、コンナ女中があるものじや。我身の恥になる事も知らずに、亭主のわる口を、近所合壁へいひまはる、鹿島のことふれ、山の神の御託宣には、こまり入つたものでござります。おたがひに腹の中を

房一人にうち任せ置いて、その身は小商にかゝり、のみ酒屋をしては、人に賣るより、己がさきへ飲上げてしまひ、古手屋をしては、博奕の算用に取られ、菓子屋をしては損をし、豆腐屋でも損をし、其くせ短氣の生附で、かりそめにも喧嘩口論、人のむすめに、疵附けては、ぐずりあるき、尤驛近いところなれば、常に驛場にたち入り、たゞのら〳〵として、明けてもくれても女房ばかり、責めせたげて、猿つかう樣に追廻し、日々に困窮にせまる、誠に氣毒千萬な惡黨ものでござります。これに依つて、居村は申すにおよばず、隣村近村身ぶるひたてて、疫病神の樣におぢおそれ、實にもてあまして居りまする。されども、お石は少しも恨みず、一言も口答せず、千辛萬苦して、舅姑のかいはうと、高七石の農業と、亭主のわるづかひの尻ぬぐひに、日をおくること、およそ六ヶ年ばかり、ナントめづらしい、ありがたい女中ではござりませぬか。是に附いてをかしい話がござります。去る所の下女が、香の物鉢をとりをとして割りましたれば、内儀が大聲をあげて、「おりん何をわつたのじや。」「ハイかうのもの鉢を取りおとしまして、大きに不調法でござりました。」「ナンヂヤ鉢をわつた。其鉢がおまへの二年や三ねんの、給銀で買へるもの歟。先度も大事の茶碗をわつて、又けふも鉢をわつてじや。ソウ片端からわつて貰うては、こちの身代は半季もつゞかぬ」とわめくを聞いて、御亭主が、「コレ〳〵ど

ふが道じや。さるによつて、其夫の心得次第で、かの氏なうて玉の輿にものり、さはなくとも、衣裝に花をかざり、下女下男多くめしつかふやうにならうやら、またその夫の心得によつては嫁入のとき、長刀をふらせて來た人も、貧苦かんなんにせまつて、身にはつゞれをまとひ、味噌こしを提げあるかうやら、百年の樂しみも苦しみも只亭主の、心得次第でござります。幸に皆さまは、お仕合がようて、結構なお暮しをなさるゝは、ひとへに夫の御恩でござります。得てわるうすると、この道理も知らず、こちらは貧乏人の娘ではなし、よめ入して難儀する筈はないと思うてござる人が、あるものじや。是はきつい、御了簡ちがひじや。百貫目の身代も萬貫目の身代も、亭主の了簡が、ひとつくひ違ふと、たちまちちんからりで飯たかにやならぬ樣になります。是じやによつて、隨分御亭主樣を大事におかけなされませ。扨かのお石は、嫁入してより後、舅姑によくつかへまして、眞實の親のやうに介抱をいたされます。それのみならず、常に夫伊八にしたがうて、農業のたすけをなし、其實體なる事、近所の人も目を驚かす程の事でござります。しかるにかの伊八といふは、生得心ざまのよからぬうへ、兄の家督を繼いでのち、お石を娶りてより、いよ〳〵身持よろしからず、第一に農業をきらひ、高七石の作を、女

さねばなりませねど、全體は稽古せいでもどうせいでも、忠孝はつとまるやうに、うまれ附いてあるのじや。かるがゆゑに、孟子も人の性は善なりと仰せられた。善なれば道に背かう筈はない。されども氣質の善惡によつて、修行をせねばなりませぬ。此事は前夜申したことでござります、幸に稽古なしに人の道をつとめた人がある。序におはなし申しませう。周防國吉城郡岩淵村と申しまするは、卽長崎街道小郡驛と宮市驛との間に、臺道村といふ、間の驛がござります。此驛より、岩淵村へは八町ばかりござりまして、すなはち街道筋にて、長門の國、萩の御領分でござります。此岩淵村に關藏といふ、百姓がござりました。女房もあり、高七石ばかりの作をいたされました。しかるに此關藏病身にて、はか〱しく耕作も出來ませぬうへに、わづかの作德なれば、下作にあてまするこどもならず。もとより夫婦の中に子はござりませぬ。兄弟も大勢ござりましたれど、こと〱く死にうせて、只今末の弟に伊八と申す者たゞ一人殘りました。これによつて此伊八を、順養子にして、高七石を讓り、關藏夫婦は隱居同前になり、近村より嫁をもらひ受け、伊八に娶合せ、農業を致させました。此嫁の名を、お石と申しまして、年十七歳にて、伊八が妻と成りました。此人後に孝貞の名、關西にきこえまして、太守樣より御褒美頂戴いたされた人でござります。古人の語に、人生れて、婦人の身となる事なかれ、百

箇樣に申しまするとゝ、それは無の見に落つるのじやと思し召うが、落ちたうても、おちられるものではござりませぬ。何じや知らぬが、春になると花がさき、秋になれば紅葉する、柳は綠はなは紅、分別するほど、邪魔になる、柹の木に柹が出來る、桃の木には桃が出來る、鳶飛んで天にいたり、魚は淵におどります。此うまい無造作な味を知らさうと、聖賢君子が齒をくひしばつて、お示しなさるゝけれど、きよろりとして居るにはこまつた物じや。なまなかに分別が有つて、東へ行くべきときに、東へゆかずして西へ行きたがり、南へ行くべきときに南へゆかず、とかく北へ行きたがる。これが天命の性にさからひ、情がねぢれて、正しう發せぬ。ソコデ明けてもくれても、せつない苦しいと、顏をしかめて、泣きあるくものがある。尤かやうな人は日本にありはいたしませぬ。唐天竺には、まゝこれに似た人があるものじや。めつたに油斷は成りませぬ。心學のありがたい事は、名目をはなれて、たゞ何ともない、我なしのうまい所を見附けまして、是にさからはぬやうにいたしまするゆゑ、分別せずして、おのづから樂になります。名を附けて申しますれば、性にしたがふ道が勤まるのじや。さるによつて、無學文盲でも、隨分修行が出來まする。よし又修行はせいでも、氣質のよいお人は、稽古せずして、人の道をおつとめなさる。畢竟銘々どもは氣質がわるいによつて、獨をつゝしむの稽古をいた

と、せり合うてゐるところへ、神主殿が來かゝつて、「これは店さきで、何を争うのじや。」「ハイ私が明德の玉を磨いてゐますれば、この和尚が、それはちがふ、面向不背の玉じやといはれますゆゑ、せり合うてゐまする。」神主殿が聞いて、「ドレ〱おれが見きはめて進ぜう。見せさつしやれ。ハヽアみな違うた。これは明德の玉でもなし、また面向不背の玉でもない」といへば、二人が口をそろへて、「ソンナラ何の玉でござります。」「サレバ〱この玉は、我方にいふまが玉といふ物じや。中々貴さまがたのいふ、玉とはちがひます」といへば、和尚がはら立てて、「ドレ見せさつしやれ、ヤツパリ面向不背の玉じや。」亭主氣をいらつて其玉をひつたくり、「イヤイヤ明德の玉にちがひはない。」神主も目に角たて、かの玉を又引たくり、「ヤツパリまが玉に相違は無い」と、たがひにせり合ひ、あつちへたくり、こつちへ取り、爭ふうちに取りおとして、玉はみぢんに碎けたれば、たゞ世界ばかりで、有つたと申す事じや。ナント味のあるおもしろい話ではござりませぬ歟。チトかんがへて御らうじませ。性じやの情じやの心じやのと、さまざまの名は附いてあれど、其名を取つてみれば、たゞ世界ばつかり、何にもない。ある人の發句に、

踏くだく氷の下に水もなし

中に、棚がいくつも釣りてあつて、それ〴〵の品物が積んであゐ樣にも聞えませう。けつして左やうではござりませぬ。畢竟何ともない物に、さま〴〵の名を附けたのでござります。されば此道理は、しひて知らいでも、大事ござりませぬ。只今日知れた通を、お勤めなされると、此理にかなひまするのじや。こゝによい譬の話がござります。さるかたに學問ずきの人が有つて、毎日先生の方へかよはれましたが、ある日何歟、店でとぎ物をしてゐらるゝ。折ふし宿坊の和尙さまが通りかゝつて、「これは何をしてござるぞ。」「ハイ〳〵とぎ物をいたしてをります。」「それは何をおとぎなさるのじや。」「されば此ごろ、先生に明德の玉を、さづかりましたが、先生の申されまするは、これは是大切な玉じや。捨てておくと、くもりがかゝる。折々切瑳琢磨というて、とぎみがきをさつしやれと、申されました。去るによつて、たゞ今明德の玉を、といで居りまするのじや」といはれた。ソコデ和尙が、「それは結構なものじや。かねて聞いた明德の玉歟。ドレ拜見いたさう、見せさつしやれ」と、手にとつてつく〴〵見て、「イヤ〳〵御亭主、これは明德の玉ではござらぬ。我方でいふ、面向不背の玉といふものじや。さても貴公は、仕合な人じや。隨分この玉を、しんじんさつしやれ。中々明德の玉とは、天地の違ひじや」といはれました、亭主は合點せず、「イヤ〳〵それでもこれは、明德の玉にちがひはござりませぬ」

たよりもせず、ゆがみもせぬ故、此徳を中と名づけまする。此場所を見附けたるを性を知つた人と申すのでござります。しかも見るというて、何も見るらしいものはござりませぬ。しかれども、何もない性に、一切の理がふくんであつて、能く萬事に應じまする。かるがゆゑに、中とはあたるとの儀とも申してござります。則これが天命の性、道の大本というてあるのじや。さて情を知らうとおもはば、何ぞ喜ぶ歟、腹たてる歟、事のあるとき、主親は申すに及ばず、世間の人がこれを聞いて、かれが喜ぶは尤じや、腹たてるは道理じやと得心して下さるのは、則情の正しいのでござります。この徳を名づけて、和と申すのじや。和はやはらぎむつまじい事で、人がみな合點してくれる故、和は天下の達道とも申してある。則情の正しいのは、世間へ通用して、指支がないによつて、達道とまうすのでござります。この味を、朱文公がおたとへなされて、ちやうど家のうちに人が居て、西へゆくのでもなし、東へ行くのでもない、何ともない所が性のやうなものじや。さて東へゆくべきときは、東へゆきて西へゆかず、南へ行くべきときは南へゆきて、北へゆかぬが、情の正しいやうなものじやと、仰せられました。さて箇様に、性じやの、情じやの、心じやの、體じやの、用じやの、人心じやの、道心じやのと、申しならべて見ますると、女中がたや子供衆は、さだめて、御合點もまゐるまい。また人の腹の

續々鳩翁道話　參之上

喜怒哀樂のいまだ發せざる、これを中といふ。發して皆節にあたる、これを和といふ。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。これ則人の性と情との德をいうて、道はしばらくも離れられぬと申す事を、お示しなされたのでござります。畢竟性と情と、わけていへど、心の事じや。たとへば性と情とは、水と波とのやうなもので、はなれたものではござりませぬ。風が來て、波のおこるときは、情の發したやうなものじや。風止んで水しづかなるときは、性のやうなものじや。波の外に水もなく、水のほかに波はない。人の性情もこれと同じ事で、所詮動靜の二つで、其實は一つでござります。この性情をかねて心と申します。心の體は性なり、心の用は情なり、心は道なり。さればこそ性は道の體、情は道の用なりとも申してある。これで見れば、人と道とは、離れたうても、離れられるものではござりませぬ。さて此性を知らうと思はば、喜びもせず、腹たてもせず、かなしみもせず、樂しみもせず、可愛がりもせず、惡みもせず、又ほしがりもせず、此七情の發らぬ先は、只何ともない物じや。此何ともない所を性と申して、か

まの小言が起る、畢竟腹一ぱい物をたべて、ひだるい目を知らぬからじや。ある人の發句に、

その腹に何が不足ぞなく蛙

面白い句じやござりませぬ歟。是は奉公人衆の事ばかりじやない、所帶を持つたれき〳〵の旦那さまも、皆入用のことでござります。猶あとは明晩おはなし申しませう。下座。

しは、絹眞田の緒の附た女雪踏、さては此奴、餘ほどうろたへたものと見える、何さま子細あらんと、しづかに金子を問へば、別條なく二百兩もち歸つて、番頭へわたします。ソコデ番頭がいはるゝには、「歸りの遲う成つた子細も、尋ねたけれど、何歟つかれたやうにも見える。まづ二階へ上つて、一寐入ねよ」といはれた。かの手代も、これをしほに、二かいへ上つて、跡はともあれ、先金子を主人へわたしたれば、安堵して氣をしづめました。此番頭の叱らぬはたらき、甚感心な事でござります。さてその夜、しづかにぎんみする處、引負の金子二十兩、有體に打ちあけ、なほまた、今日の不所存のこらず咄し、其うへ伊兵衛佐兵衛の狂言で氣がつき、恥をしのんで歸つたる樣子、委細に咄しました上、いか樣ともおはからひ下されいと、實に誤り入つた體でござりました。これによつて番頭どのが、主人へ委細に申したれば、主人も分別ある人にて、「芝居狂言を見て、本心にたちもどりの出來るは、まだたしかなる所がある。雨ふつて地かたまると、此後急度あらたむるならば、今一度つかうてやれ」といはるゝ。是からかの手代どのが、眞實主人の恩がありがたう成て、奉公を大切につとめ、難なく宿ばいりをしられたと申すことを承りました。誠にあやふい事でござりまする。是で能う御合點なされませ。主親ほど世の中に目の長い、慈悲ぶかいものはない。あまり結構すぎるによつて、さまざ

と申すのじや。何分常に、わが腹のなかを吟味して、少しも恥じうない樣にしておくが、學問の肝要でござります。此ひとりをつゝしむと申すことは、道を行ふの極秘傳、かへす〴〵ありがたい、聖賢のお示でござります。たとへば蝮にかまれたるとき、其疵口をそいですつれば、たちまちに治るやうなもので、一念きざして、惡と知つたら、チヤツト止めにすると、總身へ毒はまはらぬ。これを捨てておくと、其惡が段々腹の中で大きうなり、潛滋暗長というて、目にはたゝねど、いつの間にやら心の惡が形にあらはれ、止めにしたうても、相人が出來て、やめられぬやうに成ります。吸がらの火は、ふみけしても仕廻るけれど、火事に成つてからは、水も梯子もとゞかぬ。只一念幾微の間に、善惡をえらんで、惡をやめにするが、道の奧義でござります。ドウゾどなたも、こゝをお勤めなされて、下されませ。さてかの手代どのの主人の家には、今朝から爲替を取りにやつたが、晝になつても戻らず、先方へ問合にやれば、先刻手代どのへ、金子を渡したとの事、サアこれから大さわぎになり、請人を呼びにやるやら、卜者に見てもらふやら、上を下へとまぜかへすところへ、七つ時分に、かの手代どのが、何氣ない體でもどつて來た。此家の番頭どのが、いたつて發明なうまれ附ゆゑ、かの手代の戻るとき、其顔附をみれば、只ならぬ顔色、足もとを見れば、かたし〳〵の雪駄をはいてゐる、しかもかた

飛だりるには、「ナンボウ渡世に精出すというても、六月炎天に、わた入を三つ四つかさねて、はねたりの所作ごと、中々我々が、一日そろばんはじく様な、勤ではない。いかさまあれほど、渡世に精出さねば、身代はもたれぬものじやと、それで感心いたしました。さるによつて、ふたたび芝居へ往たら、此方の身代がもてぬによつて、得參らぬ」といはれたと申す事じや。これらは是芝居の、うまい身の所をたべたと申すものじや。どなたも芝居を御らうじるなら、かやうなところを、御覽なさるがよい。むかし柳下惠といふ賢者は、水飴を製して、根機をやしなひ、學問のたすけとせられた。又盜跖といふ大盜人は、みづ飴を製して戸樞にぬり、盗のたすけとしたと申す事じや。同じ水あめでも、もちひやうに依つて、學問のたすけとも成り、又ぬすみのたすけともなる。强い物じや。芝居淨るりも此とほりで、見樣によつては、忠孝のをしへとなり、又見やうによつては、不忠不孝の手本ともなる。幸にこの手代衆の、よいところで氣のついたは、未だ天道にも捨てられぬ處があつたとみえる、ありがたい事ではござりませぬ歟。是じやによつて、專ら獨をつゝしむの、修行をせねば成りませぬ。愼とは、一念のきざす時、良知のがゞみをてらして、善か惡かを明にわきまへ、惡なればこれを止めにし、善なれば固くこれを執りまするを、愼とはまうします。このつゝしみが、癖附になつたを、聖賢君子

つて、金の調達して、恩をおくらうとおもふものさへあるに、我は幼少から、格別の大恩をうけて、人に成つたことをうちわすれ、大切な主人の金を引負し、その上大金までぬすみ取つて、出奔せうとおもうたは、われながら不思議なほど、恐ろしい了簡じやと、フト氣がついて見れば、座にもたまらず、叱られることも、引負のことも、何もかも思れず、只そのまゝに、主人の家へ歸つたのでござります。實にありがたい目のさめ樣じや。これは是狂言のおかげじや。すべて芝居淨るり皆善をすゝめ惡を懲す、手短かな教でござりますれど、得てはうまい處の身を喰ずに、味ない皮ばかり食る人があるものじや。狂言が上手じやの、男つきが立派なのと、やくにたゝぬ所ばかり見て戻るは、かへつて毒にこそなれ、をしへにはならぬ。さる所に、いたつて實體な息子どのが有つて、芝居などは、見たこともない篤實なうまれ附、ソコデ謡講の連中が、かの實體ものを放蕩仲間へ引入れようと、一日無理無體に、芝居へつれて行きました。かの息子どの、はじめから終まで、一つ〳〵感心し、落涙してよろこばれた。友だち衆が、此體を見て、さては芝居が氣に入つたとみえると、その後度々さそへども、ふたゝび芝居へは往かぬ。ソコデ友達衆が合點がゆかず、かの息子殿に、「此間はしきりに感心して、面白がつたじやない歟。全體何を感心せられたのじや」と、問はれましたれば、かのむすこどのが、いはる

兵衞の女房は、伊兵衞がいもうとで、不器量ゆゑ、錢一貫文で身を賣る、愁歎のところを、かの手代が聞けば、伊兵衞の詞に、一貫の錢のあたひは十二匁、せけん通用の秤でかけたら、十二匁あるべきが、今日、この世界を照さつしやる天道の秤では、此みよが五百五拾匁の身の代も、お縫が其一貫の十二匁も、ちつともかるみはあるまいぞ、といふ聲が耳に入ると、かの手代が何おもうたか、しく／＼と泣出したが、たまりかねて何ともいはず、其座をたつて、一さんに主人の家へかけて戻りました。これ本心の發見。地ごくのかまのふたの明どき。ある人の發句に、

一しぐれ時雨てもとの月夜かな

ナンとおもしろい發句じやござりませぬか。若いときの不了簡は、たとへば晴れたる空の、俄にかけ曇つたやうなもので、善惡もわからず、主親の事もわすれ果て、まよいにまようて、つきあたつた所で、はじめて目のさめるは、一しぐれしぐれて、もとの月夜かなじや。人の性は善なり、一旦明德は昏んだれど、今芝居を見て、畢竟狂言綺語とはいひながら、勸善懲惡のをしへにちがひなければ、此手代どのが、見るとも見ぬともなしに、狂言の趣向が、身にしみじみとこたえ、能々おもうて見れば、かれはわづかな切米をもらうた主人の恩義に、女房を賣

生茂るむぐらの宿の道たえて人もかよはず月もてらさず

此歌のこゝろは、仁義の良心をうしなうて、人の道に離れては、生きてゐる死人じやと、たとへてよんだ、歌と聞えます。箇樣なお人は、澤山にあるものではなけれども、得て一人や二人は、あるのでござります。御用心をなされませ。扨かの手代どのが俯いてゐるを、氣のどくがり、ソロ〳〵たいこもちが、おだてかけて、「ナントこれから、芝居へ御出でなされませぬ歟」といへば、大勢の燈籠びんが、「わたしらもお供いたしましよう」ととり〴〵にすゝめる。ソコデかの手代が思案に、まだ日は暮ず、酒飲んでも醉はず、太鼓三味線もうるさく、たゞ何となくしめ附らるゝやうにおもふ最中なれば、イッソ芝居見にいたらば、まぎれることも有う歟と、是から、大勢うちつれて、芝居見にゆく。ナニガ錢拂はぬ芝居行きなれば、めつたに廣う棧敷をとらせ、大ぜいの燈籠びんを前にならべ、その身は頰かぶりで顏をかくし、後の方にちゞこまつて、もとより芝居見る氣でもなし、どうなとして日を暮さうと思うゆゑ、見るでもなし、又見ぬでもなし、たゞウツ〳〵として俯いてゐる。此日の狂言が、敵討つゞれの錦といふ狂言で、伊兵衞佐兵衞といふ若黨が、たがひに女房を賣つて、金の才覺し、主人にやらうといふ趣向じや。尤伊兵衞の女房は、佐兵衞が妹で器量がようて、銀五百兩五拾匁に身をうり、また佐

みましたと申事じや。扨ふしぎなは、件の犬が、その日より往來の人をおどさず、其うへ、かの年寄、他へまゐられまする節は、かならず町ざかひまで送り、また歸る節は、町ざかひまで、出むかひまして、先にたつて、門口に踞りまする。畜生といへども、恩を知らぬといはれては、能々に恥るところありと見えまして、かやうに所作がかはりまする。これでおもへば、主親の恩を知らぬものは、人面獸心とは、中々いはれぬ、畜生にもはるかに劣たる所作でござります。是全く、平生、獨をつゝしむの心がない故、人の見ぬところ、人のきかぬ所と、わがでにゆるして、不忠不孝の所作になります。人は萬物の靈と申して、一切いきとしいけるものの中において、尤すぐれたるが人じや。それに不忠不孝の名を取りまするは、實にはづかしい、口惜い事でござります。しかも不忠不孝の名をとつて、せめて立身出世でも出來ることか、氣隨氣まゝがなる事歟、鳶鴉でも遊んでゐてはくはれぬ。鼠もいたちも、分相應にかせがねば、口すぎは出來ぬ。若いときの無分別には、主親の手をはなれたれば、格別自由が出來るもののやうに覺えるは、これが血氣のムチヤクチヤ思案、乞食非人になつても、あそんで居てはくはれず、とても動きはたらくものなら、主親のお膝もとで、忠孝がつとめたい物じや。うろたへると、本心が眞黑に成つて、いつのまにやら獸にも劣る心になりまする。古歌に、

の町内に、何處から來たとも知らす、迷ひ犬が一疋をりましたが、いつしか町中の飼犬のやうに成つて、こゝかしこで養はれて居りました。されば此犬が、ちかごろ往來の人をおどし、子供に嚙附、あるひは非人などにかみつきまして、折々町内へ、つけこたへにあづかり、迷惑すること度々でござりました。あるとき町用につき、隣町へ、かの年寄相談にゆかれ、夜ふけて歸る處を、件の犬が、さん〴〵におどしました。やう〳〵我家へ逃げこみ、寐て見ても、腹が立つてねられず。翌朝會所へ髮を結ひに參られました。折ふしかの犬が、其會所の庭に、寐て居まする。ソコデ年寄が、にはかに氣色をかへ、犬にむかひて、人にいふ如く、「おのれ町内のやしなひをうけ、命をつなぐ、恩義もおもはず、やゝもすれば、往來の人をそこなひ、町中へ迷惑を掛けるのみ歟、夜前町用にて、夜ふけて隣町より歸る節、何ゆゑ町役人をおどしたるぞ。これによつて、已來町分にさしおくこと、罷りならぬ。いづれへなりとも立ち去れ」と、大に叱りましたれば、かの犬、首をたれ、つくばひ居て、いかにもあやまり入つたる體にみえました。さすがに、年月町内に居りました犬ゆゑ、不便の心おこり、「已來をきつとたしなみなば、これ迄のとほり、町分にさし置てやらう」と、詞が和らぎましたれば、かの犬うれし氣に表へ出ました。髮結はじめ家内の人、この樣子を見て、大にあきれ、お年寄は氣が違うたる歟と、怪

る人の所作じや。大切なものは金銀、おそろしいものは人の心じや。指一本はじく間に、どのやうな無分別が、おこらうやら知れませぬ。若いお衆は別して戰々兢々、こはしくのおつゝしみが、肝要でござります。さて此手代が、わるがしこう工夫をして、此まゝ迯げなば、追人のかゝる事は必定、いづれ二三日、江戸の町にかゞみゐて、其のちに上方へのぼらうと、覺悟をきはめ、日ざしを見れば、まだ晝前、何處でなりと、日を暮さうとおもひまして、よし町というて、堺町の裏新道に、懇意の茶屋がござりました。先こゝへ逃込んで、さてどうも仕樣はなし、たいこ持やら、燈籠鬢やら、高なしにおほぜい呼よせ、酒肴と、どんちやんとで、日を暮さうと存じましたが、能うした物じや、本心が合點しをらぬ。酒はなんぼ呑んでも醉はず、太皷三味線も面白からず、太皷もちの、かる口も、胸にこたえて、さり迚はこゝろぐるしく、首をのばして日ざしを見れば、まだ八つ前、いつもは、みじかう覺える日も、けふに限つて、格別に長うおぼえ、どうぞして日を暮したいものじやと、さし俯いて思案してゐる。ナントこれが鼻たれの時分から、おせわに成た御主人の恩を、知た人でござりませう歟。恩を知らぬものを、人面獸心というて、面は人でも、こゝろは獸じやというてあれど、畜生にも此やうな不義な心はござりませぬ。わが友何がしといふ人、町分にて年寄役を、勤めてゐられました。然るにこ

へば、かき消すやうに失せたと、ある書物に見えまする。是かの天狗も、人の念慮のおこる處は、忽に知りますれど、念慮の起らぬさきに、長枌のはじけることは、夢にも知らぬ。これ知るべき道理がないに依つてじや。さるによつて、一念おこると、天地神明に通じ、世界中へ、つつぬけに成りまする。こゝを以て朱文公も、己ひとり知るときは、則これ天下の事、著見明顯なること、しかもこれに過ぎたるもの有ることなしと、註をお下しなされました。さるに依つて、常に腹のうちを吟味して、用心をいたしませぬと、どんな大事をひき出し、悪名を流さうやら知れませぬ。甚おそろしい事でござります。先年、わたくし江戸表に居りましたる節、隣家の事でござりましたが、ある呉服店の手代に、獨を愼む心得のない人がござりまして、いつの間にやら、貳拾兩ばかり、引負が出來ました。されどもまだ節季までは、あらはれぬことゆゑ、とやかうと工面して居るうち、一日金貳百兩の爲替手がたを持つて、麹町邊まで、うけ取りに往かれました。先方で恙なう此金を受けとりました處で、ふと悪念が起りました。恐いものじや。其故は、いづれ節季になると、貳拾兩の引負があらはれて、請人へ預けられるは必定、所詮この金の手に入つたこそ幸なれ、此まゝかけ落して、京大阪へなりとも出かけ、ともかくもならうと、無分別を考出した。これが是、物をかくせば隱されるものじやと、心得ちがひす

ほどなる煙草の火より、大火事となるやうなものじや。さるに依つて、省察の工夫をこらし、つつしみを加へねば成りませぬ。此獨をつゝしむ事、僅な事のやうにござりますれど、其しるしが、天地位し、萬物やしなはるゝに至りまする。又この獨しるところを、うかうかと油斷しておきますると、其しるしが國を亡し、家をやぶり、身をうしなふにいたるのじや。ナント恐ろしいものではござりませぬ歟。古語に、念慮萌さゞれば、鬼神も知る事なしというて、此一念の萌さぬうちは、鬼神もはかり知る事が出來ませぬ。なぜなれば、知るべき事がないによつてでござります。むかし飛騨の山中に、檜木の長へぎをこしらへ、世渡とする男がござりました。一日例のごとく、山に入りて、細工をする折から、前なる杉の木の蔭に、脊の高い山伏が、おもひがけなう、立つて居ました。かの細工人大きにあやしみ、さても此山伏は、天狗さうなと思ふうち、かの山伏大聲あげて、「我を天狗さうなとおもひをるぞ」といふ。細工人、いよいよあやしみ、これはいやな事じや、早く逃歸らんとおもへば、かの山伏また聲をかけ、「これはいやな事じや、早くにげ歸らんとおもひをるぞ」といふ。細工人、あわて騒いで、長へぎをたわめ、急に荷ごしらへするとき、手がはずれて、枌板一枚はづみに飛んで、かの山伏の鼻柱へ、きびしくあたれば、山伏一驚をくらひ、「さてさておのれは、氣の知れぬ男かな」と、いふかと思

續々鳩翁道話　貳之下

隱たるより見はるゝはなく、微よりあきらかなるは無し、かるがゆゑに君子は、その獨を愼む。前には敬畏のこゝろを存して、天命の性をやしなふの工夫を、御しめしなされ、こゝには今一段くはしうして、省察の工夫を御しめしなされたのでござります。省とは、常にこの心存するや否やと省、察は、善か惡かとあきらかに辨へて、天命の性を全うすることでござります。まづ本文に、隱たるより見るゝはなしとは、人の心の事を申すのでござります。また微より顯なるはなしとは、念慮の微なる事を、いふのでござります。さて獨とは、われひとり知るところの場所にて、すなはち念慮のうごくところを、さして申すのじや。大勢の人の中でも、わがこゝろの中は、誰も知らぬものゆゑ、さればこそ、ひとりとは申しますれ。すべて、至善も極惡も、この我ひとり知るところの場で、極めまするのじや。多くはこれ世間の人の、不忠不孝におち入りまするも、またいにしへ、夏の桀王、殷の紂王などの、天下を亂し、其身を亡しまするも、はじめ僅に、此ひとり知る、念慮の微なる處より、起るのでござります。たとへば螢

ざります。」「それは一段おもしろい。これもついでに買うておけ。いづれ近々、茶を出さねばならぬ。先辨慶の茶わん、樊噲の蓋おき、清正の香合、よい取合じや。しかしみな兵ぞろへじや、是はどうした事じや」と、問れたれば、茶道具屋がぬからぬ顔で、「つよい筈でござります。たんと家をふみつぶして來た、道具じや」といはれた。ナント恐ろしい話ではござりませぬ歟。茶碗や香合ばかりの事じやない。小間物やが持ってくる、仕入箱の中にも、朝比奈や辨慶が、本名をかくして、櫛笄になつて、ゐようも知れませぬ。うろたへると、身代を、兵共にたゝきつぶされます。其外古道具、古手見せ、質屋の藏に、つんであるしろものは、皆身代をふみ潰した兵、どこに埋伏して居ようも知れぬ、御油斷は成りませぬ。とかく大事大切の愼がぬけると、大騷動のもとゐじや、御用心なされませ。休息。

十二月の大晦日には、書出はつんで山のごとく、胸づかへして、飯も喉へ通りませぬ。ひろげて見れば、皆それ〴〵に覺のある事、此とき手を持て胸を打つても、モウおそい。是みな平生の油斷からじや。とかくおこたらぬやうに、いたさねばなりませぬ。かんざしは大事歟、花見は大事歟、此くらゐな事はしても大事ないと、ゆるす心の果ぞかなしきじや。所詮分限を辨へて、立反らにや成りませぬ。かるがゆゑに、中庸に、君子その位に素して行ふ、その外を願ずと、お示しなされたのでござります。是について、おもしろいはなしがある。さる茶人の家へ、道具屋が參りまして、「モシ旦那、この道具を御らうじませ」と、さし出せば、旦那が手に取つて、「ホンニ此茶わんは時代が見える。書附はない歟。たれが手づくねじや。」「ハイこれは武藏坊辨慶が、手づくねの茶わんでござります。」「いかさま其時代と見える、代金は何程じや。」「ハイハイ三貫匁でござります。」「ヨシ〳〵これは貰うておかう。時にこの蓋置は、またよほど時代がみえる。鼎足でもなし、また三人形でもなし。」「ハイこれは、むかし鴻門の會の節、樊噲が楯の板をはさんで、門やぶりした時の、鎧のかな物でござります。」「それはけしからぬ時代ものじや。これも序に買うておかう。時に此香合は、大分あたらしう見えるが、これは誰が作じや。」「ハイハイこれは加藤清正、朝鮮征伐のとき、朝鮮王城の土をとつて、手づくねになされた香合でご

喰にすると、本堂たちまち大破におよびます。其とき一家親るゐへ、奉加帳を持してまはつても、誰が一人、寄進についてくれる者はない。是がこれ寺や本尊は、おれが物じやとおもふ和尙の心得ちがひで、寶物を賣らねばならぬやうに、成りまするのじや。是を孟子も、家必自らやぶつて、而して後人これを毀る、と仰られました。とかく家業に怠つてはなりませぬ。ある人の道歌に、

おこたりも夏のかせぎもほど〳〵にほにあらはれて見ゆる秋の田

六月炎天に田はぶつ〳〵と、にえ返つてある中へ、四つばひに成つて、腰ぎりはひり、脊はごらんで灸點おろさにや、分らぬやうに、眞黑に日にやけ汗しづくになつて、一番草、二ばんぐさ、三番草と、ねんごろに手入した田も、またぶしようかわいて、晝めしの箸はなすと、永の日を七つ時分まで晝寐して、のら〳〵と明しくらし、一ばん草もろく〳〵に取らぬ田も、靑田のときは同じやうに見えますれど、秋になると、こはいものじや、手入をした田は、實がついて皆俯てゐる。又のらかわいた田は、きよろりが味噌ねぶつたやうに、ひよろ〳〵と立てゐまする。人の怠も此通で、平生は、格別おごつた樣にも、あそんだやうにもおぼえませぬ。昨日はこれほど怠つたり、けふは是ほど油斷が有つたと、その折々はわかりもいたしませねども、

す。夫を手本にして、めつたに商賣をかへたがる人は、烏鵜の眞似をして、水をのむと申すものでございます。こゝによい譬の話がある。さる貧地の和尚樣が、急に賽錢をしてやらうと考へ、ありきたりの本尊、あみだ如來は古めかしく、世間に類も多い。當時世間をうかゞふに、專ら子をうむ事が、はやる時節なれば、子安の觀音を本尊として、安產の守を出したらば、寺門の繁昌うたがひなしと、俄にあみだを觀音にしかへ、門前には本尊子安の觀世音と、墨ぐろに書きしるし、看板をかけたれば、參詣の人肝をつぶし、あやしんで門內へはひりませぬ。和尚大きに氣をいらつて、これではいかぬと、又々工夫し、其翌日は辨才天、あるひは金ぴら、弘法大師と、おもひ出すまゝ、とり替引かへ、日々ほん尊を仕かへましたれば、後には猫の子も來ぬやうに成つたと申す事じや。商賣がへをしたがる人は、此和尚さまのお仲間うちじや。先祖開山上人の御苦勞なされた、家業如來を、大切にお守をして、御先祖開山より傳來の家藏諸道具、鍋かまの御寶物をば、大切に守護して、一向一心に家業如來を信心さへいたしますれば、參けいは門前に市をなし、賽錢は、米麥錢かね、雨のふるやうに、元日から大晦日まで、上り通しでございまするに、此和尚さまのやうに、本尊を仕かへ、御開山の御苦勞をかへり見ず、不信心になるがさいご、參詣は日々にへり、賽錢は月々に減じ、仕かたがないゆゑ、寶物をうり

も得くはず、著物も得著ず、口惜い目も堪忍したり、難儀な事も辛抱したり、千辛萬苦して、此この家業のもとゐを御立てなされたのじや。その子孫として、己が勝手の氣隨にまかせて、此仕事は引きあはぬの、畑仕事はきらひじやの、こんな小商しては、渡世になる物歟などと、とかく餘所外へ、目がついて、仕來りの家業が、いやになります。ソコデ百姓が商をし、商人が醫者になり、いろ〳〵にばけて、世間の人をたぶらかす、恐ろしい事でござります。ヨウおもうて御らうじませ。引きあはぬ商賣でも、埒のあかぬ細工でも、見事先祖代々、世渡が出來てきたのじや。それが今更渡世にならぬといふは、皆これ、家業に精が出ぬのでござります、是を怠ると申します。此怠りの起る處は、身の分限を辨へませぬによつてじや。分とは、士農工商それ〳〵の分、限とは町人は是だけ、百姓はこれだけ、職人はこれ丈と、みな夫々に、住居衣類、食物は、申すにおよばず、身分だけの限がござります、是を分限と申すのじや。その分限を過す處から、物入がつようなり、入目が多いに附けては、金まうけが足らぬやうになりまする。ソコデ家業のこしがぬけて、おのづから精出して勤めることがならぬ故、トウ〳〵先祖から仕來の家業を、取替るやうになります。こはい事じや。めい〳〵身にたち反て、愼まねば成りませぬ。たま〳〵據ないことで、家業をかへる人は、まことに止事を得ぬのでござりま

ぶるひも出ず、氣もしづまらぬ。此理を考へて、すべて種物をあつかふ事、大切の人をあつかふやうに、敬畏の心を存して、あつかひまする故、種ものの氣がおのづからしづまらず、さるによつて、實のり格別、世間にすぐれて出來るよし、咄されました。成るほど有りがたい心得でござります。尤土地ところにより、又は寒暖によつて、さまぐ〵種漬植つけなどの、仕かたもござりませうけれど、只おそれ敬しむの心を主として、其所々の法にならひ、種漬植つけ、すべてとり入まで、此敬畏の心で仕あげますれば、いづれ世間よりは、餘計とれねばならぬ筈でござります。是は種ものに限らず、茶碗ひとつ、扇一本、取りあつかふにも、おそれつゝしむの心があれば、とり落してわる樣な、無調法は出來ますまい。ましてて主親に向ひ、夫兄にむかひ、此心があらば、忠孝貞節、おのづから勤まります。但し畏れつゝしむといふて、ワナワナとふるひながら、致す事ではござりませぬ。敬畏といふは、只大事大切とぞんじ詰めまする事でござります。別して、大事大切にせねばならぬは、御銘々の家業じや。此家業は、みな是其家々の、御先祖さまや、大祖父樣、親御の代から、仕來りの家業でござります。此家業をはじめることは、一朝一夕のことじやござりませぬ。鑓に血を附けたり、鎧の袖をしきねにしたり、又は肩に棒を置いたり、あるひは草鞋を作つたり、雨にそぼぬれ、雪にうたれ、食ふもの

事でござります。先籾種は、隨分よい種を選んで、前年より俵に入れ、庭の天井に釣りおきまする。これは火氣が自然とまはつて、あたゝかなる樣の心得でござります。尤所によつては、只土藏にたくはへておく所もござりますれど、北國筋や、あるひは山分などでは、多く寒氣が、つようござりまするゆゑ、火氣を假りて、あたゝまりを入れ置きまする事じや。さて翌年にいたり、種附時分になりますれば、かの俵をおろすに、竿のさきに鎌をゆひ附け、下よりかの釣繩を切ておとし、池水に漬けまするこ と、二十日ばかり、其のち苗代へまきつけまする。これが三草邊では、すべてかやうに致します。然るにわが友何がしの心得は、大にちがひまして、籾だねといへども、天地生々の氣を、ふくんでゐる活物なれば、疎略にあつかふときは、生々の氣をくじく事があらう歟と、いかにも大切に、つゝしんで、病人をあつかひまするやうに、しづかにかづき上げて釣りおきます。又おろすときも、梯子をかけ、ソツト肩を入れて、繩をとき、靜におりて、池へもち行くときも、大事にして持ちゆき、又水へおろすときも、小口から、ソロ／＼と少しづつ水へひたし、次第に水へおろしてつけ置きます。上げるときも、またはじめのやうにして、ソロ／＼と引き上げまする。是その心得は、人のあたまより、水をかけますれば、一驚をくらひ、氣しゞまつて、暫はのびませぬ。足もとより次第に水をかけまると、胴

其くせ人の横ばひするのは、よう目にかゝつて、見事人の小ごとはいへど、おのれが横にあるくのは、トントめにかゝりませぬ。又ある人の發句に、

蟹を見て氣のつく岨の清水かな

おもしろい句じやござりませぬ歟。此句を、我得かたに取つて見れば、人の横ばひが目にかゝつたら、チヤツト、わが身にたちかへつて、我もよこ這はしてゐぬ歟と、氣をつけてごらうじませ。此氣がつくと、愼の心がおこる。愼の心が起れば、おのづから生つきの、性をやしなふ便になります。もし少しでも愼がぬけると、はなれられぬ道を、無理無體に離れるによつて、はなはだ苦しい。此故に朱文公も、是をもつて、君子は常に敬畏を存して、見きかずといへども、またあへてゆるがせにせず、天理の本然を存して、しばらくの間も、離れしめざるゆゑんなりと、註をお下しなされました。すべて敬畏の心を存するは、人にむかふばかりの事ではござりませぬ。萬物に向ふに、此心をもつてむかへば、宜しうないといふことはござりませぬ。我友何がし、播州三草の人でござりまするが、いたつて農業の事にくはしく、米麥はいふに及ばず、何にてもこの人の手に植つけまするると、豊凶にかゝはらず、世間の人より作徳がたんと有つて、至極見事に出來まする。ふしぎにぞんじまして、そのゆゑを尋ねましたれば、大きに謂ある

ならぬ。中むかし、世の亂れまして、こゝかしこに、盗賊おこり、在方町かたおびやかされて、一日もやすき心はござりませなんだ。其頃盗人二三人、夜ふけて、ある家を窺ひ、戸のすき間より、内をさしのぞいてみれば、としの頃四十計の女、たゞ一人、圍爐裏の前にすわり、粥を烹て居りまする樣子じや。此外にも人やあると、なほ窺て居りまするうち、彼女、粥のにえ加減を試る有さまをみれば、鍋のふたをとり、淸らかなる箸にて粥すこし蓋の上にはさみ上げ、指にて押潰して試み、更に口中に入れませぬ。其行儀の正しいを見て、盗大きに恐れて、逃歸つたと、ある書物にみえました。是がこれ、獨を愼むの奇特でござります。私どもは、とかく合點がわるうて、これは人の見ぬ所じや、これは人の聞かぬ所じや、是程の事は大事あるまひ、此位な事は知れはせまいと、我ひとり合點して、道のない方へあたま突込み、これが理屈じや、あれがりくつじや、是ではどうもならぬ、あれではどうもならぬ、かうすれば勝手がよい、斯せぬと勝手がわるいと、滅多に身びいき身勝手でこじつけ、心易う渡られる世の中を、無生無體に苦みます。ある人の歌に、

岩根ふみからたちわけてゆく人はやすき大路をすぎがてにする

と、朝から晩まで、岨道を横ばひする、不行儀な蟹仲間が多い。さりとてはこまつたものじや。

けない事ゆゑ、是はと驚き、手を放すと、杖はする／＼と、節あなより下へぬけて落ちると、川下の方へ流れまする。隱居これを見て、ふしぎさうな顔つきして、腰にさいた扇をぬき出して、又かの節あなへさしこみ、手を放して見れば、扇も穴から川へおちて、是も川下へながれまする。隱居、つく／＼とうちながめて、やう／＼合點がいたやら、横手を打て、ハヽア此理屈じやナといはれた。是がよう似た話じや。銘々どもは、一ぺんや二へん、鼻ついても、天窓うつても、なんぼうでも合點がゆかぬ。ソコデ學文がきらひ、道のはなしが嫌ひじや。小人と君子とのわかちは、外ではござりませぬ。しくじつても懲ぬのは小人、しくじらぬ先に、御用心なされるのが、君子でござります。誰しも、おそれ愼む心の、ないものはなけれど、小人凡夫の悲しさには、人の見る所、人のきく所では、隨分愼んで、用心をいたしますれど、人の見ぬ所、人の聞かぬ所では、どの樣な事しても、大事ないと心得、高なしの氣隨氣まゝ、さるによつて折々鼻がへこみます。聖賢君子はこれに引きかへ、人の見ぬところ、人の聞かぬところを、いよいよ大事とお愼みなされる。詩にいはく、爾が室にあるをみれば、こひねがはくば屋漏にも愧ざらんと見えまして、君子は御一人ござつても、不行儀な事はなされぬ。實に人の見聞ぬ所は、いたつて大事の曠の場所でござります。うろたへると、人にも見落され、大耻をかゝねば

も變りはございませねど、なんぞ事があると、天地の違に成りまする。たとへて申さば、私のやうな目くらも、あなたがたのやうな目あきも、斯うして居まする時には、何もかはりはござりませぬ。今にもあれ、ヤレ火事じや、盜人じやと、立騷ぐとき、あなた方は目があいてあるゆゑ、道をよう御存じや、ソコデ怪我もせずに逃げられる、私どもは、その段になると逃げる事が出來ませぬ、目がみえねば、道は知れぬ、されども、手足がござりますゆゑ、さながらきよろり共して居られず、探り廻つて、逃げて見ても、あちらでは天窓うち、こちらではふみかぶり、どうやらかうやら、逃げおふせると、始のうろたへた事は忘れて仕舞ひ、目を明かうとも、道を知らうともおもはず、結構な目くらじやと、思うてゐる。道ぎらひのお人は、私によう似たものじや。事は何どきにおこらうやら、知れぬが浮世でござります。子が死なうやら、親が死なうやら、掛損せうやら、火事にあはうやら、そのとき俄に、泣がほせぬやう、前もつて道の修行はいたして置きたいものでござります。是故に、君子は、その睹ざる處を戒め愼み、その聞かざるところを恐ぢおそると、事にのぞんで、泣づらさげぬ御用心を、聖賢君子は、前もつてなされまする。これに附いて、たとへのはなしがある。さる所の隱居が、杖をついて板橋をわたるに、中程の板にふし穴がござりました。かの隱居、杖をふし穴へ突込れた。思ひが

道を知れば天を知ります。これを知れば、天人一致、萬物一體の道理が知れます。よし又この道理は知らいでも、目は見える、耳はきく、手はもつ、足はゆく、譯を知たも知らぬも、生つきの道じやによつて、自由自在に出來するまる。ある人の發句に、

子もふまず枕もふまずほとゝぎす

おもしろい事でござります。郭公の聲が耳に入ると、いつの間にやら立つてゆき、窓を明ける、しかも側にねてゐる子もふまず、また枕もふまぬ、何ものがあるいて往たぞ、只郭公ばつかりじや。チト考へて御らうじませ。ナント奇妙なものではござりませぬ歟。しかしながら身びいき身勝手が、少しでも交ると、枕もふめば親御のつむりも蹴ちらかす。こはいものじや。さるによつて朱文公も、道は日用事物、まさに行ふべきの理、みな性の徳にして、心にそなはると、註をお下しなされました。その心におれがといふ身勝手がまじると、性の徳をうしなひまして、朝から晩まで、する事なす事、工面のわるい事ばかり思ひ附いて、我とわがでに、ハアスウいふて苦しみます。心學のありがたい事は、我ないといふ道理を、合點いたしますれば、道のはなれられぬ事を、よく知ります。大か小かの違はあれど、得て身勝手がまじります。さるによつて、平生道を辨へて、おかねばなりませぬ。事のない時は、道知つた人も、知らぬ人も、何

續々鳩翁道話　貳之上

道は須臾も離るべからず、はなるべきは道にあらず、是故に君子は、其睹ざるところを戒愼み、その聞かざる所を恐ぢおそると、これ則心を存し、性をやしなふの工夫にて、道は離れたうても、はなれられぬと申す事を、お示しなされたのでござります。既に藤樹先生の語に、道は譬へば水のごとし、人はたとへば魚のごとし、魚水にある時は、悠然としてたのしむ、水をはなるゝときはくるしむ、はなれて久しきときは死すと、仰せられました。何さま此通で、人が人の道を勤めてゐまするとたのしむ。人の道にはなれまするとと苦しい。人の道にはなれ通しで居ますると、首くゝる歟、身をなげるか、切られるか、うち殺されるか、いづれ死にまする。これ魚と水とのやうなものじや。人と道とは暫くも、離れることは成りませぬ。はなれたらしまひじや。諺にも、合ものははなれると申します。人と道とは合せものではござりませぬ。道は性にしたがふの道で、うまれ附の通にするのが道じや。道の外に物なく、ものの外に道はござりませぬ。又古人の説に、心は道なり、道は天なりともみえまして、心を知れば道を知ります。

入つて、身にしみ〴〵とこたへ、何となく尊く、ありがたく覺えましたれば、今はたまりかねて、表の戸を引きあけ、卯右衛門を内へ伴ひ、空寐入して歎きたる身の科をわびて、これよりこの馬かたも、志をあらため、終に同行となり、無二の信者となられました。蓮如上人のうたに、

火の中をわけても法をきくべきに雨かぜ雪はものの數かは

卯右衛門の行狀此歌のこゝろにかなひて、有りがたいことでござります。されば是等の始末、御領主樣の御聞に達し、奇特の信者なりと、御感心あそばされ、御褒美頂戴仰附られました。此時年六十五歲。なほ此餘ありがたき行狀あまたござりますれども、事長ければ略いたします。すでに卯右衛門、去ぬる天保辰のとし、往生を遂げられましたと、物がたりに承りました。これは全く、佛法のをしへによつて、一文不通の卯右衛門が、よく人の道ををさめられました。專ら文字を知り、古事來歷を知るが學問ではござりませぬ。神儒佛の三教、何れなりとも、其根機にかなひたる教を聞いて、謹んでこれを守らば、人の道の勤まらぬと、いふことはござりませぬ。猶あとは明ばんおはなし申しませう。下座。

かりの道を、お念佛をつれにして、寒さを凌ぎ、やう〳〵彼村にたどりつきまして、馬士の家にいたり、門の樣子を見るに、甚靜にござります。やがて、簑笠をぬぎ、門の戸をあけんとするにあかず。ほと〳〵と戸を叩き、「卯右衞門が參りました。卯右衞門でござります」と、いへども叩けども音もせぬ。かの馬かたは寐ながら此聲を聞き、さてはかの親仁めが、よほ〴〵と來たさうな、よもや今夜の雪には、つら出しは出來まいと思うたに、さても〳〵かた意地な信心じやと、肝をつぶし、息をのんで、そら寐入して聞いてゐました。卯右衞門は音信ても返事もなく、又ともし火の影もみえませぬ。さては馬かた殿が、俄に用事でも出來て、他所へゆかれたる歟、但しは刻限が違うた歟、何にもせよ、此まゝ御目にかゝらずに歸つては、約束にそむく處もあれば、いざや此軒下にて、しばらく歸りをまたうと、簑笠うちしき座をしむれば、折ふし西風つよく、吹雪しきりに身にかゝりますれば、竹子笠を前にあて、しづかに念佛せられました。此とき野も山も、平一めんの銀世界と變じ、夜のふくるにしたがふて、寒氣身をさくやうに覺えますれば、思はず聲をあげて、「さても〳〵かたじけなや。馬方どののおかげで、今夜こゝへ來たればこそ、御開山の、北國御經囘の、御苦勞のほど、萬分が一、思ひ知られて、有りがたい」と、いよ〳〵信心いやましたれば、高らかに、念佛を悅ばれます聲、彼馬士の耳に

されませ。さてかの卯右衛門、次第に年よりまする程、ます〳〵信心堅固の法義者になられました。ある年の冬姫路の町に、同行がござりまして、朝より其方へまゐりましたが、晝七つ下り、いとま乞して姫路の町を出で、野道をとぼ〳〵歸りまするに、後より聲をかけて、呼ぶ者がある。ふり返つて見れば、隣村の馬士、馬を牽いて、卯右衛門に追ひつき、「かねておまへは信心者と聞いたが、今夜わしが所で、お座をつとめまする、大事なくば、初夜時分から、どうぞ參詣して下され」といふ。卯右衛門大きによろこび、「夫は近頃ありがたい事じや。左やうならお辭儀なしに、參詣いたしませう」と、約束を定めてわかれました。此馬士、元來心ざまのよからぬ者なれば、よい心で申したのではござりませぬ。是は卯右衛門が、あまり法義を悦ぶと聞いて、かた腹いたくおもひ、なぶつて見んと、今夜お座があると僞て、出しぬいたのでござります。實は御座も何もないのじや。うまく〳〵とあざむいて、おのれが家に歸り、馬をあらひ、そこらかた附け、初夜を相圖に火をふき消し、門の戸かたくしめて、寐いりました。卯右衛門は、かやうの事とはぞんじませず、わが家に歸つて後、刻限にも成りますれば、かの馬追のかたへ出かけまする。折ふし暮すぎより雪つようふり、野風はげしく、一向顔出しもならぬほどの、氣色でござりますれど、約そくを違へじと、簔笠をきて草鞋をはき、杖にすがつて、二十町ば

の、困窮な夫婦が有つて、その女房が産の氣がつき、あやにく難産で、三疊敷をウン〳〵いふて這ひまはる、常にとりあげばゞさまにも、醫者どのにも、無沙汰しておくゆゑ、呼びに往ても來てはくれず、亭主一人が打つたり舞うたり、さながら女房が苦しむを、よそに見てもゐられず、さればとて我腹は痛うもなし、詮方盡きて、門口に有る井戸へかゝつて、水汲みあげ、二三ばいあたまからかゝり、合掌して、高聲に「南無日頃念じたてまつる、象頭山金ぴら大權現、たゞ今かゝが難産にて苦しみます、どうぞ恙なう出産をいたす様、お守りなされて下されい、もし出産いたしたら、其お禮に銅の鳥居を、奉納いたしませう」と、大聲でいふを、女房がもがきながら是を聞いて、「コレ〳〵めつたなことをいはつしやるな、ひよつと安産したら、銅の鳥居は、どうして工面さつしやる」といへば、亭主は目顔手さきで、女房をおさへ、「やかましういふな、かういふてだましてゐるうちに、チヤツト産でしまへ」といはれた。ナントおもしろい話でござりませうが。銘々共も神佛をだますとは思はねども、わるい事して極樂をがねひ、商賣ぶ情で、金もちになりたいと、無理な事を神佛へいのるは、わが本心をだましてゐるといふものじや。我本心を欺すは、直に神佛をだますのでござります。勿體ない事じや。罰の報のと申す事は、小歌ぶしではござりせまぬ。罰利生があればこそ、神佛は尊いのじや。御用心な

癡のおやぢが、あさましい心より、嫁を叱りました故、嫁が腹を立てました。是全く此親仁めが、わるうござりました。御ゆるされて下さりませ」と、くり返しく\いうてゐらるゝ。是を聞いてさしもの嫁も、だまつても居られず、舅の側へ行き、「是はわたくしが了簡ちがひでござりました。堪忍して下さりませ」といへば、「イヤく\そなたの悪いのではない。このぢいが愚癡なからじや」といふ。「イエく\わたしがわるかつた」といひ、終に嫁のきげんが直りました。是等の行状、たびく\ござりましたゆゑ、邪見の嫁も舅の信心に化せられ、いつしか我慢の角もをれて、後々は孝行なる嫁に成りましたと、申す事じや。蓮如上人のお示に、佛法は無我にて候へば、人にまけても、信をとるべしとあるよし承りました。何さま此卯右衞門は、實に我なしの行状にて、よく法義をきゝ得たる信者と申す者でござります。是に引きかへ、口に宗旨の意味をのべて、假初にも珠數をはなさず、いかにも後生願とみえたる人が、思の外に其所作を見ますれば、不足錢を拂うたり、かりたるものをかへさなんだり、念佛題目となへながら、妾狂したり、聟や嫁をいぢり出したり、つまらぬ信者がわるうすると、天竺にはあるものでござります。此樣な信心は、みな引きあてのある事で、畢竟神佛が、ものをおつしやらねばこそ、恥しいことじやござりませぬ歟。是について、譬のはなしがござります。さる所に其日ぐらし

門口へ出かけますするを、舅は大きにおどろき、隻手には流るゝ血を拭ひ、隻手にはわが子の袂をひきとめ、さま〲にわび言すれば、「是ほどの不孝もの、切りきざんでも、あきたらぬものを、何故におひ出す事を留めさつしやる」と、尋ねましたれば、「されば夫ほどの不孝もののゆゑ、追出すことを留るのじや。其わけは、此家でさへ、辛抱の出來ぬ嫁が、他へよめ入して、一日も辛抱が出來るもの歟。此家を追出すと、嫁は片時も身を置くところがない。おれさへ辛抱すれば、なに事なうをさまる。此樣に心得ちがひな嫁をもらうたは、其方の不仕合せ、おれが宿業のわるいのじや。何事も堪忍せよ」といひなだめて、お佛だんに御明をあげ、血をふきながら、稱名を悦んでゐらるゝ。是を見て、さすがの嫁も、大に後悔し、ひたすらにあやまりますると、亭主も漸く納得して、無事にをさまりました。又あるとき、卯右衛門、嫁もろとも麥ばたけへゆき、畝をこしらへまするに、嫁は舅の先に立ちて鍬づかひして、畝をけづり、舅はあとより土をかけて通ります。然るに嫁のくはづかひあらく、畝ことの外、ゆがみまする故、舅は後より聲かけ、「チト心得て鍬づかひを仕やれ。畝がゆがむぞ」といふ。嫁は元來短氣者なれば、これを聞くと其まゝ、鍬を畑にうちつけ、ものをもいはず、一さんに歸ります。舅はおどろき、これもまた家にかけ戻り、其まゝお佛だんへ御明をあげ、如來前に跪て、「扨も地獄一定の、愚

八宗九流とわかれたれど、つゞまる所は、人を善にみちびくのじや。たとひどのやうに、有りがたい宗旨でも、親に不孝、主に不忠、せけんの人に不義理をしては、極樂は思ひもよらず、先此世からたすからぬ。當來の果をもつて、未來の因を知ると申せば、どうぞ此世を安樂にくらしたら、極樂まゐりは、疑がござりませぬ。此世の安樂は、いかゞいたしたら、安樂に暮されませうぞ、チトおかんがへなされませ。忠孝より外に、安樂の道はござりませぬ。さてかの卯右衛門は、此日を始めとして、志大にあらたまり、口に稱名を絶さず、身に一寸の惡行もせず、まことに前日の卯右衛門とは事替り、別の人のやうにござりました。是より馬士をやめ、農業を出精し、かりそめにも人とあらそはず、唯法義をよろこんで、無二の信者となられました。しかるに卯右衛門の子、成人ののち、嫁をむかへました。此嫁生得慳貪邪見にござりまして、舅卯右衛門へのつかへかた、甚不孝にござりますれども、卯右衛門一言もとがめませず、すべて是約束事とあきらめ、却てわが子をなだめ、嫁をそだてて、日を送りまするに、ある時かの嫁が、舅の物のいひざま、おのが心にかなはぬとて、庭にあり合ふ横槌をとつて、舅へ投附けましたれば、かの横槌舅の額にあたつて、血はおびたゞしく流れまする。息子はこれを見て、もはや堪忍なりがたし、親仁さまが何といはるゝとも、すみやかに追出さんと、女房を引つたて、

ます腹をたて、「佛法が算盤にかゝるのかゝらぬのと、夫は何のお經に出てあるぞ。」「イヤお經には出てなけれども、目の前そろばんにはかゝらぬ。其譯は、まづ釋迦如來の御命日は、二月の十五日、三五十五日と、そろばんにかゝる。淨土の元祖は、正月の廿五日、五五廿五日と、算用が出來る。一向宗の開山は、霜月の廿八日、四七廿八日と勘定が出來る。眞言の祖師は三月の廿一日、三七廿一日と、そろばんにかゝる。其外聖一國師でも、また傳教大師でも、勘定の出來ぬはない。たゞ勘定の出來ぬのは、日蓮宗の祖師じや、二七十四では一つあまる、三四十二では一ッたらぬ。どうしても、十三日の御命日は、そろばんにかゝらぬ」といはれた。甚味のある話でござります。畢竟勝つても負けても、罪にも、報にもならぬ、おなじ高根の月をみるのじや。かやうに申すと、十把一からげ、胡椒丸のみと思しめさうが、左樣ではござりませぬ。かた臂をはらいでも、道理はちやんと分つてある。めい〳〵御宗旨を大切にまもり、人とせり合はぬやうに、致したいものでござります。たとへば男山も、劍菱も、諸白も、並酒も、もとは一色の米じや、その趣意は、酒に醉ふのじや。されども身分に上下が有て、諸白で醉ふ人もあり、並酒で醉ふ人もあり、銘酒で醉う人もある。醉うた味は同じ事じや。上酒に醉うた人が、極樂の夢を見るでもなし、濁り酒に醉うた人が、地獄の夢を見るでもない。釋迦一佛より

ち、佛性がある故じや。是を孟子も、性は善なりと仰せられました。凡一切の有情非情、佛性を具へぬはござりませぬ。さるによつて、釋尊も草木國土、悉皆成佛の金言がござります。甚ありがたい事じや。諺に佛法と藥屋の雨は、出てきけと申しまする。何樣聞ねば信心も起らぬ。是じやによつて、教によらねば成りませぬ。佛法はおのづから佛法の妙がある、儒はおのづから儒の妙がござります。神道もまた此通りじや。おのおのその趣はちがふやうにござりますれども、所詮人を教へ善をすゝめ、惡を懲すの外はござりませぬ。こゝに到つては、三教一致でござります。或人の道歌に、

雨あられ雪やこほりとへだつれど解くればおなじ谷川の水

法華は佛になられぬの、念佛は地ごくへゆくのと、さまざますがたは替りますれど、落るところは谷川の水じや、何もかはつた事はござりませぬ。是でをかしい話がある。さる所に、法華寺と、淨土寺と、垣をへだてて隣づから、毎朝花を折りに出ては、顏見あはすと宗論がはじまる。あるとき淨土の和尙がいふには、「どう考て見ても、法華は佛になられぬ」といふ。法華のお上人腹をたてて、「法華經は諸經第一、何ゆえにほとけに成られぬ。何ぞたしかな證據がある歟」。「オヽ、證據がある、法華宗は、そろばんに懸らぬ故、佛にはなられぬ」といふ。上人ます

にせんと考へ居ながら、聞くともなし、聞かぬともなしに、ボツ〳〵と御勸化の聲が、耳に入る。其大旨は、造惡の凡夫、一善を修したる覺もなし、たとひ其身阿修羅王のいきほひありとも、無常の殺鬼をふせぐ事あたはず、閻魔王の使に引きたてられ、紅蓮大ぐれん、焦熱大焦熱のくるしみを受くる時、血のなみだを流したりとも、萬劫苦患をまぬがるゝ事かなはず、しかるに、彌陀超世の悲願と申すは、かくのごとき、十惡五逆の罪人を目あてとして、たてたまふ本願なれば、一たび此佛に歸命したてまつれば、たちどころに光明の中にをさめとられ、命終れば、極樂淨土に往生せん事、何のうたがひかこれあらんと、こま〴〵と聞えました。此とき卯右衞門宿善開發の時節到來したる歟、發露涕泣し、信心肝にそみて、夢のさめたるがごとく、年ごろの惡行を後悔し、のちには大聲あげて泣きました。此とき卯右衞門、年四十ばかりと承はりまする。古歌に、

さへられぬ光のあるをおしなべてへだてがほなる朝霞かな

ナントありがたい歌じやござりませぬ歟。今此卯右衞門が忽ち惡念をひるがへして、大信心を得ましたるは、化道の利益とは申しながら、ひとへに佛智力の致す所でござります。去ながら、たとひ佛智力ありとも、卯右衞門に佛性がござりませずば、善人にはなりますまい。宿善すなは

て、裁する事を知らずと、朱子も仰られました。是じやによつて、何分敎をきかねば成りませぬ。是についてありがたい話がござります。ひととせ播州へ下りました節、姫路の社友、近江屋何がしの物がたりを、承はりまするに、同國林田領、太田村の出屋敷と申すところに、卯右衛門と申しまする奇特の信者がござりました。此人若年の頃は、ことの外身持あしく、假初にも、大酒博奕喧嘩口論を仕出し、もとよりまづしい暮でござりますれば、農業とても、はかばかしういたしませず。馬追を渡世として、常に姫路の町へ通ひ、駄賃を取れば、ことごとく酒にかへ、その上醉狂しては、人を打擲する。是によつて、姫路の御城下は申すに及ばず、近村みなもてあましたる男でござりまする。女房にははやう離れ、男子一人ござりました。されども子をおもふ心もなく、只氣隨氣まゝに、とし月を送りましたが、いかさま宿因の催す處歟。あるとき例のごとく、姫路へ出ましたが、荷物のつけ合あしく、馬を牽いて、あちこちと荷をたづねあるくうち、東本願寺の御坊の前を通りかゝりました。折から御本山より、講師のお下向にて、御勸化最中とみえ、おびたゞしく、參詣群集いたしまする。卯右衛門も思ふ處あつて、馬を門前につなぎ、その身は參詣とともに、御門內へ入り、御堂の緣に腰うちかけ、あながち聽聞する心ではなけれども、參詣の人數多ければ、よい喧嘩のあひてもあつたら、酒代

ます。馬には轡、牛には鼻づる、これ皆人のこじつけではない。大きな獸をつかふに、くつわがよければ、牛にも轡でありさうなものが、鼻づると替るは、牛のうまれつきにかなふ故じや。されば忠孝をおすゝめ申すは、人の生れつきに、かなふ故じやと思し召せ。さるによつて朱子も、事の道あることを知つて其性によることを知らずと、仰せられた。扨かの稲荷山の松茸は、御獻上にもなり、風味もしごくよろしければ、かつをぶしじやの、酒しほじやのと、だしを入れるに及ばぬ。又丹波松茸は味がわるい。ソコデ出しをいれる歟、生ざかなの一切もいれねば、味がようない。だしをいれて、稲荷山の松茸の素焚と、丁度同じ様になる。ソコデ丹波まつだけが腹をたて、めんようおれをたくには、だしを入れをる。ナゼ素だきにはせぬぞと小言いふ。ナント無理じやござりません歟。味ない持合がある故、據なうだしを入れるのでござります。同じ松茸とはいへども、土地によつて、風味のよいとわるいとが出來るは、丁度人の氣質に、清濁のある樣なものじや。濁つた生れつきには、聖人のをしへを入れにや、人のみちがつとまらぬ。しからば教は、意地わるではない、此方に持合がある、風味のわるい、丹波松茸の連中じや。仁義五常の、だしをいれねば、人なみには成りませぬ。聖人君子は、稲荷やまのまつだけでござります。かるがゆゑに、聖人の教あることを知つて、其我もとよりある處のものによつ

心じやの、天心じやのと、いひならべてみれば、心が二つも三つもある樣に、聞えますれど、左樣ではござりませぬ。其實は一なれども、人の道を勤めさへすれば、又一とも思ひませぬ。只何ともない所が、はじめて道にかなふのでござります。かれこれ名目を立てるのは、道ををさむる教でござります。わるう心得た人は、聖人を意地わるじやと覺え、忠義じやの、孝行じやの、仁義じやの、五常じやのと、六かしい教をたてて、人を自由にさせぬ責道具じや、たとへば、氣ちがひに猿ぐつわをはませ、手がせ足がせをいれて、しばり上げた樣なものじやと、おもうてござる。是は大きな了簡ちがひじや。譬へてお話し申しませう。いなり山の松茸も、丹波の松茸も、松たけにかはりはない。陰陽五行にむしたてられ、松茸の形が出來ると、たべられるといふ天理がそなはる。夫を松たけが了簡ちがひして、たべらるゝのは、己が力じやと心得、天理じやといふ事を知らぬ。ちやうどおれが心じやというて、天命の性じやと、知ぬやうなものでござります。さて松茸をたべるには、かならず柚をあひてにする。ソコデまつたけがおもふには、おれをつかふに、兎角柚をあひてにしをる、チト胡椒か山椒か、からしでも入れさうなものじやと思ふ。柚をいれるは人間がこじつけるのではない、松茸のうまれ附に、かなふに依つてじや。人もこれと同じ事で、忠孝をすゝめるは、人の生れつきにかなふ故でござり

ト明白なものではござりませぬ歟。之を誠にするは、善を擇んで、固くこれを執るものなりとは、修行の仕かたを、おしめしなされたのじや。善を擇むは、此道理を一たび合點し、本心を見附けるのでござります。固く執るは、常に本心に目をはなさず、私心私欲は交らぬ歟と、朝夕に吟味して、本心をとり失はぬやうに、致すのでござります。これを精一の工夫といふ。所詮前もつて申す、天命の性にしたがふの事じや。ある人の道歌に、

わが性の人にかくれて知られずばたかまのはらにたち出て見よ

おもしろい歌じやござりませぬ歟。チトおかんがへなされませ。人己が性ある事を知つて、其天にいづることを知らずと、朱子も仰せられて、おたがひに、わしが心じや、おれが心じやと、心のある事は知てゐて、此心直に天じやと、いふ事を知らぬ。若この心を天命の性じやと合點したら、曲げたうても曲られるものでは、ござりませぬ。ヤッパリおのれが心じやと思ふゆゑ、身欲のために、さんぐ\に曲げまする。生れ附の心が、主となつて、身欲がしたがひまするると、何事も程よう參ります。とかく欲心が主に成つて、義理の心が、つかはれまするゆゑ、人心これあやふく、道心これ微と、まうしてある。何分わが心直に天じやと決定して、疑がなければ、自然と私心は、したがひまする道理じや。さて箇樣に申せば、人心じやの、道心じやの、私

續々鳩翁道話　壹之下

いつはりのなき世なりけり神無月たがまことより時雨そめけん

此歌を、我得かたにとれば、元來天人一致なれば、誠もまた一つなり。天誠あればこそ、冬になれば必時雨する。天のみ誠ありて、人豈誠なからんやと、よみし歌と聞えまする。中庸の二十章にも、誠は天の道なり、之を誠にするは、人の道なりと見えまして、誠は天理自然の道、則本心の事でござります。さて本心を思うて、本心のごとく有りたしと、かへり見るが、之を誠にする人の道じや。誠は勉めずしてあたり、思はずして得ると申すは、何の造作もなく、又思慮分別もいらず、唯本心のさし圖にしたがへば、主親につかへるを始として、萬の事みな程よう出來まする。これで中庸にかなひまする故、甚樂でござります。此樂な味が、則聖人のお心持じや。さるに依つて、從容として道に中るは聖人なりというてある。從容とは、無造作、無分別、無知、無心の事で、たゞ何ともなく、時に中するの自然の妙を、いふのでござります。天無心にして、四季おこなはれ、人無心にして、忠孝がつとまる。天人一致、萬物一體、ナン

なく川を歩行わたりして、道成寺へかけこみ、客殿、方丈、緣の下、雪隱までさがして見たが、流石男だけで、つり鐘には氣もつかず、是程にたづねても、行への知れぬは、大方道がちがうたのであらう、いづくまでも追かけんと、また門外へかけ出しました。此體を見て、和尚はよろこび、皆よつて釣がねを引きあげて見れば、京の男は湯にもならず、默然としてゐる。「サアサアモウ氣づかひはござらぬ。おやぢは道が違うたというて、どれへやら行きをつた。安心をさつしやれ」といふと、京の男が、胸なでおろし、「ヤレ〳〵うれしや助かつた。モウ親仁は來ませぬ歟。それなら息休めにまづ一ぷくいたしませう」といはれた。ナントおもしろい咄じやない歟。燒頰、火にこりずと、煙草責に出あうても、ヤツパリ一ぷくいたしませうといふ。これ癖附と申すものじや。古歌に、

人ごとに一つの癖があるものを我にはゆるせ敷しまの道

又諺にも、なくて七くせとも申しますれば、いづれ何なりとも癖附のない事はない。迚も癖附くものなら、心の脂を掃除するくせ附になりたいものじや。少しでも心わるう覺える事があれば、是必こゝろのよごれ、脂のたまりでござります。何分をしへによつて、掃除を怠らぬやうに、いたさねばなりませぬ。休息。

申します。」京の男きもを冷し、さり迚は拍子がわるいと、胸を抱て居るうち、船は向うの岸につく。ソコデ船頭へ頼むには、「もしあとから、年の頃六十ばかりのおやぢが、たばこ盆をさげて、おれを尋ねてくる事があつたら、必わたして下さるな」と、いひ捨てて、また一文字にかけ出したが、大きな寺でゆき留りました。走りこんで樣子を咄し、かくまうて下されといへば、和尚しかつべらしく、聲づくろひして、むかし此處に、まなごの庄司といふ者ありと、ながながと、道成寺の講釋がはじまる。かの男は氣をいらち、「御說法はあとで聽聞いたしませう。どうぞ早うかくして下されし。うろたへてゐると、親仁の煙草で、責殺されにやならぬ」といふ。和尚も氣のどくにおもひ、「しからば、先例にまかせ、釣鐘をおろして、隱してやらう」と鐘樓堂へつれてゆき、大勢よつて釣がねをおろし、難なく彼男を隱しました。氣のどくなものは、宿の主じや。客がかけ落したとは夢にもしらず、今二三ぶくこじ付けんと、座敷を見れば、客はみえぬ。さては煙草に聲あげて出奔したに極まつた、おのれにげたとて逃さう歟と、尻引きからげ、捻鉢卷し、紙袋と煙草盆ひつさげ、跡をしたうて、川ばたへかけつけた。船頭は此體を見て、さては最前の追手じやさうなと、急に船を川中へ出す。かの親仁は、船をよべども返事せぬ。よしよし、船はなくとも、此河を渡らいでおかう歟と、鬼にも成らず蛇にも成らず、難

せた煙草がある。おふるまひ申さう」といふ。京の男も大によろこび、「夫は近頃かたじけない。煙草さへおふるまひ下されたら、湯も茶漬も、入用にはござらぬ。お辭儀なしに參りませう」と、打ちつれて、かの親仁の宅へ參りました。さて洗足もすみ、夕飯もしたゝめ、座敷で一ぷくくすべてゐる所へ、主の親仁が、たばこ盆をひつさげ隻手には紙袋二三十もち、「さて御退屈にござりませう。さらばお約束の御馳走をはじめませう」と、紙袋の煙草をひねり、雁首へねじこみ、吸附けて客へわたし、是から取りかへ引きかへ透間もなく、すひ附けては出し、吸附けては出す。客も圖にのり、國づくしよむ樣に、煙草の名所、それか是歟というてゐるうち、座敷うちは、煙でつまり、胸はいらく、あたまはふらく、今一二三ぶく强ひつけられたら、忽息が絕えさうで、すでに負色に成りました。さすが年よりの悲しさは、主のおやぢ、小便に座をたちました。此體を見て、客はいきたこゝちして、この隙に逃げてかへらずば、いのちもせもたまるまいと、そこら搜して、風呂しきづつみを引つかたげ、表へ出たらば、又おやぢに見つけられて、煙草ぜめに出合うてはたまらぬ、裏道から出奔せうと、切戶をはづし、畠道を橫すぢかひに、めつた無性にかけ出したが、おもひがけない、行先に大河がある、川の上下見わたせば、幸ひわたし船が見える。やにはに飛びのり、「さて此川は何といひます。」「これは日高川と

お醫者さまにも成らず、先生にもならず、又御出家にもならず、親の仕にせの商賣がいやになり、めつたに鼻がたかう成つて、つかへてお辭儀が出來ぬやうになりまする。これが掃除道具のをれこんだのじや。こんなきせるは燒ねば直らぬ。甚怖い恐ろしい事でござります。御用心なされませ。是畢竟學問のはじめ、心むけのくひ違ひで、身ををさめ、家をとゝのふる學文が、一生疵になつて、親類緣者、知音近づきにまで、きらはるゝ樣になるは、まつたく書物のとがではない、學ぶ人の心得のわるいのと、お師匠さまを撰まぬ過でござります。これを人のみちを爲じて、人に遠ざかるは、以て道とすべからずといふのである。一たびわるい癖がつくと、どうしても止みにくい。兎角わる癖を直す分別が入用じや。氣質を變化するは學問の功、わる癖を直すが、則氣質を變化するのでござります。此くせ附でおもひ出した、譬のはなしがござります。さる所に、いたつて煙草ずきの男がござりました。用事有て紀州へ下る道すがらも、六ぷくつぎの大ぎせるに、たばこの煙の絕える間もなく、長の道中をくすべあるいたが、世には似た人もあるものじや、六十ばかりの親仁が、これもくはへ煙管で、フト道づれに成りまして、互に煙草ずきなれば、はなしの間があひ、かの親仁がいふには、「わしは是から一里計向の在の者じやが、ナント今夜はおれが内にとまらツしやらぬ歟。何も馳走はないけれども、少々貰合

講釋、うなぎすつぽん、どじやう汁、呉服みせやら、小間物店やら、見るに目の毒、かぐに鼻の毒、これでは脂がたまる筈じや。官刻の孝義錄を拜見するに、忠孝の人は、とかく遠國邊鄙に多い。これは是、人交がすくなく、見るに目の毒がないに依つてじや。人間一生五十年、附合するは、二ケ村歟、三ケ村じや。ある人の狂歌に、

ほとゝぎす自由自在にきく里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里

またある人の發句に、

醫者どのの不自由な里に賀ふるまひ

これらで御推量なされませ。かた田舍に育つ人は、自然と心のよごれが少い。すべて人にかぎらず、道具衣類家居まで、手數が入れば、よごれるは知れた事でござります。かるがゆゑに、道をさむる教によらねばならぬ。扨此をしへを、たとへておはなし申しませう。脂がつまると、こよりがちぎれたりする。脂のつまつたは、あたゝめると、通る事があるけれど、小よりや、藁こより歟藁すべで、掃除せにやならぬ。掃除はよけれど、うろたへると藁すべが折れこんだり、すべの折れこんだのは、溫めても茶を通しても、中々通らぬ。やいてしまはにや埒があかぬ。これでよう御考へなされませ。掃除道具の、學文はよけれど、わるうすると、學文がをれこんで、

やと、おれを譽めて、つけた異名とみえる」と半分聞かず、息子がかぶりふり、「イエ〳〵さうではござりますまい。」「ソンナラ何じや。」「ハイ私のぞんじまするには、どうしても、つまらぬ人じやと、いふのでござりませう」といはれた。ナントをかしい話ではござりませぬ歟。此親父さまも、おれがの脂がつまつてあるのじや。それも知らずに、黒の羽織に、唐棧の袴、お太刀一本きめこんで、がん首ばかりみがいてござる。これは男ばかりの事ではない。鼈甲のくし笄じやの、緋鹿子の髷くゝりじやの、生白粉じやの、ながし白粉じやのと、さま〴〵のみがき道具、むかしは足が二本あれば、濟んだものじやに、今は首すぢに、又二本足こしらへて、都合四つあし、どうでも、狐や狸のまねがしたいさうな。氣のどくなものでござります。兎角賑はしい土地にすむ人は、猶々つゝしみが大事じや。たとへば、あまり煙草をすかぬ人の、持つきせるは、おのづから脂のたまりか少い。夫は何ゆゑなれば、煙草の數をのまぬ故じや。又朝寐所からきせるをくはへ、日がな一日、こゝを大事ときせるを離さず、尻から煙の出るまでのんでござる、たばこ好のもつきせるは、直に脂がたまります。これはたばこの數をのむによつてじや。人も是と同じ事で、三ヶの津をはじめ、其外繁華の地にすむ人は、朝から晩まで人まじはりが多い。それのみならず、あちらむけば芝居、こちらむけば淨瑠璃、かる口ばなし、軍書

また用にも立ぬ故、親兄弟に勘當しられて、あちらではごろ〳〵、こちらではごろ〳〵と、雷のやうになりちらかして、ごろついて居る人がある。これみな脂のつまつたきせる仲間じや。得て天竺には、たんとござります。さるによつて、きせるのつまつたは、小捻を通し、藁すべを通して、中を掃除すれば、本の通りに煙草がのめる。これがきせるの道を、修むる教でござります。人もこれと同じ事で、氣隨氣まゝのかたまつた人でも、聖人の教を聞いて、腹の中を掃除すれば、もとの赤子とおなじ事で、腹の中が奇麗になり、本心にたちもどられます。ナント、よう似たものではない歟。天の命、これをさらぎせるといひ、煙草ののめる、これを道といひ、掃除をする之を教といふ。御合點がまゐりました歟。ある人の道歌に、

　きせるさへ心のやにを掃除せずがん首ばかりみがく世の人

これでおもひだした話がござります。さる町内に、年寄役をつとめらるゝ人がござりました。あるとき其息子殿が、親御へいはるゝには、「此ごろ町内でも隣町でも、親父さまの事を、さらぎせるじやと申します。どうでも、おまへさまの異名じやさうな。何の道理でさらぎせるとは、附けたでござりませう」と、問ひかけられて、かの親父が嬉しさうな顔附して、「成程さらぎせると、附けさうな物じや」「夫はなぜでござります。」「されば何事を取捌いても、能う通つた人じ

よう煙が通つて、工合がよい。たばこののめるが、きせるの性にしたがふ道じや。赤子も次第に成人して、親につかへ、主につかへ、身をたて、名を後世に揚るが、其の道じや。きせるも天の一物、人も天の一物、非情をもつて、有情に譬へるは、異なものなれども、何も替つたものではござりませぬ。扨道をさむる、これを教といふは、かのさらぎせるで、煙草をのめば、はじめの程はよけれども、次第に煙草をのむにしたがひ、ソロ〳〵中によごれがつき、段々と脂がたまつて、後にはやにがつまつて、天氣がかよはぬやうに成りますると、ほゝべたをふくらして吸ても、ズウ〳〵いうて、煙草はのめぬ。これが、赤子の成人に能う似たものじや。段々と、大きうなつて、人にまじはり、ものにふれ、人欲のよごれがつき、後には、おれが〳〵の、氣隨氣まゝがかたまつて、天理をふさぐ樣になる。丁度きせるの脂がつまつたと、かはつたものではござりませぬ。見れは立派な煙管じや、取上げて、たばこのんで見れば、ちよつとものめぬ。然ればというて、きせるの形があれば、さすがに捨てても仕廻はれぬ。ソコデ據なう、煙草盆の中で、コロ〳〵ところついてゐる。人もこれと同じことで、人欲のかたまつて、天理を失うた人は、どうも仕方はござりませぬ。見れば立派な男じや、故に取上げてつかうて見れば、ちよつとも間に合ぬ。さすがに人の形して、生きてゐるものなれば、殺しても仕まはれず、

なし申しませう。御退屈にあらうけれども、ようお聞下されい。此意が御合點がまゐりまするまする
と、一生身をまもるよい便になりまする。たとへば道中で、足のつかれたる時に、二三里駕籠
にのると、甚安樂な。しかも僅の間じや。其わづかな安樂も、駕籠賃拂はぬと出來ぬ。まし
てこれは、一生涯安樂になる法でござります。それを駄賃なしにおはなし申す事じや。せめて
眠たいのを辛抱して、ヨウお聞きなされて下さりませ。先天の命これを性といふは、たとへば
此あたらしいきせるの様なものじや。此煙管も、天陰陽五行をかつて、萬物を化生する中に、眞
鍮となり、しの竹となり、すでにきせるのかたちが出來ると、チヤント天理が具はつて、煙草
がのめるやうになる。其たばこののめるのがきせるの性じや。これが直に天理、天の命でござ
ります。しかも天理は、どのやうなものじやと、吸口から覗て見れば、雁首の中もらう竹の中
も、すひ口の中もすつぱりと、奇麗に何にもない。只天氣の通ふばかりじや。此天氣のかよふ
所が、則きせるの生つきのこゝろじや。丁度赤子と同じことで、わだかまりのない奇麗なもの
じや。しかしながら奇麗なはよいけれど、煙管も煙草のまずに、さらぎせるで置けば、いつま
でたつても、煙管の用はない。人もいつまでも、赤子で居ると、腸は奇麗なれども　ホギヤア
ホギヤアでは間に合ぬ。ソコデ性に率ふ、これを道というて、さらぎせるで、煙草をのめば、心

う人の口ぐせにいふ事なれど、多くは中庸の取違を仕てござる。其取りちがへは、たとへば、銀五匁やらう歟、拾匁やらう歟、一向中取つて、七匁五分やると、これで丁度中庸じやと思うてござる。夫は子莫の中というて、まことの中庸ではござりませぬ。譬ば夏は帷子を著、冬は綿入を著る、これ自然の中じや。然るを中とつて、一年中袷きるというて、それでよいもの歟、チト考へて御らうじませ。名聞の心で、拾匁やるのでもなし、又しわんばうで五匁やるのでもなし、只先方へつかはすべき、道理にしたがうて、此方に一物なければ、眞の中にて、これを君子時に中すと申します。されば、鏡の空なるがごとく、衡の平なるがごとく、只何ともないが中の極意じや。もし一物があれば、鏡は影をうつさず、衡目はくるふ。さるによつて、堯舜も中を執れと、仰せられました。甚大切な事じや。わるうすると、中庸は只書物の名とばかり心得まして、受用にならぬと、詮ないことでござります。さるに依つて、前に中す旨を、わが身に引きうけ、心に工夫して、用ひねば成りませぬ。故に古人も、孔門傳授の心法とは仰せられました。かほど大切なる心法なれば、中々私どもの様な文盲な者が、申しつくされる譯ではござりませぬ。よし又說盡したりとも、子ども衆や、女子衆のお耳には入惡い。しかし此まゝでやむのも、本意ないものゆゑ、今一度、ちかく譬を取つて、首章三句の意をくりかへしおは

してござります。道とは自由自在の出來るといふ名じや。無理すると自由自在は出來ぬ。無理のない本心にしたがへば、自由自在で安樂にござります。これを道と申しまする。されば、性と道と別のものではござりませぬ。斯申すと、そんなら、世界中の人が、みな天命の性をうけて生れたれば、無理する人は、一人もない筈じやと思しめさうが、いやな事には、性は天命の性なれども、形をうける事は、一様ではござりませぬ。凡形は、陰陽五行の氣のあつまつて、出來まするものなれば、その氣の清濁によつて、人の氣質も、いろ〱になりまする。生れつきのこゝろは、一列に善なれども、氣質のちがひで、下愚も出來、賢もできる。過ぎたるもあり、およばぬもあり。天命の性は無欲にして、義理ばかりでござりますれども、形にあひますると、形の欲にひかれる所が出來まする。ソコデ得ては道をふみはづす、難儀なものじや。かるがゆゑに道を修むる、これを敎といふと申してござります。修るとは、ものの損じたるを、修覆するこゝろもちじや。人の性は善なれども、形にひかれて、次第に欲が出來る。此欲が段々ふかうなり、終には大ゆがみにゆがんで、人の道をうしなひまする。ソコデ、敎へをたてて、人々の分に應じて、其ゆがみを修覆いたし、もとの本心に立ちもどらせ、人の道を勸めさすのが、是則道をさむる、之を敎といふと、御示しなされたのでござります。さて中庸と申す事は、能

利は、物のとげるなり、四季にとれば秋なり、五行にとれば金なり、方角にとれば西なり、性の徳にとれば、義でござります。又天徳の貞は、物のなるなり、四季にとれば冬也、五行にとれば水也、方角にとれば北なり、性の徳にとれば、智でござります。さるによつて、小學の題辭にも、元亨利貞は天道の常、仁義禮智は人性の綱と仰せられました。扨五常の信は、四季の土用、五行の土、方角の中央と同じ事で、理において、少しも替る事はござりませぬ。このかはらぬ理が人々に具はるうへは、天のいひ附けに違ひはない。故に天の命これを性といふと、申してござります。わるういたしまするると、茶碗とりおとしても、天命じやといひ、とうろう鬢で鼻おとしても、天命じやといふ。これは天命の取りちがへ、天命は、其やうな、細工ものや干物ではない。人は仁義の性をうけたれば、すこしでも無理すると、直に氣味わるう覺える。これが、いきた天命でござります。ある人の道歌に、

止みがたきよしあればこそ年毎に咲けばかならず匂ふうめが香

石川五右衛門でも、熊坂の長範でも、盗するのは、よい事とは思はぬ。これが則天命の御合點なされぬのじや。さるに依つて、人の性は善也と、古人も仰せられました。此性にしたがひまするれば、することなす事、皆人の道にかなひまする。故に性にしたがふ、これを道といふと申

キリと申さうならば、春夏秋冬、これ元亨利貞の德にして、人の目に見える所の天のいひ附けでござります。天ものいはねど、何かはしらず、春になれば、梅さくら桃柳、誰が催促もせぬに、花がさき芽を出す、これを元と申します。さて夏になれば枝葉がしげり、草木のすがた、うるはしう成りまする、これを亨といふ。扨また秋になれば、栗の木には、栗が出來る、柹の木には、柹が出來る、草も木も皆實が出來る、これを利と申します。又冬になれば木の葉はちり、實は熟して、種になる、これを貞といふ。こゝをさして、天何を歟いふや、四時おこなはれ、百物なると、孔夫子も仰られました。則中庸の、天の命とは、此事でござります。扨之を性と謂ふと、本文にござりまするは、之とは、上にいふ天の命をさして申し、性とは、人のうまれつきの心と申す事じや。則元亨利貞の天理をうけて性となる。かるがゆゑに、朱文公は、性は理なりと仰せられまして、則本心の事でござります。此本心は、天理を其まゝうけましたるゆゑ、仁義禮智信の德をそなへます。この仁義禮智信が、則天の元亨利貞じや。所詮くはしう申せば、天德の元は、物のはじめなり、四季にとれば春なり、五行にとれば木也、方角にとれば東なり、性の德にとれば、仁でござります。又天德の亨は、物のとほるなり、四季にとれば、夏なり、五行にとれば火なり、方角にとれば南なり、性の德にとれば、禮でござります。さてまた天德の

續々鳩翁道話

壹之上

男　武修聞書

天の命これを性といふ、性に率ふこれを道といふ、道を修る之を教といふ。この三句は、中庸の首章に見えて、則大聖孔子の御孫、子思はじめて是を御發明なされたる所にして、實に千載の確言でござります。されば今にいたつて、猶道學相ひつたはりまして、我々どもの樣な者まで、性理の端をうかゞひまする事は、ひとへに子思のお力でござります。扨天の命と申すは、天のいひつけと申す事じや。時に天といへば、靑い雲や黒い雲じやと、思しめさうが、左樣ではござりませぬ。天は音もなく、香もなく、たゞ物を生ずる理でござります。これをさして天と申します。形の事ではござりませぬ。しからば、其形もない天が、何をいひ附けると、御不審におぼしめさうが、キットした言ひつけがある。則天の言ひつけは、元亨利貞と申して、元ははじまる、亨はとほる、利はとげる、貞はなるというて、此元亨利貞を、天の四德といふ。則これが天のいひつけでござります。さりながら箇樣に申しては、子供衆に分らぬ。今一段ハッ

予不得已。而略爲書所聞於先人之旨。以爲之序云。

天保九年戊戌春正月

平安薩埵天放撰幷書

鳩翁道話續々篇序

書曰。思曰睿。睿作聖。夫思者。君子之所尙。而學者之所爲要也。孟子曰。心之官則思。思則得。不思則不得也。夫人方聲色聞見之際。委耳目之感。而不以思。則物引於物。而心失其官。其奚得以立事物之綱維。而定其規則哉。是以君子之於身。視思明。聽思聰。色思溫。貌思恭。言思忠。事思敬。疑思問。忿思難。得思義。其而後心爲一身之主。而四體聽其命。身體恭敬。言語誠實。志常正。而義常立矣。聖經賢傳之旨。雖千端萬緒。要其至處。則亦不復外於是也耳。柴田子鳩翁。初從予先人德軒先生。以受石門之學。以講授於四方。不幸得疾而失明。乃不復能讀書。然其思也愈精。其學也愈進。天豈欲奪不思之官。以令進其思之官耶。抑將欲令世之有目者。以知思之貴也邪。嗚呼。如翁者。可謂盲於目。而不盲於心。不以目治。而以心治之者也耳。其子武修。錄翁之所講談。以上梓者已兩次。頃者。又錄其三篇。欲以請緒言於先人。而先人忽辭世。今也刻成。乃請之于予。

と、碎て見たれば、蚯蚓が出た。不孝者肝をつぶし、ナンボウ時節柄でも、せめて一朱ぐらゐは、有りさうなものじやに、此ざまは何じやと、にらみ附けて叱りますれば、鷄もかんしやくに障たやら、大きな口明て、ベッカコウと啼きました。ナントおもしろいはなしでござりませぬ歟。家業もせずして、金がほしいの、わるい身持でよいところへ嫁入がしたいの、遊んでゐて、うまいものがくひたいの、博奕うつて譽められたいのと、そんなことといふ人は、みなベッカコウにあふ、御連中じや。此無分別をやめにして、どうぞ至善の場にとゞまり、我なしで、おつとめなされませ。ある人のうたに、

よしと見る其ひとふしをなにには江のあしかるかたにうつさずもがな

あとは明ばんおはなし申しませう。下座。

る金を元手として、家をおこしたりといふ話を、かの不孝もの、大に感心して、聞いて居ましたが、内へもどつて、はゝおやにいふは、「おれもこれから、孝行するほどに、鷄を二三羽かうて來て下され」といふ。母おやよろこび、「孝行は嬉しいが、其鷄は何にするのじや。」「ハテさて買うてござれといふに、跡でしれる事じや。」「それでも、鷄が孝行になりさうな事でもない。殊に此米のたかいのに」と、半分いはせず、「ハテやかましい。こなたの樣に小言いふと、孝行も出來るものじやない。老ては子にしたがへじや。往て買うてござれ」といふのに、母親もせんかたなく、にはとりを二三羽かうて來た。ソコデ息子はうれしがり、舌つゞみうつて鷄をよび餌をやりながら、「コレ母者人そちら向つしやれ、背中さすつてやらう。」「イヤ〳〵私は肩がつかへはせぬ。」「又こなた小言をいふ。だまつて肩を出さつしやれ」と、無理無體に肩をさする。鷄がうらへゆくと、酒飲んで寐て居をる。とかくして、三十日計たち、モウ鷄が、土くれをくはへて、來さうなものじやと、毎日までども、しるしがない。不孝もの大きに氣をいらち、さりとては目のあかぬ鷄じや、これ程に孝行するのが、己が目にかゝらぬ歟、よいかげんに目をさませと、鷄をつかまへて述懐いふ。鷄も氣のどくに思うた歟、ある日、土のかたまりをくはへて來る。息子は悦び、これは大ぶん大きなかたまりじや、小判であらう歟、二歩金であらうか

を、人がたづぬるとも、必ずいうてくれな。そちが四十になるの、五十になるのと年をいうてくれると、おれはいかう、心ぼそう思ふによつて、必としをいうてくれなと、申されました。親ども相果てまして、年月は立ちますれども、申されましたることは、猶耳のそこに、殘りまして、今のやうに覺えまする。ことさらお佛檀に見てござるゆゑ、なんぼう御上樣の事でも、これればかりは、御めんなされて下されい」と、落涙して、申されました。是によつて、此段御聞に、達しましたれば、殊の外御感心あそばされ、其せつ又、御褒美を頂戴、仰附られました。誠にありがたい、珍しいことでござりまする。孟子に、大孝は身を終るまで、父母を慕ふと、見えましたるが、この西市村の次左衞門は、實に其人とぞんぜられます。これについてをかしい話がある。さるところに不孝な息子どのが有つて、母御の手にあはぬ。友だちが、氣のどくがつて、さる先生のかたへ、道話を、聽聞に、つれてゆきました。其夜の道話に、むかし或國に、孝子が有つて、家まづしい、しかるに親子とも大病にとりあひ、こしが拔けて、たつ事が出來ぬ、已に餓死にもおよぶ所に、孝心のほど、天の感應ありしや、隣の鷄が、ある日土のかたまりをくはへて、かの孝子のまくら元に運ぶ、ふしぎにおもひ、碎き見るに、古金一步を得たり、これをはじめとして、日々にはこぶ、終に此かねをもつて、藥をもとめ、本復して、剩、のこ

も、孝子順孫、相つゞいてたゆるときなく、今なほ、又市長右衛門など申して、御褒美頂戴いたしたる人々、堅固に耕作をつとめてゐられまする。さて父の次郎右衛門、九十六歳にて、病死いたされました。次左衛門もそののち、甥をやしなうて、子といたし、その身は生涯無妻にて、長壽いたされました。寛政二年すでに年七十歳、そのころの太守様、ことさらに御仁惠ふかく、老人御いたはりとして、御領分中へ、御酒下さるゝにつき、六十已上の老人を、村々にておしらべなさるゝ事が、ござりました。去によつて西市村にも、村役人の宅へ、次左衛門をまねき、其としを尋ねられました所が、次左衛門さらに年を申しませぬ。「何ゆゑぞと」問へば、「さる子細あつて、私の年は、どうも申されぬ」といふ。村役人もこまり、「此度の事は、御領主さまの御慶事につき、御酒代を下される事なれば、有りがたい事じや。何も年をかくすには及ばぬ。あり體にいはれよ」といふ。然れども次左衛門一向承知せず、「何ぶん年を申すことは、御免にあづかりたい」と、ひたすらに申しまするゆゑ、據なく段々、このよし御重役へ聞えまして、終に御役人さまより、御吟味になり、「何ゆゑとしを申さぬぞ。もし申されぬ子細あらば、其子細を申せ」と、仰られました。ソコデ次左衛門も詮方なく、「さやうならば、年の申されぬ子さいを、申し上げませう。私親次郎右衛門、存命中、わたくしへ申しまするには、其方がとし

たまふ所、孝子のこゝろざし、感應のないといふ事はござりませぬ。もとより次左衛門は、父を老耄せし人とは生涯思はず。さるによつて、其危きを知らぬのでござります。此知らぬのが、中常人の及ぶ所ではござりませぬ。しかればというて、親が盗をしに行くのに、子が其提灯もちをするを、孝行じやといふのではござりませぬ。幸ひおたがひに、箇樣の變に出合ぬは、ありがたい事でござります。さて父の次郎右衛門は、ふるふ手に剃刀をもち、次左衛門が左の鬢のかみを、何の苦もなく、ゴソ〳〵とそり落し、手を以て其跡を撫ながら、「さてもうつくしう成つた」といふ。次左衛門も又自らなでて、「ホンニうつくしう成りました」と、親子もろとも、うち笑うて居たるとき、庄屋何がし、折ふし用事ありて、參りましたが、此體を見て、大にあきれ、其子細を問ひましたれば、次左衛門ありのまゝにはなして、顏つき平生にかはらずと承はりました。さればこれらの行狀、終に御領主樣の、御聞きに達し、御褒美として、御米おびただしく、下し給はりしかば、隣境これをつたへ聞いて、おのづから不孝の子弟も、かれこれ行狀を、あらためましたるものも、ござりましたといふ事じや。語にいはく、德孤ならず必ず隣ありとの聖語、むなしからず、此西市村は、小村にて、家數わづかに十五六軒、しかれど

て、夫は孝子といふものではない、大膽ものといふのじや、九十にあまつて、老耄したる親に、剃刀をもたせると、いふ事があるもの歟、もし親の身に、疵が附いたら何とするぞ、またおのれが身にあやまちがあつたら、どの命をもつて、親を養ふぞ、中々孝子といふものは、其様なあやふい事は、せぬものじやとおつしやる。隨分御尤でござります。去ながら大舜か、または孔夫子が、此次郎右衛門に、おつかへなされたらば、常に髪さかやきも、立派にして、箇様に不意のことばを、聞かぬ様になされませう。邊鄙にうまれて、本もよまぬ、百姓一むきの人なれば、夫ほどにまでは、とゞきませぬ。しかし此理屈は、其場の時宜、そのときのもやうを知らぬ人が、疊のうへで、分別して、いふことじや。めい〳〵共は兎角、その知恵づかひがあつて、親のこゝろにしたがふことが出來ませぬ。この金がみなに成つたら、あすはどうせう、青田をかつたら、あとの工めんが、わるからうと、とかく前後に氣がつき過ぎて、得て親の氣をやぶりまする。孝子は親ある事を知つて、我ある事を知らぬ。晉の王祥が、氷をたゝいて鯉をもとめ、呉の孟宗が、雪中に笋をぬき、後漢の郭巨が、兒を埋めころさんと致したことなど、今の人に見せたら、氣違のやうに思ひませう。是はこれ、親に鯉がたべさせたいと、おもふ心ばかりで、氷をふむのあやふきを知らず、親に笋をまゐらせたいと、思ふ心ばかりで、時節

つてしかり聲にて、「餘所の田はみな苅入をしたのに、ナゼこちの田は苅らぬのじや。早う往て田をかれ」といふ。次左衞門、こゝろようゝけ合ひ、「この頃はことにおくれました。ドレ往て苅て來ませう」と、鎌を腰にさいて出かけましたが、頓て少々苅てもどりました。父大に悦び、「よう苅て來た」と、一段のきげんであつたと、承りました。この時まだ秋のはじめ、青田でござりまするを、一言も詞をかへさず、親の意にまかせて、青田をかつて來ました事、見る人みな感心せぬものはなかつたと申す事じや。實にめづらしい孝子でござります。猶この外、次左衞門の行狀、中々一夕二夕には申し盡されませぬ。中にも耳をおどろかす行狀、いま一つおはなし申しませう。父次郎右衞門、とし九十あまりのとき、何おもひました歟、次左衞門にいふやう、「そちが月代は、きつう延て見ぐるしい。久しぶりておれが剃てやらう。剃刀を合せて、持てこよ」と申されました。次左衞門こゝろ得て、「いかさまこの頃は、いそがしさに取りまぎれて、髮月代もいたしませぬ。夫はありがたうござりまする。どうぞ剃つて下さりませ」と、剃刀をとり出し、能くとぎて父にわたし、其身は水にて、さかやきをぬらせば、父はわが膝を叩いて、「こゝを枕にせよ」といふ。ハイというて横になり、父の膝を枕として、すこしも恐れたる、色はござりませぬ。さて此はなしを致しますると、中には理屈をおつしやる方があつ

しました。次郎右衛門よろこんで、二歩の金をわたし、かの印籠と、さかづきを持つて家に歸り、「コリヤ〳〵次左衛門、よいものをもとめて來た。これを見よ」と出して見せる。次左衛門これをみて、是は「よいものを御買なされました。」次郎右衛門笑うて、「缺けそんじたる所を直しておくと、お客のあるとき、間に合うと思うて買てきた。」「左樣なら、ぬり物やへやりませう。」「オヽ、さう仕やれ。」又此印籠はくすりを入れて、其方が腰にさげてゐると、田へ往たとき、にはかに腹でもいたい折に、間に合うとおもうて、かうて來た」と、いはれました。次左衛門落涙して、「有りがたうござりまする。ヨウ氣を附けて、買て來て下された」と、眞實に悦ばれたと申す事じや。すべて此次左衛門、老に耄たる父につかへて、更に父を、老にほれたる人とせず。何故なれば、只親にむかへば親ばかりにして、我といふものをたてねば、詞を返す世話もござりませぬ。此一條、古人のいはゆる、孝子に私のたからなしとあるは、これでござりませう。されば次左衛門の孝心、人を感ぜしむる所あるにや、はるかに日がたちまして後、かの古道具屋、孝心のほどをつたへきゝまして、心に恥かしう思ひましたか、ひそかに二歩の金を持參し、無調法のよしことわりいうて、缺損じたる道具を、乞ひもどして歸りましたと、うけたまはりまする。又ひととせ秋のはじめ、父の次郎右衛門、わが田を見まはりに、出ましたが、俄にかへ

せ。忠孝はよい事といふばかりではない。第一はからだの養生、長生する妙術じや。どなたもお勤めなされませ。又あるとき次左衞門、菜種を賣りまして、金三歩をうけとり、てゝ親に見せて、「これ程になりました」といふ。父はにこ〳〵して、「其うち二歩、おれによこせ」といはるゝ。ハイというて、金二歩をわたし、さらに其子細を問ひませぬ。父は二歩のかねを財布にいれ、首にかけて、「うちの馬が大分よわつた。此二歩の金を、あの馬に足して、博勞どのへ往て、よい馬と仕かへて來う」といふ。次左衞門大によろこび、「ホンニ馬がよわりました、御くらうながら、よい馬と、お仕かへなされて下されい」と、申されました。實は小百姓の事なれば、馬を持ちは、いたしませねども、父が馬といへば、其意にしたがうて、馬といふ、さらに一言も咎めませぬ。菜種代、金三歩は、小家では、いたつて大切の金でござりますれども、父の望むときは、明日の事も思ひませず、たゞ父のこゝろにまかせて、一言も口ごたへをいたしませぬは、いたつて成りにくい事では、ござりませぬ歟。さて次郎右衞門は、老にこそほれたれ、もとより達者なれば、かの二歩の金を持つて、杖にすがりて、御城下へ出で、あなたこなたと、古道具屋をみあるきましたが、或家にて、塗盃のかけ損じたると、印籠のそんじたるを手にとり、直段を尋ねましたれば、此家の亭主、心ざまのよからぬ者か、代金二分なりと申

たらばいかゞせらるゝ。早う衣類をぬがつしやれ。火にあぶつて、進ぜませう」といふ。次左衞門、笑ひながら、「イエ〳〵ぬれあるくは常の事じや。親どものいはれるやうに、致しますれば、おかげで寒氣も身にいりませぬ。出がけに簑かさの用意をいたしたれば、親どもが、いはるゝには、此天氣のよいに、簑かさをきたら人がわらふ、やめにせよと申されました。夫ゆゑに、簑かさはきませぬ」と、何氣なき體に申されました。此事は油屋何がし、私へ直にはなしでござりまする。すべて忠孝の人は、寒暑もたやすく、身を傷る事が、出來ませぬ。何ゆゑなれば、常に精神みちて、少しのすき間がないゆゑ、寒邪その虚をうかゞふことが成りませぬ。銘銘どもは、飽くまでにくらひ、暖に著て、猶それでも飽きたらず、火燵に寄り、すき間の風をふせぎ、其うへ居間に火鉢をたくはへ、間をあたゝめると名づけて、しきりに暖氣をこしらへ、剰、酒をのんで晝寐まする。これでは寒氣にあたらねばならぬ筈じや。其うへに、間思雜慮で氣をやぶり、透間だらけのからだへ、滅多に陽氣をかり込んだものじやによつて、立居する拍子に、必陽は陰をまねいて、かのすきまより、寒邪をうちへ引きいれまするると、夫から肩がこるやら、頭痛がするやら、齒がいたむやら、難なく、至極の病者となる。はなはだこはい事じや。わたくしどもが、年中、かやうなことをして、すたれものに成りました。御用心なされま

を申して、心やすう親子くらされました。ナント有りがたい志じやござりませぬか。是に引きかへ、世間には、年のゆかぬうちから、女房を持ちたがり、百文の錢をまうけるすべも知らず、親のお蔭で、ひだるい目せぬを、己が力とおもひ、わが口ひとつ給るほどの、手覺もないくせに、あんな器量は氣にいらぬの、こんな娘でなければ、ならぬのと、小言八百いひちらす、不孝な子もあるのに、此次左衞門は、親の心をやすめうと、女房をことわりいふは、さりとは、やさしい志じや。これがほんの我なしと申すもの、則ち至善に止まつてゐるのでござります。さて父の次郎右衞門は、ことの外長いきしたる人で、すでに年八十あまりに成つて、老にほれじや、ことばも所作も不揃になり、たゞ小兒の樣になられました。たとへのふしに、八十の三つ子と申す通り、ぐわんぜのない所作にて、九十六歳まで、存命せられました。すべて此十六ヶ年の間、あとさきわかぬ親につかへて、一度もそむかず、實に我なしの行狀、その一二ヶ條をおはなし申しませう。あるとしの冬、みぞれのつようふりまする日、次左衞門村用にて、御城下の鄕宿、油屋何がしと、いふかたへ參られました。亭主何がし、次左衞門が形を見まするに、簑かさも著ず、半道あまりを、みぞれにうたれて、參りましたれば、衣類は悉くづぶぬれ。亭主大におどろき、「今朝よりのみぞれに、何ゆゑみのかさを、著てはござらぬぞ。若寒氣にあ

善い働じや。斯いふと、早合點する人は、そんならおれが、おやま買ふのも、ばくちうつのも、皆至善歟とおつしやらう。さううまうは立合はぬ。至善は何もおぼえませぬ。我なしのきつするじや。ばくちうつたり、お山買のは、われなしでは出來ぬ。人が見附けはせぬ歟、聞いてはゐぬ歟、内の首尾はどうあらうと、何かは知らず、苦しいものをになひあるく。ナント至善に止まらぬといふものは、窮屈なものではござりませぬ歟。心に何ともなかつたら至善じや。心に咎めることが有つたら、我なしではござりませぬ。どうぞ御機嫌よう、一日我なしでお勤めなされませ。樂なものじや。此我なしを、ようつとめた人がある。序におはなし申しませう。越前の國、大野郡大野領に、西市村と申して、御城下をはなれまする事半道ばかり、高八石あまり、持ちましたる、次郎右衞門といふ、百姓がござりました。女房には早うはなれ、悴一人もちまして、名を次左衞門と申しまする。親子さしむかひで、農業をつとめて、居りまするうち、親類よりも、この次左衞門に、嫁の世話をしてくれるものも、ござりましたれど、次左衞門合點いたしませず。その故は、次第にとしよられる親の事なれば、せめて心づかひを、懸けぬ樣にいたしたい、他のむすめをもらへば、少々親の氣にいらぬ事が有つても、義理なれば、辛抱もせねばならず、左すれば、親に苦勞をかける事ゆゑ、まづ女房はもちますまいと、かたく斷

續鳩翁道話　參之下

水鳥のゆくもかへるも跡たえてされどもみちはわすれざりけり

ナント有りがたい歌じやござりませぬか。飯たきのおさんどんが、目をこすり〳〵、釜の前で火うちカチカチ。此とき何がある。わしは大和の新口村で生れ、藪際の、次郎兵衛後家の、むすめじやともおもはず、手でうつやら、足でうつやら、さつぱりと何もない。されども道はわすれざりけり、見事茶がまの下がもえる。旦那どのが、神の棚のまへで、どんがめや鯉鮒をよぶやうに、かしは手パチ〳〵。此とき金もちらしいものが有つた歟。百貫目もちやら、千貫目持やら、立つてゐたやら、居つてゐたやら。されども道は忘れざりけり。影もかたちもない人が、子孫長久、商賣繁昌といふ。何がいうたぞ、うまいものじやござりませぬ歟。朝から晩まで、我なしで勤めてござる。樂なものじや。これを至善に止まると申します。至善に止るといへば、何ぞ至善らしいものがある樣におぼえ、窮屈がつて、きく事もいやがる。至善はそんな、石で手をつめた樣なものではない。あなたがたの、日がな一日何心なう仕てござる事が、皆至

わが友何がしといふ人、商賣の透間、なぐさみに、面をつくられましたとき、或人のいふは、「此頃は顔色もよからず、なんぞ腹のたつ事はないか」と、問はれました。何がし合點ゆかず、「さらに腹たてた覺はござらぬ」といふ。たづねし人、ふしぎさうにして、歸られました。其のち半季ばかりたつて、又面を作る。さきに尋ねし人、折節また來あはせました、何がしさきの事をおもひ出し、「此頃わが顔色は、いかに」と問ひましたれば、かの人うち笑ひて、「至ごく柔和で前に見し顔色とは、大きなちがひじや」といはれた。何がし此ときはじめて心附きましたは、さきに顔色の、恐ろしといはれしときは、鬼の面を作つてゐた、此面を作るには、かならず齒をくひしばり、眼をいからせなど、こゝろにさまぐ工夫してつくる、其心わが顔色にあらはれ、恐ろしう見えたものと見える、今またおたふくの面をつくる、心にいかにも、愛敬を思うて作るゆゑ、わが顔色、おのづから柔和に、見えたものと覺える、さるにても心は、大事のものじやと、物がたりいたされました。これでヨウお考なされませ。古人の語に、一切の法は、一心の異名なりというてある。心をすてて、別にとるべき法はない。心を正しうし、家業を精出して、家相も人相も、見ておもらひなされませ。休息。

めい分限をかへりみて、其止るべき所にとゞまり、大切に御法度を守りて、少しでも御苦勞を、かけたてまつらぬ樣にいたさねば、罰があたります。かした物を返さぬ歟、何ぞつまらぬ事が出來ると、御上樣の御存じ遊ばした事の樣に、假初にも公事訴訟、勿體ない事ではない歟。これ皆其とゞまるところに止らぬによつてじや。止る所とは、主人は家來をあはれみ、家來は主人をうやまひ。子は親に孝、親は子をいつくしみ、世間の人とは眞實にまじはる、これがお互の止り所じや。もし此場所をふみはづすと、何所まで落ちてゆかうやら。むしろの著物に竹の杖まで、うろたへると落ちまする。自分の不了簡には氣もつかず、時節がわるいの、鬼門がたたるのと、雪隱をたて直したり、親のゆづりの家藏を、切りくだいたり、時節に科を負せて見たり、家藏に科をおふせて、我とがを遁れうとすれども、天罰はのがれぬ。尤家相も方角も、かまはぬと申すのではござりませぬ。それ〳〵道理のある事なれど、所詮算用しあげた處は、心の事じや。家の本は身、身のもとは心じや。其心がゆがんで有つたら、人相がようても、家相がようても、方位がようても、とても叶はぬ。内のやまひは、外から膏藥はつても治らぬ。人相がわるいというて、ゆがんだ鼻が、ねぢ直されるものでもない。然れども、心のたて直しさへすれば、恐い顏も柔和になり、下品のすがたも上品になる。只大せつなは心のもち樣じや。

かりしてゐる者が死ぬると、からだは無間地獄へおち、耳ばかり極樂まゐりする。あれは耳の佛になつたのじや」と仰せられた。ソコデ又おたづね申すは、「耳の干物は聞えましたが、あのかずの子は、極樂には不似合なもの、あれはどうしたことでござりまする。」觀世音お叱りなされて、「めつさうな、極樂に腥いものが、あつてたまるもの歟。あれはかずの子ではない。婆娑にあるとき、口に忠孝をのべて、人を教訓し、口に經論を說いて、人を濟度し、しかもその身は、氣ずゐ氣まゝをはたらく、そんなやつが死ぬると、からだは忽ち地獄へゆき、舌ばかり極樂まゐりする、あれは舌の干物じや」と、仰せられた。ナントこはい話では、ござりませぬ歟。私どもは、舌ばかり極樂まゐりする連中。またわるうすると、あなたがたは、耳ばかり極樂まゐりする、お仲間うちじや。御油斷はなりませぬ。感心上手の、おこなひ下手、口ばかりの龍がしらで、尻のないにはこまつたものじや。堯舜の御代といへば、遊んでゐても、口過の出來るもののやうに思ひ、延喜天曆の聖代といへば、只酒のんでゐらるゝとおもふは、みな迷ひでござります。聖人の御代ほど、家業に精出し、正直にせねば、世渡りは出來ませぬ。お互に今日、けつこうな御代に生れ合せ、亂ばう狼藉の患もなく、山家の隅々、海のはしぐ〵まで、何ひとつ不自由ない、有難い御上樣の、御仁惠をかうむり、せめてもの冥加のために、めい

本心を知らぬのでござります。かく申せば、わたくしが無理せず、無理いはぬやうに聞えますれど、中々さやうではござりませぬ。箕うり笠でひると申して、かへつて常に無理をいたします。是について今ひとつ話がある。ちやうど私のやうなものが、死んで極樂へ參りました。觀音勢至が御出むかひなされて、やがて阿彌陀如來の御前へ、つれて御出なされた。如來のおつしやるには、「向後其方も、極樂の仲間いりをするものなれば、ごくらくのやうすも、見覺えておかねばならぬ。今日はまづ見物をしたがよい」と、觀音さまに案内を仰附られました。觀世音心得て、かの亡者を導き、そこゝと極樂の體相を御見せなさる。七寶莊嚴目をおどろかし、天人の舞樂耳にみち、八功德池には蓮のはなざかり、伽陵頻伽のさへづる聲は、うぐひすよりもおもしろく、あなたこなたと見物するうち、一の堂へ御案内なされた。見れば質屋の藏の中見るやうに、四方に棚をつりまはして、夥しいきくらげ、數の子がつみ上げてある。さては百味の飲食を、調進する御臺所かとおもひ、觀音さまに申すは、「あの仰山なきくらげは、佛達の食物に、なりますの歟」と、問ひましたれば、「イヤ〳〵あれはきくらげではない。」「それなら何でござりまする。」「さればあれは、人、娑婆にありしとき、常に忠孝の話を聞いて、實にもと思ひ、また談義說法を聞いてありがたいと思へども、身につとむるところの所作は、惡いことば

黄鳥、丘隅にとゞまるというて、聲面白うさへづる小鳥も、身の大事はよう知つて、高いところや木深いところの、枝葉のしげつた中に身をおいて、やすらかに遊んでゐる。これは弓鐵砲もとゞかず、うつ事のならぬ所を考て、とまるのでござります。さるによつて、孔子も、この詩を御評判なされて、止るにおいて、其とゞまるところを知る、人をもつて、鳥にだも如ざるべけんやと、仰せられた。これは鳥におとるといふ事ではない。人として、鳥にもおとるべき歟と、激まして、志をおこさせ、我なしの場所にとゞまらさうと、有りがたいお示でござります。すべて、鳥にかぎらず、蜘蛛は、大風ふく前には、巣をたゝみ、狐は、雨ふるまへに穴をふさぐと申しつたへて、未然にそのわざはひを、用心いたします。人は只、利欲のために、まなこくらんで、目の前に倒るゝことも知らず、あれがほしいこれがすまぬと、何事も自分の才覺で、出來るものの様におぼえ、ならぬ事もなる様に心得て、無理無體にくるしみます。其實はあくびひとつ、くつさめ一つ、指一本うごかす事も、時節到來でなければ、本眞の事は出來ませぬ。心學をするは、何も外の事を、稽古するのではござりませぬ。なる事はなると知り、ならぬ事はならぬと知る。故に甚安樂にござります。此安樂をせうとおもへば、本心を知るが始じや。本心を知れば、無理は出來ぬ。もし本心を知つて、無理をする人が有つたら、それは

ず、至極よいちかみちじやと、靜にやき飯をとり出し、菰だれのすきまから、菜種ばたけを遠見して、悠々と給てゐられた。扨樂あれば苦ありじや。氣のどくな事が出來た。山蜂の大きなやつが、かの雪隱へ飛びこんで、大事の所をさしをつた。びつくりして蜂はらふ拍子に、手にのせた皮包の燒飯を、おもはず野壺へとりおとして、又びつくりし、暫くのぞいてゐられたが、横手を打つて、ハ、アこれは近道じやといはれた。ナントおもしろい話ではござりませぬか。これほどの近道はない、燒めしをかみこなして、喉を通し、腹を通して、而して後、下へおろすのでござります。それを直に手のひらから、野つぼへおとしたものなれば、弓と弦ほどちがふ近みち、此上の近道はない。こゝが大事の聞きどころでござります。近みちはちか道なれど喉をこさぬと、やき飯が實にならぬ。まはり遠いやうでも、本街道でなければ、近道はやくにたゝぬ。金まうけの近みちしては、相場事にかゝり、立身出世の近みちしては、山事にかゝり、婚禮のちか道しては、主親の家をほり出され、葬禮の近道しては、心中身なげ首くゝり、みな氣のみじかい人たちじや。短慮功をなさずのうたに、

いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ野路のむらさめ

しばらく見あはせて辛抱すると、時節到來のあるものを、さり迚は短氣ものが多い。綿蠻たる

の仰せられたは、僞ではござりませぬ。斯う申しても、かしこいお人は中々御合點なされぬ。聖人の道じやの、仁義五常のみちじやのと、そんなまはり遠いみちでは、今の時節に、世わたりが出來るもの歟、とかく近みちでなければならぬと、滅多に近みちをこのむ人があるものじや。其ちか道トントあてには成りませせぬ。これについて可笑しいはなしがある。さるところに勘辨者が有つて、何事によらず、近道をこのむ人じや。あるとき一人旅を致されましたが、途中において、尾籠な事じやが、急に大便にゆきたうなつた。日ざしを見れば四つ半すぎ、いま一息あるいたら驛までゆくのじやに、こまつたものじや大川に隙がいると、餘ほどの道を損せにやならぬ。どうぞあるき〳〵、用を便じる仕かたはない歟と、色々と近道をかんがへても、小用とちがうて、大用は工めんがわるい。とかくするうち、ます〳〵急に成つてくる。せんかたなさに、道ばたの野雪隱へ、はしりこみ、ほしいまゝに、黄海にまたがりながら、是はつまらぬ、斯隙どつてゐると、大分のみちがおくれる、どうぞ仕やうはない事かと、勘辨を廻らしたが、忽ち一つの近みちを思ひついた。其子細は、時は晝まへ、今こゝで隙をいれて、又むかうの驛で晝支度をすると、二重三重の休息になり、ことさら茶の錢もいり、かた〴〵もつて不勘辨じや、それより、斯してゐる隙に、懷中の辨當をしてやると、茶の錢もいらず、二重やすみもせ

娘じや、おれは親を大事にかけてゐる、おれは奉公に、精を出してゐると、覺えたらば、本眞ものではござりませぬ。たとへば、人つねに額を忘れてゐれど、額を覺えると、かならず頭痛がしてある。齒はつねに忘れてゐれど、覺ゆるときは齒がいたんである。此方にこたへがあると、眞ものではござりませぬ。今一つたとへて申しませう。楊弓をひくに、的にあたれば、カチリと音がして、矢が戻り、こたへがある。しかれども、是は的の眞中に、中つたのではない、きりというて、的のまん中に穴がある。これにあたると、矢ももどらず、カチリといふ音もなく、こたへがない。こゝが至善の場じや。これを我なしと申します。カチリ〳〵と音のする間は、まだ我があると思しめせ。若また大間違にまちがうて、人の道を失ひますると、する事なす事、矢が幕へあたつた樣なもので、尻すぼりに、ごそ〳〵と落ちてしまふ。埒もないものでござります。道は須臾もはなるべからず。道にあたれば、生れるも死ぬるも、苦しむも樂しむも、我なしでするゆゑ、我にはあづからぬ。かるがゆゑに、大安樂でござります。又人のみちを失ひますると、生死苦樂、しつかりとこたへが出來ます。是は丁度、いたむに依つて齒をおぼえ、いたむによつて額を覺える樣なものでござります。このところをヨウ味うて御らうじませ。兎角道でなければ、なりませぬ。朝に道を聞いて、ゆふべに死すとも可なりと、孔夫子

には見えませぬ。しかるに母おやが、乳ぶさをふくめると、赤子が舌をもつて、其乳ぶさをまいて、乳を吸ひます。この乳首を舌でまかねば、吸はれぬといふ事は、何者が分別したぞ。ナント奇妙なものでは、ござりませぬ歟。その赤子がどうもせずに、只大きうなりましたので、ござります。三つのとし知恵が貰うたのでもなし、五つから分別出來たのでもなし、もとより、ただ赤子が成人したのなり。しからば三十も赤子、五十も赤子、八十も赤子、赤子となにもかはりはない。赤子には私の心がない、至善ばかりじや。大人には私の心が有つて、夫だけ赤子とちがひます。かるがゆゑに、孟子も、大人は、その赤子の心をうしなはずと、仰せられました。赤子の心とは、只私の心のない事を申しまするのじや。私心なければ、至善ばかりで、我といふものはない。我といふものがなければ、只むかふまゝなり。向ふまゝなれば、忠孝おのづからつとまる道理。この我なしを見つけよと、先師がたの御世話をなされるのでござります。すでにいろはうたにも、

我をたてねば悪事は出來ぬしれよこゝろに我はない

と、堵庵先生も仰せられて、我なしの勤は、勤といふことを知らぬ。もし勤を知る事あらば、それは我ありといふものでござります。おれは嫁じや、おれは姑じや、おれは旦那じや、おれは

もない歟と申せば、ないではない。押て申さうなら、きよろりとした様なものでござります。又斯申すと早合點して、さては何も知らぬ、きよろさくを見るやうなもの歟とおもへば、先師堵菴先生の道歌に、

きよろりとはいかなるものかしらねども味噌をねぶれば味をしる

と申して、たとへば、長吉どのが晝寐をしてゐる、男とも知らず、女とも知らず、また寐てゐるとも知らず、なにも知らぬところへ、旦那どのが、コレ長吉とおよびなさると、其聲の下から、ハイと返事が出る。またおさよどのが、長吉どんと、呼ぶ聲のしたに、オイと返事が出る。このハイとオイとは何ものが分別して、返事をしわけた。チトかんがへて御らうじませ、味噌をねぶれば味をしる。しかも知るといへば、何ぞ知るらしいものがある様に聞えますれど、なにも知るらしいものは、ござりませぬ。又ないといへば、何もないと御合點なさるれど、中々さやうなものでは、ござりませぬ。所詮あるともないとも、分別はとゞきませぬ。只きよろりといたして、用が勤まるのでござります。今ひとつ申して見ませう。赤子の生れおちた所は、只芋蟲を見る様にうごく〳〵と動くばかり、目もみえねば、さだめて耳も聞えますまい。もとより物はいはれず、たゞホギヤア〳〵。此とき知惠らしいものも、分別らしい物も、何もありさう

續鳩翁道話　參之上

詩云邦畿千里、これ民の止まるところなり。これまた大學の傳に、商頌玄鳥の篇を引て、經文至善にとゞまるの工夫を、御しめしなされたのでござります。まづ邦畿とは、たとへば山城大和河内和泉攝津を、五畿内といふやうなもので、畿内は天子の御座所、千里とは、其廣きをさして申しまする。惟民の止る所とは、からもやまとも、天子のおはします所を、都というて、土地うるはしく、四方へ通路よく、何ひとつ不自由なる事なく、おのづから風俗もいやしからず、萬事につけて便よければ、人多く集りすむ。止るといふは其所へうつり住んで、外へ動かぬと申す事じや。されば此詩をおひきなされたる意は、人の本心、もと明らかなるものなれば、此にしたがふときは、君に事へ親につかへ、夫に事へ、目うへに事へ、世間の人にまじはるまでも力をいれずして、自由自在なれば、此にとゞまれとの、おしめしでござります。これを至善にとゞまるといふ。さてこの至善は、形の上で見ますれば、孝弟忠信、禮義廉恥、そのあぢはひをいはんとすれば、啞がゆめを見たやうなもので、人に對して話されませぬ。しからば何

ると人も半分獸の仲間入をして、ゐる事があるものじや。盜むの殺すのといふ樣な大よごれはあるまいけれども、また少々づつの垢づきがあるまいともいはれぬ。目の玉のせんだくより、心のせんだくが肝心でござります。ある人の歌に、

ふりにけるならのみやこの習はしもあらたまりゆく君がまことに

猶後は明晩おはなし申しませう。下座。

が見附けて、肝を潰し、これはこまつた事ができた、目の眼が紛失しては、病人へいひわけがない。どうしたらよからうと、工夫してゐられたが、工夫もあればあるものじや。側にねてゐる、狗の子を見附けて、これは屈竟なものがある、此狗の目の玉を借用して、病人を本腹さそうと、忽ち狗を胯にはさんで、苦もなく狗の目をぬき出した。狗こそ迷惑、きやん〳〵いうて舞ひあるけど、醫者どのは、をさめた顔つきで、是も燒酎であらひ、よく乾かして、烏の殘した人の目と一對にして、やがて病人の目の穴へはめまするると、奇妙に目が見え出した。病人は大きによろこび、狗の目が交つてあるとも知らず、きよろ〳〵として、うれしがると、醫者どのも、をかしさをかくして、「どうじや、見えはかはつた事はないか。」「イエ〳〵何にも替りました事はござりませぬ」といふ。醫者どの押しつけて、「何ぞ替つた事が有りさうなものじや。ヨウ氣を附けて見さつしやれ」と、いはれて、「成ほどソウおつしやると、少しかはつた事がござります。」「さうであらう〳〵、どう替りました。」「ハイ只今雪隱へ參りまして、下をのぞいたとき、右の目では、きたなう見え、左の目では何とやらこのもしう思ひます」といはれました。好もしい筈じや、ひだりの目は狗の目じや。これが是、銘々どもにヨウ似たはなしじや。忠孝はよい事と思へど、又どうやらするといやになる。とくとお考へなされて、御らうじませ。うろたへ

明をはなつてござると、太刀とりの太刀が、段々にをれてある所が書いてある。どなたも御ぞんじでござりませうが、これが、刀刃斷々壞の功德を書きあらはしたもので、みな心の事じや。こゝろさへ正しければ、刃向ふつるぎはないものじや。かるがゆゑに、仁者に敵なしとも申してある。されば此大根うりも、これから女夫こゝろを合せ、本心に成つて、夜晝はたらき、終に三年目には、相應の八百屋になつて、はじめてかの銅盥を御侍の方へもどし、厚う御禮を申して、この御やしきの御出入になりました。これが舊染の汚をせんたくしたと、申すものでござります。是について話がある。さる片田舍に、俄に目くらが出來て、大にくるしみ、諸方の醫者殿に見てもらうた處が、內傷眼でなほらぬといはるゝ。いかゞはせんと、あんじ煩ひましたが、幸ひ近國に華陀流の療治をする人が有つて、腦體をひらいて、頭痛の蟲をとるの、目の玉をくりぬいて、洗濯するのと、とりぐの評判。かの病人、さつそく尋ねてゆき、療治をたのみました。醫者どの心易くうけあひ、「これは目の玉をくり出して、洗濯すると、忽に見える樣になる」と、やがて療治にかゝり、難なく目の玉を、ぬき出して、燒酎であらひ、つるし柹をほすやうに、二の眼の玉を、竿にかけて干しておかれた。時に氣のどくな事ができました。屋根にゐる鳥が見附けて、目の玉を一つくはへて逃げました。その羽おとにおどろき、醫者どの

かしいともおもはぬ人は、こゝろがよごれきつて、たとへば鏡のくもつて影のうつらぬやうなものじや。幸に此大根うりは、よいお侍に出あうて、有りがたい御異見に預かつたので、本心に立戻られた。これを觀音の御利生といふ。もし此ときに、銅盥をぬすみおほせたら、段々盗みにおもしろみが附いて、はじめに恐しいとおもうたのが、後には心ようおぼえる樣になる。古歌に、

鳴子をばおのが羽かぜにおどろきて心とさわぐ村すゞめかな

これはこれ、ぬす人も、はじめには、己が足音におどろけども、後には石で戸をたゝき割つて這入るやうになるは、鳴子におどろく村すゞめの、後には鳴子に馴れて、とまるやうになると、同じ事じや。これを習性と成るというて、よい加減に目をさまさぬと、一生すたりものに成ります。この大根うりも、後には大盗人にもなり、首の座に直るやうに成るのじやけれど、かのお侍の御異見の聲が耳に入つて、たちもどりが出來て見れば、首きられる氣づかひはない。これで見れば、御侍は觀音さまじや。則刀刃斷々壞のくどくでござります。洛東清水寺の御寶前にかけたる、繪馬を見ますれば、罪人がしばられて首の座に直つて、首をさしのべてゐると、其後に太刀取が、太刀をふり上げてゐる、其上の方に、觀音さまのおすがたがあらはれて、光

文が薪をかへ、十六文があぶらかへと、子どものはなぐすりから、今夜の寐酒のさかなまで、のこる所もなう、でかしがほで、さはいする處なれど、けふはなんと思うてやら、いつにない門口をそつとはいり、しを〳〵と上り口にこしをかけて、わらぢのひもをとかうともせず、物をもいはずさし俯てゐる。女房はくしまきあたまに、乳呑子をふところへねぢこみ、埃はらひ持せたら、三寶荒神ともいふべきいきほひ、一調子はり上げて、「うり上の錢を見せず、あやまつたきつねどののやうに、俯いてばかり。居ねむつてゐるのか、但はくらひ醉うて戻つたの歟、見たくもない倒博奕」と、御詫宣を上げて見ても、一言も返答せぬ。ソコデ女ばうが、合點がゆかず、荷の中をみれば賣上の錢もそのまゝ、外に見なれぬ銅盥があるゆゑ、「これはこなたどこから持て歸らつしやつた。こちの内には不似合なかなだらひ、顏つきといひ、銅盥といひ、何ぞわけが有りさうな」と、たくしかけて問ひつめる。こゝで亭主も面目なげに、けふの始末を、いちぶ始終はなし、「さて〳〵、其方が手まへも面目ない」と、はじめて夢がさめてきた。これが是ありがたいものじや、かの御侍が、心を洗へと、御異見の一言大根うりの腹に横たはつたは、孟子のいはゆる、羞惡の心は義の端なりと、仰せられたもこれじや。此はづかしいと思ふは、本心の發見、恥をさへわすれねば、人は身はたつもの、わるうすると恥をかいても、恥

ぬ、七つをかしらに子どもが三人、どうぞ親子五人が命を、お助けなされて下さりませ」と、色青ざめて、土にあたまをすり附けて、詫言する。かのお侍おもひの外、氣だてのよい人で、さらに立腹のけしきもみえず、「イヤ〳〵其詫言には及ばぬ。まづ大根の數をよんで見よ」といはるゝ。恐々ながら大根を縁へつみ上げたところが、貳十三把、かの御侍、やがて七百六拾四文の錢をとり出し、かの大根うりをよんで、「サア其方がいふ通に、貳十三把、七百六拾四文、序にかならだらひをそへて遣す。貧のぬすみとはいひながら、われが根性は、餘ほどよごれてあると見える。此銅だらひは、顏や手あしをあらふ道具なれど、たゞ顏手足をあらふ許では有るまい。心のあらひやうもありさうなものじや。無禮は咎めぬ、この銅盥を遣はす。持て歸つてとつくりと思案をし、心の垢をあらひおとせ」と、云捨て障子をしめて、うちへはいる。大根屋は夢見たやうに、有りがたいやら、恥かしいやら、禮もいはれず、詮方なさに銅盥と錢を荷の中へ入れて、早々にかのやしきをにげて出て、はじめて生きたやうに覺えたが、恥かしいと思ふ心が、腹のうちに横たはつて、ウツ〳〵と家に歸る。是から經文に說てある、觀音の御利生、刀刃斷々壞の、功德の段じや。常ならば小歌うたひながら、門口を這入ると、荷籠を投げすてて、錢財布を提げ、庭に立つてゐながら、まづ翌日の手くばりじや。百が米かへ、廿四

ころに狹うなつて、五尺のからだを、しばらくもおく事がならぬ。ソコデ荷をかつぎ出して、門口を出ようとすると、障子のうちから、「コレ大根屋」と呼びかけられる。ぬからぬ顏で、「まかりませぬ」といふと、「イヤ〳〵直はねぎるまい、その大根買はう」といひさま、障子をさらりと明けられた。大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げていのうとおもひ、「何把ほど入りまする、はした賣は出來ませぬ」といふ。「イヤ〳〵はしたでは買はぬ。その大根みな買はふ。此緣さきへならべてくれ」といはれる。サア大根屋も一生懸命、障子のしまつてあるうちなら、銅だらひの出しやうもあらうに、今さら銅盥が出されもせず、というて賣るまいともいはれず、逃げてゆかうにも荷を捨てて歸つてはならず、千百萬の後悔も今に成つては間に合はず、うろ〳〵うろとしてゐると、かのお侍が、大根屋のかほをきつと見て、「われはきつううろたへて居るぞよ。まづ銅盥から出して、大根の數を、かぞへて見よ」といはるゝ。大根屋は總身に冷汗を流して、モウ切られる歟、ぶたれるかと、ワナ〳〵ふるひながら、かのかな盥を恥かしさうにソツト出して、土に手をつき、「旦那さま眞平御免なされて下されませ。何をかくしませう、先刻も申しまするとほり、今朝からまだ壹文の商もいたしませず、このまゝ歸りますると、あす親子五人が、給べまする事が成りませぬ。かなしい貧のぬすみ根性、めんぼく次第もございませ

するものでもない。おのづから遁れるみちが出來るものじや。是によい譬がござります。天竺で獵人が、猿をとるには、黐をまるめて猿のまへに投出しまする、猿ははらたて、かのとりもちを、隻手づかみにつかむと、指がついて離れぬ、驚いて左の手で、かのとりもちを取除うとすると、左の手もまたつく、ます〳〵あわてて、右の足をかけてとらんとすれば、また右の足もつく、いよ〳〵うろたへ左の足でとらうとすれば、是も附く、只一トまるめの黐のために、四つの手あし、こと〴〵くついて、はなれず、さながら括り猿のやうになると、獵人が手足の間へ棒を通して、荷うてかへるときゝました。是はこれ身を遁れんとするによつて、括り猿になるのでござります。はじめ右の手でつかんだとき、騒がずと、じつと辛抱してゐると、おのづから、手のあたゝまりで、黐はたれて、自然とあやふきを遁れるに、其辛抱が出來ぬによつて、うろたへ騒いで、いのちをうしなふ。ナント氣のどくなくゝり猿じやござりませぬ歟。とかく辛抱が大事じや、うろたへまいぞ、うろたへると、銅だらひがほしうなります。ソコデかの大根うりが、縁さきで障子は〆めてある、あたりに見る人はなし、かの銅だらひを、水の入つたまゝで、大根貳三把の下へ、ソツトかくす。怖いものじや、今までひろかつた世界が、立ちど

孔子のたまはく、君子固に窮す、小人窮すれば、こゝに濫すと、これは論語衛の靈公の篇に、孔子陳蔡のあひだにかこまれ、口中食を斷て、門人こと〴〵くやみつかれて、起つことあたはず。子路といふ人、甚これを慍つて孔子に此事を問うていはく、君子もまた窮する事ありやと。此こころは、我師天にしたがうて、道をおこなふ、何のゆゑに、かくのごとく困窮するぞと問はれた。そのとき、孔子の御返答には、君子固に窮すとは、凡人の貧富窮達、これみな天命じや。君子といへ共困窮すべきときいたらば、其困窮をまもるが、天命にしたがふといふものじや。こんきうのときにあたつて困窮せまじと、さわぎ廻るは、天命にさかうて誠といふものにはあらず。されば困きうするときにあたつて、困窮するは、もとより知れた事なり。しかるを、小人は困窮のときにのぞんで、無理に困窮せまじともがく故、終に惡心がおこつて、フトかなだらひに目がつくやうになる。こゝを指して、小人窮すれば、斯に濫すと、孔子は仰せられたのじや。これは大根賣の事ばかりではない、われ〳〵どもの身のうへにもこれに似た事があるものじや。親類の無心據ない掛ぞん、或は病難、あるひは貧乏、その時が廻つて來たら、どう思うても遁れられる物ではない。かるがゆゑに中庸に、君子そのくらゐに素しておこなふと。有りがたい天命の貧乏、ありがたい親類の無心、ありがたい掛ぞん、有りがたい病難と思うて、

或おやしきの、表長屋のまど内から、「コレ大根や」とよぶ。ヤレうれしや、先知行にあり附いたと、よぶ所を見れば、表御門から右へ三つ目の、むしこ窓のうちから呼だのじや。ソコデ大根やが、表御門から、荷をになひこんで、御長屋へまはつて見ると、門から三軒めの高塀のうち、門口には何某と標札がうつてある。荷をもち込んでみれば、縁さきの障子をあけ、旦那どのが今月代を、そられたとみえて、鏡たてに向うて、自分髪をゆひながら、「その大根はいくらじや」といふ。「百に三把でござります」といへば、「ソレハ高い、廿四文づつにしておけ」といはるゝ。賣りたさはうりたけれども、現在損のたつ事なれば、「ドウゾ三把にお買ひなされて下されい。今朝から江戸中を泣きあるいて、まだ一把も賣りませぬ。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、かけ直は一切申しませぬ」といふ。かのお侍がかぶりふり、「夫でもたかい、まからずば先よしにせう、邪魔ながら持つて歸れ」と云捨て、縁前の障子を、はたとしめられた。大根屋もいろ〳〵というてみても、かのお侍があひてにならぬ。ソコデ仕様ももやうもなく、ハテつまらぬ、モウ日の入には間もなし、何でも四五百の錢をもつて歸らぬと、親子五人があすの命がつながれぬ、なんとしたものであらうと、手を組んで思案をしながら、縁前の銅盥に、フット目が附た。こゝが大事の聞所じや。心の關所が、ゆだんなく、番してゐたら、銅盥に目はつかぬ筈じや。子

青物賣と出かけ、四五百文の錢で親子五人がその日ぐらし、あさ五百文で土物だなで、大根を買うて、其日一日、江戸中を、大根々々と泣きあるいて、暮がたに七百文ばかりにし、内へ戻ると、米買へ、酒買へ、醤油かへ、油かへ、薪かへ、子どもの鼻ぐすり迄、二百文の錢で、あす一日の軍用金、のこつた五百文は卽あすの商賣のもと手、一日やすむと、一日くはずにゐねばならぬ、小ぜわしない身代、其中から無理無體に、雨がふるというては、半日やすんで博奕うち、頭痛がするというては、晝からかへつて女夫げんくわ、親子五人が、くはずにゐる事も、折々あると、きゝました。こんな咄は、お子たちもよう聞いて、お置きなさるが宜しい。是はこれちひさいときに、とゝさまや、かゝさまの、おつしやる事を聞かなんだ報で、成人して、此やうに罰があたつて、難儀な暮をせねばならぬ。隨分御兩親のおつしやることを、ヨウ聞かねばなりませぬ。さてかの大根うりが、例の通、一荷の大根を荷ひ、朝早うから賣りあるいた處が、どうした事やら、其日は一把の大根もうれぬ。日ざしをみれば、はや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中には、まだ一文の錢もたまらず、これはつまらぬ、此大根が、暮がたまでに七百文の錢に化けぬと、忽あすは、釜の中に蜘蛛の巣がはる、どうしたらよからうと、工夫しながら、いつのまにやら、兩國橋をわたり、本庄の屋敷町を、大根々々と、うりあるいた。

とき御役人さまがたは、一同に御列座あそばされてござる。これが明六つの太鼓をきいて、お上下をめすのではござりませぬ。夜半でも八つでも、何時でも嚴重に御番をあそばさるゝによつて、夜中何時、御用物が通つても、ちよつともおさしつかへがござりませぬ。人の心も、眞其ごとく、ねても覺めても、立つにも居るにも、畏れつゝしむの心が、番してゐれば、燈籠鬢や、三味せん太鼓、鍋やきすつぽんどじやう汁を、めつたに、うかうか通しはせぬ。誰しも用心する樣なれども、いつでも、通つてしまうた、跡での後悔、これが、ちやうど、明六つの太鼓を聞いて、門をびらくと、旅人は通りかゝる、ヤレ待つてくれ、上下を著ねばならぬと、いうてゐる、其隙に、よいものも、わるいものも、通り拔けて仕廻ふ樣なものじや。是じやに依つて、心の番がきよろつくと、どんな大變が起らうやら知れませぬ。故に、明命をかへりみるとも、申してある。是について、おそろしいはなしがござります。所は江戸の神田邊と聞いたが、名は何とやら申して、いたつて貧乏なくらし方。夫婦に子供三人、亭主といふは三十四五、女房は二十八九、家は九尺二間のうら店、鼠の巢を見るやうな住居、商賣は何と取りさだめた事もなう、只明てもくれても、一合酒と女夫喧嘩、小博奕が商賣同前、あさは朝寐し、夜は夜ふかし、針を藏に積んでも、たまらぬ身持ゆゑ、とうとう、貧乏の底になつて、せう事なしに

具足いたします。六根とは、眼と耳と鼻と口と身と意と、この六つじや。これをまた六識ともいふ。此上第七を心識といひ、第八を阿賴耶識とも、又含藏識ともいふ。此第七の心識が、一切の善惡邪正を辨別し、第八識は、一切の理を含んで、しかもする事なく、たゞ何ともなき物なり。已上これを八識といふ。識とは、しるといふ事じや。さて六識に對するものは、色と聲と香と味と觸ると法と、これを六塵といふ。およそ世界に、あるとあらゆるもの、此六つの外に、もれるものはござりませぬ。尤此事を委しう申すと、生藥やの店おろしするやうで、すべてチンプンカンプンに成つて分らぬ。委しい事は、識者におたづねなされませ。此方に入用はない。只さしあたる處は、孟子に所謂、耳目の官は、思はずして物におほはると仰られて、目はみるが役、耳はきくが役、しかも、見れども何の色と知らず、たゞ見るのみ、聞けども何の音と知らず只きくのみ、是を分別するものは、意識なり。しかれども、得てわるい方へかたむきやすき意なれば、第七の心に、しつかり敬畏るゝ所があれば、人の道がつとまります。さすれば心は大切な關所じや。こゝで油斷を致して、うかくする と、どのやうな惡事を、おもひ附かうやら、甚怖いものじや。おそれ入つたたとへなれども、已に東海道には今切箱根、木曾かい道には、福島横川、すべて諸國の御關所で、明六つの御太鼓がなると、御門がひらく。此

續鳩翁道話 貳之下

何事ものりをこえゆく世の人の心にかたき關もりもがな

いにしへは、國々に關をすゑて、まもりの人をつけ、往來の人をあらため、其子細なきものは、これを通し、子細あるものは、是をとゞめて都に告ぐる。いはゆる美濃の國には不破の關、攝津の國には須磨の關、あるひは逢坂、または木幡など是なり。今此歌のこゝろは、人つねに、おそれ敬むの心を存して、私欲をふせぐ事は、猶關をまもりて、旅人を留むるがごとく、其よしあしを知らまほしと也。もがなとは、ねがひのことばなり。然らざれば、私欲常に本心をくらまして、人の道に遠ざかること多からんと、うち歎きたるさまなり。關守のたとへ、甚だ有難いことじや。これ即明德をあきらかにするの手段、日新の工夫でござります。されば銘々どもが、人の道を失ひまするは、只おれが〳〵の身贔屓身勝手より、おこるのでござります。しかもこの身は、父母の緣によつて、生ずるとは申しながら、畢竟天地水火の塊じや、佛家では、地水火風のかたまりじやと申して、是を四大といふ。この四大むすんで、形をなせば、六根を

て目あきがつきあたる。さやうならおかし下されい」と、提灯をさげて、道五六町出ました處が、向から來る人が、目くらに、はたとゆきあたりました。ソコデ大きに腹をたてて、「おれに突きあたるやつは目くら歟。」向の人も疳癪にさはり、「おれは盲ではない。さういふおのれが、どう目くらじや。」「イヤ〱おれは盲じやけれども、人には突きあたらぬ。おのれが目くらに極まつた。」向の人もいよ〱腹たて、「おれを盲といふ證據は、何ぞ覺が有ていふの歟。」「オヽ覺がある。おのれを盲といふ證據は、この持つてゐる提灯が、おのれが目には、かゝらぬじやない歟」と、ズツトさし出す提灯の火は、宿屋を出た門口で、疾にきえて仕舞てある。ナント氣のどくな盲ではござりませぬか。火もともさぬ眞くろな提灯をさげて、是でもあきらかなと、おもうてゐるは、本心見うしなうて、身勝手な心を、本心じや〱と思ひ、洗濯せうとも、愼まうとも思はぬ人に、ヨウ似たものでござります。どうぞお互に、火は消てはない歟と、日々に吟味がいたしたいものでござります。休息。

手はぬけるものを、一度つかんだら、首がちぎれても、離すまいと、かた意地なうまれ附、それで自由自在の、大安樂が出來ぬのじや。かく申せば、錢かねの事のやうなれど、つかむものは、是ばかりではない。器量のよいのを抓み、かしこいをつかみ、まけをしみをつかみ、家がらをつかみ、身代のよいのを抓んで、離すまいと、かつぎあるくに依つて、教をきく事もならず、樂をする事もならず、愼も出來ず、詮方なきに癪氣おさへたり、顏しかめたり、酒のんでまぎらしたり、さりとては、氣の毒なものでござります。壺わつて仕廻うてからは、何いうても詮ない事じや。身代の壺をわらぬさきに、御用心が第一でござります。夫でもわが本心は、あきらかな、明德は曇つてはない、洗濯するにはおよばぬと、思ふ人があるものじや。是をたとへて申しまするに、私のやうな目くらが、一人旅をして、心易い旅籠屋にとまり、「あすの朝は七立をさして下され」と賴む。亭主も心得、朝早うたゝせまするとき、目くらは旅の支度をとゝのへ、杖を持つて出ようとすると、亭主がいふには、「まだ夜深いに、提灯をおもちなされ、おかし申しませう。」「何をいはつしやるやら、盲が提灯をもつて、何にするもので。」「イエ〳〵おまへには入りますまいけれど、くらがりをとぼ〳〵御出なさるゝと、往來の人が行きあたりまする、夫で提灯をお持ちなされと申すことじや。」「成ほどさうじや。私は行當らねども、得

さま、景淸と箕尾谷が、しころ曳をする樣なと、座中が一同にどつと笑へど、年寄は中々笑はず、泣きがほに成つて、「どうも、いたんでぬけませぬ」といふ。サア是から大騷ぎになり、「醫者どのをよんでこい。難波骨つぎではゆくまいか」と、酒宴の興もさめ果てました。時に五人組が一人すゝみ出て、「いづれもお騷なされな。我等うけたまはつた事がある。むかし司馬温公といふ人幼きとき、大勢の小兒とともに、大きなる壺のほとりに遊びましたが、一人の小兒、あやまつて彼つぼの中へはまりました。大ぜいの子供はこれを見て、にげ歸つたが、司馬温公一人は歸らず、側なる手ごろの石をとつて、かの壺へ投げつけましたれば、壺はわれて、はまつた小兒は、不思議に、命を助りましたと、或人の話じや。今お年寄の御難澁は、この話にヨウ似てある。いざや我等が、司馬温公となりて、たとへばその古染附の壺が、失禮ながら、何ほど高金の品でも、お年よりの腕にはかへられぬ」と、しかつべらしく、きせるを引つさげ、向へまはれば、年寄は氣のどくさうに、つぼをかぶつた手をつき出すと、只一と打ちにうち碎た。ナニガ坐中は金米糖がちらかつて、雪をふらした樣になると、「ヤレお年より、お助りなされたか」と、其手を見れば、ぬけぬこそ道理なれ、金米糖を、一ぱいつかんでゐられたと申すことじや、ナントをかしい話ではござりませぬ歟。つかんだものをはなしさへすれば、自由自在に、

は、一つつかまへてゐるものが有つて、志が立てにくい。これに附いて、おもしろい話がある、眠さましに、お聞なされて下されい。さるお町内に婚禮振廻がござりました。ナニガお年寄をはじめ、町役家持の人々、一同に座につきまするると、さまぐの馳走がある。時にかの年よりは酒と聞いては、笹の露にも醉ふ程の下戸じや、座中を廻るさかづきの間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣のどくにおもひ、「お年寄さまは御酒はめし上らず、御退屈にござりませう。チトお菓子なりとも、御取り下されい」と、南京の古染附の壺に、大りんの金米糖をいれて、とし寄の前へ持つてくる。座中も「これはよいおこゝろ附き、ひらにお菓子を、召上がられい」と、すゝめられて、年寄もわるうはなし、「しからば頂戴をいたしませう」と、壺を膝へ引上げ、手首を突込みしなに、少しきしむやうにおほえたが、無理に手をさし入れて、つまみ出さうとするに、手首がつまつてぬけませぬ。どうぞして拔ける歟と、いろくにこじ廻して見ても、引つぱつて見ても拔けず、まごくして居らるゝと、側から見つけて、「どうなされましたぞ。」「イヤ手がすこしつまりまして、思ふやうにぬけませぬ」と、眞がほに成つていはるる。「夫は氣のどく、私が壺を持つて居ませう。無理むたいに、手をおひきなされ」と、一人が向へ廻つて壺をつかまへ、あとへ引くと、年よりは手を前へひく。互にゑいやと、引あふあり

の子もこれと同じ事で、うみ離しにして、教へもせず、捨てそだちに育て上げて、人らしい人にならぬと、小言いふのは、無理なものではござりませぬ歟。かやうな大病人は本復が仕にくい。俄に手習は出來ず、本よむことはきらひなり、どうして療治をせうぞ。幸に先師石田先生、おひろめなされた心學は、無學文盲でも、出來る學文じや。一たび本心を、見つけまするし、生れ附に、無理のない事を、知りまする。この無理のない心を手本にして、物ごとをいたしますれば、身分相應の働が出來て、人なみ〳〵の人に成りまする。ドウゾお手よりで御修行をなされて下さりませ。かく申せばとて、文字はいらぬと申すのではござりませぬ。行うて餘力あるときは、以て文を學ぶとも見えますれば、御隙のある方は、成るたけ書物をおよみなさるが宜しい。しかし銘々どもは、親につかへ、主につかへ、日用に追ひまはされ、人に損をかけまいと思へば、中々書物を、よんでゐる隙がない。さればというて、學ばずにはゐられず、詮方なさに心學でもして、せめて格別の無理をせぬやうにと存じまするゆゑ、我とおなじやうな、隙のないお衆へ、おすゝめ申すことでござります。教は時をしるが第一じや。寒中に種まいても、物ははえぬ。これ時節がちがふによつてじや。人參は結構な藥でも、二階からおちて目のまうたには間に合ぬ。渡世のせはしい町人衆には、よい教でござります。去ながら、こまつた事に

たにして、愼につゝしみをかさね、間斷なうして、終に生れつきの明德にたち反つて、聖人とおなりなされた。さるによつて、書經にその德をほめて、諫に從うて咈はず、人に與して備はらん事を求めず、身を撿むるに、及ばざるがごとくすと、あるを見れば、ひとへに明命をかへりみて、日新の功を、おつみなされたに違ひはない。況やめい〳〵どもが、敎にもよらず愼みもせず、氣隨氣まゝにやり附けたらば、ろくなものに、ならぬ筈でござります。この樣な難さくものに成るのは、畢竟幼少からのくせ附じや。障子をやぶらさぬと、蟲もちになるの、叱たら蟲が出ようのと、氣まゝにさせた癖が附いて、成人ののち、人の異見もきかず、人が思ふ樣にならぬといふては、かんしやくを起し、我ひとりかしこがつて、此上もないもののやうに心得、つひに本心を、たどん玉に仕かへる事は、品玉よりも早い。嚴家の子は、嚴を知らずというて、幼少より、嚴しい家に育つた子は、嚴しいといふ事はしらぬ。氣儘ものを俄にため直さうとすると、疳鬱して物蔭へすつこんで、泣いてばかりゐる樣になる。是みな其親愛する所において辟すというて、可愛〳〵の、とんぼ返りして、育てたあやまりじや。人の子は、敎へずとも人になると、思うてござるのは、大まちがひ。たとへば米麥をまけば、米麥が出來るに違ひはなけれども、こやしをいれ、草をとり、さま〴〵に手いれをせねば、實がいらぬ。人

にあるものでござります。夫でもやつぱり、おれが〳〵で家内の者を叱りまはし、是ほどに心をつけても、家内がねから治まらぬ。をさまらぬ筈じや、主人も家來も女房も子も、親大切といふ調子が、さだまらぬによつて面白うゆかぬは、知れたことでござります。是全く、本心のくらいによつて、身が修まらぬのじや。身がをさまらぬによつて、家内が治まらぬ、とかく心の洗濯が大事じや。衣類のせんだくに絶まがあると、盥の中に棒ふり蟲がわきまする。又心のせんだくに間斷があると、家のうちにいろ〳〵の蟲がわいて、旦那どのも奥さまも丁稚も下女も、ポン〳〵というてはね廻る。まづ第一に、世かいの人が下愚に見え、我ひとりかしこう覺える。わが氣に入つた人は、善人のやうに思ひ、我氣にいらぬ人は、惡人の樣に見え、我をほめるものは、輕薄とは思ひながら、何とやら心よく、我を毀るものは、道理とは知りながら、あたり眼に忌みきらひ、人の能あるをねたみ、人の出世をにくみ、人をこまらせ、おのれを高ぶり、おもてに正直をいひ散して、陰では身勝手をはたらくなど、これみな心の洗濯のたえまからわいた蟲じや。滅多に油斷はなりませぬ。堯舜は性のまゝにして、湯武はこれに反ると孟子も仰られて、堯舜のやうな聖人は、うまれながらにして知り、安んじて行ひたまふにより、別に愼まいでも、その身其まゝ聖人じや。すでに湯王にいたつては、日にあらたに、日々にあら

ばかりで、とんとつまらぬ。故に、聖人樂を制して、金石絲竹革木匏土の八音をもつて、をしへ給ふ、有がたい事ではございませぬか。大工の家を建つるは、曲尺といふきまりがあり、琴三味線のつれ彈は、調子といふきまりがある。人のうちにも親大事といふきまりがあると、跡は何もかも、工合ようをさまるものじや。むかし漢土に、目くらと聾と躄と、三人常に交つて、酒を飲んで樂しみ、盲がうたへばゐざりが拍子どり、つんぼがたつて舞ふ。あるとき例の三人が、さかもりの最中に、近所に火事があつて、人多くさわぎ、火事よ〳〵といへば、盲一ばんに聞附け、逃んとするに方角がしれず、ゐざりは火の手を見附けたれど、腰ぬけてたつ事ならず、氣の毒や聾は、火事の方に、尻むけてゐれば逃んともせず、既に三人、必死の身となる。此とき或人かけ附けて、まづ目くらに、腰ぬけを負せてたゝせ、聾に目くらの手ひきをさす、こし抜けは脊中から、聾に方角を、指さして見せる、聾は火事と合點して、めくらの手を引いて走り出す、盲は方角は知らねども、足は達者なれば、ゐざりを負うてつんぼに手をひかれて走りて、危きをのがれたと、或先生の話でございます。これが甚おもしろい事じや。氣があはいで家内が治まらぬは、三人がたはの、火事にあうたやうなものじや。御用心なされませ。よい事は見習はぬ盲、主親のいけんは、耳にいらぬ聾、仕事ぎらひのこし抜け、わるうすると世間

やうな顔附して、こちの旦那どのの樣に、氣が短うては、命もせも、たまるものじやない、是では辛抱がならぬと小言いふ。もし女房の思ふやうに、亭主も子も奉公人も、うち揃うて、氣が長かつたら、中々箸持つてめしはくはれぬ。晝まへに丁稚どのが、小便がしたさに、戸を明くると、お内儀が寐所から、すつぽんのやうに、首突出し、モウそろ〳〵、家内を起しませうかといへば、旦那どのが寐言半分に、晝にもならぬうちに起きて、どうするものじやと、いはるゝ。下女ぬからぬかほで、一向夕めしと一緒に、茶の下をたき附けませうといふ。是ではトントつまらぬものじや。すべて人の氣質には、色々がある。その色々があるので、ちやうど家がをさまるのじや。譬ば大工どのの家を建てるに、材木の長いばかりでも、また太い計でも、家はたゝぬ。人の家内も、其通りで、氣のみじかいも、長いも、偏屈も理屈者も皆入用じや。しかし、ひとつ〆括がないと、其色々で、かへつて治らぬ。今こゝに娘の子が四五人よつて、三味線の連彈きをするのに、同じ調子で同じうたを、同じ手で彈いてゐると、やかましい計で、面白うない。半分はカンでひき、半分はオッで彈くと、音がちがうて面白い。それより猶琴がはいり、胡弓がはいり、太鼓つゞみ、笛すりがね、色々の音がまじるほど、いよ〳〵囃は、おもしろうなる。しかし二上りか三下りか、調子がひとつきまつてないと、これ又やかましい

ざりませぬ歟。是みな心の掃除をせず、氣隨氣まゝが増長して、味噌汁がてつぺんへのぼり、此樣なかん症やみに成りまする。この心で、家内を治めうとしても、一つもおのれが思ふやうにならぬ。女房が氣が長うてどうもならぬ、旦那どのが、氣が短うてどうもならぬ、手代がのらでどうもならぬ、旦那は目を明いでどうもならぬと、小言八百の、たえる隙がない。ヨウ思うて御らうじませ、思ふ樣に成つたら、どのやうな事が出來るぞ。小の月の大晦日うまれ、氣の短い、いらついた亭主は、なんぞいふと、かゝを叱り、おのれがやうに、面ながなうまれ附きでは、此からい時節に所帶がもてるもの歟、寐所から尻はせ折りて、ナゼ釜の下たき附けぬぞ、何さしてもグズ〳〵と、牛糞に火の附いたやうで、埒のあく事じやないと、日がな一日小言いふ。もし此亭主が、思ふやうに、女房も氣がみじかく、息子も嫁も短氣もので、手代も丁稚も、せはしなく、飯たき女までいらついて、おのれと同じ樣にあつたなら、どんなものでございませう。夜は夜半から、門の戸引きあけ、疊たゝくやら、飯焚くやら、家内中がはしり廻つて、氣のせくまゝに、飯はこげつく、茶釜の下はくすぼる、土瓶はうちわる、あぶら壺はひつくりかへす、何の事はない一年中煤はきぐらし、是でよさそうなものでござりませう歟。ヨウ思うてごらうじませ。女房は女房で、氣の長いうまれつき、師走でも、正月の三つもある

やござりませぬ歟。どうするかと見れば、魚串のさきに、絹雑巾をまき、障子の横ざん一本づつ、叮嚀にふき、隅々はかの寒竹の火吹竹で、フツ〳〵とふかれる。さりとては氣のどくなものじや。さて掃除仕廻て、是で氣がすんだと、ひかへたばこ盆をとりよせ、席のまん中にすわり、そこらを睨みまはしてゐらるゝに、折から時刻は四つ半すぎ、ひがし請の席なれば、突きあげ窓から、日がさしこむ。なに思はれたか、俄に小ものをよんで、「横町の桶屋へ往て、椹の一番盥を取てこい」といはるゝ。小者畏て大だらひを重さうに持つてかへると、「コリヤ〳〵そこらにおくな、井戸の側へ持て往て、切藁で、内も外も底まはりも、くつきりとあらうて、ずゐぶんきれいな水を、一ぱい汲みこみ、長七と手舁にして、この軒打の上へ、ソツト持てこい」といはるゝ。小者心得て、その通りにして持てくると、「コレさつや、己が居間に、あたらしい朝鮮團扇が有る、取つておじやれ。」下女がうちはをもつてくると、主やがて諸肌ぬいで、しかつべらしく、かの團扇を引つさげ、たらひの水へざんぶり突つこみ、雫のたるのを提ながら、かの日のさしこむ所へ、ぬれ團扇をさし出し、上へあげたり下へおろしたり、まねくやうにしてゐらるゝ。何をするのじやとおもへば、突上窓からさしこむ日影に、一面にこまかい埃が見える。これが氣にかゝるゆゑ、そのほこりをとる分別じや、ナントめづらしい掃除ずきじやご

其跡を捨てておけば、眞黑によごれることは、障子埃を見て御するさつなされませ。よし又毎朝ほこりを拂うても、三町三所に、やりなぐつて掃除すると、かへつてすみぐ〜には、よけいにたまる、とても掃除をするなら叮嚀になさりませ。しかし箇樣に申せばとて、心の掃除をわきにして、障子ばかり拂うてゐると、かへつて大間違が出來まする。是で思ひ出した話がある。先年播州へ下りました節、或人の話に、此近所に茶人があつて、この頃二疊臺目の席が建ちました。尤かき込天井に、つき上窓、宗匠のこのみで、至極ざんぐりと出來あがつた。ソコデ疊屋が疊をいれ、表具屋がこし張するやら、障子はるやら、手離になると、其あとは、下女一人と小もの一人、これは茶事ばかりに仕ふ奉公人、此ものどもに、とくと掃除をさせました。さてさうぢが出來ると、主が見分をせられた。ナニガ奇麗なうへを奇麗にしたれば、申分はなけれども、あるじ中々合點せず、袂から蟲目がねを出して、障子のさんのすみぐ〜をのぞきまはり、「此樣な掃除の仕やうで、ドウ客が出來るものじや。おれが居間にある、掃除道具を取つてこい。ドウデおれがせずば、埒があくまい」と、めつたに叱りまはさるゝ。小者は心得、一つの箱を取つてくる。主その中より、掃除道具をとり出さるゝ。見れば、竹を細く削つた、魚串を見るやうなものが一本、絹雜巾が一つ、寒竹の小さな火吹竹が一本、ナントめづらしい道具だてじ

らひみがけば、其德おのづから明らかにて、大きくいへば國天下をもをさめ、小さくいへば家内をもをさめまする。此道理を御發明なされ、盥におしるしなされて、しかも眞實でなければならぬゆゑ、苟に日に新たにせば、日々に新にして、又日に新なりと、おしるし遊ばされたものじや。是則殷の湯王、天の明命をかへり見たまふ實事でござります。されば聖人の御身でさへ、かやうに、日々おつゝしみなされるに、銘々どもは何とも存ぜず、只うかうかと、瓢簞の川ながれ見る樣に、どこへおち附くといふあてもなく、あちらではコツリ、こちらではコツリと、鼻うつても、あたま打つても、恥しいとも思はず、そのくせ家内を叱りまはして、無理むたいに治めうとするは、ナントつまらぬものではござりませぬ歟。まづ人を治めうとおもへば、己が本心を、明らかにせいでは、所詮をさまるものではない。たまたま本心を明らかにした樣に、覺える事が有つても、又其跡は捨てておく。ヨウ考て御らうじませ。埃はらひで、朝障子のさんをはらへば、ほこりはなくなり、その日一日は先づ奇麗な。翌日に成つて見れば、またさんに埃がたまつてある。それを其まゝ捨置いて、今日もあすも、拂はずに置いて見たがよい。十日ほど立つと、一歩ほど埃がたまります。人の心もまた是と同じ事で、たまたま一日愼んでも、

續鳩翁道話　貳之上

湯の盤の銘にいはく、苟に日々に新にせば、日々にあらたにして、又日に新なり。これ又大學の傳にして民をあらたにする事を、御示しなされたものでござります。先湯の盤の銘とは、昔もろこしに、殷の湯王と申したてまつる聖王のおはしまして、其はじめは、小國の君なれども、御德の盛なるによつて、つひに起つて天子と御なりなされ、殷の世六百年の基をおひらき遊ばされました。かほどの明君なれども、猶御つゝしみのために、常に御身をきよめさせ給ふ盥に、自ら警むるの詞を御記しなされたを、湯の盤の銘と申しまする。苟に日に新にせば、日日に新にして、又日に新なりとは、夜前も申ごとく、人は天よりうけ得たる、固有の本心と申して、明らかな德がうまれ附いて、ござりますれど、利欲のために、昏まされまする事がある。たとへば人の身の、はじめ奇麗に、いさぎよきも、よごれ仕事をすれば垢づく。されども行水して、あらひみがけば、もとのごとく奇麗になる、これを捨ておけば、また垢づく。故に日々にあらひきよめて、垢をされば、いつも身は奇麗なり。本心も眞その如く、一たび利欲にくらみ

却て密に譏る人も、間あるよし聞えまする。しかしこれは全く、誠の道を知らぬゆゑじや。すべて此一條は、むかしの事でもなく、又唐土天竺の事でもない、現在たゞ今の事で、しかも私がしたしう本人橋彌にも聞き、又そのところの人にも、うけたまはりました事じや。これをおはなし申す事は、どうぞ、御たがひに、この志を手本として、めい〳〵腹の中を省み、恥かしうない樣に、本心をみがきたいものでござります。或人の歌に、

　みな人のもとの心はますかゞみみがかばなどかくもりはつべき

猶明ばんおはなし申しませう。下座。

をたづねて、川さき村へ參られました。暫く逗留して又松坂へ歸るついで、兩宮へ參詣をする事なれば、橋彌をも共に、拜禮さそうと、其用意をして、おうばの申しまするは、文五郎は、御主人をたのんで、奉公に出した上は、よいにつけ、わるいに附け、わしがあづからぬ事じやによつて、いふに及ばぬ、こなたは格別大切の身なれば、道中でかりそめにもうか〳〵せず、飯もり女などに、かならずあひてになる事はなりませぬぞ、もしや、病でもうけ、身に疵のつく事が有つたら、爺御の家をつがつしやるとも、恥を雪ぐといふものではない、返す〳〵も、身を清淨にして、參詣をさつしやれ、この乳母は、ついてはゆかぬけれど、こなたが身持のわるいことを、道中でさつしやると、わしは內で直に知りまするぞ、ゆめ〳〵忘れず、つゝしんで參宮をさつしやれと、懇に、異見をしられたと申す事を、橋彌直の話でござりまする。古歌に、

たらちねの親のまもりとあひそふる心ばかりはせきなとゞめそ

此歌のこゝろに通ひて、一しほありがたう覺えまする。此こゝろにて橋彌をそだてた事なれば、その人がら、おとなしく、柔和にして、詞すくなく、在中の癖なれば、わかき人は、男も女も夜はよもすがら、あそびまはれど、橋彌にかぎつて、一夜も他へあそびに出ず。これ全く、乳母のきびしく敎へ育てましたゆゑ、篤實におひたちました。されども乳母の嚴肅なる處あれば、

のくつをうち替るとき、かならず一つたべさせ、また若松に行きて、荷をおろしたるとき、一つたべさせ、歸るさ途中にて、のこる一つを給べさせよ」と、是のみにかぎらず、其はじめ小屋住居の難儀の節にも、なほ物をあはれむ心があつて、かゝるときなれば、人にものを施す事はならず、せめてもの志じやと、自分食料の黍稗を、毎朝すこしづつ、小鳥に施されたと申す事じや。古歌に、

山鳥のほろ〳〵となく聲きけば父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ

これは行基菩薩のお歌と申しつたへます。いかさま一さい衆生を救はふといふ、大慈悲心より、およみなされた歌なれば、申すもおろかなる事でござりますれど、中にも、父かとぞおもひ、母かとぞ思ふとは、格別にありがたう、覺える處がござります。今このお乳母どのの慈悲心、禽獸におよびまする事、その意味はぞんじませねども、みなし子をもりたて主人の家を引きおこして、其父母を顯す、忠孝の志のありがたさは、行基菩薩のむかしにも、めつたにはづかしい事は、あるまいとぞんじます。孝經にも、身をたて、道を行ひ、名を後世に揚ぐるともあれば、お互に此お乳母どのを、見習ひたいものでござります。扨實子文五郎、これ又おとなしく、奉公いたし、去年江戸表より、初登とて、傍輩同道にて松坂におち附きまして、夫より母

人の子もまなべあしたに雀子のちうとゆふべに鼠子もなく

忠孝は天下の大本、ドウゾあだ口になりとも、忠孝のはなしは、なされるやうにいたしたい。ましてこれは、我身をすてて忠節をまもりし行狀なれば、遂に御領主さまの御聞に達し、去る酉年、御褒美として、御米多く下したまはり、夫のみならず、折にふれて、御褒詞たび〳〵ありしよし、承りまする。かの身を捨てこそ浮む瀬もあれ、といふ歌のこゝろも、今さら思ひ合されて、有りがたい事ではござりませぬ歟。猶また川崎村役人衆のはなしに、橋彌近ごろ馬をもとめて、つかひこゝろみまするに、甚よい馬なれば、さては博勞どのの、よい馬を世話し呉られた、禮を申さずば成るまいと、銀二匁博勞のかたへ持參し、あつく禮をいはれました。博勞も大きにおどろき、「凡世間の人は、よい馬を直段やすう買ひとれば、買德と心得、また間ちがひにて、誤てやすう賣りたるを知らず顏して、ひそかに德附きたりと心得、すべて馬の賣かひに附いて、あとより禮にくる人はない。數十年博勞を渡世にしたが、かゝる事は珍らしい事じや」と、人々へはなしたと申されました。又橋彌耕作の隙には、馬をひいて若松浦というて、三里ばかりの所へ、米をつけて通ひまする事がある。必ずその日は、馬のかひば、一日分をもたせまして、猶その餘に、大きなるにぎり飯を、三つこしらへ、これを橋彌にもたせていふは、「馬

のはあるまい、おれが商をしてやらずば、旦那があの樂は出來はせまい、わしがおめしたいてやらずば、家内中がみなひだる腹かゝへて、かつえをるであらうと、我も〱と、鼻をのばして、家内中が、おれがの會じや。これで思ひ出したはなしがある。さる所の手代殿か、商にゆくというて、旦那へうそつき、彼とうろう鬢を大勢つれて、東山へ花見に出かけた。道でうちの隱居に、おもひがけなう出あひました。ソコデかの手代どのがびつくりし、挨拶どまぐれ、「是はお久しうお目にかゝりませぬ」といひ捨て、あとしらなみと逃げて戻つた。隱居もあまりの事に興さめ、返答もせず、にがりきつてうちへ歸られた。扨夜に入りて、かの手代を呼びつけ、「其方はけふ、商に往たと聞いたが、最前のざまは何じや。其上どこの國か、三百六十日鼻つき合してゐるおれに、久しうお目にかゝりませぬとは、なんとした挨拶じや」と、きめ附けられて、手代どのが、「ハイあのやうなところで、御目にかゝりましたは、實に私がためには、百年目でござります」といはれた。うろたへると、この百年目が、一年のうちに二三度づつ、廻つてくる。御用心なされませ。かのおうばどののやうに、主人の家は取りたてずとも、をさな兒はもり立ずとも、せめて十年の年季をつゝがなうつとめ、親請人をひき出さぬやうに、勤めたいものでござります。或人の道歌に、

した、老母をも養ふ樣に成りました。此はなしを丁稚衆も、手代衆も、女子衆も、居眠らずとヨウ聞いておかれませ。むかし、木曾殿といふ大將が有りて、北國に於て、平家と戰はれしとき、味方の兵へ申附けて、若敵がたに、齋藤別當實盛と、名乘るものが有つたら、かならず弓をひくな、軍をかへして攻口をゆるめよと、指圖せられた。これは義仲、いまだ襁褓のうちにありし頃、故あつて、實盛に七ケ日やしなはれました事がござります。此恩をおもうて、勝ほこつた軍をかへして、實盛へ敵對せぬ志、ナント養れた恩は、重いものでござりませぬか。七ケ日はさておき、三日くはずにゐても、命がない。ましてや五年十年、あるひは半季一年、主人の養をうけて、その恩を思はず、うか〳〵と身勝手をはたらくは、勿體ない事じやござりませぬ歟。在所にゐた時の事をヨウ思ひ出して見たがよい。著物は黑もめんの紋附、裾は若松に鶴のもやう、ねんごろに彩色したのを、此上もない曠著じやと思ひ、棒のやうな鼻汁たれて、ゆりご雜炊で、腹をふくらし、馬屋ごえを負うてあるいた事を忘れて、こんな米はくはれぬの、鍋やきでなけりや、めしは喰ぬの、廣ざんとめは、仕きせのやうで見つともないのと、ヨウロがはれぬ事じや。これみなおれが〳〵の妄念のかたまりじや。ソコデさつぱり主人の恩を忘れ果て、こはいものじや、おれが此家にゐてやらずば、足のすりこ木になる程、使ひあるきしてやるも

で、草履草鞋をつくり、其隙には、織つむぎ縫針のわざをなして、只此兒の手足ののびるをたのしみに、年月をおくりまするうち、早くも橋彌十歳に成りました。しかもおとなしう生ひたち、常に乳母の側で、手仕事をたすけます。ようした物じや、誰教へねども、乳母とはいはずして、たゞ、かゝさまとよびまするは、ひとへに乳母の眞實、橋彌に徹する處が有つて、おのづから斯うなりまする。扨うばのおや里には、産みおとし置きました、實子、文五郎と申す小兒、これも十歳あまりに、成りましたるゆゑ、此兒をも川崎むらへ取りよせ、橋彌とともに一年あまり、手ならひをさせまして、其のち人をたのんで、松坂へ遣り、それより江戸へ、奉公につかはしました。これ全く、實の子を手もとで育てまると、おのづから主の子を、疎畧にする心がおこらう歟と、百里の外へ、うみの子を追ひやり、主の子を育てまするは、ありがたい志、まことによい手本でござりまする。十八年のあひだ、朝夕の食物も、わが身は黍稗のやうなものに、糠をまぜてたべ、橋彌には、常體の食をたべさせ、兒は母とよべども、わが身は主従の心得を失ひませぬは、丈夫も及ばぬ、志でござります。此誠がとゞきまして、橋彌十八歳のとき、元の屋敷地を買ひもどし、四間ばかりに七間の家を、あらたに建て、其うへ馬をもかひ、猶小者一人をめしつかひ、田地一町四反をつくり、夫のみならず、さきに家出いたされま

の道歌に、

よしあしのうつるかゞみの影法師よく〳〵見れば我すがたなり

とかくわが身をかへりみるが、學問の所詮でござりまする。身に立ちかへりさへすれば、忠孝はつとめよい。さてかの乳母は無事に村かたへかへり、たのしからぬ月日をおくりまするうち、果して乳母が推量のごとく、主も老母もちり〴〵に成りましたれば、いよ〳〵志立まして、橋彌を守りそだてまする。尤村かたへ、厄介をかけおきましたる、江戸屋の事なれば、その家名を起す事は、一應にては村方へ對し、出來ぬ事でござりますれば、かねて村方の賴母子へかけこみ置きましたる銀子、幸にくじにあたりましたる故、則金五兩と銀拾匁、冥加のため、村方へ詫代としてさし出し、家名相續の儀を願ました。村役人中を始め、その志をよろこび、ともどもに世話をいたしつかはしました。勿論家屋敷はうり拂ひましたれば、身をおく所はござりませねども、主人はいまだ、他國へかげをかくさぬ以前、屋敷の隅に、形ばかりの小屋をこしらへおきましたれば、これに引きうつり、人の田地四反をあづかりまして、兒を守りながら、田をすき草をとり、こえを荷ひ蟲をはらひ、人の手をからずしての、艱難辛苦、いふ樣もござりませぬ。夜は夜なべに時のうつるのも知らず、朝はくらきより起きて、しのゝめしらむ頃ま

親父さまじや。」「めつさうな、それはこちのうりものじや。」「ナニうりもの歟、賣物ならば買ひませう」と、代物を拂ひ、かの鏡を、宿屋へ持ちかへり、さて物いうて見ても返事せぬ。これは娑婆と冥途の隔があれば、お聲がきこえぬさうな。何にもせよ、死にわかれて三年目に、御目にかゝるといふは、有りがたい事じやと、わが影とも知らず悦んで國もとへ持て歸り、ひそかに二階の長持へかくして置き、出はいりに二階へあがる。あるとき女房が、用事あつて二階の長持のふたを明けて見れば、ひかるものがある。とり出して見れば、二十五六な女がゐる。是も又びつくりし、二階から飛んで下り、亭主の胸ぐらをつかまへて、なくやらわめくやら、悋氣喧嘩がはじまつた。ソコデ隣の妙琳が聞つけて、あいさつすると、いよ／＼けんくわに花が咲く。妙琳も詮かたなく、「ソンナラわしが二階へ往て、男か女か見屆けてきませう」と、二階へかけ上つて、鏡を一目見、こいつも又びつくりして、二かいから大聲をあげて、「あまりおまへがたが、悋氣喧嘩をさつしやるに依つて、氣毒や、二かいの女中が、尼に成られました」といはれた。この話は、狂言にもしてみせる。ナント面白い趣向じやないか。トックリとかみしめて御らうじませ。嫁姑の角づきあひ、親類の中たがひ、兄弟いさかひ、女夫げんくわ、村かた町内の不附合、親子主従のあひだも、うろたへると、此はなしの仲間うちが多い。ある人

念々こゝに在つて、忘れざるを志といふと、おほせられた。いづれよしあしにつけて、人は志の起らぬと、いふ事はない。同じ志を起すならば、このお乳母どののやうに、忠孝に志をたてますると、わが心にはづかしい事はない。畢竟あれは出來ぬ、これは出來ぬといふは、志がたらぬのじや。孟子のいはく、志は氣の帥なりと、こはいものじや、こゝろざしが砕けると、氣はつれて腐つてしまふ。人は氣によつて動く、その氣がくさると、箸一本持ものうく、返事するのもいやになり、かりそめにも頰ふくらし、間がな透がな、居睡てばかりゐる樣な、こし拔になるのは、みな志がくだけたのじや。御用心なさりませ。志がたてば、氣は引きたち、女の身でも、百里のみちを、跣まゐりが出來まする。ましていはんや、疊のうへで、親兄に事へ、主人につかへ、家業出精が出來ぬといふは、六尺の犢鼻褌の手まへも、面目ない。しかしこれは男の事ばかりじやござりませぬ。夫につかへ姑につかへ、家内のとりしまりの出來ぬ女中は、鏡に顔はあはされぬ筈じや。チトお考へなされませ。是についてをかしい話がある。むかし鏡をしらぬ國の人、都へ上り、フト鏡屋の見世さきを見れば、何やらひかる物がある。ふしぎさうに差しのぞいて、俄に大聲をあげ、「ヤレ親父さま、おなつかしい」と、かの鏡をとらうとする。亭主きもを潰し、「これはどうさつしやるのじや。」「イヤどうもしませぬ。是は此方の

願だてをいたされました。そのわけは、在中にて若い女子のひとり住居をする事なれば、心よわくてはならず、又人にうたがはれぬため、先第一に鐵漿をふくまず、第二に髪に油をつかはず、第三に元結尺長にて髪をたばねる事をせまじと、かたく心に誓ひて、つひに國元へ無事に歸られました。ナントあり難い忠義ではござりませぬ歟。此人出生は、同國桑名領、員辨郡、五反田村の百姓、長七といふ人の娘じや。年は三十、みめかたちも見ぐるしからず、又盛過ぎた年といふでもなし、忠義の爲に身をかまはず、主の家を引起さうとの志、ヨウ考へて御らうじませ、まねのなりさうな事ではない。古人の語に、志ある者は成るというて、いか程の大事でも、志さへ立ちまするど、成就せぬといふ事はござりませぬ。譬ば川の中につく〳〵立つて、雇はれた太公望のやうに、魚を釣りてござる人がある。アレガ中々主命や親のいひ附けで出來さうなことではない。腰きり水につかつて、冷の入ることも、疝氣の發ることも、罪も報もわすれ果て、日がな一日竿を持つて、立通しに立ち、何程魚の取ること歟と思へば、一二寸の雜魚十ばかり、これが假令や名聞で出來るものではない。たゞ魚を釣りたいといふ志ばかりで、此所作が出來たものじや。是が此日、俄に思ひついた志ではない、平生しごとするにも、商するにも、たゞ魚つる事ばかりおもうてゐる。此ねてもさめても忘ぬのが、志じや。古人も、

には、必死と困窮になりましたゆゑ、家内の諸道具は、申すに及ばず、田畑までうりはらひましても、猶借金もすまず、女房は困窮を苦にやみまして、中年の六月病死いたしました。跡はさん〴〵になりゆき、村かたへも申譯なく、主も養母も、つひに他國へかげをかくしました。殘りしものは、乳母と橋彌とばかりでござります。此乳母名をおとせと申して、心ざまのかひがひしい人でござりましたが、この江戸屋へ奉公に出まして、三年ばかりは、給金も貰ひましたれど、そののちは不如意につき、給金も出ませず、乳母の親ざとよりは、いとまをとり歸れと、申しますれども、さらに歸らず。その故は、此家次第に困窮に成り、ことに主といひ、養母といひ、心得かたも宜しからねば、いづれ遠からず、家名斷絶と見極ましたゆゑ、一しほ橋彌を、不便にぞんじまして、親里へ歸りがたく、つひに自分の衣類を、ことごとく賣りはらひ、金子にいたして、おや里へ遣はし、自分は生涯身をかため、やしなひ子をもりたて、江戸屋の家を、ふたゝび引起さんとの志をたて、親里より送り一札をもらひ、則これより川崎村の人別に入れました。かばかりの大願なれば、所詮人のちからのおよばぬ處、かゝる折にこそ、神ほとけの力をからんと、うみ山かけて、百里の道をたゞ一人、讃州象頭山金ぴら大權現へ、はだしまゐりをいたされました。さて神前にて、主の家をとりたてるこゝろざしをつけ、三つの

が、肝要でござりませう。畢竟榮耀榮花があまつて、天地神明のおにくしみを蒙るより、困窮にもおち入りますれば、とかく身贔屓身がつ手をすてて、家業大切に勤ますると、いづれ分限相應の、さかえにあはぬといふ事はござりませぬ。たとへば、草木の花さき實るは、人の榮と同じ事じや。同じやうに、花さきみのる草木にも、大小のござりまするは、人に貧富窮達の分かあると、同じ事でござります。さりながら、庭におふる千草までも、花のさかぬといふ事は、ござりませぬ。花のさかぬは、此方の身贔屓身勝手が、やまぬのじや。身を捨てこそうかむせもあれと、よんだ歌は、面白い事ではござりませぬ歟。是について有りがたいはなしがある、ようおきゝなされて下さりませ。勢州龜山領、鈴鹿郡、川崎村といふ所に、江戸屋何がしと申しまして、相應の百姓がござりました。主は養子にて、妻は家つきの娘、其母と三人にて、此外は召つかひの人、しかるに女房、一人の男子をうみまして、名を橋彌と申します。此子三つのとし、次の女子出生に附き、橋彌に乳母をとりて、養育を致させました。これ則、今より十八年まへ、寅年の事でござります。さてかの出生の女子は、其後近村へ、つかはしましたが、また引きつゞいて、女子出生、これも他へやりました所、先かたにて、病死いたしました。されば打ちつゞき、出生も多く、猶また主の心得かたも能からず、次第に借金も出來、午どしの頃

の皮、藁などは、不自由なる地もござりませう。土を食する事は、いかなる飢饉にも、盡くる期なく、實に未曾有の良法でござります。どなたもヨウお覺えなされませ。救荒一助の文に、

土粥之製法　或官醫の家法なり。

一土はいづかたの土にても、砂石のすくなく、土めよきを選び、土壹升に水四升入れ、桶の中にてよくかきまぜ、上水を去る事數へん、また水四升入れ、よく〱かきまぜ、別の桶に入れ、底にのこる、砂石をさり、又水四升入れ、前のごとくかきまぜ、水にひたしおく事、三日のあひだ、一日に三べんづつかきまぜ、すまし、上水をかへるなり。葛の粉わらびの粉を、水飛する法のごとし。右のごとく製法せし土へ、水貳升入れ、煮てうすき粥のごとくして食ふ。其うちへ、菜大根など切りこみ、おなじく煮て食ふもよし。一日に三合より五合までくらふべし。誠に此法をもちひば、五穀を食せざれども飢えず、身體つよく、すこやかなりとぞ。

右の通り、製法の仕やうを、御しるしあそばされました。ありがたい思召ゆゑ、お取次をいたします。しかしこれが、滅多に、間に合うてはならねども、耕すや、餒その中にありと申せば、ゆだんがならぬ。しかし米をつんで、飢饉をまたうより、人の道を勤めて、飢饉をまぬかるゝ

續鳩翁道話　壹之下

山川の末にながるゝとちがらもみをすてゝこそうかむ瀨もあれ

すべて山家にては、米麥に乏しく、あらぬものを食する中に、栃の實を餅團子にして、食する所多し。その製法は、栃の殼をとりて、實ばかり袋にいれて、谷川にひたしおき、よく苦みをさりて、餅團子にするなり。今歌のこゝろは、とちの實、谷川におつればしづむ、實をとりて、殼ばかりすつれば、浮んで流れます。人もおれがといふ身贔屓身勝手を捨つれば、うかみあがるといふにかけて、よみしうたときこえまする。甚面白い事じや。これについて序に御披露申しまする。去ぬる天保癸巳の年米穀のあたひ貴く、遠國には、飢渇におよぶ人も、多くあるよし聞えました。さる御歷々樣、不便の事に思しめされ、救荒一助と題して、松の皮、藁、土を食するの法を、御ためしあそばされ、板にゑりて、ひろく諸人にほどこさせたまふ。御仁惠のありがたき事、申すもおそれあり。しかれども、百年ののち、自然その製法を、うしなひまする事も、あらう歟とぞんじまして、恐れをもかへりみず、今その一法を、御披露申しまする。松

しやべりがやまぬと、相續が出來ぬといふは、敷居鴨居をけづりて、障子をそのまゝ、たて合さうとする、無分別じや。ソンナ大工どのは、天がしたに、一人もない。はまらぬときには、何分障子の養子息子が、おれが〱の無分別を、けづり〱て家づきの兩親の、敷居鴨居に合さねば、工合よう、はまるものではないと、はじめて此息子どのが、氣がついたと見える。サアこゝが入用のところじや。全く養子ばかりの事ではない、嫁御でも、聟さまでも、奉公人衆でも、此咄の義理を、よくのみこみ、親にむかひ、主人にむかひ、夫に向はゞ、かならず當然の、道理を得て、今までのつらい悲しい、いま〱しいが、立ちどころにとけ去つて、大安樂を得ること、疑ひはござりませぬ。則これが、明德の明に成りました驗でござります。休息。

すは親ざとへ往て、相談せう歟と、煙草盆引きよせ、きせるあひてに、しあんの最中、折節て
て親が、あたらしい障子をもとめて、大工どのを頼み、たて合せをして貰はるゝ。ナニガ大工
どのが、こて〳〵とたて合せをしらるゝを見れば、障子の上をけづりては、鴨居にはめて見、下
を削りては敷居へはめて見、遂に障子の上下をけづり〳〵て、その上障子に弓をはりて、柱の
ゆがみにあはせ、コットリと敷居鴨居にはめ、引いて見れば自由になる。かの息子どのは、こ
の仕事を見るとも見ぬとも思はず、たゞうつかりと、ながめてゐられたが、おもはず持つたる
煙管を取りおとし、横手を丁どうつて、大に驚かれたが、これから分別がかはつて、辛抱が仕
ようなり、トウ〳〵この家を相續仕おふせて、懇に兩親を介抱し、末期を見とゞけ、家名相續
をしられたと申す事でござります。これがありがたい目のつけ所じや。其ゆゑは、敷居鴨居はは
じめより家についてある道具、障子は外からあらたにはいつてくる道具、工合ようはまらぬは
始より知れてある。されども障子がはまらぬというて、家づきの鴨居をけづり、敷居を削りて、
障子を其まゝにはめる、大工どのはない。はまらぬときには、あたらしう入りこむ障子の、上
下をけづりて、敷居鴨居に、あはせてはめる。人の家を相續するのも、また是と同じ事じや。二
親は家づきの敷居鴨居、養子は外からいりこむ障子じや。てゝ親の偏くつをやめるか、母親の

あるものじや。六十七十になるものの、分別の通に、つゞや二十のものが、せぬというて、小言ばかりいうて、日を送らば、一生養子はそだたぬ。めい〳〵若いときを顧て、おもひやりがないと、人の子はやしなはれぬものじや。一生金の番を仕つめて、末期の水一ぱい、汲んでくれるものもないやうな、身の上に成り行くは、菰かぶりではなうて、蒲團かぶりの、乞食するやうなものじやと、町内でのうはさ。されども蓼くふ蟲もすき〴〵とやらで、ある所の息子どのが、此噂を聞いて、どうぞ其家に養子にゆきたいと、おもひ附かれた。たとへのふしに、小ぬか三合もつたら養子にゆくなと、世間ではいへど、人の家をつぐといふは、格別の大功じや。そのゆゑは、絶えたるをつぎ、廢れたるをおこすは、聖人のをしへにして、則天地生々の道理じや。この息子どのも、こゝに目がついた歟、但は辛抱の仕にくい家と聞いて、おのれやれ、一辛抱して、名を隣町にしられうとおもうた歟、何にもせよ有りがたい志じや。さて縁をもとめて、申しいれたところが、早速に事とゝのひ、引移つて、五七日たつてみれば、なるほど、今まで辛抱の仕人がない筈じや、中々むづかしい、兩親の氣質、どう歟かう歟と、おもひわづらふうちに、二三ヶ月もたちましたが、どうも勘忍が成りにくい、所詮爺おやが、偏屈をやめる歟、婆さまがしやべりやむかせぬと、モウ一日も辛抱がならぬ、けふは仲人の所へ往かう歟、あ

とふり返つてみれば、娘は兩肩をスッポリとぬいでゐられた。ナント面白い話ではございませぬ歟。この娘の、左右の肩を、一同にぬいだ心は、晝は金もちの所へゆき、夜はよい聟の方へゆく積と見える。さても、油斷のならぬ娘御でございます。このやうな覺悟をきはめて、嫁入したら、中々辛抱は出來るものではない。しかし此やうなむすめ御は、日本にはありはせぬ、これはみな天竺の事じや、さるに依て五百羅漢も、皆肩をぬいでござると、或物しりがいはれた。どなたもヨウおきゝなされませ。古歌に、

はるの夜のやみはあやなし梅のはないろこそ見えね香やはかくるゝ

こはいものじや、隱してもかくされぬ、心のくもりが時としては見えまする。かるがゆゑに諟天の明命を顧ると申して、氣をつけて掃除をせねばならぬ。さてこの掃除を、よく仕おふせたる人がある、序におはなし申しませう。上京邊に、吳服悉皆を、渡世にしてゐる、老人夫婦がございました。しかるに家をつぐ男女の子もなく、その身は次第に年はよる、親類緣者より、あれこれ養子をもらうて見ても、どうした事歟とかくそだたず、或は三十日、あるひは五十日、または七十日、長いのが百日ぐらゐ、凡そ養子二十人ばかり、一人として辛抱をする者はない。ナント難義なものじやない歟。うろたへると此樣な偏屈おやじや、鐵槌婆さまが、得て異國には

する人のはなしに、瓜をつくるに、風ふく年は、小蔓が多くはるとの事、また唐黍をつくるに、風あるとしは、自然と土際より上にて多くの根がはるよし、これ皆風にあうて倒れぬ用心、鶩波といはゞ、大地をつかんで辛抱する身がまへというても大事ない。しかるに人は萬物の靈として、僅の辛抱が出來かねて、身のたふれるをも厭はぬといふは、さりとては面目次第もないことじや。此辛抱でおもひ出した、をかしい話がある。さる所に十六七の娘をもたれたが、脊たけものびたれば親たちも心がせく、又時分の娘なれば、諸方から貰ひにくる。或時母御が、むすめをよんでいはるゝには、「方々から貰ひにくれども、是ぞと思ふ緣もなかつたに、此ごろ二軒からいうて來た。これは隨分相談しても、よからうとおもふ。一軒は金もちなれど、チト聟どのが見ぐるしいげな。又一軒は、聟どのは品もよく、よい人がらなれども、身代はうすいといふ事じや。去ながら二軒とも、聟どのの氣象は、實體なといふ事、何よりは是は有がたい。このうへはどちらへなりとも、そなたの氣に入つた方へ、よめ入さそう。コレ返事を仕やれ。ハア恥かしいの歟。それならばよい事がある。金持の方へゆきたくば、右の肩をぬぎや。よい聟どのの方へ行きたくば、左りの肩をぬいで見せや。其あひだ、おれはこちら向てゐる」と、母御がうしろ向かれたれば、娘はこゝろ得、肩を脫だやうす、母おやが「モウよい歟、ドレ〳〵」

かくごをきはめてよめ入する娘御は、ナント覺つかないものじやない歟。是みな明德がくらいによつてじや。あちらへは嫁入し、こちらへは嫁入し、あれにせう歟、これにせう歟と、舅姑をえりきらひし、又亭主をより取に仕あるき、離緣狀をもらふことは、書出を貰ふ樣におぼえ、杖つくまで嫁入口をたづねて、一生を終るは、はづかしい事じやござりませぬ歟。おのれさへ勘忍すれば、どのやうな家にも尻がすわる。ある人の歌に、

雨にふし風になびけるなよ竹はよゝに久しきためしならずや

これ勘忍のすがたをよみし歌ときこえまする。成ほどヨウ考て見ますれば、わづかに五寸まはり、尺廻りの竹の、五間七間とたち延びて、しかも末では枝葉はびこり、其上に雪をもち、あるひは雨にうたれ、または風にふかれて、倒れぬといふは、いかさま天理自然の妙用、草木情なしといへども、たふれぬ用心はきつとしてある。先年洛中大地震のとき、多くは竹藪へにげこんだ。これは竹の根がらみがつよいによつて、大地もめつたに、われはせまじとの用意、尤な事じや。この根がらみの強いのは、竹のたふれぬ謂でござります。是じやによつて、人も專ら本に力をいれねばならぬ。本とはなんぞ、本心の事じや。專ら力を入れるとは、時々刻々に本心を失うてゐはせぬ歟と、かへりみるのじや。萬行一心、これより大きな本はない。農業を

いとは、ぞんじ申さず、いさんで參じまゐらせ候まゝ、私の事は、なにごとも御あんじ下されぬやう、御大事に御いとひ下され候やう、いのり上げまゐらせ候。かやうに申上候へば、少しは御心もじやすく思しめしも下され候はんやと、御うれしくぞんじ上げまゐらせ候。かやうなことを申し、さぞ〳〵御わらひ草と、御はづかしく存じ候へども、何とぞ御案じ下されぬやうに、いたしたくと思ひつめ候あまりと、何事も御ゆるし下されたく候。猶行するながく、御禮申上たく、あら〳〵申しのこしまゐらせ候。めでたくかしこ。

菊月　けふ

御父母さま御もとへ

かへす〴〵御兄樣御あねさま方も、いつ〳〵までも、御かはらせなう、御せわさまに相成申たくと、くれ〴〵御ねがひ申上げまゐらせ候。めでたくかしこ

とあり。ゆく末は知らねども、まづ此文のやうにては、よく女の道を思定めたる體なり。いかさま此覺悟ならば、舅姑にもよくつかへ、生涯夫の家をまもりて、どのやうな辛抱も、なりさうに見えまする。わるうすると、親の慈悲があまつて、マアこしらへをして嫁入をさすはさす物の、先方の樣子を見て、辛抱が仕にくいなら、何どきでも戻つておじやと、あまい口上に、

前にさだまるときは跆かず、事まへに定まる時は困まずと見えて、兎角はじめの覺悟にある事じや。譬へば人の身に火をのせておくといふは、ならぬ事なれど、灸治といへば、小兒も辛抱する。これ畢竟、はじめの覺悟でござります。わが友何がしのむすめ、年十七歳、天性おとなしき、生ひたちなりしが、ことしの秋さるかたへ貰はれ、婚姻もとゝのひ、里歸もすみて、夫の家にかへりし跡にて、爺おやの、何心なく、わが常に持なれし、煙草いれの中を見れば、小さき紙にこま〴〵と書きたるものあり。ふしぎに思ひ、取上て見れば、娘が手跡にて、夫の家に、かへる折から、書きおきたる文なりけり。その文に、

御禮申上たさ、思しめしもかへりみず、つたなき事を申上まゐらせ候。まことにながく〳〵の御養いくの御恩は、舟車にもつみがたく、其上いろ〳〵と、御しんぱいをかけ候御事、冥加のほどおもひやられまゐらせ候。さりながら、これはかへらぬ御事に候へば、たゞ此うへはあなたさま方より、御あづかり申候此身にて候へば、何とぞ親の御身に、疵つけてはならぬと、大せつにいたしたくぞんじまゐらせ候。まことにいつ〳〵までも、御側に居たさは、限なき御事に候へども、女子の道にて候へば、教をまもりたくぞんじまゐらせ候。もとよりわたくしは、うまれ子になりて、わがうちへ歸り候御事ゆゑ、少しもゆきとむな

ことわり、何どき如來樣の、おむかひがあらうやら、知れぬが人の身のうへ。アレあの駕籠を見さつしやれ。どうでも京へ奉公に往た人が、死んだと見えて、死骸を在所へつれていぬると見える。扨もはかないものじやござらぬ歟」と、いふ聲をかごに乘りたる和尙がきゝつけ、さては我を死人と心得た歟、いまくしいと、わざとかごの中で、咳ばらひすると、かの老人は此せき拂におどろき、急にかたはらへ飛びのき小聲に成りて、「死人じやと思うたら、どうでも科人じやさうな。めつたに側へ寄るまいぞ」といふ。和尙いよく腹をたて、今はたまりかねて、かごの中でじだんだふみ、大聲あげて、「科人ではをりない」といふ。其聲に又びつくりして、「さては科人ではなうて、どうでも氣違じやさうな」といはれた。是が面白いはなしじや。何分駕籠を外から繩がらみにしたものゆゑ、誰にみせても死人じや。然るに中から物いへば科人といふもことわり、又氣ちがひじやさうなといふのも、外からこじつけていふのではない。皆此方に其すがた、その模樣があるによつてじや。これでヨウ御合點をなされませ。よいものをわるいとは、人はいはぬ。何事もかへりみるのが肝心じや。ある人の道歌に、

世の中は何もいはずにいよすだれ其よしあしは人に見えすく

およそ物ははじめに覺悟すれば、なりにくい辛抱も、なるものじや。かるがゆゑに、中庸に、言

これでをもひ出した話がござります。或山家より、京の町へ談義僧を招待に參りました。折ふし其日は雨ふりで、みちもあしく、駕籠をもつてむかひに來た。和尚もやがて用意して、かごにうちのり、京をはなれて、三四里ばかりと思ふ所で、どうした事か、かごの底がぬけました。いたはしや、和尚は、袈裟も衣も、どろまぶれになられた。迎の人足も、氣のどくがり、そこらかけまはつて、繩ぎれ多くひろひきたりて、やう〳〵と駕籠をからげ、扨和尚にふたゝび御乘りなされといふ。和尚も氣味わるけれど、雨はつよし袈裟衣はよごれる、晝中にあるくも外聞惡く、ふしよう〳〵に駕籠にのるとき、「コレかごの衆、モウ底はぬけはすまい歟。」「イエ〳〵氣づかひはござりませぬ」といふゆゑ、乘移ると舁上るとの拍子で、又底がメキ〳〵いふ。和尚大きに肝を潰し、「これでは中々安心がならぬ。御苦勞ながら合羽の上からいま一度、丈夫に繩がらみにして下され」といはるゝ。人足も尤におもひ、また繩ぎれを拾ひあつめ、合羽の上を竪横十文字にからげ、「是ではあやまちはござるまい」と、道をいそいで、ある村を通りかかつた。折ふし此村に、法談があつたと見え、參詣の老若、道場の歸りあしに、此駕籠を見附けて、かたぎぬをかけたる親仁が、かたはらの、うばかゝにいふには、「ナントみなの衆、今日の御勸化はありがたい事ではござらぬか。いかさま無常迅速の世の中、生者必滅、會者定離の

わめきましたと申す事じや。ナント身贔屓身勝手はすさまじいものじやない歟。己が二かいからおちたことは、棚へ上げて、馬が二階へ上つたとは、ようろたへたものでござります。さりながら、加樣な事は得てある事じや。おのれが本心のくもりは、ゆめにも知らず、たゞ人がわるい、これがすまぬと、わが身を顧ず滅多に大聲をあげてわめく人は、この小用たれの仲間うちじや。ある人の道歌に、

あざみぐさその身のはりをしらずして花とおもひしけふの今まで

お互に立反つて、腹のうちを吟味せぬと、おれがよい、おれがかしこいで、一生を、うろたへ仕まひに、しまひまする。故に、明德を明らかにするにありと申して、兎角本心をくらまさぬ用心をせねば、私心私欲、身びいき、身勝手がこげついて、此世から火宅のくるしみ、聟をいぢり、嫁をにくみ、又夫をうらみ姑をそしるやうな、大まちがひが出來て、後にはあひてになる人もないやうに成りゆく。たとへば糞くむ杓の柄の拔けたやうなもので、さはればよごれる、其まゝおけばわるくさし、なんとも仕かたのないすたれものに成りまする。よう考て御らうじませ。長い物は長う見える、短いものは短う見える。おたがひに長短を見違へはいたしませぬ。夫ゆゑ人の我をあしくいふのは、必見ちがへのない事じやと心得て、我身を顧るのが近道じや。

ぎ置いて、肥をふます事でござります。時にかの小用たれを、簀子の上にねさせると、夜中に度々取はづす。ソコデすのこの間から、小用は瀧のやうにながれましても、すこしもかまひにはなりませぬ。馬の小便と人の小便と、合せて丁度よい肥になる。氣の毒なものは馬じや。夜中によう寐いつたところへ、折々の大夕だち、畢竟小言をいはねばこそ、よかつたものじや。然るにかの竹簀子は、いつの時代にこしらへたやら、竹は悉くむしが入つてある。その所へ、夜毎に小用でくさらしたものゆゑ、次第に腐がまはつて、ある夜かの簀子がぬけました。ナニが小者は、晝のかせぎにくたびれて、二階から落ちるも知らず。迷惑なは二疋の馬じや。何心なく雙でねてゐる眞中へ、おもひがけなう人がおちたゆゑ、馬はおどろき右左へたちのくと、小者は何も知らず、只グウ〳〵とねてゐる。これ全く馬部屋の中には、藁を多く敷きたる上、馬の小便にてよい程にしめりがあれば、ふとんの上へおちたも同前、さるによつて目がさめぬ。さて奇特なものは馬じや。腹もたてず、又ふみもせず、うしろ足で、馬部屋の板をどん〳〵と蹴て、家内の人をおこし、よう寐てゐる小者の、顏のあたりを鼻あらしふいて、フウ〳〵いうてかの小者を起しまする。ソコデ小者がふと目をさました。燈火はなし、眞くらがり、しきりに馬がわが顏をふくゆゑ、肝をつぶして大聲をあげ、「モシ旦那さま、馬が二階へ上りました」と、

せぬか、無理はいはぬ歟、身欲の爲に昏みはせぬ歟と、吟味するを顧ると申します。古歌に、
雨ならば宿もかるべき夕ぐれに霧にぞいたく袖ぬらしける
此うたの意は、はじめより雨と知らば宿をかりて、ぬれぬ用心をするなれど、夕ぎりなれば目にもたゝず、これほどの事はと、ゆるす心にゆだんして、衣類をひたとぬらしたと、後悔のうたときこえまする。何さま誰しも、わるいと覺えて、わるい事を仕出す人はなけれども、明德のくらいゆゑ、いつしか身贔屓身がつ手にながれて、果は申し譯もたゝぬ大事になる。只恐ろしいものは、身びいき身勝手。ひととせ越前の國へくだりました節、ある人の物がたりに、ちかきわたりに、平泉寺村といふ處あり。其村に、相應にくらす百姓があつて、多くの召つかひの中に、十五六になる小者、尾籠な事じやがひえ症にて、毎夜小用を取りはづし、夜具も疊もぬれくさるゆゑ、主人大きにこまり、いろ〳〵療治しても驗なく、せんかた盡きたるところで、一つの勘辨を仕出した。其趣向は、家のうちに馬部屋ありて、馬を二疋畜ひましたが、その馬部屋の二階は、丸竹をあみて、簀子にしてござります。彼小者をこの簀子のうへにねさせました。是がこれ一擧兩德の計と申して、その故は、すべて越前にて、農家に畜置く馬は、雜役というてみな牝馬じや。秋になると稻をつけたり、こやしを著けたり、其餘はたゞ馬部屋に繋

續鳩翁道話

壹之上

男　武　修　聞　書

太甲に曰く、諟天の明命を顧るとは、則大學の傳にして、書經太甲の篇を引いて、明德を明らかにするの仕樣を、お示しなされたものでございます。まづ諟天の明命といふは、お互に持合せた本心の事じや。この本心は手まへ勝手に拵へたものではなく、則天より禀得ましたもので、仁義禮智信の德を具へ、親に向へば孝、主人に向へば忠、兄弟中よう、夫婦は睦まじう、朋友には眞實の交り、何ひとつ不自由な事なく、物に應じて自在なる故、明德とも申します。則本心の尊號でございます。譬へば人に仁義あるは、天に日月のある樣なものじや。もし天に御日樣やお月樣がなかつたら、世界はくらやみ、人も是と同じ事で、仁義の良心を失うたらば、親子夫婦の辨へもなく、主從の差別も知れず、家內一統やみくもぐらし。ナントつまらぬものではございませぬ歟。かるが故に、明命を顧ると申して、常に本心に目をつけて、無理は

つぎて此巻をも物せられんとて、是がはしに一くだりといはるれば、やがて此はやくよりの事どもを、くだ〳〵しきまで、かくはものしつるになんありける。

天保六年九月京の二條の堀川の家にて

三河國吉田　中山美石識

守の殿の御前にても、彼道話を聞えあげらるゝさまなどの事は、はやくより聞居て、一度だに對面してしがなと、思ひわたりぬるを、己おもひもかけず、我君に從て、四年ばかりが程、大阪に在て、去年より此京にうつろひ住むに、さきに大阪にて、此翁の、道話の席ものせられし事を、一二度聞つけたれば、いかでとは思ひつれど、とあればかゝりといふやうにて、得ものせず。此所にうつろひても、事しげくなど、心にもあらで、いたづらに月日を過しゝに、幸にも近きころ、此翁さるゆゑありて、我君の御前に、うちうちにめされて、かの道話をしばしば聞えあげられけるは、いともめでたきわざになんありける。かゝれば己も、本意の如く對面して、何くれの物語も聞えかはしなどする事とはなりて、うれしうこそ覺ゆれ。かくて此ころ、彼常にものせられ、我君の御前にても、聞えあげられたる說ごとどもを、家つげる子、武修主の、露ばかりももらさず書記して、はやく世にあまねかる、此流の書籍の例にまかせて、鳩翁道話と名づけて、三卷板にゑられ、さて

心をしる事をさきとし、心をしり得て、もの學びよろづに心を用ふれば、眞の道にはかなふものぞといふ事を、むねといへるにて、實にさる事になん。さてかの人々、おのれにたふとき物ありとのたまへりし、たふとき物といふは、やがて此心の事にて、くすしとも靈しく、明らかなりとも明らかにて、行きいたらぬくまもなく、くらぶべき物もなきものなりといふをもとにて、いとも〳〵こまやかに、ねんごろにもねんごろに、ものすれば、この道によく入たてば、世の人に名をだにしられず、さもありげもなきものの中にも、思ひの外にかの泥の中の蓮、砂の中の白玉などいはんさまの人も出來めるは、めでたしともめでたく、まことに世に益ある事、たぐひあらじと思ふに合せて、己がいひがひなき心にも、いたく益を得たりと覺ゆる事なきに、はたあらずかし。こゝに柴田翁の、此道にさとり深く、近き世にならぶべき人もなく、ものせらるれば、いたく遠からぬ、國々よりは、乞ひ聞ゆるまゝに、年毎にこゝかしこ行き廻りてものせられ、其中には、其

いかにぞや。から國の聖人の道は、其もとは、心をしり心を正しくする外には出ざるを、其道に名高く、世にあふがるゝさまなるものも、よくせざれば、心をむねとする道なる事は、論はんものとも思はず。或は口にはしかいひながら、おのが心をも、身をもをさむる筋の事をば、露ばかりも物せざる樣に見ゆるもあなるは、いかなる事にかと、いともいぶかしくなん。これらを以て思へば、かの外にある物をもとむるは、難きに似て易く、已にある物をもとむるは、やすきやうにて難きわざにやあるらん。さるを近昔の世より、心學といふをたてて、ものする流ありて、其ときざまうち聞くには、はかなき戲言にひとしく、誰も知りたらん事の樣に聞ゆれども、實にはみなもと深く、かしこき書籍の道を、俗言にやはらげて、ものするにしあれば、いたく世の人に益ありて、いともおむかしく、めでたきわざになんありける。おのれもはやくより、此道の書籍をもよみ、此筋の人々にも、これかれしたしくものして、かの道話といふをも、しば〳〵きゝたるに、已が

序

貴きを欲するは、人の同じき心なり。人々己にたふとき物あるをとのたまへりしは、かけんもさらなる事にしあれど、いとも〳〵たふとくうれしき敎になんありける。今又思ふに、物知らまく欲し、人にまさらん事を思ふも、むげにいひがひなき癡人をおきては、大かたの人のおなじき情なるべし。實に世に益ありてしらでは得あるまじき筋の、古へ今の萬の事に深く心を入れてものせんは、いともめでたくおむかしきわざなりかし。そが中には、天つ空のありさま、地のかぎりの事、しらぬ國々の海山のたゞずまひ、人の心ざま、時世のならはしなどをさへに、まさ目に見たらんが如く、さとり明らむる人もあめるよ。さはいと〳〵難きわざなるをや。さも難きわざをだに、底ひの極みあきらむらん人の、心のさとりといふものは、いとも〳〵くすしきものにはありけり。しかはあれど、いかなる事にか、己が心をば、しらまくほりせんとだに、思ひもかけぬ人の多かるは

鳩翁道話。刻以行于世。使苟識四十七字者。讀之直領其意。今又抄其吐屑之餘。爲三卷以續之。可謂勉矣。但吾邦之於漢土。言語不同而文字亦異。漢人之字一字兼數義。非如吾邦一字一意。而又有古今之分。有雅俗之別。若六經最爲甚。若不精密討究。則其於聖經之旨。或不能無差謬之失也。余亦有志乎濟世者也。竊慮其如是。欲於鄕閭設一學館。積經貯書。集會講求。以致其義。以揚推斯道。圖之三十年。于今落落不合。桑楡景迫。恐將終身齎志無成。視彼浮圖氏之造千仞寶堂。一麾而成。其難易如何也。儒道之不行於吾邦。如此也耶。可慨歎。吾願藉翁之妙舌。以爲金口之木鐸。不知翁能笑而諾乎否耳。是爲序。

天保乙未臘月。胸痛褥臥不能起。口授門生某。令筆錄以贈。事在其二十七日也。

源寵天錫父

續鳩翁道話序

柴田翁。中歳喪明。以耳爲眼。以人爲書。以耳讀人。而誦六經之語。通道義之旨。以說性命之理。使人知其心。以窒惡趨善。其有功于世也。不小少也。夫聖人之道。廣矣大矣。顏子者。亞聖也。猶有彌高彌堅。既竭我才。而末由從之歎。則爾來之賢人君子。豈有能詣其閫奧者乎。乃亦各見其所見。知其所知。遂自許我得聖人之蘊。自以爲是。而以彼爲非。互相排擊。而不知此亦猶彼也。謂之兄弟鬩牆。村夫爭席。何所據之狹而所懷之不寬乎。道之廣大也。譬之猶河乎。一滴水也。百滴水也。千滴萬滴。大溝小渠。同皆水也。同皆河也。而非河也。一滴浸潤。萬滴浸潤。大溝小渠以漑以灌。皆以育物。皆以濟人。以其非瘴雨毒露也。其於彼此。何紛紛爭辨分駁之爲焉。翁之說道也。得之於心。而發之於口。竪說橫說。控送在手。或雜以諧謔滑稽。令人聞而笑。笑而拊掌。噱噱然不覺入其道。終歸正而止焉。是以自國君卿大夫。至馬官厮養。婦女童豎。悅而慕之。敬而從之。皆稱云鳩翁鳩翁。何其盛哉。翁有子曰武修。其侍講之次。從旁以邦語記之。編爲三卷。名曰

爲有感也。

天保甲午秋七月

前川常營誌

跋

士之相須也難矣。非才之難其知己者則難矣。而士有一見輒爲終身之交者何哉。有所感也。予が翁におけるもまたしかなり。予、庸愚の質、人を知るの明あらざれども、久しく莫逆の知己として、義骨肉のごとく、自家一般平素爾汝の交をなすといへども、笑談の間、時として覺えず容を改たむるに至るは、翁の令德睿敏人をして、能感發せしむる處あればなるべし。頃年、諸州に遊歷して道を唱ふ。聽衆ややもすれば千二千に及び、益を得る人常に多し。嗣子武修、侍坐して聞く處を筆記せる、積て若干卷となりぬ。往日或人上梓せん事を乞ふと雖も、翁の許さゞること久し。此頃友人頻に武修に計り、卒に世に弘くす。武修爲人謹厚實踐、學んで倦まず、且其記之詳にして遺さゞる、以て其志を觀るに足れり。冀くば此篇年々增帙して、窮なからむ事を。予此擧あるを悅び、贅言を後へに書するものは、抑又

我なしに御なりなされませ。我なしというて、體が消えて仕廻ふのではない、おれがといふ心がなくなるのでござります。さりながら此我なしにはつい成りにくい事で、皆御幼少から出家をしたり、學文をなされたり、孳々として御つとめなされるは、此我なしに成りたいばかりでござります。幸に先師石田先生、手島先生相續で、此我なしになられる仕やうを御傳授下された。尤箇樣に申せば、何やら箱傳授のやうにもきこえ、又石田手島の兩先生が御作爲なされた道のやうに聞えますれど、全く左樣ではござりませぬ。ひとへに堯舜の道に泝て、少しも私の分別をまじへず、聖賢のをしへをやはらげ、人は無我が生れつきじやといふことをお示し下されたゆゑ、銘々どものやうな、文盲なものでも、いさゝか道のかたはらをわきまへ、その無我がうまれ附じやといふことを會得してみれば、おれが〳〵といふ事は、さすがに恥かしうて、あたまも出されませぬ。されば此我なしになる道に御すゝみ下されい。此我なしにならぬと、わが身を愛する〳〵と思うてゐて、おもひの外に身を害し家をほろぼします。さるによつて孟子も、豈愛ㇾ身不ㇾ若二桐梓一哉。弗ㇾ思甚と、御しかりなされたのでござります。猶明ばん御はなし申しませう。下座。

うなもの歟。世間への外聞、または聟の手まへ、敷居ばたもふまされは致しますまい。又一家親類じやとて、繼子ころさうとした女を、かくまふ事は出來ませぬ。親類親子義絶は知れた事じや。タッタ一つの了簡ちがひ、我身の贔屓勝手から、忽ちひろい世界も狹うなり、天に跼り地にぬき足して、五尺のからだのおき所がないやうに成りました。ある人の道歌に、

世の中を四尺五寸となしにけり五尺のからだ置所なく

ナントこれが身の贔屓したのでござりませう歟。身の勝手でござりませう歟。畢竟ひいきの引倒しといふものじや。皆これ身をほろぼすゆゑんのものを樂しむのじや。又娘は身のひいき身の勝手は、ちよつとも致しませぬ。その證據は〆殺されても、井戸へ打ちこまれても、すこしも繼母をうらみず、とかく繼母の難儀にならぬ樣と、としもゆかぬに夢じやといふ一言、取りつきやうのないことばじや。是が思案から出たのでもなく、また學問して勘辨のうへで、いうたのでもない。只親を大事とおもふばかりで、我身のことはすこしもかまはぬ。是がほんの我なしと申すものじや。此我なしといふものは、ありがたいもので、身の勝手をせぬゆゑ、かへつて身の勝手になりまする。願はずして家の相續が出來る、御上より世間にも、孝行なものじやと譽られ、する事なす事勝手のよいことばかりになる。眞實の身贔屓身勝手がなされたくば、

た。又娘はこれも御しかりにて、「平生うか〳〵といたしをるゆゑ、かやうの騷にもなる。已來きつと相心得よ」と、御しかりにてすみました。こゝを能う御きゝなされませ、御上の御仁政のありがたい事を。此むすめは世にたぐひまれなる孝子でござりますれば、急度御褒美を下されたいおぼしめしなれども、此娘が孝行ものになると、母親のつみが重うなる。それで御褒美に替へられ、むすめを御叱りなされたのじや。實にありがたい思めし。このとき御立會の御役人樣方が、むすめを御しかりのせつは、御らくるゐなされぬはなかつたと、さる御歷々さまの御はなしでござりました。ナントありがたいおそろしい咄ではござりませぬ歟。是でとくと御合點なさりませ。身贔屓身勝手といふものは、わが身のためによい事じやと、皆おもうてをりまする故、假初にも身贔屓身勝手をしてなりませぬ。しかるに此一件をみれば、身贔屓身勝手は、とんと益にたゝぬものでござります。なぜなれば、此繼母が娘を殺さうとするしわざは、皆わが身の勝手をおもひ、わが身の贔屓をして、實子にあとをつがせ、まゝ子を殺してかまど將軍に成つて、わがまゝをせうといふ身贔屓身勝手なれど、その通うまうはゆかぬ。却て此身勝手から、我うみの子にそふ事もならず、奪はうと思うた家にもすまはれぬやうになり、村拂に成つて忽ち天竺浪人、こんな不了簡な女が親里へ戻つたとて、親たちが能う戻つたといはれさ

母はつねに、私を可愛がつてくれまして、中々さやうなおそろしい事が、ありさうな事ではござりませぬ」といふ。ソコデ御役人様の仰には、「まゝ母がすでに白状におよんだれば、今さらかくしても詮なき事、有體に申せ」と、すかしたり叱たりなされて、さまぐ\と御たづねなさる。されども「一向ぞんじませぬ」と計り、「さだめて夫はあなた方が、こはい顔をなさるゝ故、おそれて母が左様に申しましたか、一切私においては覺えませぬ」といふ。いく度御尋なされても、たゞ夢じやとばかりいうてゐる。これはこれ正しく娘のいふ處いつはりに相違なけれども、子は父の爲にかくすといふ眞實の孝心、親をおもふまことより、いつはりていふ處なれば、御役人様がたも如何ともなされやうがない。たとへ水火の責をもつて御尋なされたりとも、又千萬石をもつて、その心を御ひきなされても、確乎として動かざる孝行の心は、實にありがたいものでござります。これを佛法では、金剛不壞の心と申します。思案や分別で、問はれてもいふまいなどと、こしらへたこゝろは、責苦におどろき、金銀にまなこくれて、必ず動くものでござります。親をおもふ誠はしあんでもなく、分別でもなく、天然自然とうまれついた、仁義禮智のこゝろ、こればかりはうごかすことは成りませぬ。さるによつてつひに御評定決著して、これほどの大騒が、手がるうすみました。まづ繼母は御叱りの上、居村ばらひに成りまし

籠さげて門へ出ましたが、道々の思案に、九ねんぼといふものは、在所ではきかぬ名じや、どのやうなものぞと、蓋を取つてのぞいて見れば、ついに見た事も無いうまさうな物、數をよんでみれば九つある、さてはこれで九ねんぼといふのじやなと、早合點して、忽ち一つたもとへかくし、殘りを持つて先方へゆき、つかひの口上をいうて、「此八ねんぼを御めにかけます」と申したれば、取次の女中がびつくりして、「何いうてじや、是は九ねんぼじや」といふ。丁稚もさてはあらはれたと、たもとから一つ取出し、「實は一ねんぼをかくしました」と、赤い顔をしられた。是がこれ、誰も吟味したのではござりませねど、あらはれる道理がある。これじやに仍てめつたに物はかくされませぬ。扨かの繼母がだん〳〵御ぎんみに逢ひまして、こと〴〵く白狀いたしました。全く我うみの子に家をつがせんといふ心から、先妻のむすめを〆殺さうといたしたるしまつ、井戸へうち込んだ事のこらず、訊狀にかゝつて、一々申しました。ソコデさつそく彼娘を御めしなされて、其始末を御尋になりました處が、娘は何も申しませず、「たゞその夜はこはい夢を見ましたと思うたばかり、井戸へはいつたのも、上つたのも、すべておぼえませぬ」といふ。御役人様がたが、「それではすまぬ。まさしく繼母がしめ殺さうといたし、又井戸へ投こんだではない歟」と、御たづねなさるゝ。「イヽヱ左やうの事は決してござりませぬ。

さうも知れぬ、こはい毒蛇でござります。さてかのむすめは、是ほどのくるしい目にあうても、さらに色目にも出しませぬ。繼母はもとより、是が知れては身の上の一大事じやによつて、おくびにも猶出さず、爺おやは何も知らず、親類はわけが分らず、どうしても知れまする樣がござりませぬが、こはいものじや、莫レ見二於隱一と、誰いふともなく、村中でうすうすと評判がある。あの娘の井戸へはまつたは、繼母のしわざじやと、爰ではいひかしこではいふ。是がつひに番人の耳に入り、次第に御役人樣の御聞に入つて、かの繼母がたちまち召とりに成りました。

壬生忠見の歌に、

　戀すてふ我名はまだきたちにけり人しれずこそ思ひそめしか

人しれずこそとは、己獨り知る所で、腹の中の事じや。いまだ色にも出さず、詞にもなほいはぬなれども、はや世間の人が、我名をいひたてるとよんだ戀歌でござります。なるほどこはいものじや。何んぼ人の知らぬ腹の中の事でも、かくれてあるものじやない。たとへば肝の臟に病があると、目がわるうなる。腎の臟に病があると、耳が遠くなる。腹の中のやまひが顏へハツキリと出まする。是じやによつてかくされぬ。これについて面白いはなしがござります。ある家に、田舍のぼりの丁稚がござりました。九年甫を親るゐへ持てゆけといひ附られて、有馬

人のこゝろは恥かしいものでござります。事のないときは善も惡もおしなべて、同じやうに見えますれど、事にあたると、其おのれ〳〵が平生のこゝろざし、所作の上にあらはれて、芥子ほどもかくされませぬ。此むすめも、此一件がなかつたら、只よのつねの在所娘。繼母の毒惡にかゝつた故、日頃の孝行のこゝろざしが、おのづから顯れまして、くるしい中にも、親の名を出しませぬは、みやま木の其梢とは見えざりしさくらは花にあらはれにけり、ナント健氣な志ではござりませぬか。また日頃の志が、よからぬ方へ志すものは、是また事のうへにあらはれる。釋迦の遺敎經にも、黑蝖というてござりまするは、毒蛇のことじや。則銘々の腹の中のたとへじや。此毒蛇が常には寐てゐれど、何んぞ事があると、あたまをあげて騷ぎ出します。犬が中ようあそんでゐるとき、肴のあたまを一つ投てやると、俄に牙をむいていがみ合ふ。この繼母も丁度これと同じ事で、むすめに聟をとるといふ一言に、黑蝖があたまをあげてこの騷ぎを引出しました。是がこれ、日頃氣質をかくしてをりまするけれども、事にあたつて毒蛇がはねまはるのでござります。是じやによつて、御互に平生腹の中をきれいに掃除して、若黑蝖が居をつたら、早う退治して御仕舞なさりませ。さうせぬと折々あたまを出しまする。遊所生洲芝居淨るり鼈甲のくし笄、緋がのこのわげくゝり、茶わん茶杓花見ゆさん、何であたまを出

ざりませぬ。因果歴然用心をせにや成りませぬ。さて親類中は、かの娘を中に取りまき、「どういふ譯で井戸の中へおち入つたのじや」と、口々にとへば、娘はため息をついて、「夕べはいつもの通り夜なべをして、其うち寐入ましたが、何かは知らずこはい夢を見まして、これはと思うて目がさめたれば、井戸の中へおちてをりました。それから助けて下されというた事は覺えてゐますが、又そのあとはどう成つたかおぼえませぬ」といへば、親類中が、「そのこはい夢はどの様な夢であつたぞ。其譯をいへ」といふ。娘はたゞこはい夢でござつたとばかり、繼母ともどうしたとも更にいはず、唯こはい夢じやとのみいうてをりまする。ソコデ親類中もわけがわからず、「大かた狐狸のしわざであらう、まづ怪我はなうて重疊じや」と家々にかへりまする。母親もむすめがわけをいはぬを幸と、ぬつぺりと押つよう、「どんな夢を見やつたのじや。さだめてこはかつたであらう」と、是もおもてむきの口上ばかり。其内に爺親も戻りまして、これも譯が知れねば、狐狸のわざにして、何事なう此一件がをさまりましたが、たゞ繼母は明ても暮ても底ぎみわるうおぼえまする。されども娘は敢て色にも出しませぬ。ナント孝心な娘ではござりませぬか。古歌に、

深山木のそのこずゑとは見えざりしさくらは花にあらはれにけり

におもうて、こゝろをしるべに窺ひますれば、井戸の底じや。さては井戸はまりと心得、さまぐ〳〵にして引上げてみれば、見しりある隣の娘、何ゆゑぞと問ふ間もなく、かの娘あがると其まゝ氣絶いたしました。夫から大騒ぎになり、近所へ知らせ、内へ知らす、繼母はびつくりしたが、息がたえてあると聞いて、少しはおちつき、何くはぬ顔で、「夜前から見えませず、亭主は留守なり、忍びをとこの方へでもまゐつたの歟と、心づかひに存じましたが、これはおもひよらぬ事が出來ました」と、人まへ作つて泣き〳〵いへば、近所の人も氣のどくがり、先うちへ死骸を舁きこみ、醫者よ鍼たてよとたち騒ぎ、親類も追々寄て來る、亭主の方へも飛脚をたてる、氣つけなど色々もちひ、身をあたゝめまするとし、彼娘が息を吹出しました。さては人心地が附いた歟と、みな〳〵よつて介抱をするうち、やう〳〵氣がたしかになり、親類隣家の人はよろこぶ。臺所でまゝ母は、茶の下をたきながら、蘇生したと聞いて胸を冷し、もう駈出さうか、井戸へ飛びこまう歟、どうしたら能からうと、胸は早がねを撞くごとく、惡のむくいは早いものじや。ある人のうたに、

世の中をめぐり車のわがうへにつみかさねたる果のくるしさ

天網恢々疎而不洩といふて、天の網は至極ゆるやかなやうなれども、中々もらすものではご

鳩翁道話　參之下

としを經てうき世の橋を見かへればさても危ふく渡りつるかな

何さま人間一生の間には、火事にもあひ、大地震にも出あひ、大雷大風洪水飢饉、其外おもひがけない災難をかうぶる人もあるもの、中々ついは年のよられぬものでござります。幸にそんな目にあはぬ御かたは、有がたいとおぼしめせ。五十年三十年のあとをふりかへつて見れば、うき世のはしをさてもあやふくわたりつるかな、能う命があつたものでござります。扨かの娘は罪なくして、繼母の手にかゝり、井戸の中へ投げこまれたれば、所詮たすかるべき道はない、爰が有がたいものじや、わるい事をせぬ御かげで、不思議にこの娘のいのちは助かりました。其ゆゑは始め井戸へうちこまれたとき、幸にさかさまに落ちいらなんだ。順に井のそこへ落ちとゞまり、そのまゝ浮くと、忽井戸がはへ手をかけて、水をのまぬ用心し、あがらうともがけども中々上られず、聲をかぎりに助けてくれよと叫びました。をりふし夜あけまへに、隣家の人が早うおき出で、田を見まはりに出かけました處が、どこやら女の聲がする。ふしぎ

の聞もわるし、どうぞ我がうみの子に跡をとらせ、亭主はなくとも、かまど將軍で威勢ばり、おのれがまゝにくらしたいと、惡念がきざしてより、どうぞして繼子娘を、人知れず失ひたい、と、此三十日よるも晝もねてもさめても、念々こゝに在つてわすれず、つひに恐しい志になつて、今娘をころしたのじや。是全く己が身の贔屓より、ひいきの引倒しといふものになつて、飛で火に入るなつの虫、おのが身よりぞ火を出しける。是がこれ身を愛するの間違、可愛のとんぼがへり、畢竟亭主の一言をわるう耳に留めたゆゑ、此樣な大騷動。鬼貫の發句に、

やとはれて鬼になつたるまつりかな

亭主の一言に雇はれて、四年の辛抱は水の泡、心にもあらで鬼に成りたるまつりかな、ナントこはいものじやござりませぬか。是みな身贔屓身勝手からじや。御用心なされませ。どうやらする拍子に一念化生の鬼女と成ります。鬼女じやというて、口は耳までさけてあり、髮を手にからまいてしもとをふり上げ、うろこ形や紋盡しの衣裝をきて、足拍子をふんでゐるものじやござりませぬ。可愛らしい口もとして、繼子や嫁をかみこなす安達が原の黑塚は、得て京にも田舍にもをりふしあるやうに聞えまする。甚だこはいなさけない事でござります。どうぞ心の鬼の出ませぬやうに、御吟味をなされて下さりませ。休息。

み、跡をも見ずして母おやは家にかへり、そこら取りかた附、何氣なき體で、小兒の添乳をして寐入りたるは、おそろしい繼母のふるまひ、ある知識のうたに、

　おく山の杉のむらだちともすればおのが身よりぞ火を出しける

チトかんがへてごらうじませ。四年このかた中のよかつた繼子繼母、たちまち手のうらを返すやうに、毒惡な繼母の仕かた、此おそろしい心はどこから來たぞ。うろたへると銘々どもの腹の中にも、此やうな鬼が住んでゐようも知れませぬ。折々たちかへつて、腹の中を吟味せぬと、思ひの外に鬼の玉子が、へり附いてあらうも知れぬ。油斷は一切なりませぬ。此繼母がよめ入りしてくる時に、先方へいたら繼子むすめをにくんで、〆殺さうといふ分別をして嫁入して來るものじやない。サアどういふ處から、此心が出てまゐりましたぞ。四年の辛抱、タツタ一夜の寐ものがたりに、娘に聟を取つて、家をゆづらうというた亭主の一言で、此おそろしい心になりましたのじや。なぜなれば、亭主のある間は、たとへ新宅かまへても、聟や娘が大事にもせう、若亭主が目をふさいだら、娘は先妻の子なり、聟は近ごろの入人なり、我身は後妻のことなり、ちひさいものはあるし、決して聟やむすめに、おひまはされて、口をしい日を送るであらう、さればとて聟をとる事はよしにさつしやれといへば、繼子娘をにくむやうで、亭主へ

へ、心やすう世をおくらうと思ふが、こなたはなんとおもはつしやるぞ。」ソコデ女房が、「それは何より有がたい事、私もはやう隠居して世事の世話が助かりたい。どうぞはやう聟をもらはつしやれ」と、きげんよう承知しました。亭主は大に安心して、夫より一月ばかり立つて、用事につき一夜どまりに他所へ参りました。其夜はいつもの通り、繼母も娘もめしつかひも、夫夫のよなべ仕ごと、寐時分から、在中の事なり、下男も下女もどこへやら、こそ〲と出てゆく。あとには母おやは、小兒を添乳してねる、娘も部屋へ入てねる。夜はしん〲と更わたつて、七つまへとおもふ頃、かの繼母が寐所からそつとぬけ出で、そこらにあるたすきを取つて娘の部屋へしのび込み、よう寐入てゐる娘の首へ、かのたすきをまきつけ、力にまかせて〆ころさうと仕ました。思ひがけなき事ゆえ、娘はおどろきさま、襷に左右の手をかけて〆させまいとする、母親は乗かゝつて〆ころさうとする、行燈はきえて眞くらがり、母親も聲をたてず、娘も驚いて聲も出ず、狼のくひあふ樣に、闇で上になり下になりつかみ合ましたが、とう〲母親が娘のたぶさ髪をつかんで、うらの方へ引ずつて出る。隣は遠き在中の事、折ふし其夜は眞のやみ、半町ばかり引ずつて出たが、側にある野中の井戸へ、かの娘を投込うとする、娘は井戸へはまるまじと、母おやに取りつくを、踏みたふしかいつかんで、井戸の中へ難なく打ちこ

亭主の了簡には、後妻をむかへて、自然繼子繼母の中が、むつまじうゆかぬときは、我も苦勞し、むすめもまた不便なり、何とぞ此まゝで娘の成人を待たんと、餘ほど辛抱はして見られたれども、何分娘のとしは行かず、家内の取締をしてくれるものがないと、奉公人が育ちにくい、據なうあれこれと聞きあはせ、幸ひ近村に相應の人がらが有つて、やがてこれを迎へとり、家内の世話をして貰はれました。時にかの後妻は、はなはだ深切にむすめを養育する。むすめもまた母さま〳〵というて慕ひまする。ソコデ爺親も大きに安堵し、月日をおくりまするうちに、彼後妻が懷妊をいたして、ほどなく一人の男子をうみました。ソコデてゝ親はよろこびの中に、また氣にかゝる事も出來て、後妻がうみの子を可愛がつて、先妻のむすめをにくむやうに成つたらば、至つて難澁な事じやと、あんじわづらうて居ましたが、案じるよりうむがやすいと、實子が出來てのち、ます〳〵繼子娘を可愛がる。中々わけ隔ては見えませぬ。これで爺親も大によろこび、親子四人がむつまじう、明しくらして娘は十七歳になり、男子は三歳に成りました。ある夜の寐ものがたりに亭主がいふは、「こなたがござつた時は、まだ娘は十三、何のわきまへも無かつたが、早十七になつたれば、今は牛にも馬にもふまれる氣づかひはなく、依つて思ふに、どうぞ能い聟をもらうて此家をゆづり、こちら夫婦は、その小兒をつれて新宅でもかま

て我身の害になる事を知らぬ。ひどいものじや、我身勝手をおもひ附と、むさい事もきたない事もうち忘れて、春の日の永いのに、一日雪隱の中で、ひきがいるの樣に、目ばかりぱち〱してゐて、くさいとも思はず、まだある、晝じぶんになると、首筋にくゝり附けたこほり飯を取出して、雪隱の中て辨當をつかひまする。これが女房子に見せられた姿か。箇樣に申すは、雪隱の事ではござりませぬ。腹の中のむさいきたない店おろしを、たとへて御はなし申すのでござります。ある人の道歌に

我心かゞみにうつるものならばさこそ姿の見にくかるらめ

しかしながら此樣な人は日本の地にはない。得て唐や天竺には、あるやうにうけたまはりました。是じやによつて、至於身而不知所以養之者。豈愛身不若桐梓哉。弗思甚と孟子の仰られましたも無理ではござりませぬ。我身を愛する〱とおもうて、思の外に損ひまする。是について恐ろしい話がござります、序に御聞下さりませ。これは東國の事でござりまするが、相應にくらしまする百姓がござつて、夫婦の中に娘一人、其外めしつかひの下男下女が五六人。かの娘が十三歲になりました。母親が風のこゝちと打ふしましたが、わづか五七日で相はてまするど、跡は爺親とむすめ、親類村内から、後妻をいれよとすゝめますれど、かの

仁は文殊菩薩の再來か、さるにても、得意まはりはどうして仕られた事じややら、此やうに流行るといふは、ありがたい事ではあると、酒をかうて待つところへ、亭主がのろりと戻つて來て、「どうじや、かり人は有つたか」といふ。「あつただんか、かし代が八貫、糞が五荷、こなたはどうして得意廻をさつしやつた。京の町を一軒々々、ところ書を持て頼みにはいらしやつたか」と問へば、亭主は「何をぬかしをるやら、おれが得意まはりといふは、今朝内を出て、直に三文出して、八兵衛が雪隱へはいり、内から掛けがねをかけて、一日隣の雪隱をふさげたのじや、人が戸をあけかゝると、内からエヘンと咳ばらひすると、はづんではあるし、おれが所の雪隱へかけ込みをるのじや。ア、けふは仰山なせきばらひして聲がかれた。此永い日を一日つくばうてゐたれば、持病の疝氣がおこつた」と腰をなでていはれた。ナント面白い咄でござりませうが。これがこれ、小人凡夫のはらわたの開帳じや。己が金銀の儲けたいも、人の金銀をまうけたいも同じ事なれば、すこしはおもひやりも有りさうなもの、なれども我と人とは別々のものじやと覺えて、我勝手さへよければ、人はこけても倒れてもかまはばこそ、爰を大事とわが身勝手をいたしまするは、皆わが身を養はうとおもふのじや。是が大まちがひと申すもので、人とわれとはおろか、萬物と我と一體、この道理が知れぬによつて、人我の隔をなし、めぐり〳〵

落著たかほつきして、「何もやかましくいふ事はない。明日はおれが得意まはりをして來ると、借人は澤山出來る。われもはやう起きて、こほり飯をつめておけ。一ぺんかけ廻つてくると、門前市をなす事疑なし」と、太平樂をいひちらして、その夜は寐る。女房は合點が行かねど、朝早う起き、めしを焚き、こほりめしをつめると、親父はいつもより朝寐して、四つ時分に目を覺し、茶漬喰ふと身ごしらへ、ぱつち尻からげ、かのこほりめしを首筋へくゝり附け、小遣ぜにを懐へ入れ、出かけに、「コリヤかゝ、得意まはりしてくると夥しい借人があらう。モシ糞がつかへたら中入札をかけて、隣の次郎兵衛をたのんで、一荷も二荷も取つてもらへ」と、いひすてて出てゆく。ますく女房は不思議がはれず、どうして得意まはりが出來るぞ、京の町を何村の何兵衛が方で、かし雪隱かし雪隱と、菜や大根賣るやうにふれ歩くの歟しらぬと、しあんしてゐる所へ、錢筒へ八文、錢をなげこんで、一人雪隱へはいつた人がある。此人が出ると、入りかはりく引もきらず借人が出てくる。嗅はびつくりし、かし代を取りはづすまいと、目の玉をきよろつかして、雪隱のわきに張番をしてゐると、後には段々糞がつかへる。ソコデ中入札をかけて、一荷こえをくみ上ぐる。また追々にかり人がある。とうく日のくれまでに、雪隱のかし代八貫文とりあげ、糞を五荷くみ出した。ソコデかゝがひとり歡び、何さまこちの親

かはりに用ふるのじや、ナントきめう歟。窓は下地窓、ふみ板はけや木のじよりんもく、きん隠しはさつま杉、穴のぐるりは蠟色ぶち、壁は中ぬりの切りかへし、戸は檜木の長へぎ、白竹おさへ、屋根は杉皮青竹おさへのわらび縄、大和葺にこしらへ、沓ぬぎはくらま石、傍に青竹まじりの四つ目垣、橋杙の手水鉢に、かゝりの松はしよろ〳〵とした女松をあしらひ、千家でも遠州でも有樂でも逸見でも、何でもかでも取りこめるこしらへ、おそらくはこいつを出したら、八兵衛の雪隠はへたばるにちがひはない」と、自慢顔にいひならべると、「夫は奇麗でよからうが、かし代はなんぼ取るのじや。」「しれた事一度は八文よ。」「イヤ〳〵それはわるい分別、茶方でも水かたでも、どちらのみちきたない所、三文でも安い方が、ヤツパリはやりさうな事じやに、必ずそれはやめにして下され」といへば、「何をぬかすやら、女賢うて牛うられぬと、さいくはりう〳〵仕上げを見をれ」と、かの亭主が無理に工面して、とう〳〵此春間にあふ樣に、立派な雪隠をこしらへました。勿論かんばんは醫者どの歟、坊さまを頼んだと見えて、唐樣でかし雪隠一度八文と書いて出した。ようした物じや、錢がたかいと、なんぼ奇麗でも借人がない。猫の子ものぞいて見をらぬ。ソコデ女房がほやき出し、「これじやによつて止めさつしやれといふのに、仰山な錢かねいれて、此しまひはどうするのじや」と、疊たゝいてわめけば、亭主は

用がとゝのひます。又雪隱の貸元は、三文のかし代をとるばかりじやない、あとへ糞がのこります故、これも至極勝手がよろしい。全くかし座敷からおもひ附た趣向とみえまして、此ごろめつきり身代を能ういたしました。或人の道歌に、

よい中も近ごろうとく成にけりとなりに藏をたてしよりのち

とかく人の銀まうけが羨しうて、又ねたましうて、かち落してなりとも、おのが田へ水の引きたい例の身贔屓身勝手の强慾ものが、其村方にござりまして、あるとき女房をよんで相談には、「八兵衛が近頃かし雪隱で、めつきり錢儲をしをる。おれも此春はかし雪隱をこしらえて、八兵衛の銀まうけをたゝき落してやらうと思ふが、どうであらうぞ。」女房中々合點せず、「夫はこなたわるい分別じや。たとへこちのかし雪隱をこしらへた處が、八兵衛殿は仕にせも古う、得意もたんとあるであらう。こちはまた新店なり、はやらぬときは貧乏の上ぬり、それは止めにさつしやるが能からう」といへば、「イヤ〳〵それはわれが何も知らぬによつてじや。此度おれが思ひ附いた雪隱は、八兵衛のやうな汚ない雪隱ではない。當時京の町は、茶の湯がはやると聞いたゆゑ、茶方の雪隱をたてるつもりじや。まづ四本柱はよしの丸太では汚ない、北山の入節をつかひ、天井は蒲天井にして、蛭釘をうつて釣釜のくさりをぶらさげて、きばり繩の

がやめられず、身に心のつかはれてゐるは口惜いと詠んだうたでござります。いかさま身贔屓身勝手をする人の、はらわたの開帳に能う似た咄がござります。至極尾籠なはなしなれども、ねむりさましに聞いて貰はにやならぬ。これは都の咄でござりまするが、花の頃に成りまする と、嵐山御室の櫻がりとて、京中の貴賤皆花見にまゐります。其中には大家の奥樣、或は娘御、または遊女町の藝子女郎、衣裝に花をかざり、こゝを曠と見物にまゐりまする事じや。嵐山までは京をはなれて一里半ばかり、何んぼ美しうかざりたてた娘御でも、出ものはれもの所きらはずといふ譬の通り、途中で便所へ行きたい事がある。流石に野中で尻もまくられず、通筋の見苦しい百姓家へかけこんで、「御無心ながらてうづ場を、ちよつと御かし下されませ」と、赤い顏して斷いひ、裏口へ出て見た所が、うそぎたない菰だれの雪隱、是には京の女中がたが、毎年大きに困る事でござります。成程人間かしこしと申して、ある通筋の小百姓が、此事を考へ出して、かし雪隱といふ事を始めました。其趣向は、門口に雪隱をたて、側に手水鉢をする、墨ぐろに、かし雪隱一度三文と、かき附た看板を懸けました。尤これは甚面白い趣向で、至極重寶な事ゆゑ、花の頃はけしからず流行ます。勿論これは兩德の趣向で、女中がたは赤い顏して口たれて、きたないめをせいでも、三文で挨拶なしに、我家の雪隱へはいるやうな顏つきして、

やしなふ事を知らぬ。故に至於身不知所以養之者と仰られました。ナント人はかしこい樣でも、また愚な所があるものでござります。畢竟我身を可愛がる樣で、實は可愛がらず、却つてうゑ木を可愛がる事を知つてゐるは、ナント無分別ではない歟と、扨こそ豈愛身不若桐梓哉。弗思甚也と御叱りなされたのでござります。さてこゝに身を養ふと申してあれども、強ち身の事ばかりではござりませぬ。則心のやしなひじや。身心一雙と申して、心をやしなふ事を知らねば、身をやしなふことが出來ませぬ。心を捨てておいて、身ばかり養はうとするは、所謂身贔屓身勝手と申す私心私欲のかたまりに成りまする。その私心私欲で身を養はうといたしますると、かへつて身をそこなひまする。爰の境がいたつてむづかしい所じや。心を捨ては何もする事はござりませぬ。心をすててする事が有たら、みな身贔屓身勝手でござります。古歌に、

つく〴〵と思へば悲しいつまでか身につかはるゝ心なるらむ

成ほど心が主人となつて、身を家來としてつかふ時は、皆道に叶ひまする。身を主人として心をつかひまするは、心をすつると申すものじや。心が身につかはれまするると、いつでも道にはづれて、みな身贔屓身勝手になりまする。此道理は能う辨へてゐながら、ヤツパリ身贔屓身勝手

鳩翁道話　參之上

孟子曰。拱把之桐梓。人苟欲生之。皆知所以養之者。至於身而不知所以養之者。豈愛身不若桐梓哉。弗思甚也。扨此章は前晩の續きにて、孟子また譬を設けて、御示しなされたのでござります。拱とは左右の指をもつて圍みましたるを拱といふ。把とは隻手握を把と申します。桐とはきりの木、梓とはあづさの木でござります。畢竟拱把の桐梓とは、わづか一握や二握の、細い小さい樹木でも、これを育てようとぞんじますれば、必ずこれに培をし、養をなしてそだつる事を知らぬ人はござりませぬ。故に人苟欲生之皆知所以養之者と仰られました。サアこゝが入用の所でござります。樹木をそだつる事は、養がなければならぬといふ事を知て居る人が、己が身をやしなふことを知りませぬ。是はどうしたものでござりませうぞ。養ふことを知らねばこそ、明ても暮ても思ひつく事は、錢がほしい、金がほしい、よいものが著たい、うまいものが喰ひたいと、得手勝手な事ばかり思ひ附いて、我身の倒るゝをも、我身の害になる事もかまはず、無分別ばかり、是則うゑ木をそだつる事を知て、我身を

どの様にも出來るものを、苦しんで一生くらすは、此八兵衛の御連中じや。このくらゐ心から物の大小輕重がわからぬ様になり、大切の心のゆがみは捨ておいて、指のかゞんだを苦にやんで療治する。ソコデ孟子も御しかりなされて、此之謂不知類と仰られました。猶明ばん御はなし申しませう。**下座。**

手にとるなたゞ野におけよげんげ花

兎角今日の有りがたい事を忘れて、外を願ふ所から、思の外に心がゆがむ。さらば人は苦みに生れたもの歟といへば、安樂は人のうまれつき、先師のいろは歌に、

　らくがしたくば心を知りやれ樂はこゝろのうまれつき

此樂な心をもちながら、くるしんでうろたへるを、譬の咄がござります。ある獨者が、よう寐てゐるとき、隣が火事じや。近所はやれそれと騒ぎたつ、朋友が馬燈灯さげて見廻に來た所が、門の戸がしまつてゐる。南無三八兵衛、飲過して寐てゐると見える、燒殺してはならぬと、戸を蹴破て内へはいる。その物音に八兵衛、ふつと目をさまし、うろたへて赤裸で寐所からとんで出る。友達が持た燈灯鼻の先へつきつけ、「隣が火事じや見廻に來た」八兵衛喜び、「夫は能う來てくれた。其燈灯かしてくれ」と、友達の燈灯をかりて手にさげ、赤裸で庭へ下りたり、うらへ出たり、又表へかけ出したり、しきりにうろたへ騒いでゐる。友達が合點がゆかず。「八兵衛なにを捜すのじや」八兵衛ぬからぬ顔で「行燈がきえてあるゆゑ、火打箱さがしてゐる」といはれた。これが銘々共によう似たはなしじや。結構な燈灯のあかりを己が手にもちながら、火打箱をさがしてゐるは、やはり闇がりの心もちじや。明らかな本心を御互に持て生れて、樂は

りはない、さらば今夜どこでなりと盗にはいりて、金貳參百兩懐へねぢこみ、おもふ存分奢散かし、首とられて仕廻ふ方が埒あきが早うて樂じや、こんな貧乏を長うするは、埒があかいで氣色が惡いと、無分別な石川五右衛門、熊坂の長範が得てあるものでござります。首尾よう盗みおほせる事歟、はした金を盗まうとして、思のほかに引くゝられ、獄屋のうちへ打ちこまれて、握飯に香のものかぢるとき氣がついて、どんな事をした、やはり元の三疊敷、凉爐に百が米、貧乏でもわが所帶じや、斯うやつてゐれば日の目を拜む事はならず、近所あるきもする事ならず、我からだを我ながら、自由にする事のならぬとは、何の因果じや、どう見てもうちの貧乏が有がたう戀しうなる。

　逢見ての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり

扨御役人の前へ引出され、水責火責のくるしみを受くるときは、はじめの獄屋の中が戀しうなり、早う責苦を助かつて、獄屋へかへりて、休みたいと、むかしはものを思はざりけり、やはりあとが戀しうなる。其罪人が罪きはまつて首の座へ直るとき、どこが戀しいぞ。たとへ水責火責はおろか、骨をひしがれ、肉をさかれても、いのちさへある事なら、ヤハリもとの責苦が戀しい。昔はものを思はざりけり、せんぐり〳〵跡へんが戀しうなる。ある人の發句に、

へも厚く禮をいひ、始て山寺の苦患を逃れました。しかしながら一旦出奔したものなれば、國元へは歸られず、そのまゝ町人に成て家業を精出された。ところが運よう、商賣も繁昌し、れきれきの商人に成て、能いかげんな親仁に成た時分、わかい人を見ると、昔のさんげ咄に、かならず此話が出て、若い時にはどのやうな不了簡が出ようも知れぬ、もしあひみての歌がなかつたくらゐなら、どのやうな事にならうやら、今話すも恐しいと、毎度さんげばなしを、懇意の人が承りましたを、又私へはなされました。あまり有がたい事ゆゑ、今ばん御はなし申します。此息子どのは、能う立ちかへりが出來たものでござります。百人に五十人はこの立ちかへりが出來にくい。我身が可愛〳〵と思ふより、いつしか心を押しゆがめて、たはいもないものに成りまする。目が可愛によつて面白いものが見たし、耳が可愛によつて、三味せん太鼓の音が聞きたし、鼻が可愛によつて、掛香や松金油の匂がかぎたし、舌が可愛によつて、うなぎすつぽん茶碗むしがくひたし、からだ中が可愛によつて、商賣が仕ともない。ソコデ次第に貧乏して、三疊敷に涼爐（コンロ）百文が米をかひかねるとき、こんな苦しい所帶をせうより、たとへ死ぬとも一奢り奢て死んだら、一生の思出、誰が百年いきるもの歟、明日死ぬるも來年死ぬるも、思へば同じ短い命じや、疊の上で往生するも河原でのたれ死ぬるも、死ぬる味にかは

る歟、もし見咎られたら切殺すか、よし金を盗みおふせたところが、天の網はのがれぬ、たとへ京大阪へ出て立身出世をした處が、盗人の名はのがれぬ、今日は現れる歟、あすは召捕にくる歟と、人のさゝやく聲も肝にこたへて、廣い天地の間に、五尺のからだの置處がない樣に成たときの、つまらぬのと、今かうやつてゐる、つまらぬのとをくらべて見たら、盗をせぬさきのつまらぬ方が遙にましじや、盗んでからつまらぬときは、昔は物を思はざりけりと、其時後悔やくにたゝぬ、夫より此まゝじつと辛抱してゐたら、其内には國から便もあらう、滅多にうろたへる所でないと氣が附いて、立ちもどりの出來ましたのは、ナントありがたい、歌の徳ではござりませぬか。一日に一字まなべば三百六十字。一字千金に當ると、高いもののやうなれども、今この場所で見ますると、中々高うはござりませぬ。若此男が無筆であつたら、此立ちかへりは出來ませぬ。三十一字が讀めたおかげで、首が胴についてある。一字が千兩なら、三十一字で三萬千兩じや。ナントあなたがた三萬千兩の金を進上するが、首をおくれなされと申したら、たとへ千萬兩の金にても、替へる命はないとおつしやらう。して見れば一字千金高いものではござりませぬ。どうぞお小い時から手習よみものを精を御出しなされませ。此やうな利益がござります。是から彼息子殿が年月をじつと辛抱してゐらるゝうち、國方から親類が來て、寺

尾がようてもわろうても、今夜のうちに十里の道は走らにやならぬ。今のうちにとつくりと寢ておいて、晩につかれぬ用心せうと、目をふさいで見ても、胸がもやつき寐入られぬ。どうぞ一寐入ねたいものじやと、今度は客殿の方へむかうて、ころりと寐返をして、内をうそ〳〵見廻せば、座敷のすみに六枚屏風がたててある。色紙がたの小倉百首、見るとはなしに見てゐるうち、ふと目にかゝつたは、

あひみてののちの心にくらぶれば昔はものを思はざりけり

何とおもうた歟、かの息子が此うたを二三返吟じて居るうち、俄にこゝろがかはつて來て、今夜の仕業をやめにする氣に成たら、脇の下から冷汗がひつたりと出たと申す事じや。これは何で俄に善心に成たのでござりませうぞ。此歌は中納言敦忠のうたじや。歌の心は、思ふ人に一度逢ひましてからに、逢はぬさきの心とくらべて見ますれば、逢はぬ先は物思がなかつたのに、逢うてからのちは物思が絶えぬと、よんだ歌でござります。今この息子どのも、此歌で心のたて直しが出來たのは、なぜなれば、今此寺に居れば、國からはたよりはなし、和尚の墨つきはわるし、寒空にはむかふ、小遣錢はなし、仕覺えた商賣はなし、仕附けぬはき掃除はくるしし、是はつまらぬと思うてゐるが、是をつまらさうとして、今夜庄屋のうちへ忍びこんで、金を取

たち退くが上分別じやと、無分別のてつぺいを考へ出した。ナント恐しいは人のこゝろでござります。心は身のため計を思ふもの歟と思へば、又身をそこなふ事をおもひつく。尤本心は善ばかりなれども、かやうなときに、動く心は意識というて、得て惡を思ひ附くやつじや。禪家の語に莫レ信ニ爾之心ニ。心爾身之仇也と、いうてござります。成程油斷のならぬ心じや。ある人の道歌に

こゝろこそ心まよはすこゝろなれこゝろに心こゝろゆるすな

又大學の傳には、小人間居爲ニ不善ニ無レ所レ不レ至と、兎角からだを隙におくは大きな毒じや。どうでのらくとしてゐると、ろくな事は思ひつかぬ。此息子殿も、目くら歟、イツソいそがしうて走りあるいたら、こんな無分別は起りはせぬ。大それた人のかねを盗んで、まだ人をころして立退かうといふ分別が、どういふ所から出ましたぞ。チト考へて御らうじませ。むかしから家業を精出したものが、盗をしたためしはない。盗をするものは皆家業がきらひじや。御互に身の上に立ちかへつて、商賣がすきかきらひか、折々せんさくして見ぬと、腹の中から、何時石川五右衛門や、熊坂長範が出まいものではござりませぬ。心にこゝろゆるすな。折角吟味が肝要でござります。ソコデかの息子が、いよく今夜と一決して、足場をとくと考へおき、首

一大事の所じや。室鳩巣先生の歌に

朝夕に保つ我身はから衣たちゐにうつせ道の姿を

心が心の有所にないと、何時無分別がおこらうやら、こはいものでござります。是じやによつて金銀の取扱は、みだりに人に見せる物ではない。金銀は人の身にいたつて大切なものなれども、能く又人の身を害する媒となるものじや。何の心もない人でも、是を見ると何となう、心が出來る。心なければ何ともない筈でござります。兎角おそろしいものは金銀、人に罪をつくらすのも金銀、されどもなければならず、あれば煩し、さて思ふやうにならぬは、浮世の有樣でござります。何分程ようせねばならぬ事じや。時にかの息子どのが、庄屋の金を一目見るより、身にしみ〴〵と欲しう成て、どうしたら能からうと、緣ばなにねころびながら胸算用、つく〴〵と足場を見るに、忍びこむには屈竟の家だち、家内はわづかに五人ばかり、もし見とがむる者が有たら、夫こそ百ねんめ、蹴ちらかしてあの金をこしにつけ、幸ひ八月十五日、月は有あけ、立のくには至極の勝手じや、首尾よういたらば、人知らず盗取て、京か江戸か大阪か三箇の津の間へ出て、どう成りとも身のかた附は出來るであらう、所詮この山寺に、いつまでゐたとて國へ歸られるわけでもなし、和尚のつらくせは惡し、身のまはりはうすし、イツソ今夜

かふやうに追ひまはされ、仕なれもつけぬはき掃除、ナント氣の毒なものじやござりませぬ歟
此とき親の慈悲を思出し、百まんだら後悔しても、あとへはかへらぬ。是じやによつて、足も
とのあかいうちに、用心をせにや成りませぬ。かう成てからは、黐桶へ足を踏込だやうなもの
で、國へもいなれず、寺にも居られず、外に仕覺た事はなし、是はつまらぬ〳〵と思ふうちに、
秋もはや夜寒に成て來る。ある日和尚が朝から托鉢に出られた。あとはそこらはき仕まひ、夫
からはしよざいはなし、時は八月の中旬、國から著て來たゆかた一枚、汗づいたのとよごれた
ので、どろ〳〵としてあるを、曠著にも常著にもタツタ一枚、ソロ〳〵寒には向うて來る、せん
かたなさに客殿の緣にねころんで、猫のやうに丸う成て、日向ぼこりしてゐながら、つく〴〵
と思へば、思ふほど、とんとつまらぬ。國からは便もなし、和尚の顏つきも、此ごろは、めつ
きりわるし、寒空には向うてくる、どうしたら能からう、イツソ腹切う歟、首縊らう歟と、腹
の中はかき亂したやうに成つて、見るとも見ぬともなしに、麓のかたを見やれば、庄屋殿のう
ちが、目の下に見える。此寺は山の尾さきに建た寺で、客殿の緣から見れば、一村は目の下、庄
屋殿は寺の緣から、人の見てゐるとも知らず、村方の集め銀を數をあらため包み直して、金戸
棚の引出へ入れらるゝを、かの息子は屹と見とめると、ぞつとする程ほしう成た。こゝが人の

竹の筒に入れらるゝと、據なう眞直に成てゐる。とかく身をよする處が大事じや。わかい衆は此話を聞いて、能う腹の中へ、たち反つて吟味して御らうじませ。どんな所へ入込で遊んでゐるぞ。中宿か料理や歟、女藝者のふるびた所へ這入りこんでゐやせぬ歟、能う御せんさくをなされませ。扨かの御侍は、つひに生れてから、親の懐を一日もはなれた事のないのに、心からとて夜通しに、知らぬ道を彼山寺へ尋ねてゆく。是ほどのはたらきを、主人歟親の爲にしたら、大きな顔をなさるであらうに、どうやらかうやら、尋ねあたつてゆきついた所が、山中の古寺、親のまへでさへかゞめぬ腰を、滅多に御じぎし、彼手紙を出されると、和尚がうけとり、開いて見て、「此手紙の様子では、まづ此方にしばらくござらずばなるまい。然しながら小僧とてもなし、下男もつかはぬ貧僧でござれば、どうで水も汲んで貰はにやならぬ。其外ふきさうぢやら、又寺役のあるときは、穴も堀て貰はにやならぬ。マアさう心得て、そこらで足を洗うて上つて、茶粥でもくはつしやれ」と、目見にきた門番へいひつけるやうに、舌長にいはるゝ。かなしい事は三百石取でも、國を立退きてみれば、つぶ三文まうける術は知らず、路用とても壹文もなし、さし詰め居さふらふのあたりまへなれば、口惜ながらハイ〳〵というて、庭のすみで足を洗ひ、和尚のくひ殘された、水くさい茶粥を一ぱいすゝつて、夜通しのつかれもやすまる事歟、猿つ

に、此事をあかし、いかゞはせんと相談をいたされました。其朋友も無分別な若人なれば、何の思慮もなく、手紙一通認め、「其處より七八里ばかり隔てたる、さる山寺の和尚に知人のあれば、此寺へ行き此書狀を出しなば、かくまひくれるであらう、國元の樣子はあとより追々しらすべき間、まづかの山寺に、かげを隱されよ」とをしへました。こなたも無分別な若ざかり、何の用心もなく心得たりと、かの書面を懷中して、ゆかたのまゝにて城下をたちのきました。さりとては若い衆は無分別なものでござります。諺に若いは能がしどがないと、親の案じる事も、ゆくさきのつまらぬ事も、道で難儀する事も、辨のないは、夢のやうなものでござります。或人の道歌に

わるいとはしりつゝわたるまゝの川流れて淵に身をしづめけり

まんざら若い衆じやとて、氣のつかぬのではなけれども、一度思附くと、能うてもわるうても、一足あとへたちもどる事が出來ぬ。ソコデ忽ち行あたり、鼻打てから後悔して、鈍なことをした、是はつまらぬといふ内に、又つまらぬ事を思ひついて、我と我手に淵に身を沈めけりじや。此咄の事ばかりじやござりませぬ。兎角わかい御衆は平生の、より所が大事じや。猫はなまぐさきを好めど、寺にかはれると據なう精進する。蛇はのらくらとゆがむが持合せなれど、

重荷が、杖の先にかゝつてあらう筈はない。これ全く竹杖を眞すぐにたてて置によつて、貳十貫目の重荷がかゝつても折ぬのじや。ある人の道歌に

すぐなれば重荷かけてもをれぬなり世わたるわざの息杖ぞかし ・

三間間口でも八間間口でも、息杖は大黑柱壹本、五人暮しも十人暮しも、旦那殿の心ひとつで家内中の重荷が持てあるのじや。もし旦那の心がゆがむと、家内の重荷がひつくりかへり、大黑柱に蟲がいると、八けん間口がへたばつて仕まふ。兎にも角にも眞すぐな力は有がたいものでござります。大黑柱に蟲が入たのを、大工どのに見せると、建なほさうより仕樣がないといふ。旦那殿の心に蟲が入ると、これも同じことで、燒直さうより仕かたがない。どうぞ蟲の入らぬ間に、ゆがみを直すことが肝要でござります。箇樣には申すものゝ、誰じやというても、我心をゆがめうと思ふ人はなけれども、難儀なことは、見るにとられ、聞くに取られて、思の外にゆがみます。このゆがむについて、おそろしい咄がござります。ある御國に三百石どりの次男、としごろは廿ばかりの人、色情の事について若氣の誤より、俄に出奔する事あり。其節夏の頃にて、ことさら夜分なれば、浴衣に大小のみ、袴もきず、懷中物もなく、城下へしのびて遊びに出たる儘にて、其場よりの欠落なれば、もとより何の用意もなく、無貳の朋友一人

鳩翁道話　貳之下

心からよこしまにふる雨はあらじ風こそよるの窓はうつらめ

此の歌は高祖日蓮上人、身延山御隱居の節の御詠歌でござります。人の心は眞直なが生れつき、其心のゆがむのは、是皆見たり聞いたりするに取らるゝによつてじや。譬へば雨は眞直に降るもの、なぜなれば、空より下へおちるもの故、ゆがんで落る筈はないのじや。夫に窓へ横しぶきにあたるは、畢竟風の爲にゆがむのじやと、御よみなされた歌でござります。論語に子曰人之生也直罔之生也幸而免と申して、なるほど、人は正直にないと、天地の間には起てゐられぬ筈の事なれども、こゝろをゆがめて、まご〳〵と、生きてゐるのは、ほんの是が僥倖といふものじや。生きてゐるとはいふものゝ、世間で人のやうには申しませぬ。その筈でござります、人の心がないによつて、生きながら鳥類畜類の仲間入をせにやなりませぬ。わが神國の教も、正直を本とすとあれば、何分にも人は直でなければならぬ。旅をして見ますれば、重い兩掛を竹杖壹本で輕々と肩やすめする。能う考へて御らうじませ。あの細い竹杖で貳十貫目の

を聞きに來たのでござる」というた。ナント面白い咄でござりませうが。老たるも、若きも、男も女も、金の有も金のないも、おしならして、晝夜愁歎のこゝろはやみませぬ。これが皆心の煩じや。畢竟すこしばかりの身びいき、身勝手のために、ならぬ事を無理やりにやり附けうとする無分別から、さまぐ〜の苦をうけるのでござります。一たび本心を會得すれば、ならぬ事はならぬと知り、難儀な事は難儀と合點して、强て身を遁れうとはいたしませぬ。是を中庸には富貴貧賤夷狄患難、君子入として自得せずといふ事なしと、いうてござりまする。此味が知れませぬと、苦樂は體にあるやうに覺えて、心はわきへ捨て置いて、ひたすらに形の樂をもとむるところから、奢にうつり吝嗇になり、却てこゝろに苦を受けて、泣てばかりゐる樣に成りまする。兎角何事も心の事じや。ドウゾ皆さま、御なきなされぬ樣の御用心を御たのみ申します る。休息。

から、「イヤ〲店の衆に金をつかはれるはまだしもじや。此方どもは近頃都合がわるうござつて、得意先が、かたはしから倒れまする。あちらでは三貫目、こちらでは五貫目、實に氣の減るやうにござります」と、いふ下から向の席にすわつてゐる老人が、扇ぱち〲ならしながら、「何れもの御愁歎御尤でござれども、又親類縁者どもから、金の無心をいはれたり、印形押てくれといはれたり、家内づれのかゝり人、これもまた困たものでござりまする」と、半分いはさず、隣の人が、「イエ〲いづれも樣のは皆榮耀じや。私のつらい事を御聞なされて下さりませ。どうした事やら、家内のものと、母との中がわるうござつて、日がな一日牛の角づき合ひ、内中がくすぼりますゆゑ、イツソ里へ歸しませうと思へば、幼少のものは二人も有り、挨拶すれば女房の贔屓をすると、母親の機嫌がそこねまする。女房を叱れば、他人じやと思うて、ひとりむごう、つらうさつしやると恨み、イヤモウ中にたつた柱で、つらいの苦しいのと申すやうな事ではござりませぬ」と、拍子にかゝつて、身のうへの難儀咄、其内に一人氣が附いて、ほんにモウ鹿が鳴きさうなものじや、あまり咄にしこりが來て、鹿の音を聞きはづした歟知らぬと、縁の障子を引あけて見れば、大きな鹿が庭さきに、默然としてゐる。「是はどうじや。そこにゐるなら、なぜさつきにから鳴ぬぞ」といへば、鹿がぬからぬ顏で、「イエ〲わしはおまへ方のなくの

がら私は斯樣に樂しんで居ますれど、さだめて家内のものが、心づかひをいたして居ませうと、不圖ぞんじ出しましたれば、どうやら酒が理に入るやうに覺えます」といふ。座中の人が「夫はどういたした譯でござりますぞ。」「サア御聞下さりませ、御存の通り一人の悴、當年二十二歳に成りまするが、去とては困た奴で、私が宿に居ますれば、しぶらこぶらと店の用を手傳ひますれど、私のかげが見えぬと、尻に帆かけて遊所通ひ、勿論親類緣者どもも、いろ〳〵と教訓をいたしてくれますれど、一向馬の耳に風同樣、アノやうなやつに身代をまかさにやならぬかと存じますれば、心細いものでござります。おかげで何一つ不足のない私の身分なれども、子ゆゑに每日每夜血の涙、さりとては困つたものじや」と、吐息をついて咄されると、傍から四十五六な男が、「イヤイヤあなたのは御難儀とは申すものゝ、畢竟御子息に金つかはるゝといふ迄の事で、强て御心配にもござりますまい。私などは、中々左樣な事ではござりませぬ。兎角近年店のものどもが、假初にも引負をいたして、五十兩はまゝよ、七十兩はまゝよと、年々の帳面の明き。能うおぼしめして御らうじませ。鼻たれの時分から世話をいたして、どうやら、かうやら、少しばかり店の用にたつ時分、引負をこしらへてくれては、主人は何に成りまするものじや。それから見れば、あなたのは我子に金をつかはれるばかりの事」といへば、又かたはら

が見えにくうなりまする。御用心をなされませ。わるうすると、本心じややら惡心じややら、我とわが手に合點がゆかず、そのくらい心から、思附ほどの事が思ふやうにゆかぬと、ハアスウハアスウと肩で息をせにやならぬ。難儀なものじや。せめてだまつてなとゐれば能けれど、かり初にも苦しいせつないと、腹の中のゆがみを、人にあうては白狀を致しまする。さり迚は困つたものじや。是じやに依て、何とぞ一度本心の正銀を見覺え、人欲の惡銀を見損ぜぬやう、どうぞ御互に一生道にはなれぬ樣にいたしたうござります。これに附て面白い咄がある。序に聞いて下さりませ。秋も夜寒になりました頃、相應に暮す町人衆が、五六人云合せて、鹿の音を聞きに行かうと、何が辨當小竹筒を用意をし、ある山寺に心やすい和尚がある、これを心あてに尋ねゆき、客殿をかりうけ、泊りがけの遊山、鹿の音を待侘びて歌を詠む人もあり、あちらでは詩を作り、こちらでは發句、さいつ押へつ、入相の頃になつても、トント鹿が鳴きませぬ。初夜になつても四つになつても、鹿の音は一切聞えず、これはどうじや、モウ鹿が鳴きさうなものじやと、まてども鳴かず、そろ〳〵眠氣はさいて來る、詩も歌もいやになり、あくびにうき世咄もとぎれ、みな默然としてゐる中に、五十ばかりの男、盃を前にひかへて、「さて今晩はいづれもさまの御かげで、宵からゆるりと御物がたりをいたして、能い樂を致しました。しかしな

ぬうち、心學を御勸申ますする。一度本心を御えとくなされますると、奇妙なものじや、ちよつとした身贔屓身勝手でも、直に胸へこたへまする。之について、ある人前かた物がたりのついでに、さる兩替屋の主人の得意の話なりとて申されたるは、兩替渡世は、金銀のよしあしを見分るが肝要じや。其見わけ樣を小者に敎ふるに、其家々にて違あれども、この兩替屋の主人の敎へかたは、始より少しも惡銀を見せず、たゞ宜しき銀を日々に見せ置き、しかとよき銀を見覺えたるころ、ソト惡銀を見すれば、忽にあしき銀と知る事、鏡を照して物を見るが如し、これ一目下に惡銀と見極る事は、最上の銀を見覺えたる故なり、斯の如く敎ふる時は、この小者生涯惡銀を見損ずる事なしと申されたるよし、承りました。此話の眞僞は存じませねども、道理においては成ほど尤な敎へかた、實にあぶな氣のない稽古でござります。しかしながら最上の銀を見覺えても、半季一年外商賣をして、金銀を取りあつかはぬと、又もとの素人方同樣になりて、善惡を見分る事が出來ませぬと申されました。是でよう御合點をなされませ。一たび本心を見覺えますると、其あとから、少し計の身贔屓身勝手が出來ても直に知れる。なぜなれば、本心の明なる、無理の無い事を見覺た故、ちよつとでも無理らしい事は、中々うけつける物ではござりませぬ。しかし又本心に遠ざかり、本心を見忘ると、以前の通り眞黑に成て、惡銀

つは味さうなものがたんとある、硯ぶたは鷄卵の卷燒、タツタ一切ほかのこつてない、よう喰ふ客じや、こいつは何じや、ハヽァ蒲ほこじやさうなと、ひと切つまんで口へほゝばり、側をみれば、飯蛸が七つ八つ、南京のどんぶりの中に車座に座禪してゐる。こいつはえらいとつまむところへ旦那の足音、これではならぬと袂へおしこみ、銚子盃を俯伏てとる拍子に、飯蛸がたもとから、ころ〳〵と。旦那目早く「それは何じや。」長吉ぬからぬ顏で疊をたゝいて「一昨日來い〳〵」と申しました。何んぼ蜘蛛あしらひにしても、飯蛸は蜘蛛には見えぬ。隱れたるより顯はるゝはなしじや。これじやによつて人の心は隱されませぬ。心に怒があると額に青筋がたちまする。心に悲があると目に涙が浮み、心に嬉しみがあると頰べたに靨が入り、心にをかしみがあると笑ひ顏に成りまする。是皆心よりして顏へ出まする。目に涙が出て、心が悲しうなるのではござりませぬ。額に筋が立て、あとから腹の立つのではござりませぬ。何事も心がさきじや。その心に思ふ處は、皆かたちへ現はれまする。これを誠㆓於中㆒形㆓於外㆒と申します。ナント是でも、心のゆがみがかくされるものでござりませう歟。口答も心の煩ひ、鼻うたも心のわづらひ、早う養生をいたしませぬと、立煩ひは本腹がむづかしい。もし大病に成りましては、耆婆扁鵲が配劑でも、どうもいたし方はござりませぬ。さるによつて、其大病になら

る」軍太兵衞しかべつらしう肩衣を正して、「コレハ〳〵御氣を附けられ千萬忝うぞんずる。何なりとも相應の御用もござらば、承るでござらう」と、嬉しさうな顏して挨拶せらるゝ。こいつが間違うて、「時に軍太兵衞どの、足下の御心術甚以て其意得ませぬ。チト心を正直に御持ちなされ。心のゆがみが見えて甚見苦しうござる」というたら、どうするであらうぞ。刀にそり打つて、鍔うちならし、忽ち刃傷におよぶであらう。ナント人は、からだのこと世話してやると滅多にうれしがつて直す、心の世話をする人があると眞黑になつて腹をたて、その心を直さうとせぬは、どういふ拍子の間ちがひで、是ほどまで迷うたものでござりませうぞ。是はよその事ではない、御互に大歟小歟、色かへ品かへこんな間ちがひは、得てありたがる物でござります。よう御吟味をなさりませ。是がこれ形は人の目にかゝれども、心は人の目にかゝらぬゆゑ、ゆがんで有てもまがつて有てもくるしうないと、此無分別からおこる事じや。是じやによつて、少しも油斷はなりませぬ。ある所の旦那殿が、臺所に居眠てゐる長吉を呼起して、「コレ長吉、御客樣がもう御歸りなされた。奥にある酒や肴を、臺所へはこんだがよい。」長吉目をこすり〳〵、ふしよう〴〵に返事しながら、奥へ往てそこらを見れば、硯蓋やら小鉢やら、うまいものの勢揃へ。こはいものじや、誰が催促もせぬに目の玉がきよろつき出し、なんじやこい

が、鼻すぢは通つてあらうが、はえ際が美しからうが、夫は見せかけばかりで、何のやくにたたぬ事、蒔繪の重箱に馬の糞入れたやうなものじや。これをほんの見かけ倒しと申します。飯たきのおさんどのが、ながしもとで鍋の尻を洗うてゐる。丁稚の長吉が側へ來て、「おさんどん、御まへの鼻の先に墨がついてある、見とむない」と敎へてくれる。おさんどんは嬉しがつて、「さうかえどこに附てある」と、指のさきに手拭を巻いて、額口でおのれが鼻の先をながめ、後藤が目貫をほるやうに、そこら中ひねくりまはして、「長吉どん、モウとれたかえ」。「イヤ〳〵ほうべたの方へ餘計になつた」。「ドレドレどこに」と、水鏡に顔をうつして掃除してござる。おさんどんの心には、アノ長吉どんは可愛らしい子ども衆じや、晩の御菜を杓子あたりで御禮申さにやなるまいと、滅多に嬉しがつて、禮をいふ。若し此長吉どのが、「コレ〳〵おさんどん、御まへの根性はしぶとい根性じや、チットふくれづらやめなされ」というたら、お三どんが何というであらうぞ。チト考へて御覽じませ。「あたなめくさつた小丁稚づら、わしが心がゆがんであらうが、三角に成てあらうが、おのれが世話となるもの歟。おのれ覺えてけつかれ。小便たれても、ふとんの洗濯はしてやりはせぬ」と、角のはえぬ鬼の樣に成りまする。これはおさんどんの事ばかりじやない。「イヤナニ軍太兵衛どの、御上下の御紋が、すこしかたよつて見えます

とも思はず、からだばかり吟味してござるは、どういふ所から間違うてきたやら、此間違はふるうある事と見えて、指不レ若レ人知レ惡レ之。心不レ若レ人則不レ知レ惡。此之謂レ不レ知レ類と、孟子も仰せられた。是は重いと輕いと分らぬのじや。大を捨てて小を取ると申すものでござります。人情は一般、小はきらひ大はすき、輕いはきらひ重いはすきじや。ソコデ親類緣者へ招かれて、御馳走にあづかるとき、本膳が出るあとから燒物を引いてまはると、はや目の玉がきよろつき出し、向三軒兩隣をにらみまはし、わが燒ものと見くらべて、隣のやき物が五六步ほど大きいと、肝癪がむねにつゝぱり、これの亭主は何と心得てゐるぞ、太郎兵衞も御客、おれもお客じや、なんでおれには小さい燒ものをつけたのじや、何ぞこれには意趣遺恨でもある事歟と、腹の中がねぢれ出す。能う思うて御らうじませ。燒ものに何の遺恨があるもの。是程の僅な事でも、小をきらひ大をとる。夫に何ぞや、指の曲たのを恥かしう覺て、心のまがりは苦に成らぬといふは、大を捨て小を取ると申すものじや。さるによつて、孟子も此之謂レ不レ知レ類と御しかりなされた。ナント人は能うろたへた者じやござりませぬ歟。古歌に

かたちこそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなん

指や足にかゝはつた事じやござりませぬ。皆心のことじや。心がまがつて有ては、色は白から

いたみもかゆみもない、故に疾痛事に害あらずと申してある。畢竟なくても苦しからぬ指なれば、まがつて有ても、いたみさへなくば捨てておいて能い筈なれども、もしこれをよく延してくれる醫者殿があると聞いたら、道の遠いもいとはず、さだめて療治をうけに行くであらう。それは何故、指が世間の人と少し違うてあるゆゑ、恥かしう覺えて療治をうけまするのじや。晉楚の路とは、晉の國と楚の國とは道のりが千里、これは遠いところを厭はずといふたとへじや。是其指の人なみにないをいやがるから參ります、ソコデ指の人にしかざるが爲なりと申してござります。成程能う人は恥を知つたものじや。其筈でござります、羞惡之心義之端と申して、恥を知るが人の生れつき、然しながら其恥を知るに二樣ござりまして、姿の恥を知つて、心の恥をしらぬ人がござります。是はきつい御了簡ちがひじや。心程大切なものはござりませぬ。心は身の主と申して、一軒の内では旦那どのと同じ事じや。其旦那殿の心が、煩ひくるしんでゐるを捨て置いて、家來のからだばかり可愛がり、膝がしらすりむいた、ほくちを附けい、灸がいぼうた、膏藥はれ、風ひいた、葛根湯根ぶか雜炊生姜ざけと、かりそめにも身體の御世話はなされますれど、心の事は一切御かまひなしじや。人に生れて人の樣な心も持たず、鬼の樣な心を持つたり、狐の樣な心を持つたり、蛇の樣な心を持つたり、烏の樣な心を持つて、恥かしい

鳩翁道話 貳之上

孟子曰。今有₂無名之指₁屈而不ㇾ信非₂疾痛害₁ㇾ事也。如有₂能信ㇾ之者₁則不ㇾ遠₂晉楚之路₁爲₂指之不ㇾ若ㇾ人也。指不ㇾ若ㇾ人則知ㇾ惡ㇾ之。心不ㇾ若ㇾ人則不ㇾ知ㇾ惡。此之謂ㇾ不ㇾ知ㇾ類也。さてこれは前晩辯じました、仁人心也の次の章でござります。則學問之道無ㇾ他求₂其放心₁而已矣といふ言によつて、孟子また、たとへを引いて、人の心の大切なる事を御示しなされたのでござります。今とは今こゝにと申す事じや、無名の指とは小指の隣の指でござります。其外の指は親指を大指といひ、人さし指を頭指といひ、高々指を中指といひ、小指を小指と申します。ただ小指の隣のゆびに名が無い。尤紅さし指とは申しますれど、是は御婦人がた計の事で、天下通用ではござりませぬ。ソコデ名のないが名と成まして、無名指と申します。何故また名がないぞといふに、トント用のない指じや。物を握るは親指小指の力、つむりをかくは人さし指、酒のかんを試るは小指の役、皆それ〲に用があれども、無名指ばかりは無用のゆび、あつて邪魔にならず、なくて事はかけませぬ。一身の中にて、尤輕いものじや。其指が屈で延ぬ。勿論

いで、是までの不行狀がやみませぬと、親御は其まゝ地獄ぐらし、地獄極樂は、たゞ身にたちかへると反らぬとでござります。このたち反るを放心をもとむるといふ。是すなはち學問の事じや。猶またあとは明晩御はなし申しませう。下座。

これから彼息子どのが、手の裏を返す様に孝行な人になり、二親に仕る有様、實に小兒の父母を慕ふが如く、これまでの惡行はあとかたもなく消失せました。此事世間に取沙汰が高うなり、半年たゝぬうちに、御地頭樣の御耳に入り、遂に御目がねを以て、大庄屋役をかの息子に仰附られました。是でかの息子の孝行のしわざ、御推察なされませ。さて其のち三年ばかり立て、母親が大病末期にかの息子どのを呼んでいはるゝには、「いつぞや勘當の評定の節より、何と思うたか志が改り、此上もなう孝行にしてくれる。モシ其時に、そなたの心が改らず、其うちにおれが死だらば、地獄へ行うより外はない。今は其方が孝行にしてくれる、何もおもふことがない故、今死だら、極樂へゆくにちがひはない。」スリヤおれを佛にしてくれるは、皆其方が孝行のゆゑじや」と、手を合せて拜みながら臨終をしられたと申すことじや。なるほど當來の果を以て未來を知ると、この世で心苦しければ、未來もまた心苦しい。今日の手おくれは明日へ附て廻る。心の苦しいは地獄、心のらくなは極樂、親の苦樂は子たるものの所作にある。子善なれば親は佛、子惡なれば親は鬼になりまするぞえ。一旦若氣のあやまりで、何の分別もなう、親に心づかひ懸たり、親をなかせたりの不孝も、この道理をわきまへて、今日たゞ今、志を立て直し、我身に立かへつて孝行すれば、親御樣は今日から極樂ぐらし、又立かへることがなら

とは思うたが、まてしばし、此まゝ駈込たらば、親類縁者も驚き、いかなる事を仕出すぞと、親達も御心づかひであらう、何知らぬ顔にて表口から座敷へ出、親類について詫言せんと一決して、忍び足に裏より表へ廻り、わざと雪踏の音高く、咳ばらひと共に座敷へ通れば、親類は大に驚き、親達は、にくい我子の顔を見て夫婦とも泣いてござると、かの息子も何もいはずにさしうつぶいて泣いてゐる。良ありて親類中へ、「さて是までは勘當々々と、度々聞きましたれども、さのみつらいとも存ぜなんだが、今夜の寄合とうけたまはり、どうした事やらしきりに心細う覺えまする。何分これまでは重々の不調法、此上は急度改まするによつて、今夜の勘當しばらく御用捨を下されい。永うとは申しますまい。わづか三十日の日のべ、其うちに性根が改らずば、其時勘當しられても、一言も申分はござらぬ。ドウゾ御まへがたの御取なしで、親達が三十日日延を致してくれらるゝやう、御詫をなされて下されい」と、いつにない頭を疊へすりつけて頼む。此とき親類中は親達が手強い返答に、その座しらけて立つにも立れず、拍子のない折から、此息子が一言にこれ幸と一同に口を揃へ、「今夜の所は待てやつて下され」と詫言する。親たちは本心に立かへらいでさへ勘當はせぬ心。まして今の一言を聞いて、唯嬉し泣に泣いてゐらるゝ。親類もこれをしほに、「隨分孝行にさつしやれ」と、云捨てて其夜の評定はやみました。

に此通りに違ひはござりませぬ。此親の大慈大悲の光明が、かの不孝ものの腸へしみわたると、有がたいものじや、さしもおそろしい鬼のやうな横著ものも、五體を〆木でしめらるゝやうに覺え、何といふ事は知らねども、胸さきへ涙が突かけ、聲をあげてなかれはせず、かます袖を口にくはへて、大地に倒れてしめ泣きに泣いてゐる。圓位上人の歌に

何事のおはしますかは知らね共かたじけなさに涙こぼるゝ

能うよんだ歌でござります。此時、かののら息子が、親をかたじけないと思うたでもなく、又有がたいと思うたのでもない。何かは知らず、親の慈悲心がはらわたへこたへると、能うしたものじや、立ても居てもゐられぬ。これが是、人々固有の本心というて、明かな德を生れ附てはゐれども、おのれが氣隨氣儘の身勝手で、しばらくその光をかくしてゐたのじや。されども親の大慈大悲の光明で、はらわたを貫かれ、自然と息子のもちまへの光明がさそはれて、輝き出すと、氣隨氣儘のむら雲はいづくへやら消失て、眞實そこから親の慈悲が有難う成て來る。

とくさ刈るそのはら山の木の間よりみがかれ出る月のさやけさ

格別の惡黨ものが本心にたちかへると、一際すぐれてみがかれ出る月のさやけさ。ナントありがたいものではござりませぬ歟。さて彼息子は、すぐさま座敷へかけこみ、親たちへ詫言せん

き、無心合力でもいはうかと、その用心の義絶であらうが、必ず案じて下さるな。世間の義理も先祖への不孝も親類の義絶も顧ぬのは、子が可愛いばかり、その子の尻から乞食して、附てあるく事なれば、此方等夫婦が本望といふもの、決して御まへがたへ無心合力はいひませぬ。ハテ何で死ぬるも一生じや。可愛い子のために、大道にのたれ死、並木のこやしになるのも、好んですれば恨とは存ぜぬほどに、早々おまへがたも内へ引取て下され。翌日から物もいひませぬぞ。子ゆゑなら何といはれてもかまひはござらぬ」と、同じく大聲をあげて男なきに泣るゝと、母親も勘當せぬと聞いて、これも嬉泣に泣く。親類縁者はあまりの事にあきれ果て、返答もせず、たゞ夫婦の顔をうちながめて居るばかり。ナント親の子に迷ふあはれな心を御推察なさりませ。猫が子をくはへあるくやうに、蔭になり日向になり、人のそしりも先祖への義理も、わが身のつまらぬ行末もかまはゞこそ。子の可愛いにとられ切て、迷ひに迷うた親の心、實にあはれに氣のどくなものでござります。是がこれ、此親たちばかりじやない、世間に子を持た親のこゝろは、みなこの通り。先師石田先生のうたに、

　子にまよふ親の心を見るにつけ我かぞいろもかくやありなん

人の親の子にまよふを見て、我父母もかくぞおぼしめさんと思ひやりて御詠なされた歌じや。實

つた事もござるまい。モシその養子が不心得で、家を野原にせうやら、此方等のやうな肩のわるい夫婦なれば、そのほども知れぬではござらぬ歟。同じ子ゆゑにつぶす身代なら、悴の爲に家を失ひ、なじんだ村をたち退いて、夫婦袖乞になるとも、我子の尻からついて歩行たら、わしは本望に思ひます。五十年このかた、一生に一度の願ひ、ドウゾ聞入れて勘當をやめて下され。子ゆゑに乞食をすると思へば、恨にも思ひませぬ」と、聲をあげて泣々いはるゝ。親類もこれを聞て、一同に顔を見合せ、親父が何といはるゝぞと、まもりつめて見てゐれば、爺親は何おもうた歟、印形を財布へいれ、手ばやに財布のひもをしめて、かの願書を親類の前にさしもどし、「さて〳〵一家中へ對して、面目ない事でござれども、いまばゝがいふところ、尤に思ひまするゆゑ、向後悴は勘當は致しますまい。かういへば其甘い心でそだてた物ゆゑ、あの樣な不孝ものが出來たと、定めて御まへがたが、笑はつしやらうが、笑はれてもくるしうござらぬ。勿論アノ悴を勘當せねば、この家がつぶれる事は、物三年まちはすまい。わが子故に、先祖代々の家を野原にするのは、先祖へ對してすまぬといふ事も、能う合點して居ります。又勘當せねば、おまへがたと不附合になり、親類義絶も合點でござる。必定こちらが村を立のくと

子が千日道を御說なされたとて、立かへりさうな勢じやない。斯うかたまつた惡人は、無限地獄の釜こげといふものじや。たとへ釋迦如來が元服して、土佐をどりをめされても、中々性根のつきさうな事ではないが、不思議に此野良息子が、惡心をひるがへして、大孝行の人になるといふ、是れからが成佛の段でござります。

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな

かの親たち夫婦の前に勘當の願書がまはつてくると、母親は大聲を擧げて泣出す。爺親は齒もなきはぐきをくひしばつて、さし俯いてゐらるゝ。やがてくもつた聲で、「おばゝ印形を取つてござれ」母親は返事も出でかね、泣く〳〵簞笥のひき出から、革財布に入つた印形を、爺親のまへに置くと、彼のら息子は、雨戸のそとから息をつめて伺うてゐる。其のうちにごて〳〵と財布の紐をとき、印形をとり出し、肉をつけて、既に判を押うとするとき、母親がその手にすがつて、「先ッ待て下され」といふ。てゝ親は「此期におよんで親類中が見てゐらるゝ、未練な事をいはしやるな」と、いへども聞かず、「マァ私がいふことを聞いて下され。尤あの不孝ものに此家を讓たら、三年たゝぬうちに草をはやすでござらう。それが悲しいというて、天にも地にもタッタ一人の子を勘當したら、跡へかはりを貰はねばならぬ。其貰うた養子が實體で、こ

み、我が居村へ歸つた時分は、丁度初夜まへ、大かた今時分は、親類どもがより集り、ない知惠の底ふるうて、評定をして居るであらう、その所へをどり込んで、大だゝけにだゝけたらば、百兩ぐらゐはつかめるであらうと、既に我が家へ歸らうとしたが、きつと思案し、親類よつてゐる中へ、おれが顏を見せたらば、皆俯いて居をるであらう、其中で大聲あげるも何とやら拍子がない、おれが事をあしざまにいうて居る其圖にのり、踊りこまぬと座つきがわるい、コイツハ一ばん思案を仕かへて、裏の藪から座敷の緣先へまはり、一家のやつらが評定を立聞したら、さだめておれがあくそもくそを店おろしするであらう、其拍子に戸障子蹴破大がみなりと出かけたら、拍子があつて面白いと、獨思案し、雪踏をぬいで腰に挾み、尻引からげて裏の藪から、切戸を越え緣さきへ廻つて見れば、果して内にはひそ〳〵と、評定の最中、雨戸のすきから覗て見れば、親類緣者が車座に直り、めん〳〵願書に判を押してゐる。その願書が兩親の前へくると、かの息子がこれを見て、サアこゝが勝負じや、親父が判を仕やるを相圖に、この戸を蹴破つて飛込うと、居合腰に成て息をつめてのぞいてゐる。ナント人もおそろしい心になれば成るものではござりませぬか。孟子の、人の性は善なりと仰られたるに、微塵も違ひござりませねども、其習性となるときは、此やうなおそろしい惡黨ものが出來まする。此時孔子孟

是はこれ佛の大慈大悲をいふのじや。我方では、本心がそれはわるい、これが能ないと、明ても
くれても御世話をなさるれど、身贔屓、身勝手の私心私欲が、さうはまゐるまいと、兎角本心
にそむきをる。親の子をおもふも、不孝ものの親を思はぬも、能う似たものじや。敢てたのま
ぬ人ぞはかなき。銘々本心に立かへつて御助かりなされませ。さてかの野良息子は、この日近
村で博奕をうつてをりました。折から村の友達が來て、「今夜貴樣を勘當すると親類が參會する
げな。何んぼ貴樣のやうなものでも、勘當しられたら定めて難儀をするであらう」と、半分聞
かずに大聲擧て、「何じや今夜おれがうちで勘當の評定歟。こいつ面白いことが出來てきた。全
體親父や母者のほえづらが、この年ごろ見とむなうて氣色がわるうて、こたへられたものじや
ない。勘當受たら一本だち、唐へ飛ばうが天竺へ宿がへせうが、誰が點のうち人がない。この
やうなありがたい事はないぞ。さらば今夜評定の席へ乘こんで、何でおれを勘當するのじやと、
一番團十郎をふんでゆすりかけたら、五十兩や七十兩の退代は巾着へ入れたやうなものじや。其
金持て京か大阪へ出て、見せ附やはじめたら面白い事であらう。ドウゾ今夜首尾よう山のあた
るやうに、前いはひに一盃せう」と、同じ仲間の惡鬼たちと、茶わん酒の大酒もり、日の暮前
に泥のやうに醉たところで、さらば此勢に内へいんで、一勝負はつて來うと、大脇指をぼつこ

歳に成りました。次第に惡行はつのる、後々は親類縁者へどのやうな難儀をかけやうやら、怖氣が立たもの故、一同に評定して、親たちへ言うてやるには、「急に勘當をさつしやれぬと、親類中各々方と義絶をいたさねば成りませぬ。アノ息子をあのまゝにしておかれると、親類は申すに及ばず、村中へも、どんな難儀がかゝらうやらしれぬ。御夫婦には恨はなけれども、面々家が大事でござるによつて、義絶を願ひませう歟、勘當をさつしやるか、有無の返事が聞たい」というてよこした。ソコデ親達もせんかたつき、「子ゆゑに親類義絶になつては、先祖へもすまぬ事、さらば今夜みな寄合をして下され、相談の上願書をしたゝめませう。勿論親類中いづれ御連印下されねばならぬ。御苦勞ながら印形御持參にて、暮早々より御より下されい」と返答しられた。古語に、老牛犢をねぶり、牝虎子をふくむと、畜類でも鳥類でも、身にかへて子を可愛がる。ましてや人のうへで其子を勘當せにやならぬ樣になつたら、さぞ悲しい事でござりませう。これみな其子の放心から起る事じや。身に立ちかへりさへすれば、波風もなうをさまるのに、さり迚は身に立かへる人がない。親は勘當しとむなうて成らぬけれども、子の方から勘當してくれと突附るには困つたものじや。近世德本上人の歌に、

これほどによれつもつれつする彌陀をあへて賴まぬ人ぞはかなき

た。ソコデその子が次第に横著ものに成り、馬の尾を抜たり、牛の鼻をくすべたり、近所の子たちを假初にもたゝいたり泣せたり、わやくの中に成人して、とう〳〵手にあまる不孝者、小力はある、大酒はのむ、小博奕はうち覺える、いつしか神事相撲を取覺え、かりそめにも喧嘩口論女郎買やら妾ぐるひやら、たま〳〵親達が異見すると、大聲をあげてはりこみをくはせ、こなた衆が放蕩者じやの不孝ものじやのと、其不孝ものは誰が賴んで生んだのじや。おれは生んでもらうて迷惑してゐる。夫程放蕩ものがきらひなら、元の所へをさめて貰はう。そうするとおれもたすかる」などと、滅法な口ごたへ、親たちも詮方なう、其身はめい〳〵年は寄る、息子は次第にいきりをる、可愛いと、仕様がないとで、勘當も得せず、氣隨氣儘をさせておくと、いよ〳〵圖に乘り、かしこでは投たの、こゝでは腕をねぢ折たのと、あら〳〵しい大喧嘩、其度毎に親達はいふに及ばず、親類緣者の胸板に、釘うつ樣な恐ろしい、惡黨ものがござりました。是はこれ、腹のうちから此やうな、わんぱく者ではなけれども、おれが〳〵が增長して、心を取失うたばかりで、此やうな難作もの。ナント放心は恐ろしい事じやござりませぬ歟。勿論親類緣者から、親達へ勘當せいと、たび〳〵催促はするけれども、何分一人子の事なり、けふは勘當あすは義絶と、口ではいへども勘當もせず、徒に年月が立つて、かの横著ものが二十六

はいけぬ女じやと、向へばかり目を附けて、或身に立ちかへつて心を尋ぬる事はせぬ。ナントむごい事じやござりませぬか。犬鶏は尋ねても、肝心の心は尋ねぬ。よくうろたへたものでござります。是じやに依て聖人はこれを御歎きなされて、人の道ある事を御示しなされて下さる。この御示を承るを學問といふ。其學問の趣意は、此心を尋ねさがすものでござります。故に學問之道無ㇾ他求ニ其放心一而已矣と、仰せられました。而已とは盡き〳〵て餘りなきの辭。心を求むるの外、別に學問らしいものはないと、急度御うけ合ひなされた御證文でござります。强ち唐やまとの古事來歴を知り、文字の穿鑿ばかりするを學問とは申しませぬ。兎角心のことじや。八千餘巻の經論も、諸史百家の書物も、皆心のゆくへをしるした所書でござります。此心を求むるとは、前以て申す我身に立ちかへる事でござります。立ちかへる事をしらぬと、恐ろしいものじや、どこまで往うやら知れませぬ。又立かへると有がたいものじや、孝子にも忠臣にも立どころに成られまする。善惡二つは、身に立ちかへるとかへらぬとの二つの境、道二つ仁と不仁と仰られたも御尤でござります。是についておそろしい又有がたい話がござります。御眠からうが聞いておくれなされませ。去る田舍に相應にくらす百姓がござりましたが、夫婦の中に男の子一人、ナニガ可愛さのあまりに、牛が子をねぶる様に、愛だてなうそだて上げられまし

鳩翁道話　壹之下

人有ニ鷄犬放一知レ求レ之。有ニ放心一而不レ知レ求。學問之道無レ他。求ニ其放心一而已矣。是は孟子たとへを以て御示しなされたのでござります。鷄犬とは犬にはとり、すべて飼猫あるひは鷄など、いつも家へ歸る時分にかへらぬと、其飼主がうろ〳〵と尋ねまする。犬にとられはせなんだ歟、蛇にとられはせぬ歟、もしや人が盗んだかと、向三軒兩隣迷子を尋るやうに、「モシこちの三毛はこなたには居ませぬか。鷄はまゐりませぬか」と、尋ねあるくは人情でござります。こゝが入用のところじや。犬鷄は紛失しても格別害には成りませぬ。心は身のあるじと申して、一身の旦那様じや。その心が物のために奪はれると、親の意見も耳へ入らず、主人の教訓も空ふく風、蛙のつらに水かけた様に、目ばかりぱち〳〵して、口にはハイ〳〵と言うてゐれど、心こゝに在らざれば見れども見えず、聞けども聞えぬ、うまれもつかぬ片輪ものの仲間入、これはこれ、みな心の紛失してあるに依てじや。この心を尋ねやうとも探さうともおもはず、親がわるい、主がわるい、夫がわるい、兄がわるい、八兵衛はわるい奴じや、おまつ

らぬ、鯛やすゝきは取られたか知らぬ、さても心もとない事ではある、シタガまづおれは助かつたと、兎角するうち時刻もうつり、モウよからうとそつと蓋をあげ、あたまをぬつとさし出して、そこらを見まはせば、何となう勝手が違ふやうな。よく〳〵見れば魚屋町の肴屋の店に、さらへて、此榮螺十六文と、正札附に成てゐました。ナント面白い話でござりませうが。おれが〳〵を引くな榮螺、家も藏も、智惠も分別も、臺も後光も、丸で取られてしまうた事はしらず、氣のどみにはなりませぬ。この樣な連中が、唐や天竺には得てあるものでござります。とかくおれが〳〵は賴ある人の道歌に、

はし無うて雲のそらへは昇るともおれが〳〵は賴まれはせず

是を放二其心一而不レ知レ求と仰せられたのでござります。何事もわが身へ立かへつて、手まへの吟味には氣もつかず、たゞ向へ〳〵と目のつくが放心でござります。放心じやというて、心が飛でしまふのではござりませぬ。身に立ちかへる事の出來ぬのじや。すべて是まで申すところは、金銀財寶の事ばかりではない、器量をたのみ、奉公をたのみ、知惠をたのみ、分別をたのみ、力をたのみ、格式をたのみ、これさへあれば大丈夫じやと思うてござる人は、みな榮螺の御連中じや。とかく何事も身にたち反て、御吟味が御肝要でござります。休息。

な御代に生れ合した、冥加の程と思はずに、おれが〳〵と氣隨氣まゝを言ひつのつて、こちの身代は千貫目、仰向けに寐てゐても、五百年や七百年は、遊んで食うてゐられる、藏が五とまへ、家屋敷が二十五ヶ所、かしつけの證文が三百貫目、これほどあると、土佐をどりして奢ても、五十年や百年は、貧乏する氣づかひはないと、脊中に目のある蛙了簡、むかう見ずの胸算用、大丈夫な御要害じや、何んにも頼みにはなりませぬ。寐てゐるうちに彼の大松明にならうやら、大地震がおこらうやら、知れぬが浮世の有樣でござります。此頼まれぬといふについて、今一つ話がある。眠さましに能う聞いて下さりませ。アノ榮螺と申す貝は、手丈夫な手厚い貝で、しかも丈夫な蓋がある。ソコデあの榮螺が何ぞといふと、うちから蓋をぴつしやり締て、丈夫な事じやと思うて居ますする。鯛や鱸がうらやましがり、「コレさゞえや、おまへの要害は大丈夫なものじや。うちから蓋をしめたが最後、外からは手がさせぬ。さりとては結構な身の上じや」といへば、榮螺が髭をなでて、「おまへ方が其樣にいうてくれるけれど、あまり丈夫な事もない。しかしながらマア斯うしてゐれば、まんざら難儀な事もない」と、卑下自慢をしてゐるとき、ざつぷりと音がする。榮螺がうちから急に蓋をしめて、じつと考へてゐながら、今のは何であつた知らぬ、網であらう歟、釣針であらう歟、是じやによつて要害が常にしてないと、どうもな

がをいふ人があるものじや。是はきつい了簡ちがひ、御上樣の御政道がなかつたら、一日もおれがではゐられぬ。昔一谷のいくさのとき、源義經公が、丹波の三草から、攝津國へおしよせらるゝとき、山中に日を暮して、案内は知らず、武藏坊辨慶を召して、「例の大松明をともせ」と御意なされた。辨慶畏つて、諸軍勢に下知をつたへ、走りちつて、谷々にある家々に火をかけますれば、一面に燃上る、此火のひかりを便として、一谷へ出られたと承ります。爰を能う考へて御らうじませ。是はおれが藏じやの、是はおれが家じやの、これはおれが田地じやの、是はおれが娘じやの、是はおれが女房じやのと、どの樣におれが〳〵をかつぎ歩いても、天下の亂てあるときは、スッポンの間にも合ひませぬ。有がたい事には四海太平にをさまり、御仁政の至らぬ隈も無く、それ〳〵の御役人樣が、夜のまもり晝のまもりと、御まもりなされてござればこそ、屋根の下に寐てはゐらるれ、どうしておれが細工で、手足のばして、寐て居らるゝものではない。雨戸をしめた歟、表の戸を締たかと吟味しまはつて、まづこれで用心よしと落附いて御やすみなさる、その用心はどんな用心じや。四分板一枚、しかも裏表からけづりて、二分板一枚、何程の用心じやぞ。大きなおならしても、響われる位じや。それを盜賊がこはがつて這入るまいか。チト思案して御らうじませ。皆これ御上樣の御仁德、けつこう

らうと、相互に相談きはめて、兩方がたちあがり、足つま立てて向うをきつと見わたして、京の蛙が申しまするは、「音に聞えた難波名所も、見れば京にかはりはない。術ない目をして行うより、是からすぐに歸らう」といふ。大阪の蛙も目をぱち〳〵して、嘲笑うていふやう、「花の都と音には聞けど、大阪に少しも違はぬ。さらば我等も歸るべし」と、双方互に色代して、又のさ〳〵と這うて歸りました。これが是、面白いたとへでござりますれど、つひは御合點がまゐりにくからう。蛙はむかうを見わたした心なれど、目の玉が背中についてあるゆゑ、ヤッパりもとの古さとを見たのじや。何んぼほどにらんで居ても、目の附所の違うてあるには氣が附かぬ。うろたへた蛙の話し、よう聞いて下さりませ。或人の發句に、

手はつけど目は上につく蛙かな

おもしろい發句でござります。ハイ〳〵畏りました、左様々々御尤でござりますと、口にはいへども目は上につく蛙かなで、おれが〳〵の向う見ず、是を放其心而不知求と申します。なんぼおれが〳〵で物をやり附うとしても、中々おれがの細工では出來ませぬ。箇樣に申せば、おれがからだでおれが働き、おれが錢をまうけて、おれが口におれが物をくふのじや、人さまの御世話にはなるまいし、おれがでなうて、どうして世間がわたれるものじやと、滅多におれ

い故、つぎ棹にのぼりついて、キイナ聲出して唱うてゐるを、よろこんでござる親達は、御氣の毒千萬なものでござります。御油斷をなされまするな。うろたへると琴三味線で育つた子は、親をすてて走つたり、缺落したりする事があるものじや。すべてうはきらしい、花やかな事には、必ずひよんな事が出來まする。この四つの袖も、作者のこゝろは、いたづらを誡むる教の道じや。芝居淨瑠璃流行歌、とかく目のつけやうが違ひますると、大間違になるものでござります。琴三味線を敎へて、嫁入先で間に合さうと思うたが、思の外に間に合いで、嫁入せぬさきに忍び男をこしらへて走るのは、皆目の附やうのちがふに依てじや。是で面白い話がござります。むかし京にすむ蛙が、兼て大阪を見物せんと望で居りましたが、此春おもひ立て、難波名所見物と出かけ、のさ〱と這ひまはり、西の岡向うの明神から、西街道を山崎へ出、天王山へ登りかゝりました。又大阪にも都見物せんと思立つた蛙が有つて、是も西街道瀬川あくた川高槻山崎と出かけ、天王山へ登りかゝり、山の巓で兩方が出合ひました。ナニガ互に仲間同志なれば、めん〱の志をはなし、扨兩方がいふ樣は、此やうに苦しい目をして漸とまだ中程じや、是から互に京大阪へゆきなば、足も腰もたまるまい、爰が名に負ふ天王山の巓、京も大阪も一面に見わたす所じや、ナント互に足つまだて、脊のびして見物したら、足のいたさを助か

者の風俗を見習はす。じやに依て娘らしう育つが少うござりまして、親の目をぬすんで、逃げたり走つたりが多うござります。これは娘御の悪いのじやない、親御の育てのわるいのじや。尤琴三味線、端うた、淨瑠璃、やくにたゝぬと申すのではござりませぬ。心をつけて見ますれば、端歌一つでも皆善をすゝめ悪をこらすの教でござります。アノ四つの袖と申す端歌に、

うき中のならひと知らばかくばかり花のゆふべの契りとなるも

此唱歌で御考なされて御らうじませ。是はこれ若い男と女と、親のゆるさぬ縁むすび、面白からうと思ひのほか、おもふやうにならぬ、ういつらい世の中じやとしつたら、かうはせまいものと、後悔した文句でござります。こんな事は、世間にはまゝあること、嫁を貰うたら面白からうの、世帯を持たらうれしからうのと、鍋尻こがさぬ畑水練のムチヤクチヤじあん、思の外に所帯持て見ると、面白うもなんともない、唯今日に追廻され、髪もかたちもかまはばこそ、すき髪に前垂帶、ふところへ子をねぢこんで、みそこしさげて歩行て見たがよい。どのやうなものであらうぞ。是みな親の教訓をきかず、時節到來をまたずして、はやまつて俄所帶、これは誰が知つた事じや。皆おのれ〳〵がいたづらから。夫を何の分別もなう、三味線さへひくと、面白い事に思ひ、五つや六つの勘辨のない、女の子に、大きな三味線をだかへさせ、仕かたがな

まれました。ソコデ先生その親たちへ挨拶に、「是ほどにおそだてなされるは、なみ〳〵の事ではござるまい」と申されたれば、親達が圖にのり、「嫁入して先方で耻をかきませぬやうにと、只今いたした外に、松明、花むすび、畫も少しは習はせました」と段々と娘自慢、ソコデ先生が、「それは中々大ていの事ではござりますまい。夫なればさだめて、肩こしを揉む、按摩の稽古も御仕こみなされたであらう」といはれた。主人むつとしたる顔つきで、「貧乏はいたしてゐれども、娘に按摩のけいこはまだ習はせませぬ」といはれた。道二先生笑ひながら、「それは近ごろ御心得ちがひでござりませう。貧乏金持によらず、女は夫の家にかしづけば、先方の親たちを我親としてつかへるが道じや。其大切な舅姑御が御病氣のときに、ゐかき花むすび、茶や花では御かいはうが出來ませぬ。出入の按摩やをなご衆の手をからず、嫁御が眞實に親たちの、肩こしをなでさすりして御介抱をなさるゝが、嫁御の道でござります。其道の修行に按摩の御稽古はまだ歟と申したのでござります。とかく役にたつ御稽古が肝要じや」といはれました。流石の主人も、大きに我を折り、赤面して御詫を申されたと承はりました。なる程琴三味線もよろしいが、撫さすりの介抱を心がけるが、子たるものの道じや。是で道はどこにあるやら、とくと御考へなされませ。遊所ぢかいところでは、得ては娘の子に琴三味せんを稽古させて、藝

古人義者宜也と仰られました。家來としては奉公に精を出すは宜しい、嫁としては舅姑に孝行にし、夫を大切にするが宜しいじやござりませぬ歟。其外何事でも宜しいのが義でござりまする。其宜しいのが人の道じや。道とは古人曰道猶二大路一也と、江戸へ行くも長崎へ行くも、表へ出るも裏へ出るも、隣へ行くも雪隱へはいるも、皆夫々に道が有る。若し道を行かぬと、屋根越をしたり溝へ陥たり、野越山越とつけもない所へ狼狽まする。是と同じ事で、人の上でも宜しうない事をすると、道ではござりませぬ。子は親に孝、妻は夫に貞、朋友は互に信、一々言はいでも知れてある。其通りさへすると、道じやによつて、互に宜しけれど、親を泣かせたり、夫に腹立てさせたり、人を恨んだり恨まれたり、是みな宜しうない事じや。是が道でない故に、川へはまつたり、荊の中へかけ込だり、どぶへ飛こんだりすると同じ事で、扨も難儀千萬なものでござります。尤道はどこらにあるやら、とくと考へねば成りませぬ。幸ひ中澤道二先生の御話を承り傳へました事がござります。序に御話申しませう。中澤先生、ひととせ攝州池田へ道話に參られました。ある豪家に逗留いたした處が、其家の主人もとより心學執心ゆゑ、先生をもてなしのあまり、十四五になる娘を呼出し、道二先生を饗應させられました。此娘御容儀もすぐれ行儀もよく、花をいけ茶をたて琴を彈き、また先生をなぐさめ、歌などをよ

心をもつて無理を爲る故、心が捩れて心悪いのでござります。是は是千人萬人みな同じ事でござります。古歌に、

是無理のない心をもつて無理を爲る故、心が捩れて心悪いのでござります。

鳴瀧の夜の嵐に碎かれて散る玉毎に宿る月影

是月は一つなれども、散る玉ごとに各そのかげをやどす天理の妙用、仁は一つの仁なれども、萬人みな是を分けて持つて居ますする。ソコデ世界中の人の心に、無理のないと言ふ事が、チヤント勘定が出來まする。さるに依て、此無理のない心に從うて物事をすれば、皆有るべき様に成つて、孝行忠義もおのづから出來まする。ナント早い學問ではござりませぬか。タツタ一つ合點すると、百年學問した人と、行において何も變つた事はござりませぬ。ドウゾ本心に御從ひなされ、是を先生として、御稽古をなさるが宜しうござります。我本心を師匠にすれば、御祝儀もいらず、暑寒の見廻にも及ばず、心安う忠孝はつとまる、有りがたい敎でござります。併し餘り安いと、得て御疑の起るものじや。決して安物でも御買ひかぶりの氣遣のあるのではござりませぬ。押切つて本心にお從ひなされるが、宜しうござります。中庸には率性之謂道と、急度御證文の請合がござります。御氣遣なしに御勤めなされませ。扨義人路也とは、義と言ふは無理をせぬ事なり、無理をせねば人交は申すに及ばず、萬物と交つて宜し。故に

もなりませぬ。矢張見臺は見臺のあるべき樣に御つかひなさる。然れは親御樣を親御樣と御覧じたらば、御孝行になされるが、子たるものの有るべき樣、是が仁なり、人の心でござります。箇樣に申してゐると、餘所の話の樣なれども、則ち御銘々樣の御心が、トント無理のない仁の丸無垢、今あなた方の御心の、店おろしを致して居まするのじや。餘所事の樣に御聞きなされては迷惑にぞんじます。若しあなた方が親御へ口ごたへをなされたり、また親を泣せたり、主人に心配させたり、難儀をかけたり、夫に腹を立てさせたり、女房に心遣をかけたり、弟を惡んだり、兄を侮つたり、世間へ難儀を懸け散らすは、皆扇で尻を拭ひ、見臺を枕にしてござるといふものじや。御當所には左樣の人柄はござるまいけれども、天竺の横町には、此連中がたんとある。御用心なさりませ。つく〴〵思うて見れば、意地の惡るい生附でも、いたし方がござりませぬに、幸に御互に無理のない心を持つて生れましたは、千萬金にも替へられぬ有難い事ではござりませぬ歟。この無理のない心を我方で本心と申します。尤仁と本心と、となへ所によつて少しの差別はあれども、そんな事の吟味すると長うなる、唯本心は無理の無いものと思召して、間違はござりませぬ。今日各々樣に御一人々々御目に懸らいでも、各々樣方のお心に、少しも無理はござりませぬと知れまする。其證據は言ふまじき事を言ふ歟、爲まじき事

書いても、藥さへ功能があれば能いではない歟」と仰られました。いかさま是は面白い事でござります。聖人の道もチンプンカンでは、女中や子供衆の耳に通ぜぬ。心學道話は　識者のために設けました事ではござりませぬ。たゞ家業に追はれて隙のない、御百姓や町人衆へ、聖人の道ある事を御知らせ申したいと、先師の志でござりまする故、隨分詞を平うして、譬を取り、或は落し話をいたして、理に近い事は神道でも佛道でも、何でもかでも取込んで、御話し申します。かならず輕口話の様なと、御笑ひ下されな。これは本意ではござらねども、たゞ通じ安い樣に申すのでござります。時に仁と申す事は、畢竟トント無理のないと申す事でござります。此無理のないのが、則ち人の心じやと、孟子は仰られました。此無理のない心を以て、親に仕へまするとき孝行になり、主に仕へまするとき忠になり、夫婦兄弟朋友の間も又々此通りで、五倫の道は安らかに調ひます。其無理のない仕樣は、親は親のあるべき樣、子は子のあるべきやう、夫は夫のあるべきやう、女房は女房のあるべきやう、此有べき樣が無理のない處で、則ち仁なり、又人の心でござります。喩へて申さば、此扇は誰が見ても扇じや。扇と知つて、これで鼻汁かむ人も尻拭ふ人もない。これは是扇の有るべきやう、禮儀に御用ゐなされるか、開いて風を求める歟、この外に仕樣はない。此見臺もその通で、棚の代にもならず、又枕の代に

鳩翁道話

壹之上

男　武修聞書

孟子曰。仁人心也。義人路也。舍二其路一而弗レ由。放二其心一而不レ知レ求。哀哉。是は孟子告子上に見えまする本文でござります。扨此仁と申すは、諸先生いろ〳〵に御註をなされたれども、むつかしう申しては、女中方や、小供衆の耳へ入にくい、それをたとへをもつて御話し申しませう。昔京に今大路何某といふ名醫がござつて、名高い御人じや。或時鞍馬口といふ所の人、霍亂の藥を製して賣弘めまするにつき、看板を今大路先生に御願ひ申して、書いてもらはれました。其看板に、はくらんの藥と假名で御書きなされた。そこで頼だ人がとがめました。「先生是は霍亂の藥ではござりませぬか。何故はくらんとはなされましたぞ。」先生笑うて、「鞍馬口は京へ出入の在口、往來は木こり山賤百姓ばかり、くわくらんと書いては分らぬ。はくらんと書いてこそ通用はするなれ。眞實の事でも、分らぬ時は役に立たぬ。假令はくらんと

鳩翁道話序

天保甲午夏六月朔。近夕獨坐於齋中。柴田氏之子。偶來訪云。請餘暇閱此書。且附一言。卽取而覽之。乃其所隨錄乃翁之話。而命曰鳩翁道話者也。因審其文。言則似戲而悉是孝弟之實說。則若俚尙不乖聖賢之旨。語曰。道在邇。而求諸遠。事在易。而求諸難。今如翁者。可謂於能從其邇且易。教諭世俗者。實有勤矣。覽者捨其言辭之俚近。而取意味之深長者。以爲修身齊家之一助。便是翁之本意矣云爾。手島毅庵識於五樂舍之南窓。

神學道話集　內容細目終

都鄙問答

松翁道話

心學道話集 内容細目

鳩翁道話

心學道話集 目錄

鳩翁道話

續鳩翁道話

續々鳩翁道話

松翁道話

初編

貳編

參編

以上の三篇、何れも流布の木版本に據りて、假名遣を一定し、會話引用句と說者自身の語との紛らはしきものに鈎識を施したる外、殆んど原本の面目を保存して、敢て改竄を加へず、句讀の如きも、原本或は口演の語調を傳へたるものあるべきを信じ、甚しく理解を妨ぐるものの外、殆んど改訂を施したるものなし。本書の校訂に關しては、文學士渡邊徹氏を煩はしたる所尠からず。記して謝意を表す。

大正三年一月　　　校訂者　塚本哲三

あり。素心學は通俗を旨とし、文字なき民人を教導するを目的としたるを以て、儒といはず、佛といはず、將神道といはず、苟も理に合するものは、直ちに採つて以て自家講說の資とし、敢へて陸王の學說に拘泥せず、興味ある幾多の例話を交へ、愉々快々倦む事を知らざるの間、無學文盲の士をして尙よく聖人の大道に通ぜしめん事を期す。蓋し平民敎義の上乘たらずんばあらず。

今本文庫に收むるもの三篇、

鳩翁道話　柴田鳩翁著　男武修聞書　天保十年己亥正月發行

松翁道話　布施松翁著　浪華八宮齋輯　文化十一申戌秋七月發行

都鄙問答　石田勘平著　門人藏板　元文四年孟秋日開板

何れも道話集中の代表的述作にして、依て以て其全豹を窺ふに足るべきものなり。

緒　言

心學は、神儒佛の三教を調和して別に一派を成せる實踐道德の教にして、享保年間石田梅巖の創唱する所に係る。梅巖は丹波桑田郡の人、夙に朱學を修めて別に一家の見を立て、心法を主として專ら井市人士の爲めに修身の道を講ぜしが、後四十五歲にして京師に出で、常に衆人を集めて講筵を開き、譬喩を引き實例を擧げ、諄々として平民社會の教化に務めぬ。其詞平易にして俗耳に入り易く、其旨質實にして日常彝倫に切なるものあり。其主義とする所の詳細の如きは、今本書に收めたる都鄙問答によりて知悉するを得べし。其歿後、手島堵菴、中澤道二、布施松翁、柴田鳩翁等相次いで此說を唱道し、一時天下を風靡するの槪を示しぬ。其の說く所を道話といふ。

蓋し心學は陸王二家の學に本づき、其語また王陽明の「夫聖人之學心學也」といひ、又「君子之學心學也」といふに出づ。而も其內容に至りては、亦自ら陸王二家の學と趣を異にするもの

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

心學道話集

全